
遊戯王 X

カイナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王X

【Nコード】

N5572K

【作者名】

カイナ

【あらすじ】

ごく普通に日々を過ごしていた主人公は今日も友達と一緒に楽しみにしていた街のデュエル大会へと赴く。
なるべく自重はしますがオリカを出す予定もあるのでご了承ください。
い。

第一話 大会出場、そして一回戦

全国どこにでもあるような一軒家、もう太陽も昇りきった午前七時頃にきちんと戸締りもされているその家の鍵がガチャリと音を立てて開く。そして外から水色の髪をポニーテールにした女性と同じ色の髪を短髪にした少年、そして二人より少し色の濃い蒼色の髪をポニーッシュに切った少女が入ってきた。

彼女らは慣れた足取りで家の中を歩くと女性が少女に一つの方台所らしき方に行くよう指で指示し、少女は軽く頷くと何か入っているような袋を持って台所の方に歩いていく。そして女性と少年は二階への階段を上がると二つのドアが姿を見せ、少年は手前の、女性は奥のドアを開けて部屋に入っていた。

そして女性は部屋のドアを閉めると数歩歩きながら部屋にあるベッドを見る。ベッドの中では一人の黒髪の青年がぐっすりと眠っており女性はふっと笑みを浮かべると持ってきていた木刀を構えて青年の方に歩き寄る。彼女は寝ている青年に向けて木刀を振り上げ、すうっと息を吸う。

「起きなさい！！！！」

その言葉と共に木刀が寝ている青年目掛けて勢いよく振り下ろされる。その瞬間青年ははっと目を覚ますとその木刀をバシンと真剣白刃取りで受け止めた。そしてそのままの体勢でふああと欠伸をする。

「おう……おはよ、メリオル」

「ええ。おはよう、レオ」

青年 レオの言葉に女性 メリオルは呆れたように返して木刀

を彼の手からどけて下げる。傍から見たら何この寸劇とかこいつ絶
対寝てるふりしてただけだろとか言われそうだがこれがこの青年を
起こす一番手っ取り早く確実な方法だ。幼馴染であるこの女性が一
番よく分かっている。

そしてクローゼットから適当な服を出してレオに投げるとレオはそ
れを慣れたように受け取る。そして振り返りながらメリオルが言っ
た。

「とつとと着替えて降りてきなさいよ。家で作ってきたご飯をエル
フィが台所で並べてるから。ライもアルフが起こしてるわ」

そう言い残すとメリオルは部屋を出て行き、レオはもう一つ欠伸を
しながら伸びをする。今日は遊戯王デュエルモンスターズの大会、
それに自分　レオとさっきの女性　メリオル、そして自分の弟
のライとメリオルの弟　アルフに従姉妹のエルフィとで参加する
事になっている。

レオはそう頭の中で予定を確認するとのろのろと服を着替えて机の
上のデッキケースを懐のポケットに入れ、部屋を出て行った。そし
て階段を下りて台所に向かう。

「あ、おはよ、兄さん」

「おはようございます」

最初に挨拶してきたのは自分と同じ黒髪をこれまた自分と同じよう
なぼさぼさの短髪に切っている少年　ライとメリオルと同じ水色
の髪を少し整えた短髪にしている少年　アルフ。また蒼い髪をポ
ーイッシュに切った少女　エルフィとメリオルは弁当を慣れた手
つきで並べている。まあ似たような事を数年間毎日のように行って
いれば嫌でも慣れるだろう。レオは頭の中でふとそう考えると席に
着く。

そして五人は朝食を食べ始め、食べながらメリオルが口を開いた。

「そついえばデツキの確認とかちゃんとした？」

「したよ。ケースにちゃんと入れて今持ってる」

そう返しながらレオは服の裏ポケットに入れているデツキケースを見せ、メリオルはそれだったらいいわと返すと弁当をまた食べ始める。その次にライが口を開いた。

「で、何時集合だった？」

「八時半に駅前ドーム集合、九時から開会式だったはずよ」

「登録とかもあるし余裕を持って八時にはついておきたいね。じゃあ五十分前には出ときたいかな？」

ライの言葉にエルフィがそう言うところアルフがそう続ける。それに唐揚げを食っていたレオが言った。

「まあ、間違っても七時半には食い終わるからデツキの最終確認する時間は充分あんだろ」

「そうね。久々の大きな大会だし、入念なチェックが必要よ」

レオの言葉にメリオルがくすくすと楽しみそうに笑いながら言い、四人も頷く。最近はカードシヨップで行われる小さな大会程度しかやってないためこんな大きな大会は実際久しぶり、燃えてこないと言ったら嘘になる。

そして弁当を食い終えて片付けも終わると五人は最終確認も兼ねて

軽いデュエルをやった後アルフの言ったとおり五十分前に家を出て、前に止めていた自転車を走らせた。この家から駅前ドームまでは長くて也十分、途中の信号を上手く通り抜けられれば五分かからない事だつてある、八時前に一行はドームに辿り着いた。

「へえ、結構いるわね」

「そりゃ町内だけじゃなくって隣町とかからも来るだろうからな」

メリオルの言葉にレオはそう返しながら自転車の鍵をかけて歩き出し、メリオル達もその後が続く。そして五人のチームで登録をするドームの中に入る。やはりかなりの人数がいる、パツと数えても五十人、十チーム分はいるだろう。しかもまだ増える気配がある。それを考えるとレオはふつと笑みを浮かべた。デュエリストとして遊戯王好きが多いのは嬉しい、当然の事だ。

「あつはつは、いやあ弱そうな奴らばつかり揃ってるねえ」

すると急にそんな嫌味たらしい声が聞こえ、その声に軽くムカツと来たらしくレオは声の方を向く。黒ずくめのSPらしい男を四人チームメイトのつもりだろうか連れたやけに身なりのいい青年がいる。彼は嫌味っぽい笑みを浮かべながら続けた。

「貧乏人がこせこせと雑魚カードを買い集めてご苦労様だね」

「なんだ？ あいつ」

「確かここの近くの会社の社長の一人息子だよ」

青年の言葉に辺りでどよめきに近い話し声が聞こえ始める。誰も関

わりたくないのか彼から離れていくがレオはむしろ彼に喧嘩を売ることがとく近づいて声を出す。

「おいお前、もう一回言ってみろ」

「なんだい君？ 僕は無駄にカードを買い集めてご苦労様って言うただけだよ？ その点僕は必要なカードだけを買ってるからね」

「どんなカードだろうがそのデュエリストが必要としている限り絶対に無駄にはならねえ……カードを馬鹿にしてると泣くぞ」

レオの言葉に青年がくっくつと笑いながら言うとレオは睨みをきかせながら続け、青年は少しびくりとなると声を出す。

「ふ、ふん。そんな事を言うんなら僕に勝ってみるんだね、まあ当たったらの話か」

「ああ、お前が負けたら当たれねえもんなあ」

青年の言葉にレオはまだ睨みながら続け、言い終わると丁度開会式が始まるらしいので歩き去っていく。そして開会者が長い挨拶を終えた後大会の組み合わせが発表されていく。

「まず第一回戦第一試合、時の旅人VSグレート・ウェルス」

その言葉に反応したのはレオとあの嫌味たらしい青年、レオは相手があいつだと確認すると後ろのメリオル達に言った。

「俺が行くぞ」

「はいはい」

レオの言葉にメリオルがそう言うと言いつつライ達もこくと頷く。そして組み合わせの発表が終わり、いよいよ試合が始まる。

レオは試合が行われる特設コートに行くところになり、ワンテンポほど遅れて青年も上がってきた。

「やあ、一回戦敗退とは残念だね」

「その言葉、そっくりそのまま返してやるよ」

青年の言葉にレオはそう返すとデュエルディスクを構える。そして懐からデッキケースを取り出すとその中からデッキを取り出し、デュエルディスクに差し込んだ。青年もふっふつと笑うとデッキをデュエルディスクに差し込む。

「時の旅人代表、レオ対グレート・ウエルス代表、直哉……第一回戦、第一試合、開始！」

「デュエル！！！！」

審判の言葉と同時にレオと青年　直哉は声を上げ、直哉が先に声を出す。

「僕が先攻を貰おう！」

「どーぞ」

直哉の言葉にレオはそう返し、直哉はくっくつと笑うとデッキから手札を抜いてからカードをドローする。そしてそれらを眺め回すと

くっくつと笑い始めた。

「僕の勝ちみたいだな。いくぞ、「チューニング・サポーター」を召喚し、魔法カード「機械複製術」を発動！ 効果でチューニング・サポーターを二体デッキから特殊召喚し、さらに魔法カード「二重召喚」で「ゾンビ・キャリア」を召喚する！」

「ほっ……」

直哉はいきなり四体のモンスターを場に並べ、レオは腕を組んでそれを眺める。そして直哉はくっくつと笑いながら言った。

「ゾンビ・キャリアと効果によりレベル2となったチューニング・サポーターとレベル1のままのチューニング・サポーター二体をチューニング！ 来い、「ゴヨウ・ガーディアン」！！」

一ターン目で攻撃力2800のモンスターを呼び出した。さらにシンクロに使ったモンスターの効果により三枚のドロローという手札増強。観客は思わず息を飲む。しかしレオは顔色一つ変えていない。

「声も出ないようだねえ……そしてこの瞬間僕の勝利も決定した！ 手札を一枚デッキの上に戻してゾンビ・キャリアを蘇生！ そして魔法カード「早すぎた埋葬」の効果でチューニング・サポーターを特殊召喚してゾンビ・キャリアと効果によりレベル2となったチューニング・サポーターをチューニング！ 来い、「アームズ・エイド」！！」

直哉：LP4000 3200

一ターンで二体のシンクロ召喚にシンクロ素材の効果による手札補

充、無駄のないコンボだ。しかし直哉はまだまだ続ける。

「アームズ・エイドの効果によりゴヨウ・ガーディアンに装備！
ゴヨウ・ガーディアンを攻撃力を1000ポイント上昇させ、さらに戦闘によって相手モンスターを破壊したときそのモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える！ さらにゴヨウ・ガーディアンは相手モンスターを破壊したときそのモンスターを僕の場に守備表示で特殊召喚させる能力を持っている！」

ゴヨウ・ガーディアン 攻撃力：2800 3800

「まあ最初はこの辺かな？ カードを二枚セットしてターンエンド」

「……なんだ、偉そうに言っというその程度か」

直哉は自信満々にそうターンエンドを宣言するが、対するレオはため息をついてそう呟く。それに直哉がなんだと声をあげるとレオは静かに言った。

「上級モンスターの並べ方ってのを教えてやるよ。俺のターン！」

レオはそう声をあげてドロし、手札を見る。そしてもう決めていたようにカードを一枚伏せると別のカードを発動した。

「魔法カード「手札抹殺」発動！」

「はははっ！ 偉そうに言っておいていきなり手札交換かい！？
まあいいや。僕は一枚捨てて一枚ドロするよ」

「俺は四枚捨てて四枚ドロ……俺の勝ちだな」

「なんだと!?!」

「まずは青眼の白龍をコストに「トレード・イン」を発動し、二枚ドロ。さあ、いくぞ! リバースカードオープン! 魔法カード「竜の鏡」! このカード効果により墓地のロード・オブ・ドラゴンとラグナロクを除外融合! 「竜魔神 キング・ドラグーン」召喚!」

レオのフィールドに現れた巨大な鏡に二体のモンスターが映し出され、消えていくとレオの場に一体の人が姿を現し、そう思ったら彼から何かを呼び出そうとするようなオーラが発され始める。

「ドラグーンの効果により俺は「真紅眼の飛竜」を特殊召喚! さらンに飛竜を除外して「レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン」を特殊召喚だ!」

ドラグーンが呼び出した飛竜が闇に包まれて消えていったと思っただら新たな上級ドラゴンが呼び出され、グオオオオオンと雄叫びを上げる。それに思わず震えながら直哉は声をあげた。

「ふ、ふん! 僕のゴヨウ・ガーディアンには届きなんてしない! 無駄なんだよ!」

「パワーだけで何とかなるほどのゲームは甘くねえ。ダークネスメタルドラゴンの効果で墓地から「青眼の白龍」を特殊召喚!」

このゲームをやるものなら知らぬものなんていないだろうドラゴンが姿を現す。そしてレオはもう一枚の魔法を発動した。

「全てを蹴散らせ！ 魔法カード「滅びの爆裂疾風弾」！！」

バーストストリーム

「さ、させない！ 「魔宮の賄賂」で無効にする！！」

レオがその魔法を発動した瞬間ブルーアイズが口をあけてもの凄いエネルギーを口の中に集める。しかし直哉がその魔法を破壊した瞬間エネルギーは霧散して消えていく。しかしその程度は予想の範疇とばかりにレオは笑っていた。

「あ、そう。効果で一枚ドロ……んじゃこっちはどうかな？ さつき引いたカードをコストに「ライトニング・ボルテックス」発動！！」

「嘘ー！？」

降り注ぐ雷にゴヨウ・ガーディアンは黒焦げにされる。それに直哉は目を丸くするが心の中で自分に言い聞かせた。

（お、落ち着け……あいつがこのこと攻め込んできたところでミラーフォースの餌食だ……）

「お前の伏せたカードの一枚がさつきみたいな魔法・畏の無効カードとは読んでいた。そしてもう一枚は攻撃無効カードというところだろう、例えば攻撃の無力化やミラーフォースのような」

直哉が深呼吸をしながらそう心の中で呟いているとレオはさらっとそう言い、それにびくりとなりながらも直哉は挑発するように叫ぶ。

「そ、それがどうした！？ まさか臆病風に吹かれて攻撃できないつてのか！？」

「そうは言つてねえよ、攻撃はする。ただ忘れてないか?……俺はまだ通常召喚を行つてない」

レオの言葉にそういえばと観客が声を出す。今まで行つたのは全部特殊召喚、通常召喚の権利はまだ彼に残っていた。そして彼の手札は残り一枚。レオはそれをデュエルディスクに置いた。

「「ミラージユ・ドラゴン」を召喚! こいつはバトルフェイズ時相手の罠カードを無効にする! メインフェイズ終了、罠は発動しないな?……さあ、バトルフェイズだ!!」

レオの言葉と共にミラージユ・ドラゴンから不思議な光が発され、相手の罠を封じる。直哉はもはや顔面蒼白になっていた。

「チェックメイトだ……全軍攻撃!!!」

レオが直哉を指差しながらそう叫ぶとレオのフィールドのドラゴン達が次々と口を開け、キング・ドラグーンは右手の籠に力を込める。そして直哉目掛けて一斉のその力を叩き込んだ。

「うわあああああつ!!?」LP3200 0

直哉のライフが0を示し、ソリッド・ビジョンも消えていく。直哉は映像とはいえその攻撃の勢いで仰向けに倒れており、レオはそれを一瞥するとコートから降りようと彼に背を向ける。

「イ、イカサマだ!!」

すると彼の背に向かって直哉が声を上げ、レオはうざったるそうに

振り向く。

「一ターンであんな事、何かやったに決まっている！！ イカサマだ！ 反則だ！！」

「……言いがかりも甚だしいなてめえ……だが俺はイカサマなんてやってねえ、それだけは確かだ」

「嘘を」

「そもそもイカサマなんざカードを信じてない奴がやる事だ。俺はこのデッキのカードは全て信頼し、期待している。その期待にカード達が応えてくれた……それだけだ。笑うなら笑え、俺のデュエリストとしての自論だ」

直哉の言葉にレオは静かに且つ重々しくそう語るとコートを下りる。直哉はもはや何も言えなかった。

コートを降りたレオはグッとサムズアップしているメリオルに微笑みかけ、メリオルも笑みを浮かべて返すと右手を広げる。それにレオも応えるように右手を出すと二人はパシンとハイタッチを行った。

第一話 大会出場、そして一回戦（後書き）

初めまして、このサイトではレーネスさんに憧れまして遊戯王小説を投稿いたしました。ちなみに他の小説投稿サイトでもこの名前で投稿しているのでもしかしたら誰か知っている人もいらっしゃるかもしれません。というか今回出てきた主要キャラ五人って別のサイトで使ってるキャラの設定を少しいじっただけのリメイクですし。ちなみにぶっちゃけると僕は遊戯王はGX途中からほぼノータッチでそれ以降、例えばシンクロなんて遊戯王wikiで調べている始末です。言い訳になりますが至らない点多いと思います。何かご指摘がありましたらよろしく願います。

とりあえず最初のデュエルということで僕がwikiとにらめっこしながら考案したドラゴン族ワンキルを叩き込んでみました、現実ではまず使えないでしょうけどね。まずこれから成立するのかが不安です、手札枚数とかについては注意を払っているつもりですけど少々無理矢理感が否めませんし。

正直主要キャラ五人の大雑把なデッキテーマ以外ストーリーもろくに考えていないような小説ですがお付き合いいただければ嬉しいです。それでは。

第二話 二回戦、天使VS悪魔

レオのワンターンキルでチーム 時の旅人は第一回戦を突破し、今は第二回戦を待つのみとなっていた。一回戦を軽く見て回った後一旦全員は他のデュエルの邪魔にならないように観客席に移動しており、今回の流れを確認していた。

「えーっと、つまり俺はもう決勝を除いて出場できないと」

「そう。今回の大会のルールは一回戦、二回戦に普通のデュエルがあつて三回戦、つまり準々決勝でタッグデュエル、準決勝でまたシングルに戻つて決勝戦で全員出場の団体戦になるわけ。まったくもう、一番の切り札を一回戦で消費するなんて想定外よ」

レオの言葉にメリオルがそう説明し、呆れたように額に手をやってため息をつく。

「いや、だつてあいつカードを馬鹿にしたみたいでむかついたし……」

「ま、それは分かるし別にいいわよ。さて、そうなつたら次に出る人を考え直さないと。そもそもこの予定じゃ一回戦にライ、二回戦でエルフィ、タッグに私とアルフがいつて準決勝でレオが出る予定だったから……」

「じゃあ二回戦は予定通り私が行くわ」

メリオルの言葉に流石にレオも後ろ暗いような表情でそう言つとメリオルは慣れたようにあしらつてまた考え始める。するとエルフィ

がそう声を出し、メリオルがエルフィを見ると彼女は続けた。

「私のデッキってタッグに向いてないとこあるしライとアルフのコンビネーションって中々のものでしょ、メリオル姉さんが今のこの中じゃ一番強いから準決勝に出る。これでどう？」

「……了解、でも負けないでね」

「当然」

エルフィがそう言うとメリオルはふふつと笑みを浮かべてそう返し、エルフィは不敵な笑みを浮かべてその言葉に返す。そして軽くデッキの見直しと調整を行った後放送が聞こえてくる。

「第二回戦、第三試合、時の旅人とチーム・シュヴァルツの代表は第二コートに来てください」

放送を聞くと一行は第二コートに向かう。相手も既に揃っており、代表のデュエリストはコートに上がっている。

「じゃ、行ってきます」

エルフィはメンバーに軽くお辞儀をしてコートに上がり、自身の名前を審判に伝える。それからその相手にぺこりと頭を下げた。

「遅くなりました」

「いえ、こっちのリーダーが几帳面すぎるだけだから。気にしないで」

エルフィの言葉に相手の少女　エルフィより少し年上らしく、また鴉の濡れ羽色と称せられそうな長い黒髪がまた大人っぽく見せるはにこりと微笑んで返し、エルフィもはいと微笑んだ。

「時の旅人代表、エルフィ対チーム・シュヴァルツ代表、黒菜……
第二回戦、第三試合、開始！」

「先攻後攻は？」

「そちらからどうぞ、遅れたお詫びです」

審判が声を出した後少女　黒菜がそう尋ね、エルフィはふふっと笑ってそう言う。それに黒菜はじゃあ遠慮なくと言った後改めて二人合わせて声を出す。

「デュエル……！」

「そして私の先攻！　ドロー」

黒菜はそう言ってデッキからカードをドローし、手札に加えるとさっと眺め回す。そして二枚カードをセットするとモンスターを一枚場に出した。

「リバーズカードを二枚セットし、モンスターを守備表示。ターン終了」

「私のターン」

黒菜がターンエンドを宣言するとエルフィが入れ替わりにそう言うってデッキからカードをドローする。そしてそれを手札に加えると別

のカードを場に出した。

「「ウイクトリア」を攻撃表示！ カードを一枚セットして攻撃！
ウイクトリー・フラッシュュ！！」

エルフィの指示と共にウイクトリアが聖なる光を発して守備モンスターを攻撃、それに姿を表したのは巨大なウィルス、そいつは光に飲み込まれて消滅した。

「「ジャイアントウィルス」の効果発動！ このカードは戦闘によって破壊された時相手に500ポイントのダメージを与え、デッキから同名カードを攻撃表示で召喚できる。私は二体召喚」

「くっ」LP4000 3500

黒菜がそう言うのと二体のウィルスが黒菜の場に召喚され、エルフィはしまったと心中で呟く。一気に主導権を握るつもりが相手に上級モンスターのリリース要員を与えてしまっている。

「ターン終了の前にカードをもう一枚伏せて、ターンエンド！」

「私のターン……ジャイアントウィルス二体をリリースして」E
HERO マリシヤス・エッジ」を召喚！」

「くっ……えっ!？」

黒菜のプレイングにエルフィはまずいというように表情を歪ませた後驚きの声をあげる。マリシヤス・エッジは相手フィールド上にモンスターがいる時リリース一体での召喚が可能なはず、それをわざわざ二体リリースするということは……

「お見通しって顔ね。私は墓地のジャイアントウィルス三体を除外し、「ダーク・ネクロフィア」を特殊召喚!!」

黒菜のディスクから三体のジャイアントウィルスのカードを出てきて黒菜はそれを除外ゾーン代わりにデッキケースに収める。そして手札から一枚の悪魔　ダークネクロフィアを召喚した。

E・HERO　マリシャス・エッジ　攻撃力：2600
ダーク・ネクロフィア　攻撃力：2200

あっという間に攻撃力2000以上のモンスターが二体姿を現し、エルフィの表情が今度こそ歪む。黒菜はくすくすと微笑んでいた。

「一気にいくわよ？　マリシャス・エッジでウィクトーリアを攻撃！　ニードル・バースト!!」

「リバーズカード、「ドレインシールド」を発動！　マリシャス・エッジの攻撃を無効にし、その攻撃力分私のライフを回復！」

エルフィLP3500　6100

「やるわね、ならダーク・ネクロフィアで攻撃！　念眼殺!!」

マリシャス・エッジの攻撃は不思議な盾に阻まれ、黒菜はくすつと微笑むと続いてダーク・ネクロフィアに攻撃を指示、その言葉と共にダーク・ネクロフィアの眼が開いてその呪いの力がウィクトーリアを破壊した。

「くっ!?!」LP6100　5700

「ターンエンド」

黒菜はくすりと笑みを浮かべながらそう言い、エルフィの顔が歪む。だがこれではつきりした、相手のデッキは間違いなく悪魔族デッキだ。そしてこっちのデッキは……

「私のターン！ 私はヘカテリスを墓地に送って「神の居城 ヴァルハラ」を手札に加え、発動！」

その一連の言葉が終わると共に辺りが天使の城といわんばかりの場所に変わる。

「私はヴァルハラの効果で「The splendid VENUS」を特殊召喚！！」

その言葉と共にエルフィの場に金色の天使が姿を現し、その光を浴びた悪魔族の力が減少していく。

The splendid VENUS 攻撃力：2800

E・HERO マリシヤス・エッジ 攻撃力：2600 2100

ダーク・ネクロフィア 攻撃力：2200 1700

「VENUSの効果により天使族以外のモンスターの攻撃力、守備力は500ポイント減少する。VENUSでマリシヤス・エッジを攻撃！ ホーリー・フェザー・シャワー！！」

「「攻撃の無力化」発動！」

「リバーストラップ発動！」「盗賊の七つ道具」！！」LP570
04700

「くっ！？」LP4000 3300

VENUSの光の波動が羽根を形作ってマリシャス・エッジを襲うが黒菜はそれを不思議な障壁を張って防ごうと試みる。しかしエルファイが発動したカウンタートラップでそれは無効化され、マリシャス・エッジは破壊される。

「さらにモンスターを守備表示で召喚し、ターン終了」

VENUSの横に正体不明のモンスターカードが守備表示で伏せられ、エルファイはターンエンドを宣言する。

簡易状況説明

エルファイ：LP4700 手札一枚

フィールド：VENUS攻撃表示、モンスター一体守備表示
ヴ
アルハラ発動中、伏せカードなし

黒菜：LP3300 手札二枚

フィールド：ダーク・ネクロファイア攻撃表示、伏せカード一枚

「凄いデュエルだね」

「ああ。エルファイが天使族なのに対して相手は悪魔族、種族的にも面白いデュエルだ」

「ライフ、フィールドのモンスター共にエルファイが優勢……なんだ

けど」

「ええ、相手の余裕が気になるわ」

観客になっていているライがそう言うのとレオも腕を組んで笑みを浮かべながら返す。その次にアルフがどことなく不安そうに言うことメリオルもこくと頷いた。

「私のターン、ドロー！」

黒菜はそう言うのとカードを引き、手札に加える。そして手札をさつと眺め回すとふふつと笑った。

「私は「クリボー」を攻撃表示で召喚！そしてリバーズカード発動、「増殖」！」

現れた丸っこくて可愛らしい小さな悪魔がいきなり四体に増殖し、エルフィはやばいと警戒を強める。このコンボから繋げてくるとしたらあのモンスターの召喚。

「クリボートークン三体をリリースして「幻魔皇 ラビエル」を召喚！！」

「やっぱり……でもVENUSの効果で攻撃力500ダウンはなってもらおうわよ」

幻魔皇 ラビエル 攻撃力：4000 3500

「ええ、でもVENUSを倒すには充分。ついでにラビエルの効果を発動！クリボートークンをリリースしてその攻撃力300ポイ

ントをラビエルに加える！！」

黒菜の言葉と共にクリボーがラビエルに吸収されていき、ラビエルの攻撃力が微々たるものとはいえ上昇した。

幻魔皇　ラビエル　攻撃力：3500　3800

「ラビエルでVENUSに攻撃！　天界蹂躞拳！！」

黒菜の指示と共にラビエルの拳に力が溜められ、咄嗟に防御の構えを取ったVENUSをも粉々に打ち砕く。

「さらにダーク・ネクロファイアでそのモンスターを攻撃！　念眼殺
！！」

「くっ！？」LP4700　3700

VENUSが破壊されると共に悪魔達を蝕む光が消え、ネクロファイアは本来の力で守備モンスターを破壊する。

「守備モンスターはスケルエンジェル、効果によって一枚ドロー！」

「ターン終了よ」

さっきまでエルフィの優位だったのがあっという間に形勢逆転されてしまっている。黒菜はふふつと笑ってターンエンドを宣言し、エルフィはスケルエンジェルの効果とドローによって三枚に増えた手札を眺め回す。今場はほぼがら空き、ヴァルハラがあるとはいえ早く何とかしないとやばい状況だ。

「でも、なんとかしのげる……」

「？」

「私の墓地にはウイクトーリア、ヘカテリス、VENUS、スケルエンジェルの四体が眠っている。その力を借りて私は大天使を呼び出す！ 来て、「大天使 クリスティア」！」

「この時ラビエルの効果で私のフィールド上に幻魔トークン召」

「無駄よ！ クリスティアの効果で特殊召喚は無効になる！」

エルフィの声と共に天から光が落ちてその場に大天使が降り立つ。そしてエルフィはラビエルを指差した。

「そしてクリスティアでラビエルを攻撃！！」

そう言うエルフィの口元は笑みが浮かんでおり、その正体を黒菜は見抜くと肩をすくめた。

「オネスト？」

「ええ。手札からオネストを捨てて効果発動！ クリスティアの攻撃力をラビエルの攻撃力分上昇！」

エルフィがそう言うって手札からオネストを捨てるとクリスティアの身体が光に包まれ、その攻撃力が上昇する。

「クリスティア、ホーリーシュート！」

「ラビエル、天界蹂躞拳！」

二人の指示と同時に光に包まれたクリスティアの突進とラビエルの拳が激突する。その次の瞬間ラビエルが砕け散り、その光の波動が黒菜をも襲う。

「つうつ!?」LP3300 500

「リバースカードを一枚セットして、ターン終了」

エルフィがそう宣言すると黒菜はカードをドロウする。そしてそれを手札に入れると自分のターンを進めた。

「ネクロフィアを守備表示に変更してモンスターをセットし、ターン終了」

黒菜の場には守備表示モンスターの他に守備力2800のネクロフィア、守備にしたら結構硬いのは確かだ。エルフィはそう考えながらカードを引く。

「クリスティアで裏守備モンスターを攻撃、ホーリーシュート!」

そして光の波動が裏守備モンスター デーモン・ソルジャーを破壊し、それからエルフィはターンを終える。

簡易状況説明

エルフィ：LP3700 手札一枚

フィールド：クリスティア攻撃表示 ヴァルハラ発動中、伏せカード一枚

黒菜：LP500 手札二枚

フィールド：ダーク・ネクロフィア守備表示 伏せカードなし

「私のターン！……魔法カード「カップ・オブ・エース」！」

黒菜が魔法カードを発動するとフィールドに巨大なコインが現れ、黒菜が指でコインを弾くようなジェスチャーをするとコインは回転しながら上昇し、落ちてくる。それは表を見せていた。

「よし、カードを二枚ドロ……よし、これに全てをかける！」

黒菜は思わず笑みを浮かべながらそう言い、また魔法カードを発動する。

「魔法カード「禁じられた聖杯」によってクリスティアの攻撃力を400アップさせ、代わりに効果を無効にさせる」

「くっ……」

「そして魔法カード「奈落との契約」！ ネクロフィアをリリースして闇の支配者ゾークを召喚！！」

クリスティアの効果を封じられたことにエルフィが表情を歪めるのに続いて黒菜はさらに魔法カードを発動する。それと共にネクロフィアが奈落に呑み込まれ、そう思ったら奈落から一体の悪魔が姿を現す。

「ゾークはサイコロを振ってその出目により異なる効果を発動する。効果についてはその出目が出た時に説明するわね」

「……黒菜さんってギャンブル好き？」

「……まあね。そ、それはいいとして、ダイスロール!!」

エルフィの疑問の言葉に黒菜はこくと頷いた後いつの間にかソリッド・ビジョンに出ていた、ゾークに合わせたのが不気味な外見のサイコロに向けてそう叫び、それと共にサイコロは回転しながら飛び上がり、床に落ちるとコロコロ転がって一つの目を示す。それは一個の悪魔の眼をしたつまり一の目だ。

「よっし! 一の目の効果は相手モンスター全て破壊!!」

「嘘!?!」

黒菜の言葉にエルフィが目丸くして声を上げ、その間にもゾークは闇の力を集め始める。

「全てを破壊せよ! ラスト・ゾーク!!!!」

そして黒菜の言葉と共にゾークが闇の波動を発してクリスティアを破壊する。そして黒菜はふっと笑って続ける。

「ゾークでダイレクトアタック! ダーク・カタストロフィー!!」

「きゃああっ!!」 LP3700 1000

「カードを一枚セットしてターン終了!」

ダイレクトに闇の力を受けたエルフィのライフが大幅に削られ、それを見ながら黒菜はカードを一枚伏せてターンを終了する。

「私のターン、ドロー！……こつちもこれに賭ける、私は墓地のVENUSとクリスティアを除外して「ホーリーシャイン・ソウル神聖なる魂」を特殊召喚！」

「そんなカードで何を！？」

「ええ、本当の狙いは私の天使達の除外……リバースカードオープン、「異次元からの帰還」！ ライフを半分払い、除外されているモンスターを特殊召喚する！ 異次元から舞い戻れ、我が大天使達！！！」

エルフィ LP：1000 500

その言葉と共にエルフィの場に二体の大天使が姿を現し、さらにVENUSの光の波動がゾークを蝕む。

闇の支配者 ゾーク 攻撃力：2700 2200

「これで終わりにする！ クリスティアでゾークに攻撃、ホーリーシュート！！！」

「そうはいかない！ リバーストラップ、「威嚇する咆哮」！！！」

「くっ……ターン終了。異次元からの帰還の効果によりVENUSとクリスティアは除外される」

エルフィの指示に対抗するように黒葉がそう叫んでリバースカードを発動する。それにより攻撃が止まり、エルフィはくつと眩いた後ターン終了を告げる。それと共にVENUSとクリスティアも異次元に吸い込まれるように消え去った。

闇の支配者 ゾーク 攻撃力：2200 2700

「私のターン！ 良くも悪くもこのターンで終わらせましょう……
ゾークの効果発動！！」

黒菜はエルフィに向けてそう言い、エルフィもこくと頷く。そして黒菜が声をあげると共にゾークの横にサイコロが現れ、黒菜はフウツと息を吐くと叫んだ。

「ダイスロール！！」

その言葉と共にサイコロが転がり始め、二人の間に緊張感が走る。そして止まったサイコロの上は悪魔の眼が六つ見えていた。

「六……」

「……私の負けね」

何の効果が来るか分からないエルフィはそう呟くが黒菜はただそうとだけ呟く。それと共にゾークの身体が爆発を起こした。

「え、え！？」

「ゾークのダイス効果、六の目が出たとき自分フィールド上のモンスターを全て破壊する。ファンブルよ……ターンエンド」

驚いているエルフィに黒菜はそう静かに説明するとブラフすら伏せずにターンエンドを宣言した。それを見てエルフィは少し啞然とするがフウツと息を吐くとキツと表情を引き締める。

「……私のターン！……ありがとうございます。神聖なる魂ホーリーシャイン・ソウルでダイレクトアタック！！ セイント・フラッシュュ！！」

エルフィの指示と共に神聖なる魂は光の波動を黒菜にぶつける。

「……」LP5000

黒菜のライフが0を示し、ソリッドビジョンも消え去る。それからエルフィと黒菜はお互いに近寄って握手をした。

「楽しいデュエルだったわ」

「あの、最後の手札は？」

「ああ、「冥府の使者ゴーズ」よ」

黒菜が微笑みながら言うつとエルフィがそう尋ね、黒菜はまた微笑んでそう言うつ。そして黒菜はエルフィを撫でながら言った。

「頑張つて優勝しなさいね。それとまた戦う事があつたら今度は負けないから」

「はい！ そして次も勝てるよう私も頑張りますから！」

黒菜とエルフィはそう言いあつと微笑んで振り返り、それぞれのチームメイトの方に向けて歩き出した。

第二話 二回戦、天使VS悪魔（後書き）

というわけで第二話、主要メンバーの一人 エルフィは天使使いです。ちなみにレーネスさんとこのアテナとデッキコンセプトは似てるんですよ、今回は出してないもののアテナも切り札級モンスターとして眠ってますし。

さて、今回はライとアルフのタッグデュエル。お二人のデッキはなんなのか、どんなデュエルになるのかお楽しみに。でも期待はしないでくださいね、応えられないと思うので。

ご指摘があつたらお願いします。それでは。

第三話 三回戦、タッグデュエル

「第三回戦、第一試合、時の旅人と百川中学遊戯王部の代表は第一コートに来てください」

「っと、始まりか」

「あ、ずるいよライ！ 僕の攻撃で勝ちだったのに！！」

そんな放送が聞こえてきたと思ったらライは手早くカードを片付けてデュエルディスクに差し込む。流石に観客席でソリッドビジョンをやるわけにもいかないしそもそもそんなのデッキ内容をばらすようなものだ。そしてライが立ち上がるとアルフがその声を上げ、ライは目を逸らしながら返した。

「試合の時間になったんだからしょうがないだろ？ これはノーカンで」

「はあ……はいはい」

ライの言葉にアルフは呆れたように息を吐いて頷き、レオ達はんじや行くかと第一コートに向かう。そこにはまだ相手は来ておらず、ライがコートに上がろうとするとアルフがその服を押さえた。

「っと、なんだ？」

「これ、渡すの忘れてた。ライのデッキコンセプトにはあってるはずだから余力があれば使ってみて」

「んつと……ああ、サンキュ」

アルフがそう言って渡してきたカードをライはさっと眺めるとそう
言っただけのカードをデッキに組み込む。そしてコートに上がって審
判に自分達の名前を伝えているとその向かいから二人の男女が上が
ってくる、自分達と同じ年くらいだろう。中学校のデュエル部なん
だから少なくとも年上ではないはずだ。

「……よろしく頼む」

「こっちこそ、楽しく戦おうぜ」

男子 スポーツ刈りにしてなんか重々しいというか変な感覚を思わ
せる。はその見た目に違わず静かに挨拶し、ライもにつと笑みを
浮かべて返す。それを見たアルフはもう一人の女子に挨拶した。

「正々堂々戦いましょうね、よろしくお願いします」

「は、は、は、はい！ よ、よろしくお願いします！」

アルフがにこつと微笑みを浮かべながらそう言って握手をするよう
に手を差し出すとその相手。茶色いふわふわとした髪の毛の女子、自
分より年下だろう。はこくと頷いて握手に応える。ちなみにア
ルフは容姿は整っているしこの穏和で割と礼儀正しい性格のせい
か女子に好かれやすいのだ。しかし本人はさっぱり自覚していない所
謂天然たらし、だが女子は場合によってはこれで完璧に舞い上がり
ミスを連発するという遊戯王での彼の思わぬ武器となっていた。そ
して挨拶も終わり、デュエルを始めようと二組は向かい合う。

「時の旅人代表、ライ、アルフペア対百川中学遊戯王部代表、啓一、

水菜ペア……第三回戦、第一試合、開始！」

「……デュエル……！」

「俺のターン、ドロー」

挨拶している時に決めたのだろうか啓一と呼ばれた少年がカードを引く。つまり次にライ、水菜と呼ばれた女子、アルフという順番で回る事になる。

「俺は「不屈闘士 レイレイ」を攻撃表示で召喚、カードを二枚セツトしてターンエンドだ」

現れたのは筋骨隆々な獣戦士、それを見るとライはへえと呟いてカードを引く。

「俺のターン！ 俺は「切り込み隊長」を召喚し、カード効果で「コマンド・ナイト」を守備表示で特殊召喚！ そして切り込み隊長に「融合武器 ムラサメブレード」を装備！ コマンド・ナイトの効果も合わせり切り込み隊長の攻撃力は2400！ カードを一枚セツトしてターンエンドだ！」

切り込み隊長 攻撃力：1200 1600 2400

あつという間にレイレイの2300を上回る攻撃力を生み出し、ライはへへっと笑った後カードを伏せてターンを終了する。次に水菜と呼ばれた少女のターンに回った。

「私のターンドロー……私はフィールド魔法「伝説の都 アトランティス」を発動します」

水菜がデュエルディスクのフィールドゾーンにカードを入れると彼女の背後に太古の遺跡のようなものが現れる。さらに水菜は続けた。

「私はアトランティスの効果でレベルを一少なくし、「ジエノサイドキングサーモン」を召喚！ サーモンはアトランティスの効果を受けて攻撃力、守備力が上昇します！」

ジエノサイドキングサーモン 攻撃力：2400 2600

「なるほど、アトランティス主軸デッキか……こりゃ厄介かもね」

「あ、あの、えと……タ、ターン終了」

水菜が巨大な暗黒海のシャケを召喚するとアルフが笑いながらそう言い、それを直視した水菜は顔を赤く染めるとそう呟く。

「おっと、ごめんごめん。僕のターン！」

水菜がターンエンドを宣言するとアルフはそう言ってカードを引き、さっと眺め回す。そしてカードを取った。

「「プロト・サイバー・ドラゴン」を召喚！ このカードはフィールド上に存在する時カード名をサイバー・ドラゴンとして扱う。そして魔法カード「融合」を発動！ プロト・サイバー・ドラゴンと手札の「サイバー・ドラゴン」を融合！ 出でよ、「サイバー・ツイン・ドラゴン」！！」

アルフが呼び出した灰色つばい機械竜はさらに続けて発動された魔法カードの発した光に包まれる。その光が止むとそこには二つの頭

をした白銀の機械竜が存在していた。

「タッグデュエルでは全てのプレイヤーは最初のターン攻撃できません。カードを二枚セットしてターン終了」

「くっ、両方とも高攻撃力タイプか……」

ターンが回ってきた啓一は苦虫を噛み潰したような表情でそう呟き、そしてカードをドロースるとそれをパツと見る。

「一気にいくしかないみたいだな……俺は不屈闘士レイレイをリリースし、「偉大魔獣^{グレートまじゅう} ガーゼット」を召喚!!」

レイレイが闇に包まれたと思ったらその闇から一体の魔獣が姿を現した。

「偉大魔獣 ガーゼット」の攻撃力はリリースしたモンスターの元々の攻撃力の倍となる。よってこのガーゼットの攻撃力は2300の二倍、4600!!」

「嘘お!?!
アルティメット・ドラゴン究極龍超えてるじゃん!?!」

啓一がそう言うつとライが声を上げ、啓一はふっと笑うとサイバー・ツイン・ドラゴンを指差す。

「まずは攻撃力の高い方から潰す! ガーゼットの攻撃、グレートガーゼットクラッシュユ!!」

「「攻撃の無力化」を発動!!」

「ちっ、ターンエンドだ」

ガーゼットはサイバー・ツイン・ドラゴンに力を集中して殴りかかるがその攻撃が当たる前にアルフが発動した攻撃の無力化の障壁に阻まれる。とはいえ攻撃力4000オーバーのモンスターがいるというのは厄介な事この上なかった。啓一がターンエンドをした事によりライにターンが回る。

「俺のターン、ドロー！……とりあえず倒せる奴から倒させてもらうよ！」「共闘するランドスターの剣士」を召喚！ 効果により俺の場の戦士族は攻撃力が400ポイント上昇する！」

切り込み隊長	攻撃力：2400	2800	
共闘するランドスターの剣士	攻撃力：500	900	1300

「切り込み隊長でジェノサイドキングサーモンに攻撃！ 切り込み斬！！」

「リバーズカー……あ！ 伏せるの忘れてました!？」

「何だと!？ ったく、リバーズカードオープン、和睦の使者！ このターン受ける戦闘ダメージをゼロにする!!」

ライが指示をすると共に切り込み隊長がサーモンを斬ろうと二刀を構えて突進し、それに対抗するように水菜が言うがその次に驚いたように声を上げ、啓一が間髪を容れずカードを発動。サーモンの前に数人の優しそうな女性がサーモンを守るように姿を現し、流石にそんな人達を斬るわけにはいかんというように切り込み隊長は引き下がる。

「危ねえ」

「う、ごめんなさい！」

「落ち着いてー」

啓一が胸を撫で下ろすと水菜が頭を下げ、アルフが呼びかける。とはいえ水菜のこういうミスこそがアルフの本人すら知らぬ武器だ。相手のミスを誘うというテクニックを女性限定とはいえアルフは無自覚でやってのけている。

「リバースカードを二枚セットしてターンエンド」

「わ、私のターン、ドロー」

水菜はカードを引くと自分を落ち着かせるように深呼吸する。そしてドローしたカードを手札に加えると口を開いた。

「私は「アトランティスの戦士」を攻撃表示で召喚、そして魔法カード「二重召喚」を発動！アトランティスの戦士をリリースし、「超古深海王 シーラカンス」を召喚します！もちろんアトランティスの効果を受けてパワーアップ！」

超古深海王 シーラカンス 攻撃力2800 3000

「攻撃力3000!? サイバー・ツインまで上回りやがった!？」

「これで終わりと思ったら大間違いです！シーラカンスの効果発動！手札を一枚捨ててデッキから魚族モンスターを可能な限り特殊召喚！私は「レインボー・フィッシュ」を二体、「竜宮の白夕

「ウナギ」を一体特殊召喚！」

「一気にモンスターを並べやがった!?」

「もつともシーラカンスの効果で呼び出されたモンスターは攻撃宣言ができず、その効果も無効になりますけど」

突然召喚された魚にライが声をあげると水谷はようやく調子を取り戻したと言わんばかりに続け、その場にさらに三体の魚が呼び出される。それにライが表情を歪めると水菜は律儀に説明を続ける。それにライはよかったと言わんばかりに息を吐くがその時水菜はくすつと笑った。

「しかしチューニングは出来ませよ？」

「げっ」

「アトランティス効果でレベル3となった白タウナギとレインボーフィッシュ二体をチューニング！ 現れよ、「ミスト・ウォーム」!!!」

白タウナギとレインボー・フィッシュが光に包まれ、その光の中かなんといおうか、巨大芋虫みたいなモンスターが出現した。

「アトランティスの効果は受け付けませんがまあいいです。ミスト・ウォームの効果発動、アルフさんはサイバー・ツイン、ライさんは切り込み隊長と伏せカードを一枚手札に戻してください」

「融合モンスターだからエクストラに行っつと」

「えーっと、伏せはどっちだ？」

「ライさんから見ても右を」

水菜の言葉に二人はさっさとミスト・ウォームの効果続ける。それが変に水菜の気にかかった。

(なんででしょう、この感じ……何か畏が？　ライさんの伏せカードは左を戻すべきだったんでしょうか？……考えてても仕方がない！)　そう思考を続けるが水菜はキツと表情を引き締めるとフェイズを続けた。

「リバーズカードを一枚セットし、ミスト・ウォームでコマンド・ナイトを、ジェノサイドキングサーモンのランドスターの剣士を攻撃し、シーラカンスでライさんにダイレクトアタック！」

「おっとつと、ジェノサイドキングサーモンの攻撃に対してリバーズカード発動！」「ドレインシールド」！！」「LP4000　6600

「だったらシーラカンスでランドスターの剣士に攻撃！」

「ぐっ！？」」「LP6600　4500

サーモンの攻撃を攻撃吸収の盾で防いだはいいが連続攻撃にライのモンスターは全滅する。

「ターンエンドです」

「僕のターン！……でも、ホント凄くタクティクスだね、その上級

「モンスター連続召喚」

「ど、どうも……」

アルフの言葉に水菜はぺこりと頷く。でももう惑わされたりしないという意思がそれには見え、それに気づいているのかいないのか分からないがアルフはまた笑った。

「でも、それが仇になるなんて皮肉だよな？」

「え？」

「僕は「サイバー・ドラゴン・ツヴァイ」を召喚！ このカードは手札の魔法カードを相手に見せる事でカード名をサイバー・ドラゴンとして扱う事が出来る。僕は手札の「サイクロン」を相手に見せてこのカードのカード名をサイバー・ドラゴンにする」

確かにアルフが見せたのは魔法カード「サイクロン」、相手の二人はそれを確認すると頷き、アルフはふふつと笑う。

「ミスト・ウォームでサイバー・ツインをバウンスせずにこっちをバウンスすればよかったね！ リバースカードオープン！ 「DNA改造手術」！！ このカードがフィールド上に存在する限り全てのモンスターの種族は僕が選んだ種族に変更される。僕が選択するのは当然、機械族！」

その言葉と共に啓一の場のガーゼットと水菜の場のシーラカンスとサーモン、ミスト・ウォームが機械の身体に変化する。というか他の種族ならともかく機械族はDNAを改造してどうにかなるようなものじゃない気がするがまあ細かい事は置いておこう。

「そしてカード名がサイバー・ドラゴンに変化したツヴァイとあなた方の場のガーゼット、シーラカンス、ミスト・ウォーム、ジェノサイドキングサーモンを墓地に送り、「キメラテック・フォートレス・ドラゴン」をエクストラデッキより特殊召喚！」

「！！！！」

「このカードの攻撃力は融合素材、つまり墓地に送ったモンスターの数×1000、墓地に送ったモンスターは五体、よってこのモンスターの攻撃力は5000！」

キメラテック・フォートレス・ドラゴン 攻撃力：0 5000

見事に一撃必殺の値だ。そしてアルフは水菜の方を見る。

「あなたの伏せカードは恐らく防御系カード、よって破壊させてもらいます！ 手札から速攻魔法、「サイクロン」を発動！」

「くっ！？」

アルフが呼び出した竜巻が水菜の場の伏せカード 聖なるバリア ミラーフォースを破壊する。そしてアルフは水菜を指差した。

「ダイダロスとかを呼び出されるのは勘弁なので、すいませんが一撃でしとめます！！ キメラテック・フォートレス・ドラゴンの攻撃！ エヴォリューション・レザレト・アーティラー！！」

「きゃああああっ！？」

「リバーズカード・オープン！」

キメラテック・フォートレス・ドラゴンの五本の首から発された光線が水菜目掛けて飛び、水菜は思わず悲鳴をあげるがその次の瞬間そんな声が聞こえ、そう思ったら光線が霧散した。

「「え！？」」

その言葉にアルフと水菜が驚いたように声を上げ、次に啓一の声が聞こえてきた。

「ライフを1000支払い、「スキルドレイン」を発動した。このカードの効果でキメラテックの攻撃力、守備力の変動効果が無効になり、その攻撃力は0になった」LP4000 3000

キメラテック・フォートレス・ドラゴン 攻撃力5000 0

「しまった、盲点突かれたか……手札もないし、ターンエンド」

簡易状況説明

ライ：LP4500 手札二枚（うち一枚切り込み隊長、一枚魔法・罠カード）

フィールド：モンスターなし 伏せカード一枚

アルフ：LP4000 手札零枚

フィールド：キメラテック・フォートレスドラゴン攻撃表示 D

NA改造手術発動中、伏せカードなし

啓一：LP3000 手札三枚

フィールド：モンスターなし スキルドレイン発動中、伏せカードなし

水菜：LP4000 手札零枚

フィールド：モンスターなし 伝説の都アトランティス発動中、
伏せカードなし

「俺のターン……」「可変機獣 ガンナードラゴン」を攻撃表示で召喚。このカードはリリース無しでの召喚も可能だ。もっともその場合カード効果により攻撃力、守備力は半分になるがな。しかしスキルドレインの効果によってその効果も無効になり、攻撃力は元に戻る！」

可変機獣 ガンナードラゴン 攻撃力：2800 1400 2800

「うわぁお!？」

「これが俺の速攻ビートダウン戦法だ。ガンナードラゴンでライをダイレクトアタック！ ガンナーブラスト！」

「こうなりや賭けだ！ リバースカードオープン、「徴兵令」!!」

いきなり2800もの攻撃力のモンスターが姿を現し、思わずライが叫び声をあげる。それに啓一が淡々とだが得意そうに説明するとガンナードラゴンにライへの攻撃を指示する。そしてガンナードラゴンがその銃火器をライ目掛けて掃射しようとするがその前にライが伏せていたカードを発動した。

「このカードの効果の対象に啓一さんを選ぶ！ あなたのデッキの一番上のカードをめくり、それが通常召喚可能なモンスターであれば俺の場に特殊召喚、それ以外のカードならあなたの手札に加える」

「面白い……俺の運が強いからお前の運が強いか……」

「勝負……！」

啓一は不正をしないという意思を表すために他の手札を全て一度床に置いてデッキに指をかける。そして彼がデッキからカードを引き、それを見ると啓一は啞然とした表情を見せ、くつと唸るとライに歩き寄ってそのカードを手渡す。それを見たライの表情も啞然としたがとりあえず元の位置に戻ると効果が続けた。

「徴兵令の効果によって俺は「神獣王バルバロス」を通常召喚！スキルドレインの効果により弱体化の効果が無効になり、本来の攻撃力3000に戻る！」

なんとこのタイミングで妥協召喚モンスターの中でも最高峰のバルバロスを呼び出した。元の位置に戻った啓一はターンを続ける。

「バトルフェイズ中に相手フィールドのモンスター数に変化があったため巻き戻しが行われる。俺はキメラテック・フォートレス・ドラゴンに攻撃対象を変更する！」

「悪い！」

「別にいいよ。バルバロスが手に入れば安いもんだと考えればいいし」LP4000 1200

啓一の言葉にガンナードラゴンはキメラテックに照準を合わせなおして銃を掃射する。それにライが手を合わせて謝るとアルフは笑ってそう言い、キメラテックが破壊され残った銃弾をその身に受ける。

キメラテックの攻撃力は現在0、2800ダメージをもろにくらってしまった。

「カードを一枚セットし、ターンエンドだ」

「俺のターン……」「サイクロン」を発動してスキルドレインを破壊。手札から「切り込み隊長」を召喚し、そのカード効果で「ジャンク・シンクロン」を召喚。さらにカード効果で蘇生に繋がりたいところだけど俺の墓地にレベル2以下のモンスターは存在しない。そしてレベル3のジャンク・シンクロンとレベル3の切り込み隊長をチューニング！ 出陣せよ、「ゴヨウ・ガーディアン」！！」

ライの言葉と共にジャンク・シンクロンと切り込み隊長が光に包まれ、その中から新たなモンスターが姿を現す。そしてライは啓一を指差した。

「バルバロスでガンナー・ドラゴンを攻撃！ トルネード・シエーパー！！」

ライの指示と共にバルバロスはガンナー・ドラゴンに突進して右手に持っていた槍を突き刺す。それがガンナー・ドラゴンを貫いて爆発させた。

「くっ」LP3000 2800

「止めだ！ ゴヨウ・ガーディアンでダイレクトアタック！ ゴヨウ唐竹割り！！」

「……ちっ」LP2800 0

そしてゴヨウ・ガーディアンの手により唐竹割りをくらった啓一のライフは0を示す。どうやら伏せたカードはブラフだったらしい。

「よし！ ターンエンド」

「私のターン！」

まず一人というように手を握り締めるとライはターンエンドを宣言し、水菜のターンに移る。ちなみにこの時から今大会のルールよりターン移動も変更、水菜の次にアルフはそのままだがまたその次に水菜、それからライという動きに変わる。

「私はモンスターを守備表示で場に出し、ターン終了」

「僕のターン！……ありやりや、ターンエンド」

引いたカードが悪かったらしくアルフは苦笑を漏らすとターンを終える。また水菜のターンに移った。

「私のターン！ よし、アトランティスの効果でレベルを一少なくとも、裏側表示モンスター、「光鱗のトビウオ」をリリースして「海竜 ダイダロス」を召喚！ そしてダイダロスの効果発動！ 海として扱っているアトランティスを墓地に送り、このカード以外のカードを全て墓地に送る。大波に飲まれよ！」

水菜の言葉と共にアトランティスが崩れ落ち、その背後から現れた大波がバルバロスとゴヨウ・ガーディアン、そしてDNA改造手術をも押し流していく。

「そしてアルフさんにダイダロスでダイレクトアタック！ タイダ

ルウエーブ!!」

「うわあああっ!?!?」LP12000

「ターンエンドです!」

「俺のターン!」

アルフもやられた。それを考えた後ライはそう叫んでドロし、カードを見る。そして一か八かと言わんばかりのそのカードを裏守備表示で召喚した。

「ターンエンド」

「私のターン!」

ライの言葉に水菜はそう返すとカードを引き、ダイダロスに攻撃を指示した。

「ダイダロスで裏守備モンスターに攻撃! タイダルウエーブ!!」

水菜の言葉と共に大波が守備モンスターを襲う、しかし現れたそのモンスターは大波を防ぎきった。

「「翻弄するエルフの剣士」は攻撃力1900以上のモンスターとのバトルでは破壊されない!」

「うっ……ターンエンド」

ライの言葉に水菜は少し苦虫を噛み潰したような表情を見せ、それ

からライにターンが移り、ライはカードをドローする。

「俺のターン！……手札から「稲妻の剣」を翻弄するエルフの剣士に装備！」

翻弄するエルフの剣士 攻撃力：1400 2200

ライの言葉と共に防御の構えを取っているエルフの剣士の剣に雷が纏われる。するとその雷がダイダロスを痺れさせた。

海竜 ダイダロス 2600 2100

「稲妻の剣は水属性モンスターの攻撃力を500下げる。これでエルフの攻撃力が上回った！」

「くっ」

「翻弄するエルフの剣士でダイダロスを攻撃！ 翻弄の精剣斬！」

ライの指示と共にエルフの剣士はダイダロスを翻弄するように動き出し、その隙をついて雷を纏った剣で斬り裂く。その瞬間電撃がダイダロスの身体中を走り、ダイダロスを破壊した。

「くっ！」 LP4000 3900

「ターン終了！」

「私のターン！」

お互いに退かないとばかりの雰囲気を感じ取れる。ライのターンが

終了し、水菜のターンに移る。そして水菜はドローしたカードを守備表示で伏せてターンエンドを宣言した。

「俺のターン……ドロー……!!」

ライは己の引いたカードを見るとよしと呟き、そのカードを攻撃表示で場に出す。

「「終末の騎士」を召喚！ その効果で俺は「ネクロ・ガードナー」をデッキから墓地に送る。そしてエルフで守備モンスターを攻撃、雷撃精剣斬！」

さつきと技名が変わったが気にしないでおこう。エルフの剣士は真正面から相手モンスターに斬りかかり、そのモンスター コダロスを破壊した。

「そして終末の騎士でダイレクトアタック！」

「くっ」 LP 3900 2500

終末の騎士の剣が水菜を捉え、水菜のライフが削られる。そしてターンは水菜に移り、水菜はデッキトップのカードを引くと思わず笑みを浮かべた。

「発動！ 「伝説の都 アトランティス」……!!」

「二枚目か！」

「さらにモンスターを守備表示で召喚し、ターンエンド！」

「俺のターン！」

水菜の発動したカード　アトランティスにライは少し表情を歪めながら言い、続けて水菜はまた別のカードを守備表示で場に出す。そしてライのターンに移った。

「俺は装備魔法「早すぎた埋葬」を発動し、コマンドナイトを蘇生して装備！　カード効果で俺の場の戦士族の攻撃力が400アップ！」LP4500　3700

翻弄するエルフの剣士　攻撃力：2200　2600
コマンド・ナイト　攻撃力1200　1600
終末の騎士　攻撃力1400　1800

「……」

「翻弄するエルフの剣士の攻撃！　雷撃精剣斬！！」

ライの攻撃指示と共にエルフの剣士は裏守備モンスター　ギガ・ガガギゴを破壊する。これで相手の場はがら空きになった。

「コマンド・ナイトと終末の騎士でダイレクトアタック！　ツインブレイド・スラッシュユ！！」

「……参りました」LP2500　0

二体の剣士の攻撃で水菜のライフが0を差し、水菜はお手上げと言わんばかりに両手を挙げる。

「あつぶね……」

勝ったライもやつと肩の荷が下りたと言わんばかりに大きく息を吐き、近寄ってきた啓一と水菜を見る。

「お強いですね」

「いや、徴兵令でバルバロスが引けたのは運が良かったしダイダロスが出た次のターンで翻弄するエルフの剣士を引けなかったら手も足も出なかった。稲妻の剣が来たのも運がよかつたし」

「ま、その悪運の強さがライの強さの秘密なんだけどね」

水菜が微笑みながら言うと言いはそう返し、その横でアルフが笑いながら言う。すると啓一が言った。

「確かに凄まじい強運だな……今度ギャンブルカードを入れるのを考えてみたらどうだ？」

「考慮しとく」

啓一が冗談交じりに言うと言いはそうとだけ返し、四人は互いの相手にお辞儀をするとお互いのチームの方に歩いていく。一方、観客席でレオ達を見ている影がいるのにはまだ誰も気づいていなかった。

第三話 三回戦、タッグデュエル（後書き）

はい第三話、タッグデュエル……疲れました。

そして主要メンバー、ライとアルフのデッキはそれぞれ戦士族、機械族です。ちなみにライのデッキはレーネスさんとここにオファーした戦野剣士とデッキコンセプトが似ています。もっともこっちはリンクロを遠慮なく使うとか違うところもありますけどね。

さて次回は準決勝、戦うのはメリオル……もう相手のデッキネタがねえよ……マジどないしょ？……決勝団体戦で使わせる予定のデッキを先に使わせるか？……。ま、それでは。

第四話 準決勝、魔術師V S HERO

「準決勝、第二試合、時の旅人とチーム・ヒーローズの代表は第二コートに来てください」

「さてと、行きますか」

放送が聞こえてくるのと共に消去法で代表確定になったメリオルはそう言っただけで立ち上がると自分のデッキをデュエルディスクに差し込む。そしてレオ達と共にデュエルコートに行き、メリオルはコートに上がると自分の名前を審判に伝える。すると丁度相手もやってきた。栗色の髪を伸ばした女性。私と同年くらいだろうか、そうメリオルが考えているとその女性はメリオルに近づくと笑みを浮かべて口を開いた。

「よろしくね」

「ええ、よろしく」

女性はそう言っただけで右手を差し出し、メリオルも微笑み返しながら握手に応じる。それから指定の位置にいく前に女性が再度言った。

「先攻後攻はどうする？」

「え？ ああ……そっちが先で構いませんよ」

「じゃあ遠慮なくいただくわ」

女性の問いにメリオルがそう返すと女性はふふっと笑みを浮かべて

言い、指定の位置に歩いていく。それを見ながらメリオルも指定の位置に歩いていき、向かい合うとデュエルディスクを構える。

「時の旅人代表、メリオル対チーム・ヒーローズ代表、春香……準決勝、第二試合、開始！」

「デュエル……！」

審判がそう宣言すると二人も声を合わせて出し、その次に女性春香がカードをドロ―した。

「私のターン、ドロ―！ 私は「E・HERO エアーマン」を召喚し、その効果によりデッキから「E・HERO バーストレディ」を手札に加え、魔法カード「融合」を発動！」

「HEROデッキ……！」

「手札のバーストレディとフェザーマンを融合し、「E・HERO フレイム・ウィングマン」を融合召喚！」

いきなり二体のモンスターが現れたがメリオルは面白いというような不敵な笑みを浮かべたまま動じておらず、春香はターンを続けた。

「カードを一枚セットして、ターン終了」

「私のターン、ドロ―！……私は「マジシャンズ・ヴァルキリア」を召喚し、魔法カード「デイメンション・マジック」を発動！ 私はヴァルキリアをリリースして「氷の女王」を特殊召喚！」

現れたヴァルキリアはすぐにその背後に現れた棺桶に入り、棺桶の

扉が一回閉まって何かの光を発すると扉が開く。その中からは一体の女王と言わんばかりの雰囲気を漂わせる女性が現れた。

「そしてデイメンション・マジックの効果により私は「E・HERO
O フレイム・ウィングマン」を破壊！」

メリオルがフレイム・ウィングマンを指差しながらそう言うとフレイム・ウィングマンの背後にさっきの棺桶が突如出現し、フレイム・ウィングマンを吸い込むと地中へと消え去っていく。

「そして「氷の女王」で「E・HERO エアーマン」を攻撃！
コールド・ブリザード！！！」

氷の女王はメリオルからの指示を聞くとエアーマンに猛吹雪を浴びせて攻撃し、エアーマンは吹雪に吹き飛ばされて破壊される。

「くっ……」 LP4000 2900

あっという間にモンスターが全滅した事に加えてライフを大幅に削られた事に春香は表情を歪める。しかし直後にカードを発動した。

「エアーマンが戦闘で破壊された瞬間リバーカード発動、「ヒーロー・シグナル」！ その効果で私はデッキから「E・HERO フォレストマン」を特殊召喚！！！」

「ふうん……じゃあ私はカードを一枚セットしてターン終了」

春香の場に新たなるHEROが現れ、メリオルはリバーカードを一枚セットするとターンを終える。そして春香のターンに移った。

「私のターン！ フォレストマンの効果で墓地から融合を手札に加えて、私はフィールド魔法「摩天楼2 ヒーローシティ」を発動！ その効果で戦闘によって破壊された「E・HERO エアーマン」を特殊召喚し、エアーマンの効果によってデッキから「E・HERO レディ・オブ・ファイア」を手札に加える。そして融合を発動！ 手札のザ・ヒートとレディ・オブ・ファイアを融合し、燃え上がれ！」「E・HERO フレイム・ブラスト」！！」

春香の場に現れた二体のヒーローは燃えるような光に包まれ、その中から新たなヒーローが姿を現す。そして春香は氷の女王を指差した。

「フレイム・ブラストで氷の女王を攻撃！」

「え？ フレイム・ブラストの攻撃力って2300じゃ？」

「フレイム・ブラストは水属性モンスターとバトルする時その攻撃力を1000ポイントアップする。氷を溶かしつくせ！ バーニングファイア！！」

春香の言葉にメリオルが驚いたような声を出すと春香は不敵な笑みを浮かべてそう続ける。確かにフレイム・ブラストはさらに燃え上がり、その攻撃力を上昇させていた。

フレイム・ブラスト 攻撃力：2300 3300

「……ごめん」LP4000 3600

「そしてエアーマンでダイレクトアタック！」

「くっ」LP3600 1800

フレイム・ブラストの放った炎に氷の女王が燃やされ、破壊される。そして追撃の突風をくらってあっという間にメリオルのライフが削られた。

「私はカードを一枚セットしてターン終了!」

春香はそう言っただけでカードを一枚セットしてターンを終え、宣言を聞いてからメリオルはドローを行う。

「……私は「クルセイダー・オブ・エンディミオン」を召喚し、エアーマンを攻撃! そしてこの攻撃宣言時にリバースカード発動、
「マジシャンズ・サークル」! カード効果でお互いのプレイヤーはデッキから魔法使い族を特殊召喚する」

「くっ……」LP2900 2800

「マジシャンズ・サークルの効果により私は「マジカル・マリオネット魔法の操り人形」を特殊召喚するわ」

「私のデッキに魔法使い族は存在しない」

「悪いけど確認する必要があるわ。デッキを貸して」

メリオルの伏せカードが発動した不思議な輪の中から不思議な人形を操る魔術師が現れ、春香が首を横に振ってそう言くとメリオルはすまなそうな表情でそう言い、審判に確認を促すと審判も頷く。それを見ると春香は観念したようにデッキを手渡した。

「不正防止のために見ててね」

「ええ」

メリオルが冗談交じりにそう言うつと春香も苦笑を見せながら頷き、メリオルはささっとデッキの確認を始めた。

「これで相手のデッキはメリオルさんに筒抜けって事だよな」

「まあHEROデッキだって分かってるから相手も痛くはないんじゃないかな？」

「いや、D・HEROやE HEROが眠っているかの確認にはなる」

「ああ、ダーク・フュージョンがあったらE HEROがいるって証拠ですもんね」

観客になっているライ、アルフ、レオ、エルフィがそう言っている間にメリオルはデッキの確認を終え、春香にデッキを返した。

「確かになかったわね」

「ええ」

メリオルの言葉に春香はそう言つてデュエルディスクにデッキを差し直すと指定の位置に戻つていき、メリオルも指定の位置に戻る。そしてメリオルは手札のカードの内一枚を発動した。

「私は「魔力掌握」を発動！ そのカード効果により私は魔法の操り人形に魔力カウンターを乗せ、さらにデッキから魔力掌握を加える。もちろん魔力掌握自体も魔法カードのためもう一個魔力カウンターを乗せる。そして魔法の操り人形の効果発動！ このカードに乗っている魔力カウンターの数×200このモンスターの攻撃力は上昇する。そして魔法の操り人形の効果発動！ 魔力カウンターを二個取り除く事によりフレーム・ブラストを破壊！」

魔法の操り人形 攻撃力：2000 2400 2000

魔法の操り人形の周りに緑色の光が二つ浮遊し始めたと思ったら魔法の操り人形の魔力が上昇し、春香は表情を歪める。そして魔法の操り人形の効果でフレーム・ブラストは破壊された。

「くっ……」

「カードを一枚セットしてターン終了」

「うわ、なんてデュエル……」

「お互いに自分のターンが来る毎に新しい上級モンスターを召喚してる……モンスターネタが尽きたら負けるよこれ」

「その点においたら相手の方が有利よ。次のターンに摩天楼の効果でエアーマンを蘇生召喚し、カード効果でHEROをサーチする、さらにフォレストマンの効果で墓地から融合を回収できるわ。元々戦士族であるHEROはそのサーチ法も多数ある、それはライも知ってるでしょ？」

デュエルを見ながらアルフが呟くとライがそう言い、エルフィが説明するとライもこくと頷く。HEROは元々戦士族、それを考えると戦士の生還や増援のようなサーチカードは多数ある。E エマージェンシーコールやO オーバーソウルだっそうだ。それにエアーマンとフォレストマンもいざという時は融合素材にできる。

「私のターン、ドロー！ 摩天楼の効果でエアーマンを守備表示で特殊召喚し、カード効果でデッキから「E・HERO スパークマン」を手札に加え、フォレストマンの効果で墓地から融合を回収。そして融合を発動！ 手札のスパークマンとオーシヤンを融合し、「E・HERO アブソルフトZero」を召喚！」

「うっ……でも融合を使用した事により魔法の操り人形には魔力カウスターが乗って攻撃力が上昇するわ！」

魔法の操り人形 攻撃力：2000 2200

メリオルの言葉通り春香の発動した魔法カード、融合が発した魔力が魔法の操り人形の周りに球体状の光となって力を与え、その攻撃力を上昇させた。

「ええ。でもアブソルトはフィールドから離れた時に相手のモンスターを全て破壊する効果を持つ、迂闊に破壊したらあなたの負けよ。まずは魔法の操り人形を攻撃！ フリージング・アト・モーメント……！」

「う、こ、攻撃の無力化、発動！」

アブソルトが放った冷気をメリオルは反射的に発動した時空の穴に吸い込み、アブソルトの攻撃は無力化される。

「ターンエンド」

「私のターン……」

メリオルはデッキからカードをドローして少し考えると口を開いた。

「「クルセイダー・オブ・エンディミオン」を再度召喚してデュアル効果発動！ 魔力カウンターを乗せることが出来るカード、魔法の操り人形に魔力カウンターを乗せ、さらにこの効果で魔力カウンターを乗せたとき、このカードの攻撃力を600ポイントアップ！」

メリオルの言葉と共にクルセイダー・オブ・エンディミオンから魔法の操り人形へと緑色の魔力が渡り、さらにクルセイダー・オブ・エンディミオンの攻撃力が上昇する。そして魔法の操り人形もその魔力により攻撃力が上がる。

クルセイダー・オブ・エンディミオン 攻撃力：1900 2500
魔法の操り人形 攻撃力：2200 2400

「さらに「魔力掌握」を発動して魔法の操り人形に魔力カウンターを二個乗せ、魔力掌握をデッキから手札に加える……クルセイダー・オブ・エンディミオンと魔法の操り人形でそれぞれエアーマンとフオレストマンを攻撃！」

魔法の操り人形 攻撃力：2400 2800

クルセイダー・オブ・エンディミオンと魔法の操り人形がエアーマンとフオレストマンを破壊するが双方守備表示のため相手にダメージは通らない。

「くっ……リバーズカードを二枚セットしてターン終了」

春香はふふつと笑みを浮かべており、メリオルはくつと呟くともう一枚カードをセットしてターンを終えた。

簡易状況説明

メリオル LP1800 手札零枚

フィールド クルセイダー・オブ・エンディミオン、魔法の操り人形両方攻撃表示 伏せカード二枚（内一枚魔力掌握）

春香 LP2800 手札零枚

フィールド E・HERO アブソルutzero攻撃表示 摩天楼2 ヒーローシティ発動中、伏せカードなし

「ちょっと、まずいね……」

「ああ、でもこのターンは流石に相手も融合はしてこないだろ？」

「だが相手はHEROだ」

アルフがやばそうだというような表情で呟くとライも頷いて苦笑を漏らしながら言う。しかしそれに対してレオは険しい表情を崩していなかった。そして春香のターンに移る。

「私のターンドロー！ 摩天楼の効果によってエアーマンを特殊召喚し、カード効果で「E・HERO クレイマン」を手札に加える。そして「融合回収」フュージョンリカバリーを発動し、墓地から融合に使用した「E・HERO フェザーマン」と融合を手札に加える。そして手札のクレイマンとフェザーマンを融合！ 吹き荒れる、「E・HERO Gr

e a t T O R N A D O」！！」

手札の二体のモンスターが現れたと思ったらその二体が竜巻のような光に巻き込まれ、その光の中からマントを羽織ったHEROが姿を現す。

「TORNADOは融合召喚に成功した時相手フィールド上の全てのモンスターの攻撃力・守備力を半分にする！ タウン・バースト
！！！！」

春香の指示と共にTORNADOの起こした竜巻が二体の魔法使いの力を奪い取り、攻撃力と守備力が半減する。

クルセイダー・オブ・エンディミオン	攻撃力：1900	950
魔法の操り人形	攻撃力：2800	3200
	1600	0

「終わりよ！ まずはアブソルートで魔法の操り人形を攻撃！」

「そうはいかない！ リバースカード発動、「和睦の使者」！！」

春香の指示と同時にメリオルがリバースカードを発動し、攻撃を防ぐ。それを見た春香は肩をすくめて言った。

「ターン終了」

「私のターン……ドロー！」

春香の言葉を聞いてからメリオルはカードを引き、見る。そしてそのカードを発動した。

「一か八か、魔法カード「カップ・オブ・エース」！！」

そのカードが発動した瞬間ソリッドビジョンのコインがフィールド上に現れ、メリオルがコイントスと叫ぶとコインはくるくると縦に回りながら宙を舞う。そしてコオンと音を立てて落ちたコインは表を見せていた。

「よし、二枚ドロ……！！」

「？」

その二枚のカードを引いた途端メリオルの様子が変わり、春香は不思議そうな表情を見せる。そしてメリオルは伏せカードを発動した。

「リバースカードオープン、「魔力掌握」！ この効果で魔法の操り人形に二つの魔力カウンターを乗せ、攻撃力を上昇。そしてクルセイダー・オブ・エンディミオンの効果で魔力カウンターを乗せ、さらに攻撃力上昇」

「いえ、TORNADOの効果で攻撃力は上昇しないわ」

「あら？ まあ魔力カウンターは乗せるわね」

クルセイダー・オブ・エンディミオン 攻撃力：950 1550

「そして「氷結界の風水師」を召喚し、レベル3の風水師とレベル4のクルセイダー・オブ・エンディミオンをチューニング！ 出でよ、「アーカナイト・マジシャン」！！」

その言葉と共に二人の魔術師が光に包まれ、白を基調に紫色の模様

をつけたローブを着た魔術師が姿を現す。その魔術師の周りに二つの緑色の球体状の光が浮遊を始めた。

「アーカナイト・マジシャンのシンクロ召喚に成功した時このカードに二個魔力カウンターを乗せる。そしてこのカードは私のフィールド上にある魔力カウンターを一個取り除く事により相手フィールド上のカードを破壊できる。私は魔法の操り人形に乗っている魔力カウンターを三個取り除いてエアーマンとTORNADO、そして摩天楼2 ヒーローシテイを破壊！ アーカナイト・デストラクションー！！」

魔法の操り人形から三つの緑色の光がアーカナイト・マジシャンの持つ杖に移り、その光が解放されるとエアーマンとTORNADO、そして摩天楼が破壊された。

アーカナイト・マジシャン 守備力：1800

「リバーズカードをセットし、魔法の操り人形を守備表示に変更してターン終了」

魔法の操り人形 守備力：500（TORNADOの効果により半減中）

「（悪あがき？ それとも何かの罠？……）くっ、私のターン、ドロー！！」

春香の頭の中を様々な思考が走るが、春香は首を横に振って息をふうっと吐くとカードを引く。

（融合……でも素材がない……このまま黙ってターンを明け渡し、

次のターンで下級モンスターを引かれたらペースを持っていかれる
……)

引いたカード　融合を見ながら春香はそう考え出し、くつと呟くとそれをブラフにセツトした。

「アブソルートでアーカナイト・マジシャンに攻撃！　フリージング・アト・モーメント！！」

「リバーズカード発動！　「バスター・モード」！！」

春香の攻撃指示を聞くとメリオルも伏せカードを発動し、それと共にアーカナイト・マジシャンが光に包まれ、光の中から黒を基調に赤い線のような模様の入った鎧を着たアーカナイト・マジシャンが姿を現す。

「バスター・モードの効果により私はアーカナイト・マジシャンをリリースして「アーカナイト・マジシャン/バスター」を特殊召喚！！　攻撃表示！！」

「くつ……なら攻撃続行！！」

アーカナイト・マジシャン/バスターの出現に春香は一瞬気後れするがそう叫び、アブソルートはアーカナイト・マジシャン/バスターに向かっていく。

「フリージング・アト・モーメント！！」

「アーカナイト・バスターマジック！！」

しかしアブソルートはアーカナイト・マジシャン/バスターに迎撃

され、破壊される。しかしその瞬間アーカナイト・マジシャンと魔法の操り人形が氷に包まれた。

「アブソルートの効果によりあなたの場のモンスターも全て破壊！
死してなおヒーローはマスターを守るためその責務を果たす！！」
LP2800 2400

その言葉と共に中の魔術師ごと氷が弾けとぶ。しかし終わってないのはメリオルも同じだ。

「アーカナイト・マジシャンノバスターの効果により私は墓地から
「アーカナイト・マジシャン」を特殊召喚！」

その言葉と共にメリオルの場に光が灯り、光の中からさっきの白いローブの魔術師が姿を現す。しかしその魔力の源である光はなかった。

「アーカナイト・マジシャンに魔力カウンターが乗るのはシンクロ召喚のみ。よってこの場合アーカナイト・マジシャンに魔力カウンターは乗らないわ」

「ターンエンド」

この次のターンで相手が攻撃力2400以上または2000以上のモンスターを召喚してきたら自分は負ける。せめてこのブラフが警戒されるように春香は強い意志を見せてターンエンドを宣言した。そしてメリオルのターンに移る。するとメリオルはふふつと笑った。

「やっぱりこのデッキのエースはこの人っていうわけかしら？ 魔法カード「黒魔術のカーテン」を発動！」

その言葉と共にメリオルの場に一枚のカーテンが現れ、そのカーテンが翻ると中から紫色の衣装に身を包んだ魔術師が姿を現した。

「私のライフ半分をコストにデッキから「ブラック・マジシャン」を特殊召喚！」LP1800 900

(うっ)

自分のライフを上回るモンスターを召喚された、それに春香の顔が一瞬強張るがなんとか持ち直す。

「アーカナイト・マジシャンを守備表示に変更。ここで決着をつける！ ブラック・マジシャンでダイレクトアタック！ ブラックマジック黒魔導！！」

「……私の負けね」LP2400 0

ブラック・マジシャンの闇魔法を受けた春香のライフは0を示し、メリオルはよしとガッツポーズを取る。そしてソリッドビジョンも消えてから二人は歩き寄った。

「楽しいデュエルだったわ」

「ええ、私のヒーローデッキのラッシュコンボについてこられるなんてね」

メリオルが右手を出してそう言うと春香も笑って握手に応える。それから春香が続けた。

「絶対に勝ちなさいよ?」

「全力を尽くすわ」

春香の言葉にメリオルがそう返すと二人はパシンとハイタッチをしてそれぞれのチームメイトの方に戻っていった。

「ご苦労さん」

「ええ。今回ちょっと引きが悪かったわ」

「確かに、最後のあれなんて少し力任せだったし。バスター・モードが破壊されてたら負けてたろ?」

「多分間違いないわ。少し改良の余地ありかもね」

レオとメリオルはそう話し合い、ライとアルフ、エルフィは決勝進出を共に喜び合っていた。

「決勝戦は一時間後に第一コートで行われます。時の旅人とチーム・パワードのメンバーは遅れないように充分注意してください」

「っと……んじゃ飯食って軽く調整するか」

「そうね」

放送を聞いたレオとメリオルはそう言い合つとライ達を連れて一旦デュエル場を出て行った。

第四話 準決勝、魔術師V S H E R O（後書き）

第四話……なんか続いていくことにデュエルの質が下がっている気がしてなりません……。

前回の準決勝はアーカナイト・マジシャンの効果ミスを指摘されたため改めて作り直しました、申し訳ありませんでした。まあメリオルのデッキコンセプトは変わらず魔力カウンタータイプの魔法使い族ですけどね。

そして次回から決勝なんですが、決勝ではレオのチームが全員一回ずつ戦うんですが正直もうデッキネタがなくなつて、そんなわけでレオ、メリオル、ライ、アルフ、エルフィの相手に使つてほしいデッキを募集します、というかキャラも募集します。正直今までの相手つてそこまで深く考えてなかつたもんで、名前的にもネタが切れてきました……。

そして決勝戦からはレオ達にもオリカを使わせていく予定です。あ、もちろんそんなに壊れにならないよう自重はします。ですがレオ達だけがオリカを使うつても不公平なので相手に使わせたいオリカの方も募集をいたします。

ようはレオ達が戦う相手キャラとそのデッキ、さらに出来ればそのデッキで使つてほしいオリカの募集つてとこですね。まあオリカはこれはちよつとやばいだろとか判断したら、すみませんが無理です的な返答もいたしますが。

とりあえずキャラの名前と性格や口調等の簡単な設定、そのキャラが使用するデッキとそのデッキに組み込んで欲しいカード、オリカ、そして誰と戦つてほしいかを明記してください。でも細かい設定を出されすぎても出し切れるか分からないんで性格と口調程度で結構ですよ。

ご質問があれば受け付けますのでご協力よろしくお願いします、もちろんただの感想だけでも大歓迎です。乱文乱筆にて失礼致します

た。
それでは。

第五話 決勝戦第一試合、戦士VS光の支配者（前書き）

今回からオリカ、原作使用未OCG化カードを使用していきます。
あらかじめご了承ください。

第五話 決勝戦第一試合、戦士VS光の支配者

「さあ、いよいよ今大会決勝戦が始まります。今大会決勝戦のルールは五対五の団体戦、先に三勝したチームが優勝となります！優勝するのは時の旅人か、それともチーム・パワードか!？」

放送が実況も兼ねているのだろうかと考えながらレオ達は最初に行くメンバーの選出をする。しかし選出するまでもなくライがそれに立候補をした。

「俺が行くよ」

「おう。頼んだぜ、家のチームの切り込み隊長」

ライの言葉にレオがそう返すとライはグッとサムズアップしてコートに上がる。相手は茶色い髪を短髪にした少女、自分と同年か年上というところだろう。そうライが考えていると彼女はグッとサムズアップして口を開く。

「よろしくな!」

「ああ。楽しく戦おうぜ」

「時の旅人代表、ライVSチーム・パワード代表、真理………決勝戦、第一試合、開始!」

「「デュエル!!!」」

審判の宣言と共にライと少女

真理が合わせて声を出すとソリッ

ドビジョンにコインが出現し、審判が続けて言った。

「なお決勝戦では一試合ごとにソリッドビジョンのコイントスにより先攻後攻が決定します。表なら時の旅人、裏ならチーム・パワードの先攻です……コイントス！」

審判が説明し、コイントスと言うと共にソリッドビジョンのコインはくるくると回転し、宙を舞う。そして落ちて止まったコインは表を見せていた。

「よし、俺の先攻！ ドロー！！」

表情を緩ませた後ライはそう言ってカードを引き、手札に加えて見眺める。そして一枚のカードをフィールドゾーンに発動した。

「フィールド魔法「侍の戦場」を発動！」

その言葉と共に辺りが所謂戦国時代の合戦の場へと変わっていく。ちなみに折れた刀に矢の他変にリアルな侍の死体まである。

「侍の戦場の影響下において戦士族の攻撃力、守備力は500ポイントアップし、さらに戦闘以外では破壊されなくなる。己が義の元に戦場を戦う侍の意思、それは信念となって戦士達に受け継がれるんだ！！ さらに俺は「切り込み隊長」を召喚し、その効果でもう一体切り込み隊長を召喚！」

「ほう、一ターン目でお得意の切り込みロックをかけたか」

「しかも侍の戦場の効果で戦闘以外では破壊できず、でも切り込み隊長のロック効果で攻撃もできない。案外厄介よね」

ライの言葉と共にフィールド上に同じ姿の二刀流剣士が姿を現し、剣を構える。もちろん二体とも戦場の効果を受けて攻撃力が上昇した。

切り込み隊長×2 攻撃力：1200 1700

「ターン終了！」

「ふうん。あたしのターン！」

ライが笑みを浮かべてターンエンドを宣言すると真理は頷いてドロ―し、手札を見る。そして一枚のカードを手にとった。

「「ライトロード・パラディン ジェイン」を攻撃表示で召喚！
このカードも戦士族だからフィールドの影響を受けるよ！」

ライトロード・パラディン ジェイン 攻撃力：1800 2300

「でも切り込み隊長の効果で攻撃は出来ない」

「ま、そうよねえ……カードを一枚セットしてエンドフェイズ、ジェインの効果でデッキの上からカードを二枚墓地に送るつとラッキ―、「ライトロード・ビースト ウォルフ」を特殊召喚！ このカードはデッキから墓地に送られた時に特殊召喚する効果を持つてる！ それからターン終了！」

フィールドにもう一体モンスターが現れ、それから真理はターンエンドを宣言する。それを聞いてからライはカードをドロ―した。

「俺のターン……俺は不意打ち又佐を召喚し、手札から装備魔法「融合武器 ムラサメブレード」を又佐に装備！ さらに侍の戦場の効果で攻撃力も上昇する！」

不意打ち又佐 攻撃力：1300 1800 2600

「ライの得意パターンだな。切り込みロックと侍の戦場で相手の攻撃を防ぎ、その隙に不意打ち又佐みたいな複数回攻撃可能モンスターで敵を切り崩し、畳み掛ける」

不意打ち又佐の右腕が刀と融合し、さらにフィールド効果が攻撃力を上昇させる。一気に真理の場のモンスターの攻撃力を越え、ライは相手モンスターを指差した。

「不意打ち又佐の攻撃！ 不意打ち斬り！！」

「リバーズカード発動、「ライトロード・バリア」！ ライトロードが攻撃対象になった時、自分のデッキの上から二枚のカードを墓地に送ることにより、その攻撃を無効にする！」

「ちっ……二回目の攻撃はせずにターン終了」

ライの指示と共に不意打ち又佐は素早く相手の死角に入り込んで刀を振るうがその瞬間真理が発動したカードによって現れた光の障壁が又佐の刀を防ぎ、又佐がその場を引くとライはターンを終了した。

「あたしのターン、ドロー！……私はジェインをリリースして「ライトロード・エンジェル ケルビム」をアドバンス召喚！ この時ケルビムの効果で私のデッキの上から四枚カードを墓地に送ってあったの場のカードを二枚まで破壊する。けど侍の戦場の効果であん

たの場のモンスターは破壊できないからあたしが破壊するのは侍の戦場のみ！」

真理の場に一体の天使が現れ、その天使が光を発すると戦場がかき消され、元の状態に戻っていく。

「そして魔法カード「ブラック・コア」！ 手札を一枚捨ててあんなの場の切り込み隊長を除外！！」

「うわっ！？」

さらに突然現れた黒い穴に切り込み隊長が吸い込まれていった。

「これによりあなたの戦士達の攻撃力上昇効果も消え、切り込み隊長のロック効果も破られた」

「ちっ」

切り込み隊長	攻撃力：1700	1200
不意打ち又佐	攻撃力：2600	2100

「いくよ！ ライトロード・ビースト ウォルフで切り込み隊長を攻撃し、さらにライトロード・エンジェル ケルビムで不意打ち又佐を攻撃！」

「ぐあっ！」 LP4000 2900

「ターン終了」

あっという間に場が全滅し、ライは少し苦しい表情を見せる。しか

し次にカードを引くとふつとした笑みを浮かべて手札のカードを發動した。

「魔法カード「戦士の生還」により俺は墓地から切り込み隊長を手札に加え、召喚！ その効果で手札から「共闘するランドスターの剣士」を特殊召喚し、レベル3のランドスターの剣士と切り込み隊長をチューニング！ 出陣せよ、「ゴヨウ・ガーディアン」！」

ライが召喚した二人の剣士はすぐに光の包まれ、その中から一人の岡引っぽい人物が姿を現す。そしてライはすぐに攻撃を指示した。

「ゴヨウ・ガーディアンでライトロード・エンジェル ケルビムを攻撃！ ゴヨウ・ラリアット！」

その言葉と共にゴヨウ・ガーディアンは縄付きの十手の縄をヒュンヒュンと振り回してケルビム目掛けて投げる。しかしその攻撃は光の壁に阻まれた。

「ライトロード・バリアの効果でデッキの上から二枚カードを墓地に送り、その攻撃を無効にする」

「ちえっ、カードを一枚セットしてターン終了」

真理の言葉を聞いたライは分かってたけど残念みたいな仕草をとってターンを終了する。そしてターンが真理に移った。

「あたしのターン、ドロー。私は「ガーディアン・オブ・オーダー」を特殊召喚！ このカードはあたしの場に光属性モンスターが二体以上表側表示で存在する時特殊召喚できる！ そんなもって「ライトロード・サモナー ルミナス」を召喚！ このカードは手札の

光属性モンスターを捨てる事により墓地からレベル四以下のライトロードを呼び出せる。あたしは手札のウォルフを捨てて墓地から「ライトロード・ウォリアー ガロス」を特殊召喚！」

あつという間に相手の場に五体ものモンスターが揃い、流石にライの表情も歪められる。そして真理はターン終了の前にエンドフェイズに移った。

「エンドフェイズの前にルミナスとガロスの効果で合計五枚のカードをデッキから墓地に送る。そしてガロスの効果で墓地に送られる中にはエイリンとオルクスが一枚ずつある、よってガロスの効果により二枚ドロ。そんでもってターン終了」

簡易状況説明

ライ LP2900 手札零枚

フィールド ゴヨウ・ガーディアン攻撃表示 伏せカード一枚

真理 LP4000 手札二枚

フィールド ライトロード・エンジェル ケルビム、ウォルフ、ルミナス、ガロス、ガーディアン・オブ・オーダー全て攻撃表示
ライトロード・バリア発動中

「強い……」

「ええ、ライトロードの連続召喚に隙がない。速攻のモンスター並べを得意としているライを越える速さでモンスターを並べてるわ」

観客席にいるレオが呟き、メリオルもこくと頷く。ライも深呼吸をするとデッキに指をかけた。

「俺のターン、ドロー！……よし、俺は「命削りの宝札」を発動！
デッキから手札を五枚になるようにドローし、五回目のスタンバ
イフェイズにこのカードを破壊、全ての手札を捨てる」

ここでドロースーツを引いた。そして一気に手札の増強を行い、ラ
イは手札をパツと見眺めるとその内の一枚を取った。

「永続魔法「闇の護封剣」を発動！ 相手フィールドのモンスター
は全て裏側守備表示になる！」

魔法が発動されると同時に闇の剣が天から降り注ぎ、相手モンス
ターを全て闇に包む。さらにライはもう一枚のカードを取った。

「そして「コアキメイル・ベルグザーク」を召喚！ 裏守備にしち
まえばバリアもオネストも関係ない！ 一気に攻め込む！！ ゴヨ
ウ・ガーディアンで裏守備となったガーディアン・オブ・オーダー
を攻撃！ ゴヨウ・ラリアット！！」

ライの指示と共にゴヨウ・ガーディアンが裏守備になったガーディ
アン・オブ・オーダー目掛けて十手を投げ、その縄で相手を絡めと
ってライの場へと持っていく。

「ゴヨウ・ガーディアンは破壊したモンスターを俺の場に表側守備
表示での特殊召喚が出来る！ そしてコアキメイル・ベルグザーク
で裏守備のライトロード・エンジェル ケルビムを攻撃！ ベルグ
ザークアタック！」

コアキメイル・ベルグザークの攻撃がケルビムを破壊し、さらにラ
イが追撃を指示する。

「コアキメイル・ベルグザークは相手モンスターを戦闘で破壊したときもう一度だけ続けて攻撃する事が出来る！ 裏守備のライトロード・サモナー ルミナスに攻撃！ ベルグザークツインアタック！」

ライの指示と共に行ったコアキメイル・ベルグザークの追撃がルミナスを破壊、それが終わってからベルグザークは攻撃から引いた。そしてエンドフェイズに入る。

「俺はエンドフェイズ時にコアキメイル・ベルグザークの効果で手札の戦士族「無敗將軍 フリード」を見せてからターン終了」

ライのターンエンド宣言を聞いた真理はカードを引くがその表情は少し歪んでおり、モンスターを場に裏側で置く。

「あたしのターン、ドロ……モンスターを守備表示で召喚してターン終了」

「俺のターン、俺はガーディアン・オブ・オーダーをリリースしてジェネラル「無敗將軍 フリード」をアドバンス召喚！ 魔法カード、連合軍を発動！ 俺の場の戦士はゴヨウにベルグザーク、フリード。よって攻撃力は全員600ポイントアップ！」

ゴヨウ・ガーディアン	攻撃力：2800	3400
コアキメイル・ベルグザーク	攻撃力：2000	2600
無敗將軍 フリード	攻撃力：2300	2900

ゴヨウ・ガーディアンで裏守備のライトロード・ビースト ウォルフに攻撃！ 効果によって破壊したウォルフを俺の場に守備表示で

特殊召喚！」

ゴヨウ・ガーディアンが縄付き十手で絡め取ったウオルフはライの場に守備表示で召喚され、さらにライは攻撃を続ける。

「コアキメイル・ベルグザークで裏守備のライトロード・ウォリアー ガロスを攻撃！ そしてベルグザークの効果により続けてもう一体の裏守備モンスターを攻撃！」

コアキメイル・ベルグザークの連続攻撃に裏守備のガロスともう一体の裏守備モンスター カードガンナーを破壊する。これで相手の場はがら空きになった。

「カードガンナーの効果で一枚ドロ！」

「無敗將軍 フリード」でダイレクトアタック！ ジェネラル・スラッシュュ！」

「くっ！」 LP4000 1100

一気にライの場に四体ものモンスターが並び、逆に真理の場のモンスターは0。ライトロードを召喚すればバリアで防げるものものそんなに持つかは分からない。

「エンドフェイズ、ベルグザークの維持のために俺は手札の「共闘するランドスターの剣士」を見せてターン終了」

ライは手札の一枚の戦士を見せてターンを終える。これで次のターンシンク召喚をするという牽制にもなっただろう、真理はふうつと息を吐いてカードを引いた。そのカードを見ると真理の顔が驚き

の表情を見せる。

「……最後の最後で、あたしの勝ちだ！ あたしは魔法カード「おろかな埋葬」を発動し、デッキから「ジャッジメント・ドラグーン裁きの龍」を墓地に送る。そして魔法カード「死者転生」！ 手札を一枚捨て、墓地からモンスターを手札に加える。あたしが加えるのはもちろん「裁きの龍」！

「っ！」

「あたしの墓地にはケルビム、ジェイン、ルミナス、ガロス。フィールドに出て墓地に送られただけでも四種類のライトロードがいる、それぞれの効果で墓地に送られてるのはもつといるけどね。よってあたしは手札から「ジャッジメント・ドラグーン裁きの龍」を特殊召喚！！」

真理の場に巨大な龍が姿を現し、その威圧感に思わずライは固まる。

「裁きの龍の効果発動！ ライフを1000払う事でこのカード以外の全てのカードを破壊する！ ジャッジメント・ハウリング！！」
LP1100 100

真理の叫び声と共に裁きの龍が吼え、その咆哮によって起きた衝撃波がライの場の全てのカードと真理の場のライトロード・バリアを破壊する。

「っ……」

もはやライを守るものは何もない。真理はふうと息を吐くとライを指差した。

「裁きの龍でダイレクトアタック！！ ジャッジメント・ブレス！

「!!」

「……負けたか、ごめん」LP2900 0

真理の指示と共に裁きの龍は口を開けてエネルギーを溜め、一気にそのエネルギーをライ目掛けて撃ち出す。向かってくるそれを眺めながらライは悟ったようにそう呟いた。そしてプレスがライを呑み込み、ライのライフポイントが0を示す。ソリッドビジョンとはいえその勢いに押されたかライは大の字になって仰向けに寝転んでいった。それを見ながら審判は真理のフィールドの方の手を上げて声を出す。

「決勝戦第一試合勝者、チーム・パワー代表、真理!!」

「……あーくそつ、負けたー!!!!」

審判がそう宣言したと思ったらライはうがーっと吼えるように声を上げる。するとそこに真理が歩き寄った。

「ほーら、いつまでも寝っ転がらない」

真理はそう言うのと笑みを浮かべてライに手を差し伸べ、ライはうーっと呟きながらその手を取って起き上がる。それから真理が笑いながら言った。

「それにしてもホント強かったねえ。まさかあの状態から追い込まれるなんて思わなかったよ」

「ああ、こっちも追い込んでから逆転負けしたから余計に悔しい。まあ全力でやったから悔いはないよ、楽しいデュエルだった!」

真理がからからと笑いながら言うとライも悔しそうな笑みを浮かべて返し、その次ににかつと元気な笑みを浮かべてそう続け、それを聞いた真理もサムズアップをして言った。

「おう！ 楽しいデュエルだったよー！」

ライと真理はそう言いあうとパチンとハイタッチをし合って踵を返すと己のチームの方に戻っていった。

「ごめん、負けた」

「まあいいさ、勝負は時の運っていうし」

ライは悔しそうにそう言うがレオはふつと優しい笑みを浮かべながら返し、ライもまあそうだけどと呟く。

「第二試合！ 両チームの代表はコートに上がってくださいー！」

「おっと、次は誰だったっけ？」

「僕だね。まあライの仇討ちと思って頑張るよ」

「仇って……ま、頑張れよ」

審判の声を聞いたレオがそう尋ねるとアルフが答え、ふつと笑みを浮かべて続ける。それにライは苦笑を浮かべて言い、アルフはもちろんというように笑ってデュエルディスクにデッキをセットした。

第五話 決勝戦第一試合、戦士VS光の支配者（後書き）

第五話、今回から決勝戦開始です。そして今回の相手はライトロード、例によって使ったこともてか見た事もないカード群なのでご指摘があればよろしくお願いします。

そして今回からレオ達はオリカを使用していきますがとりあえず常にオリカではなく時々出す程度でいきたいと思imasuのでご理解いただければ嬉しいです。なるべく基本は既存のカードを使用して多く出さないよう、またチートにならないように気をつけていきますので。

そしてオリカの説明についてはまた後日、活動報告を利用して説明します。むしろそれ以外に活動報告を使わないと思imasu。まあ侍の戦場については元々レーネスさんのところにオフアーしたカードなのであっちを読んでる方は既に知ってると思imasuが……。えーっと……とりあえずまたデッキネタも切れましたし次いつになるか分かりませんが、それでは。

第六話 決勝戦第二試合、人工生命VS自然生命

決勝戦はレオ達時の旅人の黒星で幕を開け、次の第二回戦が開始される。

その第二回戦を戦う少年 アルフがコートに上がるとそれからワントンポ遅れて黒い髪をツインテールにした明らかに自分より年下だろうの少女がコートに上がってくる。それを見るとアルフはこつと微笑んで挨拶をした。

「よろしくね」

「ええ、よろしくお願いします」

アルフの言葉に少女もこくと頷いて返し、アルフは笑みを浮かべたまま続けた。

「偉いね。いくつなんだい？」

「……そう聞かれるのは慣れてますけど……15です」

アルフの問いに少女がため息混じりに言うとアルフの表情が固まる。完璧に自分と同じ年、小学校高学年程度だろうと思っていたアルフは我に返ると慌てて謝る。

「1、ごめんねー」

「慣れてるからいいですよ。幼児体型とか童顔なのは事実なんですし……むしろこれで気を遣って手加減したらそっちに怒ります」

アルフの言葉に少女はキツとした目つきで言い、それを見たアルフはふっと笑みを浮かべた後頷いた。

「分かった。こっちも負けたら後がなくなるし、全力でいかせてもらうよ」

アルフと少女はそう言いあうとそれぞれの所定の位置に向かって歩き、向かい合うとデュエルディスクを構えた。

「時の旅人代表、アルフVSチーム・パワード代表、奈々……決勝戦、第二試合、開始！」

「デュエル!!!」

審判の掛け声を聞くと二人が声を合わせて叫び、それを合図に先攻後攻を決めるソリッドビジョンのコインがトスされる。落ちたコインは裏を見せていた、つまり少女　奈々の先攻だ。

「よし、私の先攻！　ドロー！」

奈々は素早くカードをドローして手札を眺め回し、一体のモンスターを出す。

「私はモンスターを守備表示で召喚し、カードを一枚セットしてターン終了」

「僕のターン。僕は」アンティーク・ギアナナイト「古代の機械騎士」を召喚してそのモンスターに攻撃！　アンティークスピア！」

アルフの指示と共に機械兵士が右手に持った巨大な槍で相手モンス

ターを突き倒す。その攻撃にひまわりみたいなライオンはなす術もなく破壊された。すると奈々のフィールドに二つの綿毛型モンスターが姿を現す。

「「ダンディライオン」の効果により私の場に二体の綿毛トークンが出現します」

「ふーん……カードを一枚セットしてターン終了」

それを見たアルフは面白そうに微笑みながらカードを一枚セットしてターンを終えた。そして奈々のターンに移る。

「私のターン……いきます。私は「ローンファイア・ブロッサム」を召喚し、ブロッサムの効果発動！ 綿毛トークンを一体リリースし、デッキから植物族モンスターを一体特殊召喚する。この効果で私はローンファイア・ブロッサムを特殊召喚し、新たに特殊召喚されたブロッサムの効果発動！ もう一体の綿毛トークンをリリースして「椿姫 ティタルニア」を特殊召喚！」

「わお」

「ティタルニアで古代の機械騎士をこっげ」

「おっと待った、攻撃宣言される前にリバーズカードオープン「威嚇する咆哮」。このターン攻撃宣言はさせないよ」

奈々の場に同じ二体のモンスターの他人型植物の姫が姿を現し、アルフは面白そうに微笑む。そして奈々が攻撃を指示しようとしたのを優しく遮るとリバーストラップを発動、そのカードから発された咆哮のような声に奈々が怯むとアルフはちゅちゅと指を振って笑いながら言った。

「あう……ターン終了」

「……とはいえタイトルニアと……少し荒っぽくいかせてもらおうよ。僕のターン、僕は「プロト・サイバー・ドラゴン」を召喚し、「融合」を発動！ 場のプロトと手札の「サイバー・ドラゴン」を融合し、「サイバー・ツイン・ドラゴン」を召喚！」

アルフはふふつと笑いながら双頭の機械竜を呼び出し、相手の場を指差した。

「今の僕の手札でタイトルニアは倒せないし放つとしても厄介……ツインには悪いけどタイトルニアには早々にご退場願うよ。ま、その前に念のため速攻魔法「サイクロン」でその伏せカードを破壊させてもらおうよ」

アルフがそう言うと突然現れた竜巻が奈々の場の伏せカード「棘の壁」を破壊する。

「危ない危ない……さてと、サイバー・ツインで攻撃表示のプロットサムを攻撃！ エヴォリューション・ツイン・バースト、一発目！」

「きゃっ!?!」 LP4000 1700

「そしてサイバー・ツイン・ドラゴンで椿姫タイトルニアを攻撃！……ごめんね、ツイン」

ローンファイア・ブロッサムを破壊したビームはその勢いで奈々にも激突、ライフポイントを大幅に削るとアルフはタイトルニアへの

追撃を指示し、すまなそうに笑ってティタルニアへと攻撃しようとしているサイバー・ツイン・ドラゴンを見る。そしてツインの放ったビームに対してティタルニアは花びらのような刃で対抗、二体のモンスターは相打ちになった。

「最後に古代の機械騎士でローンファイア・ブロッサムを攻撃！
アンテイクスピア！！」

そしてアンテイク・ギアナイトの槍がもう一体のブロッサムを襲うがこのブロッサムは守備表示、残念ながらライフポイントに影響は出ない。

「ターン終了」

「私のターン！」

アルフのターンエンド宣言を聞くと奈々はカードを引く。それを見ながらコート以外のメリオルがレオに言った。

「結構上手く回ってるわね、アルフ」

「ああ。このまま上手く行ってくればいいんだが……流石に相手も決勝の敵、そうそういかせてくれるかどうか」

メリオルの言葉にレオは険しい表情を見せながらそう呟く。その間に奈々のターンも進んでいた。奈々は引いたカードを見るとふっと笑みを浮かべてカードを手取る。

「「ナチュル・ナーブ」を召喚し、さらに墓地のローンファイア・ブロッサムを除外して装備魔法「薔薇の刻印」を発動。このカード

を装備したモンスターのコントロールをエンドフェイズまで得て、また次のターンのスタンバイフェイズ時に装備モンスターのコントロールを得る」

「くっ……ちなみに、ほぼターンプレイヤーが装備モンスターを操るって意味でいいよね？」

奈々が魔法カードを発動すると共に古代機械の騎士の頬に当たる部分に薔薇の刻印が刻まれ、古代騎士はプログラムにバグが走ったのかふらふらと相手ゾーンに向かう。それにアルフは苦笑交えに魔法の効果を簡単に言うが状況はやばい、自分のフィールドがから空きになってしまった。あいにく冥府の使者ゴーズは手札にないしそもそもデッキに入れていない。

「ま、そういう意味ですね。返す気なんてありませんけど……レベル1、地属性のナーブとレベル4、地属性の古代の機械騎士をチューニング！」

「しまった!？」

「今ここに現れよ、「ナチュラル・ビースト」!!」

奪われたモンスターを早々シンクロ召喚に使われ、その光の中から身体が緑色で足が木のようになったまるで植物みたいな虎が現れる。

「ナチュラル・ビーストでダイレクトアタック! ナチュラルビーストファンゲー!!」

「うわぁっ!？」 LP4000 1800

「私はカードを二枚セットしてターンを終了します」

流石に虎に飛び掛られ、噛み付かれたらソリッドビジョンとはいえびびる。アルフは思わず退いてしまふ。それからビーストが元位置に戻ると奈々は二枚カードをセットしてターンを終えた。

「うゝ……僕のターン」

「やばいわね。確かナチュル・ビーストって……」

「ああ、相手の魔法をデッキトップ二枚を犠牲に無効にし破壊する効果を持つ。あいつのデッキの上級モンスター召喚はリリースを除くと魔法に頼ったもの……封じられたらきついで」

アルフがやばそうだなと心中で考えながらカードを引く後ろでメリオルとレオはひそひそとした声でそう言いあう。そしてアルフがカードを引くと彼は「あ」と思わず声を出す。

「はい？」

「ラッキー、この状況を打破できるカードだ……僕は「シュレッダー」を攻撃表示で召喚！」

「？ あなたが通常召喚に成功した時、私は手札の「ナチュル・コスモスビート」を効果によって特殊召喚します、コスモスビートは守備表示」

アルフの場に一体の妙な機械が姿を現し、奈々は不思議そうに首を傾げながら黒く、頭に花が植えられているモンスターを召喚する。

するとアルフは説明を始めた。

「シュレッダーは僕の手札にある機械族を捨てる事によりそのモンスターレベル以下の相手モンスターを破壊する、そして僕の手札にはレベル八の「古代の機械巨竜」がある。これを捨ててシュレッダーの効果発動！ レベル五のナチュル・ビーストを破壊！」

アルフがそう言ってカードを墓地に捨てるとシュレッダーの目が光り、ナチュル・ビーストに近づくとどういいう理屈か知らないがナチュル・ビーストを頭上から吸い込み、頭についているカッターで裁断する。

「そしてシュレッダーでコスモスビートを攻撃！」

「そうはいきません！ リバーズカード発動、攻撃の無力化！」

シュレッダーの突撃を奈々は発動した不思議な障壁で防ぎ、壁に弾かれたシュレッダーはコロコロと転がってアルフのフィールドに戻る。

「カードを一枚セットしてターン終了」

簡易状況説明

アルフ LP1800 手札零枚

フィールド シュレッダー攻撃表示 伏せカード一枚

奈々 LP1700 手札零枚

フィールド ナチュル・コスモスビート守備表示 伏せカード一枚

「私のターン、ドロ……ビーストをあの状況から一ターンで破壊したのは正直驚きました、流石は切り札ですね。ならこっちも切り札を見せましょう。私は「ボタニカル・ライオ」を召喚し、レベル二のコスモスビートとレベル四のライオをチューニング！ 咲き誇れ、「スプレんティッド・ローズ」！」

二体の植物モンスターが光に包まれ、その光の中から薔薇の茨が現れる。そして光が破れてその中から半身が黒、もう半身が緑の服に身を包み、足首のところには薔薇の花の飾りを付けた女性が姿を現した。

「スプレんティッド・ローズは墓地の植物族を除外する事で相手モンスターの攻撃力を半分にする能力と戦闘を行った時墓地の植物族を除外する事で攻撃力を半分にしてもう一度攻撃する能力を持つ。これで終わり！ スプレんティッド・ローズでシュレッダーを攻撃！ ローズレクイエム！！」

奈々の指示と共にスプレんティッド・ローズは四本の茨の茎をシュレッダーに向けて突き刺すように出す。するとシュレッダーの姿が突然消えた。

「え！？」

それに奈々が呆けた声を出す、その次に彼女が見たのは三つのシルクハットだった。

「リバーズカードを発動したんだよ。罠カード「マジカルシルクハット」、このカードの効果でシュレッダーの他デッキから選んだモンスター以外のカードをモンスターとして扱い、僕の場に裏側守備表示で召喚したのさ。ソリッドビジョンではカードに合わせてシル

クハットが出る仕組みみたいだね」

「うう……なら右のシルクハットに攻撃！」

アルフが得意げに説明すると奈々は厄介だなあとというように呟いてから右のシルクハットを指差して攻撃を指示する。それに頷いてスプレントイッド・ローズは茨をシルクハット目掛けて突き出し、シルクハットを貫き、ずたずたに破く。そしてシルクハットの中からシュレッダーが出てきて破壊された。

「おお、まさか一発で当てるなんて」

「この瞬間リバーズカードオープン「ブロッサム・ボンバー」！私の場の植物族モンスターが相手モンスターを破壊したとき、そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与えます」

「あいたた……で、二回目はどうします？ バトルフェイズ終了時、モンスター扱いのダメージは破壊されますけど」LP1800 200

「……二回目の攻撃を行わず、バトルフェイズを終了します」

アルフはまるでゲームの支配人みたいにそう説明を口にし、それを聞いた奈々は攻撃を止める。わざわざ墓地のカードを除外してまでダメージを破壊する意味もないだろう。彼女の宣言を聞くと二つのシルクハットは消えていき、アルフはくすつと妖しげな笑みを浮かべる。

「ところで、さっきシュレッダーが切り札って言ったよね？ そんなつもりはないよ……教えてあげるよ、シルクハットに使ったダメージカードを」

そう言つてアルフがぱちんと指を鳴らすとアルフの場に二枚の魔法カードが現れる。

「僕が二つのダミーシルクハットに使用したのはフィールド魔法」
「ギア・タウン歯車街」二枚。そしてこのカードは破壊され墓地に送られたとき、手札、デッキ、墓地から「アンティーク・ギア」と名のつくモンスターを特殊召喚できる。僕の墓地には二体のアンティーク・ギアが眠っています。一枚は古代の機械騎士、もう一枚はさっきシュレツダーで捨てた……分かりますよね？」

「……」

アルフはくすつと笑いながらそう尋ね、奈々は口元を手で押さえる。そしてアルフは右手を上にして指を構えた。

「さあ、復活せよ。」「古代の機械騎士」、そして「アンティーク・ギアガゼルドラゴン古代の機械巨竜」
「……」

そう言つて彼が指をパチンと鳴らすと共に大地が割れてアルフの場に古代騎士と巨大な機械の竜が出現する。

「うっ……タ、ターン終了」

奈々はもうお手上げというようにうな垂れてターン終了を宣言し、アルフのターンに移る。しかしこれはもう勝負がついていると言ってもいいだろう。

「僕のターン。僕は古代の機械騎士を再度召喚し、デュアル効果を発動。攻撃時にダメージステップ終了時まで相手は魔法・罠を発動

できない。もつとも魔法、畏は伏せられてないので関係ないですが」
アルフはふつと笑みを浮かべながらそう言い、スプレンドイット・ローズを指差した。

「終わりです。古代の機械巨竜でスプレンドイット・ローズを攻撃！ アンテイク・タツクル！」

アルフの指示と共に古代巨竜はスプレンドイット・ローズにその巨体を使って突進、スプレンドイット・ローズを吹き飛ばした。

「きゃあっ！」LP1700 900

「これで止め！ 古代の機械騎士でダイレクトアタック！ アンテイクスピア！」

「くあっ!?!」LP900 0

古代巨竜の攻撃の圧力に思わず奈々は腕で顔を隠すようにし、その隙に古代騎士が槍で奈々の身体を貫いた。ソリッドビジョンとはいえ槍で身体を貫かれたため奈々は思わず胸元に手をやり、それと共にソリッドビジョンも消える。驚きのあまりか奈々は膝をついていた。

「決勝戦第二試合勝者、時の旅人代表、アルフ!!」

その宣言を聞いてからアルフはまだ膝をついている彼女に近づいて手を差し伸べた。

「楽しいデュエルだったよ。ありがとう」

「ど、どうも！　こちらこそありがとうございました！！」

アルフはにっこりと柔和な微笑みを浮かべてそう言い、その微笑みを見た奈々は顔を赤く染め上げるとアルフの手を取らずに大急ぎで立ち上がると深く礼をして逃げるようにコートから去っていく。それを見たアルフは首を傾げた後コートから降りて口を開いた。

「僕、最後に何か相手の気に触ること言っちゃったかな？」

「いや、違うとおも……もういいよ」

そしてコートを降りて早々アルフは首を傾げてライに尋ね、ライは違うと思うと言おうとした後諦めたように額に手をやって呟く。昔から同じ光景を何度も見ている、流石にもう諦めるしかないだろう。この鈍感さはもう異常だ。

「第三試合！　両チームの代表はコートに上がってください！！」

「あ、次は私ね」

「お、頑張れよ！」

審判の言葉を聞いたエルフィがデッキを取り出してデュエルディスプレイにセットしながら言い、それを見たライはそう声をかける。それにエルフィはコートに向かって歩きながら当然というようにサムズアップをして見せた。

「ふむ、奴らが候補の者達か」

「はい」

一方観客席の隅で黒いローブで身体を隠している人達がそう話し合
いながらレオ達の方を見ていたが、それには誰も気づいていなかった。

第六話 決勝戦第二試合、人工生命VS自然生命（後書き）

さて、第五話……一応相手は植物族混合ナチュルのつもりでした……割と前にナチュル使いのデュエリストを個人的に見たいってリクエストが来てたんでやってみたんですがナチュルって使いづらくて……これが限界です、もうほぼ植物族デッキですよこれ……。えーっと、オリカは今回出なかつたし……そんじゃあ今回はこの辺で。指摘があつたらお願いします。それでは。

第七話 決勝戦第三試合、天使VS爬虫類（前書き）

デュエルの進行に大きな問題のある指摘を受けたので修正ついでに加筆修正を行いました。

第七話 決勝戦第三試合、天使VS爬虫類

決勝戦は現在一勝一敗、中堅を戦うエルフィはコートを上がりながら深呼吸を行って平常心を保とうとしていた。そしてコートに上がって審判に自身の名を伝え、それから相手となる青年 黒い長髪を後ろの方で一つに纏めており、割と顔立ちも整っている に挨拶する。

「よろしく」

「ん、ああ。こっちこそ……お互い、頑張ろうな」

エルフィが挨拶すると青年はそう返した後ウイंकをして言い、それを見たエルフィはくすつと笑う。すると青年はありやというような顔を見せた。

「そんな反応返されたのは初めてだ。大抵顔を赤くするなり慌てるなりすんのに……」

「確にかっこいいけど家のチームには天然でそれをやらかす人がいるから」

「ああ、二回戦のアルフって奴か。奈々があんなに照れてるのを見るのは初めてだったぜ。こんなかっこいい兄貴を持つてんだからしようがないけど」

「ふうん。じゃあ妹さんのリベンジ頑張ってね、私は彼の従姉弟なので」

青年の言葉にエルフィは笑みを浮かべながら返すと青年はまた冗談交じりに笑いながら返し、それにエルフィはくすつと笑うとそう言い残す。それを聞くと青年も言った。

「ああ。そつちも俺の毒牙に気をつけるよ」

お互いにそう言い合うと所定の位置に歩いていき、向かい合うとデュエルディスクを構えた。

「時の旅人代表、エルフィVSチーム・パワード代表、広樹……決勝戦、第三試合、開始！」

「デュエル!!!」

審判の掛け声を聞くと共に二人も声を合わせて叫び、それを合図に先攻後攻を決めるソリッドビジョンのコイントスが行われる。落ちてきたコインが指したのは裏、よって青年　広樹の先攻だ。

「俺のターン、ドロ……俺はモンスターを守備表示で場に出し、カードを二枚セット。ターンエンドだ」

さつきまでの飄々やちゃらちゃらとした雰囲気はどこへやら、物静かで冷静な雰囲気を見せてターンを終え、思わずエルフィは目を丸くするがターンエンド宣言を聞くと自分のターンを進めた。

「私のターン……一気に行くわよ？」

エルフィは手札を見るとふふつと笑い、一枚のカードを手取る。

「私は「神の居城　ヴァルハラ」を発動し、そのカード効果で「ア

「テナ」を特殊召喚！」

「ターン目で来た！ エルフィの切り札！」

エルフィの背後に出現した居城から美しい女性の天使が姿を現し、ライが思わず嬉しそうな声を上げる。それを聞いたエルフィも思わず笑みを浮かべながら続けた。

「さらに手札から速攻魔法「光神化」を發動して「光神機 桜花」を特殊召喚！ ただし攻撃力、守備力は半減し、このターンの終了時に破壊される」

エルフィの言葉と共に現れたのは一体の機械天使、しかしその纏った光はどこか弱々しく、不安定な感じを出していた。するとアテナの持つ槍が輝き出す。

「この瞬間アテナの効果発動、天使族が召喚、特殊召喚された時相手に600ポイントのダメージを与える！ 天罰てきめん！」

「ちっ」LP4000 3400

アテナの槍から発射された光線が広樹を貫き、広樹は思わず端正な顔を歪める。しかしエルフィのコンボは終わっていない。

「そして桜花をリリースし、「光神テテュス」をアドバンス召喚。この瞬間アテナの効果によりさらに600のダメージ！」

「いきなり痛いねえ……」LP3400 2800

エルフィの言葉に広樹は表情を歪めながらそう言い、エルフィは相

手の伏せモンスターを指差した。

「アテナで守備モンスターを攻撃！ アイギス・スピア！」

アテナの指示を聞いたアテナはその手に持った槍を構えて相手に突進し、相手突き抜く。その相手モンスター 小柄な宇宙人はなすすべなく破壊された。

「「エーリアン・グレイ」のリバーズ効果発動、表側表示で存在するモンスターにAカウンターを一個乗せる、俺はアテナにAカウンターを乗せるぜ。さらにリバーズしたこのカードが戦闘で破壊され墓地に送られた時デッキからカードを一枚ドロウする」

「Aカウンター？……まあいいや、テテユスでダイレクトアタック！」

「おっとそうはいかない！ リバーズカードオープン、「洗脳光線」！」

広樹の説明を聞いたエルフィは少し不思議そうな表情を見せるものの続けてテテユスでのダイレクトアタックを指示する。しかしその攻撃の前に広樹がリバーズカードを翻らせるとそのカードから妙な光線がエルフィのフィールドに向かい、その光線を受けたアテナの目が虚ろになると彼女はふらふらと相手フィールドに向かっていった。

「ア、アテナ！？」

「洗脳光線はAカウンターを乗せたモンスター一体を選択し、そのコントロールを得る永続罫。そして俺のエンドフェイズ毎にそのモ

ンスターに乗っているAカウンターを取り除きコントロールを得た
モンスターのAカウンターが全て取り除かれた時洗脳光線は破壊さ
れる。俺の場のモンスター数に変化が起きたためバトルの巻き戻し
が行われるぜ、どうする？」

「くっ……カードを一枚セットしてターン終了」

エルフィが驚いた声を上げると広樹がそう説明し、ふっと笑みを浮
かべて尋ねるとエルフィは最後の手札をセットしてターン終了を宣
言した。

「俺のターン。さてと、このターンのエンドフェイズでアテナはあ
つちに戻るがそうなたら面倒だからな、俺の場にいる間にご退場
願いますか。俺はアテナをリリースし「エーリアン・マザー」を召
喚！ おいでなさいませ我が宇宙人の母ってな」

広樹はふふつと笑いながらアテナをリリースして新たなエーリアン
を呼び出す、ちなみに対象であったアテナが破壊されなかった事に
より洗脳光線は意味もなくフィールドに残る事となった。そしてさ
らにカードを発動した。

「そして魔法カード「二重召喚」の効果で「エーリアン・ウォリア
ー」を通常召喚してつと。エーリアン・ウォリアーでテテユスを攻
撃！」

「えー!？」

わざわざ攻撃力の負けているモンスターで攻撃を仕掛けてきた。何
かやってくるのかと思っただが広樹は他にカードを発動する様子を見
せず、エーリアン・ウォリアーはテテユスの光の波動で返り討ちに

される。もちろん広樹のライフも減っていった。

「……………」 LP2800 2200

「?????」

訳が分からないとばかりにエルフィは口元に手をやる。すると爆散したエーリアン・ウォリアーの細胞の一部が突然動き出してテテユスにくつついていく。

「こ、これって!?!」

「そう言うこと、エーリアン・ウォリアーは死した時その相手に自らのA細胞を付着させる効果を持っているのさ。カード効果で言うところのカードを破壊したモンスターにAカウンターを二つ乗せるってわけ。まあ安心しなよ、Aカウンターはそれが乗っているモンスターがエーリアンと戦う時には一個につき攻撃力、守備力を300ポイント減少させる効果を持つてるけど、そう明記しているカードが場がないと発動しない。つまり仮に今マザーでかかっていてもテテユスの攻撃力は2400のままだから返り討ちってわけだ」

「そ、そう……………」

エルフィが驚いた声を上げると広樹が説明、エルフィは頷くがじゃあ何故こんな事をしたのかと疑問に残る。すると広樹はにやあっと笑みを浮かべた。

「何でそんな事をしたのか気になるって顔だね、じゃあ教えてあげるよ。俺はテテユスに乗っている二つのAカウンターを取り除き、宇宙の復讐者「エーリアン・リベンジャー」を特殊召喚!」

テテユスの身体に取付いていた変な細胞が二つ突然広樹の場に集まり、光に包まれるとその光の中から真つ黒でたくさんの腕を持ったエーリアンが姿を現した。するとリベンジャーはテテユスを睨みつけたと思うと自身の身体からA細胞を発射し、テテユスに取付かせる。

『きゃー！……！』

流石にソリッドビジョンでは絵的にきついか観客となっている女性陣から悲鳴が上がり、エルフィも口元を手で押さえる。コートの外のリオとメリオルも表情がひきつり、ライとアルフは必死で目を逸らしていた。広樹自身も表情が僅かなりひきつっている。

「相変わらず絵的にはきついな……ターン終了」

広樹は苦笑を漏らした後ターンを終え、それを聞くとエルフィはカードをドロ―した。

「私のターン、ドロ―。ドロ―カードは「ヘカテリス」、テテユスの効果によりさらにドロ―「神光の宣告者」、ドロ―「神聖なる魂」……」

エルフィのドロ―は驚くほど続き、エルフィ自身の表情と声にも驚きのものが混じってくる。

「「ジェルエンデュオ」、ドロ―……流石に終了ね」

一気に五枚もドロ―し、最後のカードを見るとエルフィはほおっと息を吐く。それから手札の一枚を手を取った。

「私は「宣告者の預言」を発動！ 手札のレベル6モンスター「神聖なる魂」をリリースして「バリエクト・デクレアラ神光の宣告者」を儀式召喚！ 守備表示！」

エルフィの場に二つの球体が一個の棒で繋ぎ合わさって手と羽が付いたようなモンスターが現れるがその守備力は2800とかなり高い上に広樹は厄介だなというように表情を歪めた。

「……テテュスを守備表示に変更してターン終了」

それから嫌な予感でもしたのかエルフィはテテュスを守りの状態にしてターンを終えた。相手の手札は二枚、そしてその両方が天使族モンスター。それに広樹は厄介だと呟いた。

「俺のターン、ドロ……神光の宣告者は手札の天使を犠牲に魔法罫、モンスター効果を全て無効にし破壊する能力を持つ。リベンジャーのAカウンターを乗せる効果もマザーの捕食効果も封じられたって訳か……ならエーリアン・リベンジャーの効果で神光の宣告者にAカウンターを乗せる！」

「神光の宣告者の効果！ ジェルエンデュオを捨ててリベンジャーの効果が無効にして破壊！」

「その効果にチェーンしてリベンジャーをリリースしトラップ発動「惑星汚染ウイルス」！ 相手フィールド上のAカウンターの乗っていないモンスターを全て破壊する！」

「ヘカテリスを捨てて無効にし破壊！」

「これで手札が尽きたな？ 俺は「エーリアン・テレパス」を召喚し、エーリアンの召喚に成功したため手札から「エーリアン・ドッグ」を召喚！ そしてエーリアン・ドッグは己の効果で特殊召喚に成功した時相手フィールド上の表側表示モンスターにAカウンターを二つ置く事ができる。俺は神光の宣告者に二つAカウンターを乗せる。そしてテレパスはエーリアンとAカウンターが乗ったモンスターがバトルする時Aカウンターの数×300、攻撃力と守備力を減らす効果を持っている……ここまで言えば分かるよな？」

広樹の怒涛のコンボをエルフィはなんとか防ぐが手札が尽きたのを見ると広樹はふっふつと笑って手足の生えたなまずのようなエーリアンを召喚し、その横に犬のようなエーリアンを呼び出す。すると犬のエーリアンの身体からA細胞が飛び出て神光の宣告者に付着した。

それから広樹の説明と不敵な笑みつきの確認にエルフィは表情を歪めるしかできなかった。

「エーリアン・マザーで神光の宣告者に攻撃しこの瞬間エーリアン・テレパスの効果により宣告者の守備力が600ポイントダウン！マザーズ・クローウ・アンドイトー！！」

神光の宣告者 守備力：2800 2200

「^アAndEat!？」

エーリアン・マザーの攻撃名に引っ掛ったかエルフィがそう叫ぶと彼女の予想通りというかなんとかマザーは神光の宣告者を四本の腕の爪で切り刻むと捕食してしまった。あまりの生々しさとかグロさに観客は引いているが攻撃対象が人間型じゃないだけだましとっていいだろう。

「悪いな、これもマザーたる彼女の効果の一端なんだ。次にエーリアン・テレパスでテテュスに攻撃しこの瞬間テテュスの守備力は300ポイントダウン！ テレパス・ビーム！！」

光神テテュス 守備力：1800 1500

エーリアン・テレパスの長い髭から発射されたビームというか熱線はテテュスを貫き、エルフィの場がから空きになった。

「エーリアン・ドッグでダイレクトアタック！ エーリアンクロウ！」

「くっ」LP4000 2500

「バトルフェイズ終了、そしてこの時エーリアン・マザーの効果が発動する」

あっという間にライフポイントが逆転されたらとエルフィが考える暇もなくマザーはフシユウと息を吐き、その身体の珠が輝き出す。するとマザーの体内からさつき食べられた神光の宣告者が身体を若干A細胞に侵食された状態で産み出された。既に観客は無言と化し、エルフィも吐き気を催したように口に手を当てている。彼女の顔色も若干悪くなってきたのは気のせいじゃないだろう。

「エ、エーリアン・マザーはAカウンターの乗ったモンスターを破壊したときバトルフェイズ終了時にそのモンスターを特殊召喚するんだ……ソリッドビジョンの絵的にはあれだけど……ターン終了」

「わた、しのターン……」

広樹のターンエンド宣言を聞くとエルフィは震える手でデッキからカードを引く、その震えの原因は圧倒的不利からではないのは確かだろう。まあ状況も圧倒的に悪いのは確かだが。そして引いたカードを見て少し考えを取り、落ち着いてから口を開いた。

「私は墓地の宣告者の預言の効果を発動。そのカード効果によって神光の宣告者の召喚に成功した時墓地のこのカードをゲームから除外する事でリリースしたモンスター一体を手札に戻す事が出来る。よって私は神聖なる魂を墓地から手札に戻し、墓地のアテナとヘカテリスを除外して「神聖なる魂」ホリーシャインソウルを特殊召喚！そしてリバーサイド発動「奇跡の光臨」、除外されている天使族を一体特殊召喚する！ 私が特殊召喚するのは「アテナ」！」

エルフィの場に槍を持った美しい女性天使が天から降りるように姿を現し、ふわりとした柔らかい感触で地面に降り立つ。その時彼女の隣の神聖なる魂が光り始めた。

「アテナの効果発動！ アテナ以外の天使族を墓地に送る事で墓地からアテナ以外の天使族を一体特殊召喚する。私は神聖なる魂を墓地に送って「光神テテュス」を特殊召喚し、アテナの効果で相手に600ポイントのダメージを与える。そして最後に手札から「ゼラの戦士」を召喚！」

「ヒュウ」 LP2800 2200

あの状況からあつという間に上級天使を二体と一体の戦士を並べた。そしてエルフィは相手の場のモンスターを指差す。

「宣告者は倒せないけどあなたのデッキに天使はいないでしょうか

らただの壁も同然、変な伏せカードがない今の内にエーリアンから破壊させてもらうわ！　ゼラの戦士でエーリアン・ドッグを攻撃！　ゼラブレイド！」

エルフィの指示を聞くとゼラの戦士は剣を構えてエーリアン・ドッグに攻撃、その剣を受けた宇宙犬はあっさりとやられてしまった。

「そしてテテユスでエーリアン・テレパス、アテナでエーリアン・マザーを攻撃！」

「くっ！？」LP2200　2100　1300　1000

そして続けとばかりに二人の天使がテテユスは光の波動で、アテナは右手の槍を使ってエーリアンを撃破。その連続攻撃で広樹のライフも大幅に削られてしまった。

「ちっ、エーリアン・マザーの効果で特殊召喚された神光の宣告者はマザーがフィールドを離れた時破壊される」

「え、そうなの？　じゃあ次のターンで一気に決める！」

エルフィは気を取り直したようにそう言ってターンを終了し、広樹はそれを聞くとふうと息を吐く。さっきの一瞬で劣勢を盛り返され、今度はこっちが追い込まれた。しかも手札はゼロ、次のドローカードにかけるしかない。そう考えながら広樹はカードをドローする。

「俺は洗脳光線を墓地に送って「マジック・プランター」を発動！　カードを二枚ドロー」

ドローしたカードを即座に使用してさらに二枚のカードを引いた、

というか意味もなくフィールドに残っていた洗脳光線の妙というか上手い使い方だ。そして引いたカードを見ると広樹は思わず笑みを浮かべかけるがエルフィに悟られる前に普段の表情に戻す。

「俺はレベル8モンスター、毒蛇王ヴェノミノンを墓地に送って」「トレード・イン」を発動。さらにカードを二枚引く」

「ヴェノミノン？」

広樹の言葉にエルフィは首を傾げてそう言い、知らないという事をそれから読み取ると広樹は思わずよしと微笑んでいた。

「（こいつは賭けだ）。俺はモンスターを守備表示で召喚し、カードを一枚セットしてターン終了！」

相手が天使族を引けば通常召喚＋アテナの蘇生効果＋バーン効果二つで確実に負ける。随分と分が悪い賭けだ。つい自嘲してしまうが広樹は相手 エルフィの動向を見逃さずに見始める。

「……私はテテユスで守備モンスターを攻撃！」

賭けには勝った。テテユスの波動が守備モンスター ヴェノム・コブラを破壊し、それにエルフィは伏せカードが攻撃反応系のカードじゃないと確認したのか追撃を指示した。

「これで止め！ アテナでダイレクトアタック！！！」

「悪いがそうはいかねえ！ リバースカード発動、「リミット・リバース」！！ 俺は墓地から攻撃力1000以下のモンスターを攻撃表示で召喚する！！！」

「でも攻撃力1000のモンスターを召喚したってダメージは1600……」

エルフィの言葉と共にアテナが突進していくが広樹はその前に伏せカードを発動、墓地から一枚のカードを取り出す。それにエルフィがそう言うが広樹はくっくつと笑って言った。

「いや、1000じゃねえ。俺が蘇生するモンスターの攻撃力は0だ」

「え!？」

その言葉にエルフィはさらに驚いた声を出す。が広樹はまだ笑いながら続ける。

「0は0だけ……召喚時はな。俺は「毒蛇王ヴェノミノン」を特殊召喚！」

広樹の場に毒々しい紫色の光が発せられ、その光の中からマントを着た巨大な蛇のようなモンスターが現れた。

「毒蛇王ヴェノミノンは墓地の爬虫類モンスターの数×500の攻撃力上昇効果を持つ。俺の墓地にいるのはエーリアンが六体にさつき墓地に送られたヴェノムが一体、故に我が王の攻撃力は3500！」

「嘘!？ バ、バトルフェイズの巻き戻しにより私は攻撃せずにバトルフェイズを終了しメインフェイズ2にテテウスをリリースして光神の宣告者を特殊召喚し、効果でダメージを与える！ 天罰とき

めん！　そ、それから……カードを一枚セットしてターンエンド」

「くっ……」LP1000　400

毒蛇王が召喚された事でエルフィの顔色が変わり、バーンダメージで倒そうと試みたか神光の宣告者を効果で召喚、その時のアテナの効果で広樹にダメージを与えた。そしてエルフィはカードをセットしてターンを終了するが顔色が悪い、広樹はカードを引くと少し考えて口を開いた。

「ヴェノミノンでアテナを攻撃！　ヴェノム・ブローー！！」

「きゃああつ！？」LP2500　1600

「カードを一枚セットしてターン終了」

広樹の指示でヴェノミノンがアテナを破壊する。あつという間にライフが大幅に削られ、エルフィの表情が歪む。そして広樹がカードを一枚セットしてターン終了を宣言するとエルフィはカードを引いた。それを見るとはつとした表情を見せ、そのカードを発動する。

「私の勝ち！　速攻魔法発動、「サイクロン」！　このカード効果でリミット・リバーを破壊！！」

現れた竜巻がリミット・リバーを打ち砕き、蘇生の力がなくなつたヴェノミノンの姿が霧散していく。しかしそれを見ている広樹の表情は……微笑んでいた。

「ヴェノミノンを破壊してくれてありがとな。リバーズカードオーブン「蛇神降臨」！！　ヴェノミノンが破壊された時手札またはデ

ツキから「毒蛇神ヴェノミナーガ」を特殊召喚する！！！」

広樹の場にさっきのヴェノミノン召喚の時よりも毒々しい紫色の光が発され、その光の中から両手と髪、そして身体が蛇の女性が姿を現した。

「これぞ我がデッキの切り札にして我が女神ヴェノミナーガ。その攻撃力はヴェノミノンと同じく墓地の爬虫類×500、またこのカード以外いかなる魔法、罫、モンスター効果の対象に出来ず、効果も受けない耐性能力、そして戦闘で破壊されようと墓地の爬虫類族モンスターを除外する事により復活する不死の力をも持つ」

毒蛇神ヴェノミナーガ 攻撃力：0 4000

「嘘……モ、モンスターを全て守備表示にしてターン終了」

広樹の説明を聞いたエルフィは顔を青くし、味方の天使に防御体勢を取らせるとターンを終了した。

「俺のターン、ドロ……フィールド魔法「ヴェノム・スワンプ」を発動する」

その言葉と共に辺りが気味の悪い沼地になっていき、丁度エルフィと広樹は沼の対岸に、モンスターは沼地に入っている状態になる。

「え、え？」

「ヴェノミナーガで神光の宣告者を攻撃、アブソリュート・ヴェノム」

辺りの変化に驚いているエルフィを見ながら広樹は攻撃を指示、ヴェノミナーガの両手から発射された毒液が宣告者に浴びせられ、即効性の猛毒なのか宣告者は破壊される。

「エンドフェイズ、ヴェノム・スワンプの効果発動。沼に迷い込みし者は毒に侵される」

その言葉と共に辺りに瘴気が立ちこみ、ゼラの戦士は咳き込むと苦しそうな表情を見せる。彼の攻撃力が500ダウンしていた。

ゼラの戦士 攻撃力：1600 1100

「ヴェノム・スワンプは互いのエンドフェイズ時場のヴェノムと名のつくモンスター以外にヴェノムカウンターを乗せる。そしてヴェノムカウンターが乗ったモンスターの攻撃力は500ダウンし、攻撃力が0になった瞬間そのモンスターは破壊される。もちろん我が女神は魔法効果を受けないためヴェノム・スワンプの毒の影響は受けない。ターン終了だ」

「うっ……私のターン……私はモンスターを守備表示で召喚し、ターンエンド」

「その前のエンドフェイズ時、ヴェノム・スワンプの効果が発動する事を忘れるな。俺のターン」

エルフィは引いたカードをそのまま守備表示で場に出すとターンを終え、広樹の言葉と共にゼラの戦士がまた苦しみ出す。それを見てから広樹はターンを進める。

ゼラの戦士 攻撃力1100 600

「俺は魔法カード「ヴェノム・ショット」を発動。このカードはヴェノムもしくはヴェノミノン、ヴェノミナーガが場にいる時のみ発動可能な魔法でデッキから爬虫類族モンスターを墓地に送り、相手モンスターにヴェノムカウンターを二個乗せる。当然それで攻撃力が0になれば破壊され、また爬虫類族が墓地に行くため我が女神の攻撃力も500上昇する」

毒蛇神ヴェノミナーガ 攻撃力：4000 4500

その言葉を聞くとヴェノミナーガは左手の蛇をゼラの戦士に向け、毒液を放つ。それを受けたゼラの戦士は限界というように沼に倒れ、沈んでいった。

「そしてヴェノミナーガで守備モンスターを攻撃」

続けての指示を聞いたヴェノミナーガは守備モンスター ウイク
トリアを左手の蛇で噛み千切り、呑み込んだ。

「私のターン……う……ターン終了」

モンスターが来なかった。エルフィは何もせずにターンを終え、それを見ると広樹はふうと息を吐いてカードをドロースるとエルフィに向けて言った。

「我が女神を出させたのは見事。バトルフェイズ、ヴェノミナーガでプレイヤーにダイレクトアタック」

広樹の指示を聞いたヴェノミナーガはエルフィを見ると右手の蛇を構えてエルフィを食い殺させるように突っ込ませていく、エルフィ

は少し震えながら目を瞑っていた。

「……………」LP16000

「決勝戦第三試合勝者、チームパワー代表、広樹！！」

ソリッドビジョンも消え、エルフィはがくと膝をつく。そして審判の宣言と同時にコートにライが上がってエルフィに駆け寄った。

「エ、エルフィ！ 大丈夫か！？」

「グ、グロテスクな宇宙人に毒蛇はきつかった…………こ、腰抜けた…………」

ライの言葉にエルフィは震える声でそう返す。流石に少女の身に爬虫類デツキとの戦いは無理があつたらしい。それを聞くとライはエルフィの肩に手を回すと支えになって立ち上がる。するとそこに広樹がやってきて口を開いた。

「す、すまない。俺のデツキは女性相手には刺激が強すぎた…………配慮が足りなかった。すまん」

「い、いいですよ。デュエルは男女平等、甘い事は言ってもらえないから」

「あ、ああ…………ゆつくり休憩しておけ。遠い観客席ならともかく対峙していたんじゃホラー映画をすぐ近くで凝視していたようなものだ」

広樹の言葉にエルフィは微笑みを浮かべながら返し、それを聞いた

広樹はそう言い残すと去っていく。それからライとエルフィもコー
トの階段を下りていった。

「そういえばこれでこっちは二敗、後がなくなっただか……」

「うめん」

ライの言葉にエルフィが弱々しくそう返し、それを聞いたライは慌
てたように返す。

「エ、エルフィは悪くないって！ 相手が強すぎただけだよ」

ライがそう言っている間に下に到着する。すると次を戦うメリオル
が階段を上がるために二人をすれ違つるように歩いており、すれ違い
様に話しかけた。

「よく戦ったわ。後は私達に任せて」

「！」

その言葉に二人は振り返るがメリオルは振り返る事なく階段を上が
っていく。それから二人が待機位置に辿り着くとその隣に座ってい
るレオが言った。

「後は任せる。意地でも勝利を掴んでやる」

「代表が揃ったため、これより第四試合を開始します……！」

レオの言葉と同時に審判の宣言が響き渡った。

第七話 決勝戦第三試合、天使VS爬虫類（後書き）

第七話、デュエルの進行に問題がある指摘を受けたのでついでに書き直しました。デュエル前と後、最初はほぼコピペですけど。というか文字数上一番長くなっただし……決勝試合どうしよう？……。とりあえず気合入れて描写しました。エーリアンからヴェノムの移行、つっても王ことヴェノミノンの蘇生召喚ですが、そして女神ことヴェノミナーガの召喚からの毒を意味させる描写と。本来はもつとエルフィを精神的に追い詰めて裏設定の人格交代をやらそうと思っただんですが……ま、それはまた次の機会にしておきましょう。それでは。

第八話 決勝戦第四試合、魔術師VS黒羽

決勝戦は現在一勝二敗でチーム・パワードが優勝に王手をかけており、時の旅人にもう負けは許されない状態。しかしそんな中でも次に戦うメリオルは平常心を崩していなかった。

既に今回の相手 癖のある黒髪を短髪にした青年と挨拶は済ませている。そして二人は向かい合うとデュエルディスクを構えた。

「時の旅人代表、メリオルVSチーム・パワード代表、黒斗……決勝戦第四試合、開始！」

「デュエル……！」

審判の掛け声を聞くと同時に二人も声を合わせて叫び、それを合図にソリッドビジョンのコイントスも行われる。そしてコインが見せたのは表、つまりメリオルの先攻だ。

「私の先攻、ドロー！ 私は「魔導騎士 デイフェンダー」を攻撃表示で召喚してカードを一枚セットし、ターン終了」

「俺のターン、ドロー。俺は永続魔法「黒い旋風」を発動し、「BF 蒼炎のシユラ」を召喚する。そしてこの時黒い旋風の効果を発動！ 俺のフィールド上にBFが召喚された時デッキから召喚したBFより攻撃力の低いBFを手札に加える。そして俺が加えるのは「BF そよ風のブリーズ」、このカードは魔法・罠・効果モンスターの効果で手札に加えたとき即座に特殊召喚できる」

大きな両手に黒い羽の鳥人が現れたと思ったらフィールドに旋風が走り、黒斗はデッキからカードを一枚取るとそのカードを見せて説

明し、フィールドに召喚する。それと共に赤く小さな鳥人が姿を現し、そう思ったら二人は渦巻いた風に包まれる。

「レベル3のブリーズとレベル4のシユラをチューニングし、「B F アーマード・ウイング」をシンクロ召喚！」

渦巻いた風が光となり、その光が弾け飛ぶと中から黒い装甲を身に纏った黒羽の鳥人が姿を現した。そしてディフェンダーを指差す。

「そしてアーマード・ウイングでディフェンダーを攻撃！ ブラック・ハリケーン！」

「くっ、ディフェンダーの効果発動！ 魔力カウンターを取り除く事によって魔法使い族モンスターの破壊を防ぐ！」 LP4000
3100

ディフェンダー目掛けてアーマード・ウイングの巻き起こした黒い竜巻をメリオルはディフェンダーの持つ魔力を使って破壊を防ぎ、黒斗はへえと呟くとカードを手に取る。

「しかし攻撃したモンスター、ディフェンダーに楔カウンターは乗せさせてもらう。俺はカードを一枚セットしてターン終了だ」

「私のターン、ドロー……アーマード・ウイングは確か戦闘破壊に對して完璧といえるほどの耐性を持っている、そして楔カウンターはウイングの効果で取り除かれることで乗っていたモンスターの攻撃力、守備力を0にする効果のはず」

「ヒュウ　　」
「ご名答。よく知ってたな」

「BFはその安定性とかから良く使われるデッキだから。厄介そうな効果は一通り覚えてるのよ」

メリオルはドローをした後アーマード・ウイングの効果を空で言い当て、それを聞いた黒斗は口笛を鳴らしてそう返し、メリオルはふつと笑ってそう言っているとカードを一枚手に取った。

「ディフェンダーをリリースして」マジカル・マリオネット「魔法の操り人形」を召喚！」

ディフェンダーが光に包まれ、消えていったと思っただけその光の中から不思議な人形の操り師が姿を現した。そしてメリオルは続けて手札を取る。

「魔法カード「魔力掌握」！ このカードの効果で操り人形に魔力カウンターを乗せてデッキから魔力掌握を手札に加える。そして魔力掌握も魔法カードのためさらに魔法の操り人形に魔力カウンターが乗る」

魔法の操り人形 攻撃力：2000 2400

「ちっ」

魔法の操り人形の周りに緑色の魔力の球体が浮遊をはじめ、黒斗は舌打ちをする。するとその魔力球体が操り人形に吸収された。

「魔法の操り人形の効果発動！ このカードに乗る魔力カウンターを二つ取り除いてアーマード・ウイングを破壊！」

操り人形の持つ槍のような武器から魔力の塊が発射され、アーマード・ウイングに向かっていく。と黒斗は瞬時にそれに対応した。

「どうせ破壊されるなら、その効果発動にチェインしてリバースカード発動、「ゴッドバードアタック」！ アーマード・ウィングをリリースして魔法の操り人形とリバースカードを破壊する！」

アーマード・ウィングが魔法の操り人形の放った魔力光線を飛び上がるようにかわすとその身体は炎に包まれ、アーマード・ウィングは急降下して魔法の操り人形に特攻する。その特攻突進に魔法の操り人形はなす術なく破壊され、さらに一枚のリバースカードも破壊された。

「くっ……「光の護封剣」を発動し、ターンエンド」

メリオルがカードを発動すると共に黒斗の場に三本の光の剣が落ち、それからメリオルはターン終了を宣言した。

「俺のターン、ドロ……俺は「BF 黒槍のブラスト」を召喚し黒き旋風の効果で「BF 月影のカルート」を手札に加える。そしてカードを一枚セットし、ターンエンドだ」

「私のターン、私は「王立魔法図書館」を召喚。カードを二枚セットしてターン終了」

「俺のターン……（恐らく二枚のカードのうちどちらかはさっきのターンに手札に加えた魔力掌握、残った手札はモンスターカードのはず……そしてもう一枚は多分護封剣が破壊されたための攻撃無効カードと見るか……まあ俺の手札に魔法破壊カードはないがな）

……俺は「BF 蒼炎のシユラ」を選択して「アゲインスト・ウィング」を発動。その攻撃力、1800ポイントのダメージを受けてシユラを手札に加える」LP4000 2200

突然黒斗に向かって吹いてきた向かい風がその勢いで黒斗のライフを削り取り、その代わりに黒斗は墓地からシユラのカードを手札に加える。

「そして「BF 蒼炎のシユラ」を召喚し黒き旋風の効果で「BF 極北のブリザード」を手札に加える。ターン終了」

メリオルが召喚した守備型モンスター 王立魔法図書館を見ると黒斗はそう予測を立て、さつきサルベージした巨大な手に黒羽の鳥人を召喚すると旋風の力でデッキから新たな鳥人を手札に入れてターンを終えた。三本あった光の剣も残り一本、次のターンで光の護封剣も破壊される。するとメリオルがふふつと笑った。

「いい読みをしてるわね。多分この伏せカードの一枚は魔力掌握のブラフ、もう一枚が攻撃無効カードと読んだでしょ？ わざわざ攻撃力の低いモンスターを召喚するには護封剣だけじゃ心もとないからね、またゴッドバードアタックなんて発動されたら目も当てられないから。でも深読みしすぎよ、二枚ともブラフって可能性だってあるんだから」

「！」

メリオルの予測に最後の不敵な笑み付きの言葉に黒斗はしまったと表情を歪める。そしてメリオルは手札のカードを取った。

「まずは「クルセイダー・オブ・エンディミオン」を召喚し、伏せておいた「魔力掌握」を発動！ 王立魔法図書館に魔力カウンターが二つ乗り、デッキから魔力掌握を手札に加える。そしてもう一枚のリバースカードオープン！ 「ハリケーン」！」

突如フィールドに台風のような竜巻が起こり、黒斗の場の伏せカードと光の護封剣が手札に吹き戻される。そしてメリオルはまた不敵な笑みを浮かべた。

「そしてこの瞬間王立魔法図書館の魔力カウンターが三つ溜まったので三つの魔力カウンターを取り除いてデッキからカードを一枚ドロ―！」

王立魔法図書館の館内を浮かんでいた魔力球体が消え、メリオルはカードをドロ―する。それを見るときよとんとした目を見せ、次に微笑んだ。

「光の護封剣がバウンスするぐらいでよかったのにラッキー。私は墓地のデイフェンダーと操り人形を除外し、手札から「カオス・ソーサラー」を特殊召喚！ カオス・ソーサラーの効果で蒼炎のシユラをゲームから除外！」

メリオルの場に混沌の力を持つ魔術師が召喚され、カオス・ソーサラーの発した闇の力がシユラを呑み込んで消し去る。それに黒斗はまた表情を歪めた。

「カルートでやられるのは勘弁だし念のため「光の護封剣」を再度発動し、王立魔法図書館を守備表示に変更してカードを二枚セットしターン終了」

また黒斗の場に三本の光の剣が降り注ぎ、黒斗は嫌そうにため息をついた。もちろんこれでまた王立魔法図書館に魔力カウンターが一個乗る。

「くっ……俺のターン！」

状況は少々まずい、そう考えながら黒斗じゃカードをドローしてそのカードを見る。とはっとした表情をし、キッと表情を引き締める。

「俺は「BF 漆黒のエルフェン」を召喚！ このカードは俺の場にBFが存在する時リリースなしで召喚できる。そしてエルフェンが召喚された時黒き旋風の効果によってデッキから「BF 疾風のゲイル」を手札に加える。さらにエルフェンが召喚された時相手の場のモンスター一体の表示形式が変更できる。俺が表示形式を変更させるのは王立魔法図書館！ 次にさつき手札に加えた「BF 疾風のゲイル」を特殊召喚！ このカードは俺の場にBFが存在する時特殊召喚でき、一ターンに一度相手モンスターの攻撃力・守備力を半分にさせる。これによって攻守を半分にさせるのはカオス・ソーサラー！」

王立魔法図書館 守備力：2000 攻撃力：0
カオス・ソーサラー 攻撃力：2300 1150

「でも光の護封剣が……」

「ああ。そして俺は魔法カード「サイクロン」を発動し、光の護封剣を破壊する！」

メリオルの言葉に黒斗はふっと笑いながら魔法を発動、そのカードから発された竜巻が鳥人達の動きを制限していた光の剣を吹き飛ばした。

「このターンで決めさせてもらおう！ エルフィンで王立魔法図書館を攻撃！」

「リバースカードオープン！」「和睦の使者」！！」

黒斗の攻撃をメリオルが発動した畏カードが防ぎ、このターンの攻撃はしのぐ。それに黒斗はチツと舌打ちをするとカードを取る。

「俺はリバースカードを二枚セットしてターンエンドだ」

簡易状況説明

メリオルLP3100 手札零枚

フィールド カオス・ソーサラー、クルセイダー・オブ・エンデ
イミオン、王立魔法図書館全員攻撃表示 伏せカード一枚（魔力掌
握）

黒斗LP2300 手札二枚（カルト、ブリザード）

フィールド エルフエン、ブラスト、ゲイル全員攻撃表示 黒き
旋風発動中、伏せカード二枚

「私のターン、ドロ……カオス・ソーサラーの効果で私はエルフ
エンをゲームから除外！そして「サニー・ピクシー」を召喚しレ
ベル1のピクシーとレベル6のカオス・ソーサラーをチューニング
！ 現れよ、「アーカナイト・マジシャン」！！そしてこの瞬間
サニー・ピクシーの効果発動！ 光属性モンスターのシンクロ召喚
に使われて墓地に送られたとき私のライフが1000ポイント回復
する！」LP3100 4100

カオス・ソーサラーとサニー・ピクシーが光に包まれ、その光の中
からメリオルの場に現れたのは白を基調に紫色の模様がついたロー

ブを着た魔術師。その次にメリオルは伏せカードを発動した。

「そして魔法カード「魔力掌握」を発動し、王立魔法図書館に二個の魔力カウンターを乗せる。これで魔法図書館に乗った魔力カウンターは三個、この時アーカナイト・マジシヤンの効果発動！ フィールドの魔力カウンターを取り除き、その数だけ相手フィールド上のカードを破壊する。私は魔法図書館のカウンター三つを取り除いてブラストと黒き旋風、私から見て右の伏せカードを破壊する！！」

「アーカナイト・マジシヤンの効果発動にチェーンしてリバーサイド発動「ゴッドバードアタック」！ 俺はゲイルをリリースしてアーカナイト・マジシヤンと王立魔法図書館を破壊！！」

アーカナイト・マジシヤンが魔力光線を放つ前にゲイルはその身体に炎を纏わせて突進、アーカナイト・マジシヤンと王立魔法図書館を特攻突進で破壊した。

「くっ………クルセイダーを守備表示に変更してターンエンド」

クルセイダー・オブ・エンディミオンを守備表示に変更してメリオルはターンを終了する。しかしメリオルの手札は0の上フィールドにはクルセイダーのみなのに対し黒斗はまだ手札にも余裕がある。状況はメリオルの方が悪いと言っただけで間違いはないだろう。

「俺のターン、ドロ………クルセイダーの守備表示変更はミスだったな」

「え？ あ、ブラストは貫通効果を持つてる！？」

「ああまあそれもあるけど………ま、進めりゃ分かるさ」

黒斗の言葉にメリオルが声を出すと黒斗はそう返して手札の一枚を手にとった。

「俺は「BF 極北のブリザード」を召喚して黒き旋風の効果でデッキから「BF 熱鎖のフェーン」を手札に加えてからブリザードの効果発動、墓地からゲイルを守備表示で特殊召喚して次はゲイルの効果発動。クルセイダーの守備力を半分にする」

クルセイダー・オブ・エンディミオン 守備力：1200 600

黒斗の場にカモメが一羽現れたと思うとその隣に自身の羽を壁みたいに構えてゲイルが姿を現し、一回羽ばたいて突風を起こし、エンディミオンの体勢を崩して守備能力を半減させる。

「そしてレベル2のブリザードとレベル4のブラストをチューニング！ 羽ばたけ！ 「アームズ・ウィング」！！」

ブリザードとブラストが竜巻のように渦巻く光に包まれ、その光が弾け飛ぶと中からライフルを持った黒羽の鳥人が姿を現す。

「アームズ・ウィングは守備表示モンスターとバトルする時その攻撃力を500上昇させる。さあ、行くぜ？……アームズ・ウィングでクルセイダー・オブ・エンディミオンを攻撃しダメージステップ時に手札のカルートを捨て効果発動！ アームズ・ウィングの攻撃力を1400ポイント上昇しさらにアームズ・ウィング自身の効果で守備モンスターに攻撃する時攻撃力は500ポイント上昇！ そしてアームズ・ウィングは貫通効果を持っている！！」

アームズ・ウィングが黒い風に包まれてクルセイダー・オブ・エン

デイミオンに突進、その銃剣で斬り裂いた後にライフルを乱射して止めをさし、その残り弾がメリオルを襲った。

「くっ!?!」LP4100 500

「ゲイルは守備表示だし他にモンスターはいない。カードを一枚セツトしてターンエンドだ……ちなみに言っておくが俺がさつき手札に入れた鉄鎖のフェーンの攻撃力は500、そして相手へのダイレクタアタックを可能とする効果を持っている。つまりこのターンで決めないとほぼお前の負けだ」

黒斗はターン終了を宣言した後そう言い、メリオルの表情が強張る。自分は手札のモンスターも伏せカードもない、次のドロークカードだけで勝利を決めると宣告されたも同義である。

手が震える、自分が負けたらチームも負け、そんな考えがメリオルの頭の中を支配していた。

「びびってんじゃねえぞ!!!」

その瞬間コートの外からそんな叫び声が聞こえ、メリオルは驚いてそっちを向くとレオはメリオルを睨んで腕を組んでいた。

「負けなら負けであがいて負ける! だがどうせなら勝って俺まで回せ!!!」

「……それはどうも失礼しました!」

レオの言葉にメリオルは皮肉っぽい口調で返し、それにさらにレオが叫ぶ。

「ああ！ いつもみたいにやれ！！」

「オツケー！」

レオの言葉にメリオルは微笑みを浮かべて叫び返すとフィールドを向きなおす。相変わらずこっちはがら空き、あつちにはモンスターが二体いるのに加えて手札もたくさん。だがもうどうでもいい、メリオルはふうつと息を吐くとデッキに指をかけた。

「私のターン、ドロー！！」

そしてドローカードを確認すると発動する。

「私は「壺の中の魔術書」を発動！ 互いのプレイヤーはデッキからカードを三枚ドローする」

メリオルがそう言うと二人はカードをドローし、メリオルはさらに来たカードを見て笑みを浮かべた。

「頼むわよ、皆……私はライフを半分払って魔法カード「ソウル・サークル」を発動！ 墓地の魔法使い族モンスターを四体まで除外し、その数だけデッキからカードをドローする。私が除外するのはカオス・ソーサラー、サニー・ピクシー、王立魔法図書館、クルセイダー・オブ・エンディミオンの四体。よって四枚ドロー！」LP
500 250

メリオルの墓地の魔法使い達がメリオルに己の魔力を使って新たな魔術書 手札を与え、一気にメリオルの手札が六枚に増強された。それを眺め回すとメリオルはキツと表情を引き締めてカードを取る。

「一個でも防がれたら負けだけどどうせならあがいてやろうじゃないの！ カードを一枚セットして私は速攻魔法「トラップ・ブースター」を発動、手札を一枚捨てて手札の罠カードを発動する事が出来る！ 私は「リミット・リバーズ」を発動して墓地から攻撃力1000以下のモンスターにして今私の墓地にある唯一のモンスター、「アーカナイト・マジシャン」を攻撃表示で特殊召喚！」

メリオルの言葉と共に彼女の場に白いローブの魔術師が姿を現す。さらにメリオルのコンボは続く。

「「黒翼の魔術師」を召喚！ このカードが私の場に存在する限り私はセットしたターンに罠カード「バスター・モード」を発動できる！」

「まさか」

「リバーズカード発動「バスター・モード」！ アーカナイト・マジシャンをリリースし、デッキから「アーカナイト・マジシャン/バスター」を特殊召喚！」

メリオルの説明に黒斗はまさかと呟き、続いてメリオルはさつき伏せたカード バスター・モードを発動、アーカナイト・マジシャンは光に包まれるとその中から赤い鎧に身を包んだ魔術師が姿を現した。そしてその周りを二つの魔力球体が浮遊してその魔力を上げる。

アーカナイト・マジシャン/バスター 攻撃力：900 2900

「アーカナイト・マジシャン/バスターの効果発動！ このカードに乗っている魔力カウンターを二つ取り除くことで相手フィールド上に存在するカードを全て破壊する！」

アーカナイト・マジシャンノバスター 攻撃力：2900 900

「ぐっ」

メリオルの宣言と共にアーカナイト・マジシャンノバスターの杖に魔力球体が吸収され、魔力が集中していく。その力で辺りに地響きが始めた。

「アーカナイト・マジシャンノバスターの効果であなたの場のカードを全て破壊！！ アーカナイト・バスター・デストラクション！！！」

そしてアーカナイト・マジシャンノバスターの杖から放たれた魔力が黒斗の場の鳥人全てを破壊し尽くし、黒斗の場が全滅、がら空きになった。

「黒翼の魔術師の攻撃力は1300、効果によって魔力カウンターがなくなったアーカナイト・マジシャンノバスターの攻撃力は900、その攻撃力の和はちょうどあなたのライフポイントと同じ2200」

「……………」

メリオルの言葉を聞いた黒斗はやれやれというように肩をすくめ、それを見たメリオルは少し呼吸を置いて相手を指差した。

「黒翼の魔術師でダイレクトアタック！ ブラックフェザー・マジック！！！」

「くっ」LP2200 900

「これで止め！ アーカナイト・マジシャン・バスターでダイレクトアタック！ アーカナイト・バスター・マジック！！」

そしてアーカナイト・マジシャンは己の持つ魔力を杖に集中し、一筋の光線として相手に撃ち出した。それは黒斗を寸分の互いもなく撃ち抜く。

「くそっ……」LP900 0

自らのライフが0を示した事を確認すると黒斗はそう呟き、それと共に審判が声を上げる。

「決勝戦第四試合勝者、時の旅人代表、メリオル！」

審判の宣言を聞くとメリオルはふうと一息つく、と黒斗が近づいてきて声をかけた。

「まさかあの状況から逆転劇を叩き込むとは……恐れ入ったよ」

「それはどうも。でもこっちもぎりぎりだったからね、正直諦めてたし」

黒斗の言葉にメリオルもふふつと笑いながら返すと黒斗はにやっと笑みを浮かべて言った。

「で、彼の言葉を聞いて戦意復活と」

「なっ！？ ちちち違っ！ あいつはただの幼馴染の腐れ縁であっ

て!」

黒斗の言葉を聞いた瞬間メリオルの顔は真っ赤に染まり、手をぶんぶん振ってすぐさま否定を始めるがはつきり言って説得力が欠片もない。黒斗はデュエルに負けた精一杯の仕返しとばかりに笑っており、殆ど聞き流していたメリオルの否定の言葉が終わると黒斗は踵を返して歩き出した。

「じゃあな、決勝試合でうちの大將が勝つかそっちの彼氏が勝つか楽しみに観戦させてもらうよ」

「だからあいつはそんなじゃない!!」

黒斗の言葉にメリオルはそう叫び返し、それに黒斗がくつくつと笑っているのを背中越しに感じ取るとふいっと踵を返して自分もコートを下りていった。

「よお、ご苦労さん」

その彼女に一番にレオが声をかけると思わずメリオルはビクツと仰け反り、それを見たレオは首を傾げた。

「どっした？」

「な、なんでもない……勝ちなさいよ」

「?……当然だろ? 負けると思って戦うつもりはない」

レオの疑問の言葉にメリオルはそう返すと続けてそう言い、それを聞いたレオは不敵な笑みを浮かべてそう返すと彼女をすれ違つよう

に歩き出す。

それを見たメリオルはすれ違う方の手 左手を挙げ、レオも左手を出すと二人はパンとハイタッチを行い、それで気合を入れたかレオはふうつと息を吐くとコートが上がっていった。いよいよ今大会決勝戦、最終試合がスタートする。

第八話 決勝戦第四試合、魔術師VS黒羽（後書き）

第八話、メリオルの相手はBF……しかしBFって本当に強いんですね……こんな勝てるのかって気になりましたしもう最後のドロ―強化なんてオリカ二連発ですし……まあ一個は原作オリカですけど。

レオ「さて、ついに俺の出番か」

おう。相手はパーミッション、そのデュエリストの名前も決定してるぜ。

レオ「へえ……名前は何？」

名字は今まで同様考えてないけど名前は切雄きじお！

レオ「なんだその切セツのパチモンくせえ名前は！？」

いやパーミッションデッキにしようって決めたのはセツのデッキを見てだし、だったら名前もセツみたいな字は入れようかって。

レオ「適当だなんてめえは……」

今更でしょそんなもん。さて次回ついに今大会決勝試合、勝つのはレオか、それとも切雄か！？それとも敢えてセツに乱入させるか！？

レオ「最後待てや！！」

いやいやそれは冗談、レーネスさんが許可してくれればノリですつてのも面白そうだけどさ。いざとなれば切雄の代わりにチーム・パワードの大将として。

レオ「絶対駄目！！！！」

はいはい、つたくレオは固いなあ。

レオ「心構えつてかマナーの問題だよ！」

はいはい。それじゃオリカの説明は前のように活動報告のほうでいたしますので、結局出さなかつたけどアルフの所有オリカも説明だけはしたいし。それでは。

第九話 決勝試合、ドラゴンVSカウンターエンジェル

決勝戦は二勝二敗、大将戦で決着がつく状態になった。そして時の旅人の大将であるレオはコートに上がると目を瞑って上を向き、ふうつと息を吐くと目を開けて前を向く。自分の相手も落ち着けと言いつつ聞かせるように深呼吸をしており、二人は歩き寄ると相手の方から声をかけた。

「よろしく」

「ああ。どっちが勝っても悔いがないよう全力でやりあおうぜ」

相手の青年 茶色い髪を目にかかるとに伸ばした、レオと同年か少し上くらいの青年は僅かな笑みを見せながらそう言い、それにレオも不敵な笑みを浮かべてそう返す。それから二人は軽くパチン程度にハイタッチをすると踵を返して所定の位置に歩いていき、振り返って向かい合う。そしてデュエルディスクを構えて起動すると共に審判が声を上げた。

「時の旅人代表、レオVSチーム・パワード代表、切雄……決勝試合、開始！」

「デュエル……！」

審判の掛け声を聞くと同時に二人も声を上げて叫び、それを合図にソリッドビジョンのコイントスも行われる。そしてコインが見せたのは表、レオの先攻だ。

「俺の先攻、ドロー！ 俺は「青眼の白龍」を墓地に送って「トレ

「ド・イン」を発動し二枚ドロ、「ランス・リンドブロム」を召喚し、リンドブロムを除外して手札から「レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン」を特殊召喚！そしてダークネスメタルドラゴンの効果で墓地から「青眼の白龍」を特殊召喚する！カードを二枚セットしてターン終了」

ワントーンで二体の上級ドラゴンが姿を現し、レオはカードを二枚セットしてターンを終了した。

「俺のターン、ドロー！」「豊穡のアルテミス」を召喚しカードを三枚セット、ターンエンドだ」

対する青年 切雄は一体の天使を呼び出してさらにカードを三枚伏せるとターンを終える。それを見たレオはカードをドローすると少し思考を始めた。

「（アルテミスに三枚の伏せカード、普通に考えたらパーミッショントタイプ……少し探ってみるか。）ダークネスメタルの効果により俺は「ホルスの黒炎竜 LV6」を特殊召喚！そしてさらに「真レッドアイズ・ライバーン紅眼の飛竜を召喚する！」

レオは鳥のような竜を呼び出し、さらに紅眼の飛竜を呼び出した。そして一気に決めるとばかりにアルテミスを指差す。

「ホルスの黒炎竜でアルテミスを攻撃！ホルスフレイム！」

「攻撃宣言時にリバーズカード発動「炸裂装甲」！ホルスの黒炎竜LV6を破壊する！」

「くそつ、だったらレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンで攻

撃！ ダークネス・メタル・フレイム！」

「リバースカード発動、「攻撃の無力化」！ 相手の攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了させる。そしてカウンター罠が発動した事によりアルテミスの効果が発動！ カードを一枚ドロー！」

「隙がねえな……ターン終了」

レオの攻撃指示でホルスが炎を吐こうとするがその前にホルスの身体が爆発する。それにレオは表情を歪めた後さらなる攻撃の指示を出してそれを受けた黒き機械竜が動き出すがその炎は時空の渦に飲み込まれて消えていき、切雄はまたカードをドローする。それにレオは肩をすくめて呟いた後ターンエンドを宣言した。

「俺のターン、ドロー！……」

レオの行動を全て未然に防いでいるのにその手札は現在四枚、切雄は少し考えると動き出した。

「魔法カード「カップ・オブ・エース」！ コイントスを行い表なら俺が、裏ならあなたが二枚カードをドローする」

その言葉と共にソリッドビジョンのコインが現れ、弾かれたように飛び上がると宙をくるくると回る。そして落ちてきたコインは表を見せていた。

「よし、二枚ドロー。リバースカードを三枚セットし、エンジェル・セイント「天空聖者メルティウス」を召喚。アルテミスを守備表示にしてターン終了だ」

「俺のターン、ドロー……」

また切雄の場に三枚のカードが伏せられ、さらに新たなモンスターが姿を現す。それから切雄はターンエンドを宣言し、レオはカードをドローすると少し考え出す。と切雄が少し動いた。

「リバーズカードオープン、シンセティック・エンジェル「人造天使」！」

(アルテミスにメルティウスそして人造天使、完璧にパーミッシヨンか……とすると下手に突っ込んだらカウンターを無駄に使わせるどころか逆に不利になるな……) つつても攻め込まなかったら俺のデッキじゃ勝てねえし……)

相手の場の伏せカードは三枚。相手のデッキから読んで少なくとも半分、最悪全部がカウンター罠と読んでいいだろう。対策抜きに突っ込んでカウンターをされたらアルテミスのドローとメルティウスの回復の手助けをしてしまう。しかも人造天使トークンを下手に生み出されたらめんどくさい。

「(……相手の手札は一枚、こっちは二枚……俺の勘が正しければ……) リバーズカードオープン、「バーストブレス」！ 飛竜をリリースしてその攻撃力以下の守備力のモンスターを全て破壊する！」

「リバーズカード発動、「魔宮の賄賂」！ カードを一枚相手に引かせる代わりに魔法・罠の発動を無効にして破壊する！」

「くっ、効果で一枚ドロー」

「カウンター罠が発動した事によりアルテミスの効果で一枚ドロー、メルティアスの効果でライフを1000ポイント回復する。さらにリバーズカード発動「強烈なはたき落とし」！ ドローしたカード

を捨ててもらおう！ カウンター罠が発動した事でさらにカードをドローしライフを1000ポイント回復。そして人造天使の効果で人造天使トークンを二体召喚する」LP4000 5000 6000

紅眼の飛竜の命を賭けたブレス攻撃を切雄は防ぎ、その効果でレオがカードを一枚ドロウするが切雄も一枚カードを引き、さらにライフポイントまで回復した。そしてレオのドロウに対してさらなるカウンターをし、レオのカードを捨てさせ、自分はドロウと回復を行った。さらに二体の人造天使が切雄の場に姿を現す。

「すご、あの兄さんが手も足も出ない……」

「ええ。レオのデッキは上級ドラゴンの速攻連続召喚に長けたビートダウン、その展開力と攻撃力、破壊力は正に最強の矛と称される。大方相手は最強の盾ね」

「矛と盾か……矛が盾を貫くか、盾が矛を防ぎ逆に折るか……だね」

「でもエンジェル・パーミッションの恐ろしさは多分ここからよ」

レオが手玉に取られている様を見ながらライがそう呟き、メリオルも頷いて言う。アルフがそう称する。するとエルフィがぼそりとう呟いた。そして切雄が動き出す。

「カウンター罠が発動した事により俺は場の全ての天使をリリースして「裁きを下す者 ボルテニス」を特殊召喚！」

切雄の場の天使達に雷が落ちて弾けとび、その雷の中から巨大な天

使が姿を現す。

「ボルテニスの効果発動！ リリースした天使の数だけ相手の場のカードを破壊する！ あなたの場のカードは合計四枚、それら全てを破壊する！！」

「この瞬間を待っていた！ リバースカード発動「昇天の角笛」！ 飛竜をリリースしてボルテニスの召喚を無効にし破壊する！！」

「まだだ！ リバースカードオープン、「魔宮の賄賂」！ 魔法・罾の発動を無効にして破壊する代わりに相手は一枚ドロウする。そして人造天使の効果で人造天使トークンを特殊召喚、守備表示」

ボルテニスの召喚を待っていたと叫んでレオが伏せていたカードを発動。しかし切雄は最後の伏せカードを発動してそのカードの発動を無効にし、破壊した。

「よってボルテニスの効果は有効！ 全ての相手に裁きの雷を与える！！」

ボルテニスの掲げた杖に電撃が走り、次の瞬間降り注いだ雷がレオの場の全てのドラゴンを破壊する。伏せカードも使いきったレオの場はがら空きになってしまった。

「くそつ、俺はモンスターを一体守備表示で召喚しカードを一枚セツト、ターン終了」

レオは手札の二枚を取ってそれぞれモンスターゾーンと魔法、罾ゾーンに伏せてターン終了を宣言する、しかし状況の悪さは圧倒的だった。切雄はカードをドロウすると少し考える。

「……カードを二枚セットし、「天空聖者メルティアス」を召喚。ボルテニスで守備モンスターを攻撃！」

切雄の場に天使が姿を現し、次のボルテニスの雷に守備モンスターは黒焦げにされる。

「マスクド・ドラゴン「仮面竜」の効果により俺はデッキから仮面竜を守備表示で特殊召喚」

「だったらメルティアスで攻撃！」

「仮面竜の効果でデッキから「デルタフライ」を特殊召喚！」

「くっ、ターン終了」

アルテミスの攻撃で呼び出されたドラゴンはすぐに倒されるがその効果で新たなドラゴンを呼び出した。それを見た切雄は少し表情を歪めてターンを終了した。

「俺のターン、ドロ……リバースカード発動「トラップ・スタン」！ このターンのみ全ての罠カードの効果は無効にする。チェーンするか？」

「……通す」

レオの発動したカードが相手の罠を防ぐ特殊な光を発し始め、レオの問いに切雄は肩をすくめてそう返した。どうやら魔宮の賄賂系は切れているらしい。

「よし、これでこのターンはトラップを警戒しなくて済む。俺は「ブリザード・ドラゴン」を攻撃表示で召喚してバトルフェイズ、ブリザード・ドラゴンでメルティアスを、デルタフライで人造天使トクンを攻撃！」

「くそっ」 L P 6 0 0 0 5 8 0 0

レオは一つ息をつくと手札の一枚を取って新たなドラゴンを召喚して連続攻撃、ボルテニスを除いて全滅だ。

「そしてメインフェイズ2でレベル三のデルタフライとレベル四の水属性、ブリザードドラゴンをチューニング！ 来い、「氷結界の龍 グングニール」！！！」

デルタフライとブリザード・ドラゴンが光に包まれ、光の中から一体の巨竜が姿を現す。それからレオは最後の手札を取った。

「グングニールの効果で手札を一枚捨て、ボルテニスを破壊！ ターンエンドだ」

レオの指示と共にグングニールの氷のプレスがボルテニスを氷付けにし、破壊する。そしてレオはターンを終了した。

「俺のターン、ドロー！……：「豊穡のアルテミス」を召喚し、ターンを終了する」

「俺のターン、ドロー！」

「ドローフェイズ時にリバースカード発動！ 「強烈なはたき落とし」…… ドローしたカードを捨ててもらおう。そして俺はアルテミ

スの効果で一枚ドロ―し人造天使の効果で人造天使トークンを守備表示で特殊召喚」

「ちつ、エンドフェイズに墓地の真紅眼の飛竜の効果発動！ 通常召喚を行っていないエンドフェイズ時、墓地の飛竜を除外する事で墓地に存在するレッドアイズを特殊召喚できる。俺が召喚するのは当然「レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン」！」

レオのフィールドに風が走り、そう思ったら闇が吹き出てレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンが蘇生された。

「ターン終了」

切雄はまたカードを発動せず、レオはターンエンドを宣言する。そして切雄はカードをドロ―した。

「カードを一枚セット、アルテミスを守備表示にしてターン終了」

切雄はカードを一枚伏せてモンスターを二体とも守備の体勢にしてターンを終了する。

簡易状況説明

レオLP4000 手札零枚

フィールド レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン、氷結界の龍グングニール攻撃表示 伏せカードなし

切雄LP5800 手札零枚

フィールド 豊穣のアルテミス、人造天使トークン守備表示 人造天使発動中、伏せカード二枚

「凄いなあ、兄さんは上級ドラゴンを次々と呼び出してるのに未だにダメージはたったの200」

「しかもライフは回復されてるから意味をなしてないし……どうなるんだろ？」

コートの外で観客になっているライとアルフがそう言いあう、メリオルも表情を険しくしていた。そしてレオのターンへと移る。

「俺のターン、ドロ……ダークネスメタルドラゴンの効果で墓地から「青眼の白龍」を特殊召喚！」

「特殊召喚にチェーンしてリバーストラップ「昇天の角笛」！人造天使トークンをリリースして青眼の白龍の特殊召喚を無効にして破壊！そしてカウンター罠が発動した事によりアルテミスの効果でカードをドロして人造天使の効果でトークンを特殊召喚、守備表示」

ダークネスメタルドラゴンの咆哮に呼び覚まされた青眼の白龍はフィールドに戻ろうとするが相手の呼び出した笛の音を聞くとまた昇天する。しかも相手はカードをドロしカードコストに使ったトークンは新たに呼び出される。全く無駄のないコンボだ。

「だったら手札を一枚捨ててグングニールの効果発動！ アルテミスを破壊する！」

「手札を一枚捨ててリバースカード発動「天罰」！ グングニール

の効果が無効にして破壊！　そしてアルテミスの効果でドロ―し、人造天使の効果でト―クンを守備表示で特殊召喚」

氷のプレスをはこうと構えていたグングニールの頭上に雷が落ち、グングニールは悲鳴のような咆哮を上げると倒れこみ、粉々に砕け散る。

「ダークネスメタルドラゴンでアルテミスを攻撃！　ダークネス・メタル・フレア！」

伏せカードが消えた事により壁が消え、レオの攻撃指示でダークネスメタルドラゴンがいた炎はアルテミスを焼き尽くす。ダメージはいかないもののパーミツシヨンデッキのキーカードが倒れた事は相手にとっても痛いはずだ。

「ターン終了だ」

「俺のターン、ドロ―………よし、いかせてもらう。俺は人造天使ト―クンをリリースして「エンジェルナイト天空騎士パーシアス」をアドバンス召喚！　パーシアスでレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンに攻撃！　そしてダメージステップ時に手札の「オネスト」を捨てて効果発動！　ダークネスメタルドラゴンの攻撃力分パーシアスの攻撃力が上昇する！」

天空騎士パーシアス　攻撃力：1900　4700

パーシアスの翼にさらに光が纏われ、剣にも光が纏われる。そしてパーシアスの剣がダークネスメタルドラゴンを斬り裂き、その光の衝撃波がレオをも襲う。

「ぐあつ！」LP4000 2100

「パーシアスの効果でカードを一枚ドロし、カードをセット、ターン終了」

レオのライフが大きく削られ、切雄はパーシアスの効果でドロをするとそれを伏せてターンを終了した。

「くそつ、俺のターン……ドロー！」

ドラゴンが次々となす術なく破壊されさらに大ダメージを受けた、止めにフィールドはがら空き、レオの表情は曇っていたが目を瞑って一つふうつと息を吐くと目をカツと見開いてカードをドロした。それを見ると一か八かとはかりに発動する。

「お互いこいつで仕切りなおした、魔法カード「神より賜りし宝札」！ このカードは俺の手札がこれ一枚もしくはゼロ枚の時のみ発動可能な魔法カード、そして本来このカードの発動には1000ポイントのライフコストが必要だが俺のフィールド上に他のカードがない時このカードはコストを払わずに発動できる。お互いのプレイヤーは手札が六枚になるようにドローする！」

お互いの手札が一気に増強され、レオは手札を見眺めると一枚を手にとった。

「「黒竜の雛」を召喚し、黒竜の雛を墓地に送る事で「レッドアイズ・ブラックドラゴン真紅眼の黒竜」を特殊召喚！ 魔法カード発動「黒炎弾」！！」

「魔法カードの発動にチェインしてリバースカード発動「マジック・ジャマー」！ 手札を一枚捨てて魔法カードの発動を無効にし破壊

！そして相手のカードをカウンター罠で無効にした事により俺は手札から「冥王竜ヴァンダルギオン」を特殊召喚！！そしてヴァンダルギオンの効果発動！」

「ヴァンダルギオンは魔法を無効にして召喚された時俺に1500のダメージを与える、だろ？」LP2100 600

切雄の場に冥府の王と呼ばれる竜が姿を現し、冥王竜の炎がレオのライフを削る。しかしレオは笑っていた。

「意味もなく黒炎弾を使ったと思うなよ、そっちが冥府から竜を呼ぶなら俺は深淵の闇より竜を呼ぶ！ 真紅眼の黒竜をリリースし、レッドアイズ・ダークネスドラゴン「真紅眼の闇竜」を特殊召喚！！」

真紅眼の黒竜が闇に包まれ、その闇に侵食された黒龍は闇の竜へと姿を変える。

「闇竜は墓地の竜の力を吸収してその攻撃力を上げる。俺の墓地の竜は十二体、よって闇竜の攻撃力は3600ポイント上がって6000！！」

「嘘だろ！？」

真紅眼の闇竜は墓地のドラゴン達から力の一部を吸収し、その攻撃力を爆発的に上昇させると咆哮を上げた。

真紅眼の闇竜 攻撃力：2400 6000

「真紅眼の闇竜でパーシアスに攻撃！！ ダークネス・ギガ・フレーム！！！！」

「ぐあぁっ!!」LP5800 1700

闇竜のはいた闇の炎がパーシアスを貫通して切雄に直撃し、一瞬で切雄のライフが桁違いに削られた。

「カードを一枚セットしてターン終了」

「つつつ……俺のターン、ドロー」

レオはカードを一枚セットしてターンを終え、切雄は少しまづくなってきたとばかりに表情を歪めてカードをドローする。しかしそのカードを見るとはつとした表情を見せる。

「最後の最後で俺の勝ちだ！ 俺は魔法カード「融合」を発動！手札の「クイーンズ・ナイト」、「キングス・ナイト」、「ジャックス・ナイト」を融合し、「アルカナ ナイトジョーカー」を融合召喚!!」

切雄の場に三体の騎士が現れると光に包まれ、光の中から一人の騎士が姿を現す。

「アルカナ、ナイトジョーカーで真紅眼の闇竜に攻撃！ そしてこの瞬間手札のオネストを捨てて効果発動！ アルカナ、ナイトジョーカーの攻撃力を真紅眼の闇竜の攻撃力だけ上昇させる!!」

ジョーカーの背中に光の翼が現れ、その翼を羽ばたかせてジョーカーは真紅眼の闇竜に突進していく。

「最後の最後で後一枚のオネストを引き当てたか！ だがこっちに

も対策はあるんでね！！ 手札を一枚捨ててリバーズ暴発動！
「天罰」！！」

「！！！」

「カウンターはお前の専売特許って訳じゃないんでね！ 手札の「冥王竜ヴァンダルギオン」をコストにオネストの効果が無効にする！！！」

レオの宣言と同時にジョーカーを天からの雷が襲い、光の翼が霧散する。それによって地面に落ちたジョーカーを闇竜が睨みつけて口を開いた。その口の中には闇の炎が見え始める。

「真紅眼の闇竜の反撃！！ ダークネス・ギガ・フレイム！！！」

「……負け、か」LP17000

ジョーカーが闇の炎に焼き尽くされ、切雄は悟ったようにそう呟く。切雄のライフが0を示しソリッドビジョンもゆっくりと消えていく。そしてソリッドビジョンが完全に消えたのを合図に審判がレオの方の手をあげた。

「決勝試合勝者、時の旅人代表、レオ！！！ よって今大会優勝チームは時の旅人！！！」

その宣言と共にパチパチパチと会場内が拍手に溢れ、レオは何を言うでもなく座り込む。

「勝つ………た………」

そしてやっと搾り出すようにそう呟き、込み上げてきたように微笑みを浮かべる。するとそこに切雄が歩き寄ってくる。

「全く、パーミッション使いの俺が最後の最後にパーミッションで負けるなんて思わなかった」

「ああ。でも正直ぎりぎりだったぜ」

切雄の言葉にレオはそう言いながら立ち上がり、二人は目を合わせると互いに笑みを浮かべる。

「楽しいデュエルだった！」

「ああ！」

そしてレオの言葉に切雄がすぐさまそう返すと二人はパチインとデュエルを始める前のものよりも大きなハイタッチを行った。

それから表彰式が行われ、レオ達は賞状を受け取って主催者達を礼や握手等を交わして大会の閉会宣言を聞いてドームを出る。既に外は暗くなり始めていた。

「さてと、早く帰るか」

「ええ」

いつになく嬉しそうな笑顔を浮かべながらレオがそう言い、メリオも笑いながら頷く。それから五人は家へ向けて自転車を走らせる。その道中の人気のない路をレオ達が走っている時に彼らの前に五人の人達が行く手を阻むように立ち塞がった。全員背丈や体格は違いが例外なく黒いローブを羽織っており、さらにフードを被って顔も

隠している。

「っと！」

瞬時にレオはブレーキをかけて自転車を止め、後ろを走るメリオルたちも自転車を止める。

「危ないだろ！」

「突然のご無礼をお許しいただきたい。一緒に来ていただけますか？」

レオの叫び声に相手の一人、真ん中に立っていた声と体つきからして男性がそう尋ねるように言う。それにレオは自転車を降りながら返した。

「断るって言ったら？」

「……ご無礼は承知だが……止むを得ない」

レオの言葉に男性はそう返しながら左手を動かす、レオは何かを感じ取ると自転車に常備している傘を抜いて防御する。その防御した傘には木刀が当たっていた。

「危ねっ!？」

レオはそう叫びながら傘を振って相手を払いのけて傘を剣を構えるように構える。それと共に男性も左手に木刀を構えた。

「で、何のつもりだ？ 強盗にしちゃ妙じゃねえか？」

「こちらにも事情があるといえはいいだろうか？」

「あ、そう……悪いが先に手を出してきたのはそっちだからな、こっちは正当防衛って形を取らせてもらっぞ」

レオの問いに男性はそうとだけ返し、レオはそうかいと息を吐くとそう言つて傘を構えて相手に向かって突進する。それを見た男性も姿勢を低く取った。

その次の瞬間傘と木刀がぶつかり、そう思った瞬間男性の木刀がレオの右胸を襲うがレオはそれを瞬時に傘で防御して左足で蹴りを入れる。しかし相手はそれを横に動いてかわすと木刀を振り上げていた。

「はっ！」

そしてレオの手から傘を叩き落とそうとするように木刀を振り下ろすがレオはそれを察知したのか攻撃をかわして反撃をするように傘を右手一本で振り上げるがそれを男性はバックステップを踏んでかわす。しかし傘の先がフードに当たり、フードが外れてしまう。

そこに見えたのは金色の髪を伸ばしたダンディというべきだろう男性。不敗將軍フリードの顔だった。

「なっ!?!」

それにレオは驚きを隠せずに声を出し、メリオル達も目を丸くする。その直後レオの喉元にフリードの木刀が突きつけられた。

第九話 決勝試合、ドラゴンVSカウンターエンジェル（後書き）

デュエル大会優勝はレオ達、時の旅人！！

レオ「ああ……しかし相手が……セツだろ？」

……違うとだけは主張したい……一応レーネスさんからはパーミッションに絵札の三銃士を混ぜたのも使っていていいという許可は貰ってるし、オリカ使用許可らしき言葉もあるけどそれは流石に止めとした。第一セツだったらもつと上手くカードを使いこなすって。

レオ「まあな……しかし俺のデッキ……バランス悪過ぎないか？
上級が多すぎる気がするんだが……」

ああ、かもねえ。少し改良を検討しとくよ、青眼の白龍のけるかな？滅びの爆裂疾風弾も。でも上級ドラゴンの高速展開が主軸のデッキだし……。

レオ「んでその後の急展開。突然現れた謎の五人、しかもその一人は不敗將軍フリード」

次回、遊戯王X第一部最終話……予定です。まあ今回はこの辺で、そしてオリカ説明は活動報告で。それでは。

第一部最終話 新たなる出会い、そして旅立ち

遊戯王デュエルモンスターズ大会終了後、帰っていたレオ達の前に突然謎の人達が現れ、レオは自転車に常備しておいた傘を剣の代わりに使って応戦したが一瞬の隙を突かれて彼の喉元に木刀が突きつけられていた。

「くそっ……」

レオは応戦した相手 不敗將軍フリードを睨むが相手は流石に一瞬の隙を見せていない。

「さて、話を聞いてもらう前に……」

その言葉と共に彼とその背後の人達の方からグウウウという間の抜けた音が聞こえ、ローブの人物の内二人は恥ずかしそうにお腹を押さえ、フリードも少し黙った後言った。

「……何か食べ物を恵んではもらえないか？」

「……分かりました、家に案内しますよ」

フリードの言葉にレオは深くため息をつきながらそう返し、自転車を押して彼らはレオの家へと向かう。そしてローブの人達は全員レオの家のキッチンで料理を食べ、彼らが一息ついてからレオが口を開いた。

「んでどういう事です？ 新手のコスプレショーでもやるんですか？ 無敗將軍フリードにブラック・マジシャン・ガール、勝利の導

き手フレイヤに人造人間サイコシヨッカー、そして竜魔神キング・ドラグーン。答えのようにってはすぐに警察に通報しますよ」

レオは木刀でとんとんと肩を叩きながらそう言い、ライも二本の木刀を持って警戒を強める姿勢を見せる。流石にいきなり遊戯王のモンスターが現れたらコスプレシヨールと言われてもしょうがない、それは分かっているかフリードは口を開く。

「ふむ、どう説明したのか……まず我らがこことは違う世界の存在と言えは信じてくれるか？」

「全部説明を聞いてから真偽判断しますって言い返そうか？」

フリードの言葉にレオは隙を見せずにそう言い返し、フリードはふむと呟いた。

「そうか……まず我らはここ、我らは人間界と呼んでいるがそことは違う世界、デュエルモンスターズワールドという世界の住人だ。しかしここ最近そこに不思議な存在が現れてな、平和に過ごしていた我らの世界が侵略され始めたのだ……それが何者かは分らんが、そのために我らは人間界に助けを求めに来た。我らの札を使って戦うものの力を借りるために」

「札、カードか」

「そう。そして札使いの實力を測ることが出来る大会がある事を知り、観客として潜り込んでいた。そこでその力量等を調べた結果お前達が適任だと判断したんだ」

「札使いはデュエリストとして……力量？　ただ強いってだけでか

「？」

「いや、力量だけではなく絶対に諦めない言わば心の強さだ。救世主に諦められたらどうにもならんからな」

レオとフリードはそう対話を続け、フリードの話聞き終わるとレオはなるほどと呟く。

「で、信じてくれるか？」

「ま、一応はな。考えてみりゃコスプレして夜通り魔まがいをやるなんて目立ちすぎる」

「ああ、信じられないと思ったが……案外簡単に信じてくれたな」

「信じきった訳じゃないとは言っておく」

レオとフリードはそう対話を終えるとフリードは味噌汁をすするとブラック・マジシャン・ガールが口を開いた。

「味噌汁お代わり!」

「あ、はいはい」

ブラック・マジシャン・ガールの言葉にメリオルは笑ってそう言いながらお椀に味噌汁を注ぐ。するとサイコ・シヨッカーが言った。

「中々美味しいな、この味噌汁」

「ってか機械が飯食うのか？」

「当然だ、俺達機械族もエネルギーを補充しないとイケないからな。こつこつ生物用の食料品も食えない事はない」

サイコ・シヨッカーの言葉にライがそうツツコミをいれると彼はさりりとそう言い返して味噌汁をすすり、そんなものなのかとライは咳く。

「うん、美味しい美味しい！」

そう言いながらブラック・マジシャン・ガールは味噌汁を飲み始める。するとフレイヤが口を開いた。

「全くもう。人の家上がりこんで騒ぐなんて恥ずかしい」

「ん？ 何よフレイヤ？」

フレイヤの言葉にブラック・マジシャン・ガールはそう言って睨み、フレイヤはため息をつくと返した。

「もう夜なのに人の家で騒いだら迷惑だって言ってるのよ、全く子供なんだから」

「むっ」

「ま、まあまあ。喧嘩はよくないですよ」

フレイヤの言葉にブラック・マジシャン・ガールはぴくんと表情を怒ったように動かし、喧嘩になりそうな雰囲気を感じ取ったのかアルフがその間に入り込むとアルフは続けて言った。

「ね？ 落ち着いて」

「「うっ……」」

アルフはにこやかな微笑みを浮かべて二人に言い、それを見た二人は顔を赤くしてお互いに逸らす。それからレオはもう一度言った。

「ま、とりあえず今日はここに泊まれ。俺も考えを纏めたいからな……部屋は親父と母さんの部屋が余ってる」

「？ 父上と母上はどうしたんだ？」

レオの言葉にご飯を食べ終えたキング・ドラグーンがそう尋ね、レオは少し黙ると言った。

「……親父はガキの頃死んで母さんは病気で入院してる」

「……すまん」

そう言うレオの表情に陰りが見え、キング・ドラグーンはそれを見ると頭を下げる。とレオは首を横に振って言った。

「別にいい、むしろそれで変に言われる事は嫌いだ」

レオはそう言うのと食事が終わったと考えたか食器を取って洗い始め、メリオルとエルフィもそれを手伝い、ライとアルフはフリード達を部屋に案内する。そして食器洗いも終わってメリオル達もブラック・マジシャン・ガールとフレイヤを連れて家に帰ってからレオとライも眠りについた。

そして次の日の朝、レオはしつかりぐっすり眠り込んでいた。すると突然その枕元に置いていた携帯がけたたましい音を立てて鳴りだし、それから数分経ってようやくしぶしぶレオは携帯を取る。

「はいもしもし？」

「レオ！？ 急いで着替えて木刀持って外に出て！！」

レオが声を出すとそれを遮る勢いでメリオルが怒鳴りつけ、レオがなんだよと呟くとメリオルがなんでもと怒鳴り、レオはやれやれとばかりに寝巻きを脱いで服に着替えると壁に立てかけていた木刀を持って外に出る。

そこは大騒ぎになっていた。道に溢れんばかりの数十体ものモンスターー デーモン・ソルジャーにチエスデーモン、悪魔族が中心になっているが中にはアンデッドやらも混じっている。

「おいおいどういう事だ？」

「ふわあ……なんか厄介な事になってるね」

レオの言葉に後ろからライが出てくる。こっちはアルフから連絡が行ったのかその両手には二本の木刀が握り締められていた。

「まあいい、フリード達は？」

「いない。多分先に行ったんじゃないかな？ 起こしてくれてもいいのに……」

「初めて会った奴にそれは無理な注文だ。とりあえず手分けしてくぞ！ 関係ない人達が巻き込まれたら大変だ！」

レオの言葉にライはそう言い、その言葉にレオは苦笑交じりに返してから真剣な目つきを取って言う。それにライが頷くと二人は別の方向に走っていった。

「おい、フリードって男達を知らねえか？」

「し、知らない……本当だ」

低くドスの聞いた声でデーモン・ソルジャーがそう尋ね、剣を突きつけられている男は震える声でそう言う。それを聞くとデーモン・ソルジャーはそうかと呟いて剣を下げ、男は安堵の息をつく。

「なら貴様は用済みだ!!」

その次の瞬間デーモン・ソルジャーの剣が男を襲い、男は思わず目を閉じる。と男は何かに押され、後ろに弾かれた。

「げふっ!?!」

「大丈夫ですか!?! それと手段の乱暴さはすいません! とりあえず逃げて!!」

男は背中で倒れこみながら息を吐き、それを見ながらレオがそう言う。それに男は頷くと逃げ始め、レオはそれを見届けると木刀を剣道のように構える。

「何者だ、貴様?」

「フリードの関係者って言えば通じるかな?」

「貴様がか……なるほど」

「何のつもりだ？ 何故こんな事をする？」

デーモン・ソルジャーの剣にレオはびびる様子を見せずに笑みを浮かべてまで言い、それを聞いたデーモン・ソルジャーはなるほどといった表情を見せる。それからレオが尋ねるとデーモン・ソルジャーは言った。

「貴様が知る必要はない、そしてフリードの関係者という事は強き札使いを意味する。ここで死んでもらおう!!」

デーモン・ソルジャーはそう叫ぶと飛び掛り、しかしレオはそれを予想していたように動いて相手の剣をかわすと木刀を相手に顔面に叩きつける。

「……その程度か？」

「!？」

しかしデーモン・ソルジャーはびくともしていなかった。人間なら間違いなく気を失う一撃、それを相手は痛がる様子も見せずデーモン・ソルジャーは剣を振るうと木刀が弾かれて宙を舞う。なんとか手を離してかわしたため身体に傷一つもないが武器を失ってしまった。

「くそっ！」

「我が任務の犠牲となれ！ 死ね！」

丸腰になったレオに向けてデーモン・ソルジャーが剣を振るい、レオはかわそうと姿勢を低くする。しかし相手の方が速すぎてタイミングが掴めなかった。

(やられる!?)

しかしその瞬間何者かがデーモン・ソルジャーを跳ね飛ばし、口を開く。

「無茶をするな、人間」

「キング・ドラグーン!？」

その相手　キング・ドラグーンにレオが驚いた声を出し、ドラグーンはやれやれと息をついた。

「この敵は大方片付けた。後はあいつと……むう、レッド・サイクロプスまでいるか……パワー系が二体となると少し厄介だな」

デーモン・ソルジャーの横に赤い身体に一つ目の悪魔　レッド・サイクロプスが姿を現し、ドラグーンは厄介だと呟く。それからレオに言った。

「レオ、今からお主に我らとの契約をしてもらおう。デュエルモンスターズワールドに来る代わりにその住人と渡り合える力をやろう」

「ああ、デーモン・ソルジャーであれじゃ上級モンスターとの戦いはやばすぎるからな」

キング・ドラグーンの言葉にレオはそう呟く。まあ武器を使った渾身の一撃を痛む様子すらない相手がたくさん存在する世界にそのまま行ったら間違いなく瞬殺されるだろう。それを考えるとレオはすくに頷いた。

「オーケー、契約に乗ってやる」

「うむ。右手を出せ」

レオの言葉にキング・ドラグーンはそう言い、レオはそれに従って右手を前に出す。キング・ドラグーンはその右手に手をかざして何か光を浴びせ、光が止んだ後レオの手の甲の方の右手首には星の紋章が描かれていた。

「レベルの星に似てるな？」

「セイヴァー救世主の紋章だ」

レオの言葉にキング・ドラグーンはそう言っつてその龍の身体を使っつてそこに落ちてたレオの木刀を拾い渡す。それを握り締めるとレオは不敵な笑みを浮かべて言った。

「デーモン・ソルジャーは俺がやる。さっきのお返しだ」

「……承知した、我らが救世主よ」

レオの言葉にキング・ドラグーンは頷いてそう言い、それを聞いたレオは一気に飛び出す。狙いは悪魔の兵士　デーモン・ソルジャー。

「おらあつー!!」

「ぐつ!?!」

突進しその勢いをも利用した一撃をデーモン・ソルジャーは剣を使つて受け止めるがその剣は押され、体勢が崩れる。それを見た瞬間レオは木刀を両手で握り締め、相手の面向けて振り下ろした。

「面ツー!!」

デーモン・ソルジャーの頭に木刀が叩き落され、デーモン・ソルジャーはぐらりと揺れると倒れ、消滅していく。

「すげえ……」

さっきの苦戦が嘘みたいだと思いつつながらレオはそう呟き、キング・ドラグーンの方を見る。既にレッド・サイクロプスは消滅していた。

「さて、ライの方もフリードが行っているだろう。戻るぞ」

「はいよ」

キング・ドラグーンという言葉にレオはそう返して歩き出し、キング・ドラグーンも後を追うように動き出す。そしてレオの家に向き着くと既に全員揃っていた。それからレオとキング・ドラグーンが到着するとフリードが口を開く。

「さて、各々契約を試してみたいだな」

その言葉に答えるようにレオ達は全員右手の甲を見せる。そこから

見える手首には全員例外なく星の紋章が描かれていた。それを見るとキング・ドラグーンが続ける。

「ではお主らをデュエルモンスターズワールドに案内しよう」

「ちょっと待って、その間こつちが留守になるんでしょ？ 学校を長期休むつてのがちょっと問題あるんだけど、出席日数とか」

キング・ドラグーンの言葉にメリオルがそう言うがフリードはそんな事かと頷く。

「その点なら問題ない、シヨツカー」

「ああ、我ら機械族の街には時の機械タイム・マシンがある」

「私らの魔法使い都市にも時の魔術師がいるよ！」

「ちょっと黙りなさいよ、話が進まないわ」

フリードの言葉にサイコ・シヨツカーが頷いて言うとブラック・マジシャン・ガールが割り込んで言い、フレイヤが声を出す。それにまた二人が睨み合いを始めるがフリードはため息をつくと二人共に黙れと一喝し、二人はしょぼんとうな垂れる。それからフリードが続けて言った。

「まあそついう訳で終わった後君達は我らの世界に行った五分後に帰ってくるようになる。それならばこつちの世界には五分しかないなかつた事になるからな」

「なるほど。心配が消えたわ」

フリードの言葉にメリオルは頷いてそう言い、それから一行はレオの家の庭にいつの間にか描かれた妙な光を放つ魔方陣の中に入る。そしてブラック・マジシャン・ガールが杖を掲げて口を開いた。

「開け、時空の扉！！ デュエルモンスターズワールドへワープ！！！！」

その言葉と共に光が強くなって辺りを包み込む。その光が止んだ時魔方陣の中には誰もおらず、魔法陣も役目を果たしたというように消えていった。

第一部最終話 新たなる出会い、そして旅立ち（後書き）

はい、そんなこんなで遊戯王X第一部はこれで完了です。ちなみに彼らにはデュエリストとしてだけでなく剣等の武器を使った普通の戦いつてもやってもらう予定です、もちろんメインはデュエルですよ？遊戯王小説ですし。

ただ後ろで指示を出すだけじゃなく仲間のモンスターと共に戦ってもらってというかね、まあ武器使った戦いがなしになっても生身の人間がモンスターにデュエルを介さずまんま襲われたらあつという間に死ぬ可能性だってありそうですからそのための肉体強化契約を施しましたけど。ってか一般人がモンスターとまともに戦えるわけないし、物理的とか生物的な意味で。

ま、こんなデュエルのミスも度々目立つ小説ですが、これからもお付き合いよろしくお願いします。それでは。

第二部第一話 デュエルモンスターズワールド到着、竜の谷

デュエル大会の帰り道に異世界からやってきたと言うフリード達遊戯王モンスターズの精霊と出会った次の日、レオ達は彼らのデュエルモンスターズワールドを救うため一緒に戦ってくれという願いを承諾し、異世界へと向かっていった。そして今、レオは困ったように腕を組んでいた。

「……ここはどこなんだ？」

今自分がいるのは凄く険しい渓谷、気がついたらここに立っていたのだが周りにメリオル達はもちろん連れてきたはずのキング・ドラグーン達の姿すらない。辺りを見回してそれを確認するとレオはやれやれとため息をついて自分の持ち物を確認し始める。

「デッキとデュエルディスクに予備のカードが少し……あと朝からなんだかんだの騒ぎで持ってきた木刀ぐらいか。まあとりあえず少し辺りを調べてみるかな」

レオは腰に挿している木刀を確認するとそう呟いて渓谷に入っていく。それから辺りをきよろきよろと見回しながら歩いていると突然目の前に槍が突き出された。

「おっと!？」

「何者だ!？」

素早くバックステップを踏んでかわした直後そんな声が聞こえる。その声の主は黒い皮膚をした、右手に簡素な槍を持ち左腕にこれま

た簡素な盾をつけた竜。

「竜の尖兵！」

遊戯王の世界に来たんだから当たり前なのだが遊戯王のモンスターが目の前にいるというのは妙な感じと同時に変に楽しいような気持ちになる。しかし相手は警戒心満々な様子で槍を構えており、さらにリザード兵がやってきた。

「うわ、リザード兵も……あ、えーっとキング・ドラグーンは？」

「竜魔神様は救世主を探しに行かれています。はっ！？ もしや貴様敵軍の回し者か！？」

「濡れ衣もいとこだな！ 違うー！」

「とにかく拘束させてもらうぞ！ かかれー！」

レオはとりあえず本題に入ろうとそう言うが竜の尖兵はそう言った後気づいたような声でそう言い、それにレオがそう叫ぶが相手は聞く耳持たずにそう叫び、リザード兵も剣を構えて襲い掛かる。

それを見た瞬間レオは腰の木刀を振って目の前に突きつけられている槍を弾き、襲い掛かってくるリザード兵の剣をかわずとその顔面に蹴りと殴りを連続で叩き込んだ直後、槍を構えなおしてきた竜の尖兵の槍の攻撃をかわして顎をかち上げるように木刀を振り上げてまるでアッパーのように木刀が顎に入る。それを受けた瞬間竜の尖兵はぐらりと揺れ、倒れた。

「人間で言うところと脳震盪が起きているはずだ。簡単には立てないはずだぞ」

「くそっ……」

レオの言葉に竜の尖兵は悔しそうに呟き、リザード兵も上手く蹴りが入ったのか気を失っている。するとそこにまた別の声が聞こえてきた。

「おお、そこにいたのか」

「竜魔神様！」

「キングドラグーン！」

その声に反応して竜の尖兵とレオが同時に声を出し、声の主 キングドラグーンがその場にやってくる。それから現在の状況を確認すると口を開いた。

「レオ、何をやった？」

「襲ってきたんで対処したまでだ」

「りゅ、竜魔神様、まさかこの人は……」

キングドラグーンの言葉にレオがそう返すと竜の尖兵が心なしか震えている声でそう呟き、キングドラグーンはこくと頷いて言った。

「うむ。我が人間界で見つけてきた救世主の一人だ」

「なっ！？ そ、それは失礼を……」

「いや、分かってくれたなら構わないからそっちでのびてるリザード

「ド兵にも説明しといてくれ」

キングドラグーンの言葉に竜の尖兵は絶句した後レオに向けて頭を下げながらそう言い、それを聞いたレオがそう言っていると竜の尖兵は頷き、それから行こうかとキングドラグーンが言っているとレオも頷いて溪谷の奥の方へと行った。

溪谷の奥は崖に囲まれた集落のようになっており、そこにはたくさん種類のドラゴン族のモンスターがいた。いや、ドラゴン族をサポートする効果を持っている別種族のモンスターもいる。

「すげえ、ドラゴンがたくさん……」

「壮観な眺めか？」

「まあドラゴン使いとして凄いと云わざるを得ない……」

レオは妙に楽しそうな笑みを浮かべながら呟き、横を歩くというか浮遊して動くキングドラグーンがそう尋ねるとレオはまた笑いながら頷いた。するとキングドラグーンの前に真紅の眼を持つ黒竜が姿を現した。

「ちわつす竜魔神様」

「おお、レッドアイズ」

フレンドリーに挨拶してきた黒竜　レッドアイズ・ブラックドラゴンにキングドラグーンも微笑を浮かべながら返し、次にレッドアイズはレオを見た。

「この者が救世主で？」

「うむ。我らドラゴン族の使い手だ」

「よろしく」

レッドアイズの言葉にキングドラグーンが頷いてそう言うとレオもペコリと一礼して挨拶する。しかしレッドアイズは紅い眼でレオを見定めるように眺めながら言った。

「悪いが俺は救世主とやらは信用しない性質なんだ。そんな者の力がなくとも我ら竜族の力で侵入者は倒してみせる」

「結構な心構えだがそっちも一児の父なのだから無茶はせぬようにな」

レッドアイズの言葉にキングドラグーンは笑いながら注意するようにそう言う。言われてみれば彼の背中には小さな黒竜　黒竜の雛が乗っており、レッドアイズは一礼するとその言葉に返した。

「分かってます。でもあいつらが攻めてきたときには俺も誇り高き竜族の一人として前線を戦いますから」

レッドアイズはそう言うつと雛を背負ったままドシンドシンと歩いていき、それを見送りながらレオは口を開く。

「強かな奴ですね」

「我らの中でも好戦的という点ではトップクラスだ」

レオの言葉にキングドラグーンがそう返していると突然慌てた様子

のランス・リンドブルムが飛んできた。

「ま、魔神様！ 悪魔群の襲来です！！」

「なんだと！？ 早く応戦準備だ！」

「速いなおい！」

ランス・リンドブルムの知らせを聞いた瞬間キングドラグーンは総大将のように指示をはじめ、レオは木刀とデュエルディスクを確認すると入り口の方に向けて走っていく。

渓谷の入り口には既にブリザード・ドラゴンやアックス・ドラゴニユートというような下級ドラゴンがウィップテイル・ガーゴイルやガーゴイル・パワードと言った飛行能力を持った下級悪魔族と戦っている。流石はドラゴンと飛行能力を持つ悪魔族、全員空を飛んで戦っていた。

「……」

つまり翼を持たないレオは戦えないわけだ、これじゃあなんのために来たのか分かったもんじゃない。

「邪魔だ邪魔だ！」

そう考えていた次の瞬間自分の横をレッドアイズ・ブラックドラゴンが飛んでいく。それを眺めていると足をちよこちよこ動く気配に気がつき、レオは足元を見下ろした。そこには黒い仔竜 黒竜の雛がいる。

「よおチビスケ、お父さんに置いてかれたか？」

「きゅ〜」

レオがしゃがみ込みながらそう尋ねると黒竜の雛はそう鳴いて返し、レオは含み笑いをすると雛を左手だけで抱き上げた。勿論右手は万一の時用に開けておき木刀を手にやるのも忘れない。それから見上げた空ではドラゴン族と悪魔族の凄まじい空中戦が繰り広げられている。いつの間にかキングドラグーンもやってきていた。

「本当に遊戯王の世界に来ちゃったんだなあ……」

「きゅ?」

思わずの呟きに雛は首を傾げてそう返し、レオは何でもないと思いを浮かべて返す。すると雛が何か気づいて驚いたようにキューと鳴き、レオも雛が見ている方を見る。上半身を鎧で固め大きな角のついた獣　地獄の使いがこっち目掛けて突進していた。

「おつとつ!?!」

瞬時に木刀を抜いてその角と牙を上手い具合にかわし串刺しや噛み殺されるのは免れたが流石に力が強い、レオの身体はどんだん崖に向かって押されていた。

「く、そつ!?!」

すんでのところで引つ掛りかけていた角から木刀を外し、受け流すように地獄の使いの突進をかわしてその勢いを利用して相手のみを崖に落とす。

「グオオオオオツ!?!」

作戦は成功、危なく文字通りあいつが地獄の使いになるところだった。しかしそう思ったのもつかの間、自分の左手が妙に軽い事になった。

「きゅー！」

「チビスケ！」

さっきの攻防で黒竜の雛が吹き飛ばされていた。完全に崖から放り出されており必死で小さな翼をばたつかせているが飛べそうになく、レオは反射的に崖から飛び出すと黒竜の雛を捕まえ、直後木刀を崖に突き刺してなんとか引つ掛る形に持つていく。

しかし状況は最悪だ。崖に引つ掛ったのはいいが両手が塞がっていて登るなんて無理だしこの崖はかなり高い、下で地獄の使いが潰れているのを見たら分かるが落ちたら確実にお陀仏だ。しかもそれを味方より先に敵に気づかれた。

「ほう、救世主が自らそんな雑魚一匹のために死に掛けるとはな」

「あいにくあつちでこいつには結構助けられてんだよ。雑魚とか馬鹿にするな雑魚」

ウィップテイル・ガーゴイルがレオの近くを浮かびながら嫌味らしくそう言い、それに対してレオも皮肉っぽくそう返す。それを聞いたウィップテイル・ガーゴイルは頬をピクリと動かすと笑って言った。

「今の状況が分かっていないようだな？……死ね、救世主！！」

その言葉と共に相手の長い尻尾が鞭のようになってレオに襲い掛かる。しかしそれがレオに当たる前にウィップテイル・ガーゴイルが何かに吹き飛ばされ、そう思った直後レオは空を飛んでいた。

「……サンキュ、助かったぜ。レッドアイズ」

「我が息子が危なかったから助けたまで、お前はついでだ」

レオは自分が乗っている黒い竜 レッドアイズ・ブラックドラゴンの背中を叩きながらそう言うがレッドアイズはふんと鼻を鳴らすとそう返し、レオは手厳しいなと笑う。それからレッドアイズは続けて言った。

「地面に置く時間が勿体ねえからこのまま戦う！ 振り落とされたくなけりやしっかり捕まってる！」

そう言うのと同時にレッドアイズは飛ぶスピードを上げ、レオは左手に雛を抱えたまま木刀を腰に挿しなおすとレッドアイズの背中 of 棘に掴まる。そしてレッドアイズは悪魔達に肉薄するとその爪で引き裂き、口から黒炎弾を撃って敵を焼き尽くす。するとその背後をガーゴイル・パワードが取ってかぎ爪を構える。

「おっと！」

しかしそれをレオは木刀を振って防ぎ、雛がついでに炎を吐いて追いつく。

「背中文字通り俺が守るからお前は前に集中してろよ！」

「おつよー！」

レオの言葉にレッドアイズは頷いて黒き炎で次々と悪魔達を焼き尽くす。どんどん悪魔達が押され始め、レッドアイズに吹っ飛ばされた後何とか戻ってきたウィップテイル・ガーゴイルはくつと呟いた。

「まずいですねスカル・デーモン様……このままではやられてしまいます……」

ウィップテイル・ガーゴイルの言葉にその横を浮遊している迅雷の魔王 スカル・デーモンはふむと呟く。すると彼は突然耳というか角の部分に手を当てて何かを聞くような仕草を取り、そう思うと彼の手の中に一個のカードが現れた。そしてそれを見たスカル・デーモンはくつくつと笑う。

「よっしゃ次いつ!」

レッドアイズの咆哮にレオもおうと叫び返すがその次の瞬間レッドアイズの動きが鈍った。そこにタルワール・デーモンがタルワールを手に斬りかかり、レオはちつと舌打ちすると木刀で相手の腕を殴って動きを鈍らせ、その間にレッドアイズはその場を離脱する。

「どうしたんだよ!??」

「力が入らねえ……」

「きゆう〜」

レッドアイズだけじゃなく黒竜の雛までもぐったりとしている。それからレオが一つの方を見るとそこにはウィップテイル・ガーゴイルが龍の顔を模した壺を持っている姿があった。

「ドラゴン族・封印の壺か！」

そう叫んでふと左腕のデュエルディスクを見るとそこにはいつの間にかキングドラゴン、真紅眼の黒竜、黒竜の雛、ブリザード・ドラゴン、アックス・ドラゴニユートのカードがありその全てが守備表示になっていた。するとキングドラゴンのカードが輝き、そこから声が聞こえてくる。

「レオ、聞こえるか？」

「おう。やべえな、お前の効果じゃあの壺は無効に出来ないだろ？」

「残念ながらも。ちなみにこの世界だとお前はデュエル時を除いてモンスターの召喚が出来ないはずだ」

「ああ、道理でデッキ枚数が少ないと思ったらモンスターが全部除外されてやがる。つまりこの俺は普通のデュエルを除くと魔法、罫でのサポートに専念しろって訳だな？」

レッドアイズが相手の攻撃をかわしている間にレオがデッキを見ながらそう言い、キングドラゴンがうむと言う。それなら話が早いとばかりにレオは一枚のカードを手に取った。

「だったら壺を破壊するまで！ 速攻魔法発動、「サイクロン」！」

その言葉と共に竜巻が一筋の矢のごとく壺を持つウィップテイル・ガーゴイル目掛けて突き進む。しかしその竜巻をガーゴイルはあっさりとかわしてしまった。

「あ、ずりいー！」

「何を言う？　これはお前達の世界の札での戦いとは訳が違う。魔法も罫も効果も当たらなければどうということはないし攻撃力が低いモンスターでもたくさん集まれば強いモンスターを倒せるわけだ」

「……なるほど、確かにそうだ」

レオの言葉にウィップテイル・ガーゴイルはあっさりとそう返し、それを聞いたレオが納得したように頷くとレッドアイズが怒鳴る。

「納得してどうすんだ！？　このままじゃやられるだけだろうが！」

「何とか攻撃できないのか？」

「無理だ。なんていうか力が抜けたような攻撃する気が起きないっていうか……闘争本能が湧いてこないって言おうか？」

レオの問いにレッドアイズはそう返し、レオはなるほどなと頭をかく。

「多分あの壺がお前からから力や闘争本能を吸い取ってんだろっな。だが……あ、待てよ……キングドラゴン、ブリザード・ドラゴンに少し指示を頼む……ああ、おう、頼む。よし、レッドアイズ、空高く飛んでくれ」

「何をやる気が知らんがいいだろう！」

レオは壺のこつちでの効果を予測すると何か作戦を立てたのかデュエルディスクを通してキングドラゴンに指示を出し、それからレッドアイズに向けてそう言う。それにレッドアイズは頷くとスピー

ドを上げて急上昇した。

「逃げる気か!?!」

「さあな!?!」

ウィップテイル・ガーゴイルの言葉にレオはそう叫び返し、レッドアイズは谷を見下ろすぐらいの高さまで上昇する。それからレオはよしと頷いた。

「俺がお前の頭の上に登るから、ここからこの角度で突っ込んで俺が合図したらお前は首を大きく振って俺を飛ばしてくれ。俺が突っ込んで壺をぶっ壊す」

「……大丈夫なのか?」

「それでも絶叫マシーンは得意な方だ。苦手なのは船ぐらい」

レオの言葉にレッドアイズは流石に心配になったのかそう尋ね、レオはふっと笑ってそう言うのとレッドアイズの頭の上によじ登る。それにレッドアイズはため息をつくとどうなっても知らんぞと念を押してから一気に急降下を始めた。

「きゅ〜」

「なんだチビスケ? お前も来るのか?」

レッドアイズの頭によじ登っているレオの頭にさらに黒竜の雛がよじ登り、頭の角を掴んでいるレオはそれに気づくと声を出し、それに雛はこくと頷く。それにレオはふっと笑った。

「よし、行くか……今だ！」

「いくぞっ！」

レオの合図と同時にレッドアイズは首を振ってレオをふっ飛ばし、レオは木刀を手に弾丸のごとく宙を飛んだ。

「なんだと！？ 止める！！」

それにいち早く気づいたスカル・デーモンがそう叫ぶと共に悪魔族達はレオに襲い掛かる。

「頼むぞチビスケ！ リバーストラップ「威嚇する咆哮」！！」

レオの言葉と共に黒竜の雛の背後に一枚の赤いカードが半透明状態で現れ、黒竜の雛が咆哮を上げると悪魔達の動きが止まる。

「攻撃宣言できない効果はこっちじゃ攻撃行動ができなくなるみたいだな！」

そう言いながらレオは木刀を構えなおす。黒竜の雛は役に立ってくれた、後は俺の仕事だ。

「ガーゴイル！ かわせ！！」

「言われずとも！？」

スカル・デーモンの指示にウィップテイル・ガーゴイルが動くようにするがその身体が凍りついたように動かない。それにレオはふつと

笑った。

「ブリザード・ドラゴンの氷の息吹を受けたモンスターはその動きが封じられる！ もらった！！」

レオはそう叫んで壺目掛けて木刀で突きを叩き込み、封印の壺は突きをくらった場所からひび割れ、ついに割れてしまう。しかもそれだけでは勢いが止まらずウィップテイル・ガーゴイルまで貫くと相手は吹き飛ばされる。それと共にデュエルディスクに表示されたドラゴン達が全て攻撃表示に変更され、雛も勇ましい咆哮を上げる。ちなみにレオは先回りしていたキングドラゴンに受け止められた。

「よし、後は任せておけ」

「おう。空中じゃ俺は邪魔になる」

キングドラゴンの言葉にレオはふっと笑いながらそう言うつと溪谷の入り口に下ろされる。

「さて、後はあいつらに任せるか。チビスケ」

「きゅ〜」

レオは頭上にいる雛に向けてそう言い、雛も一鳴きして返す。すると突然彼の頭上に雷が落ち、レオはすんでのところでそれをかわす。レオの目の前には迅雷の魔王 スカル・デーモンが立っていた。

「ちっ、魔王様のおでましか……チビスケ、下がってる」

レオは警戒心を強くしながらそう呟いて指示し、雛はきゅうと一鳴

きするとレオの頭から降りて後ろに下がる。

「救世主、ここで仕留めさせてもらおう！」

「そうはいかねえよ、こつちも死にたくないんでね」

スカル・デーモンの言葉にレオがそう返すとスカル・デーモンの周りに雷が纏われ、レオは素早く突進して雷をかわすと一気に相手の懐に入って木刀を振るい相手を吹き飛ばした。しかしスカル・デーモンは受け身を取って雷を放った。

「魔降雷！」

「おっと！」

その雷をかわしてまた地面を蹴り、木刀を構える。しかしスカル・デーモンはその太刀筋を予想して腕を構えた。

「残念っ！」

しかしそれに飛んできたのは空いている左手による殴り。それをモロに受けてしまつてスカル・デーモンの体勢がぐらつき、レオは木刀を両手で握り締めると相手の脳天目掛けて振り下ろし、ゴスツと音がしてスカル・デーモンは倒れるとその姿を消していった。

「うし！、！？」

レオは木刀を握り締めながらそう言うがその次の瞬間木刀がぼきりと音を立てて折れ、それを見たレオは絶句した。

しかしこれ以上レオが戦う必要はなく、スカル・デーモンが倒れた

事により悪魔族は撤退、ドラゴン達も戻ってきた。それからレオ達は広場に集まり、キングドラグーンは地図を広げる。

「さて、ここは住み慣れない人間の身には危険だからな。とにかく他の街に飛ばされた仲間達と合流するでしょう」

「どこだ？」

「そうだな……それぞれが飛ばされた地点から移動する距離や状況を考えて……魔法使い族たちの都市、魔法都市エンディミオンが妥当なところだろうな。恐らくフリード達もそう考えるはずだ。となるとレオ一人じゃ危険だから我らからも護衛をつけるか……まず我は決定として」

キングドラグーンの言葉にレオはどこにいくと尋ね、それにキングドラグーンは地図をなぞりながら少し考えるとトンツと一つの街を指差してそう言う。それから続けて言っつて顎に手をやって考えているときゅ〜と声だし、足元を見たレオはふつと笑って声の主を抱き上げた。

「チビスケが立候補するってさ」

「そうか……」

レオの言葉にキングドラグーンは苦笑を漏らす。するとレッドアイズが声を出した。

「ならば俺も行く！ 我が子を危険に晒すわけにはいかない」

レッドアイズの言葉にキングドラグーンはよしと頷き、辺りを見回

すと改めて言った。

「では我とレッドアイズ、そして雛殿で救世主、レオの護衛をしよ
う」

「ああ。よろしく頼むぜ」

キングドラグーンの言葉にレオもそう言ってキングドラグーンと握手をし、それからレオは雛と共にレッドアイズ・ブラックドラゴンの背中に乗って魔法都市エンディミオンへと飛んでいった。

第二部第一話 デュエルモンスターズワールド到着、竜の谷（後書き）

久しぶりに書いたけど……デュエルモンスターズワールド独特の戦闘ってのがどうも書きにくいです……やっぱ普通のデュエルも重視しないと駄目かな？……敵の方も急いで考えないと。

えーっととりあえず次回から三、四作はメリオル達の転移した時の話を書きたいと思ってます。書けなかつたらまた違う方向になる可能性も有りますけど……まあ、それでは。

第二部第二話 デュエルモンスターズワールド到着、戦士族の国

レオがドラゴン族の渓谷に来たのと同時刻、ライも光の中からとある場所へとやってきていた。

辺りを見回すライの目に映るのは西洋風な町並み、中世の文化といえばいいだろうか。ついでに突然街中に光の中から現れたら当然なのか町の人は奇異の目をライに向けていた。

「ありゃ？……つてか兄さん達どこ行っただら？」

「貴様、何者だ!？」

ライは苦笑して首をぼりぼりとかきながらそう呟いていると彼の背後からそんな声が聞こえ、振り向いたライの目に映ったのは茶色の髪を短髪にした、左目に傷のある二刀流剣士。

「わ、切り込み隊長!」

「質問に答えよ、何者だ？」

ライが驚いた声を上げるのに切り込み隊長は凜とした声でそう尋ね、ライはああと呟くと困ったように表情を歪める。フリードもないしどう言えばいいのやら、そう考えていると突然また別の声が聞こえてきた。

「そこまでだ」

「あ、フリードさん!」

「フリード將軍!」

その声の方を向いたライと切り込み隊長は同時に声を出し、フリードはライの近くに歩き寄るとやれやれと息を吐いた。

「いやあすまん。ブラック・マジシャン・ガールが転送魔法を失敗したらしく、それぞれ別々の街へは送り届けられたのだが離れ離れになってしまった」

「いえ、構いません。皆無事なんだよね？」

フリードの言葉にライが笑みを浮かべながらそう返すとフリードはこくと頷き、それから切り込み隊長の方を向いて続ける。

「この者は我らが連れてきた救世主の一人だ。王城への報告を頼む」

「はっ！」

フリードの言葉に切り込み隊長は双剣を収めて敬礼を取るとだつと走って行き、ライはそれを見届けると呟いた。

「フリードさんって偉いんだね」

「將軍だからな。まあ、我よりも優れた力を持つ者は多数いる。さて我らも王城へ向かうか」

ライの言葉にフリードも笑みを浮かべながら返した後そう言い、ライもこくと頷くと二人は王城へと向かう。彼らを迎えたのは西洋風の巨大な王城だった。そこには門番としてかコマンド・ナイトが立っている。彼女もフリードを見ると敬礼をしてフリードもご苦労と返し、ライも一礼して門を潜る。

それからライは一つの部屋へと招かれた。その大きな部屋は厳かな雰囲気にも包まれ流石のライも緊張を隠せていなかった。その部屋にはフリードは勿論天下人紫炎やその後ろに六武衆が待機、他にも切り込み隊長等戦士族の偉い立場にあたるようなキャラクターが揃っていた。

「……」

ライも無言を保っていた、というか緊張のあまり何も喋れないのだろうか。すると彼の前に立っている少女 キーンズ・ナイトが口を開く。

「救世主様、どうぞ楽になさってください」

「あ、えーっと……ライでいいです、その救世主ってのはどうも……それに様つても落ち着かないし……」

キーンズ・ナイトの言葉にライが言いにくそうにそう返すとキーンズ・ナイトはあら失礼というように笑って再度口を開く。

「ではライさん、楽になさってください」

「そうじゃよ、若い者がそんな萎縮しても仕様がな」

キーンズ・ナイトに続いてキングス・ナイトが柔和な笑みを浮かべながらそう言い、ライはどうもと微笑む。するとそこにジャック・ナイトが大慌てで入場した。

「大変です！ 救世主到着の知らせを送りに行った者の知らせによるとアマゾネスの里が壊滅していたとの事です！」

「え！？ 戦士族ってひと固まりで暮らしてるんじゃない？……」

ジャックス・ナイトの声にライが驚いたように声を上げた後気づいたようにあつと呟いて口をつぐむ。するとクイーンがくすくすと笑いながら言った。

「別に構いませんよ。その説明より先にジャック、どういう事ですか？」

「詳しい事は……私の独断で忍者兵を数名偵察に向かわせましたが一番最新の報告によるとアマゾネス達が里から消えたとして数日経った後と考えられるそうです」

クイーンという言葉にジャックがそう説明をし、ライは不思議そうに首を傾げる。するとキングが説明を始めた。

「戦士族はその種類も豊富なのは札使いたるぬしも知っておろう？ この街は我らやフリード殿と言ったそちらでいう西洋の者達で作りに上げた街、他にもそちらの紫炎殿が主軸になって作り上げた東洋の街、そしてHERO達が作り上げたヒーローシティというようにいくつかの街が分かれて暮らしておるのじゃよ」

「あ……なるほど。つまりその一個であるアマゾネスの里がやられたって事？」

「そういう事になりますね。しかし少数民族とはいえあの戦闘民族アマゾネスが敗れるなんて……」

「失礼」

キングの説明にライがそう話を呑み込んだというように返すとジャックはこくと頷く。するとそこにまた一人の戦士が入ってきた、白い装束に身を包んだ 忍者マスター SASUKEだ。彼の姿を確認するとジャックが尋ねる。

「どつした？」

「ここより少し離れた地点にアンデッドと爬虫類、エーリアン主軸勢を確認。進路から考えてここを襲おうとしているものと予測したため報告へと参った」

「そうか……となれば話し合いは戦の後、六武衆！ 戦の準備をせよ！！」

『承知！……！』

忍者の言葉にいち早くそう言って立ち上がったのは天下人紫炎、そして彼の言葉に背後に待機していた六武衆はそう声を上げると部屋を出て行き、紫炎もその後にくよくよ歩き出す。

「拙者も退場させていただく。話の続きは向かってくる敵を撃退した後にいたそう」

「そうですね……ではフリード、あなたも準備を」

「はっ」

紫炎の言葉にクィーンも納得したように頷くとフリードに指示を出し、フリードは切り込み隊長と忍者を連れて部屋を出て行く。それ

を見るとライも立ち上がった。

「ライさん？ あなたは残っていた方が……」

「救世主が黙ってるわけにもいかないでしょ？ 少しは手伝えることもあるかもしれないし、行つてきます！」

ライが立ち上がったのを見るとクイーンがそう言うがライは腰の木刀を確認しながらそう言い、急いで部屋を走り出ていく。部屋に残った三人は顔を見合わせるとふうと息を吐いた。

そして城を出てきたライの見たのは城下町に溢れんばかりのアンデット族にエーリアンモンスターとそれと戦う戦士達。その姿を見るとライもすぐ町に降り、彼の目の前に斧を持った馬の妖怪 馬頭鬼が現れるがライはすぐさま木刀で殴り倒しながらフリードの元へ向かう。

「フリードさん！」

「ライ！？ 戦場に来るとは何を考えているのだ！？」

「あいにくデュエリストたるもの日々デュエルに精進するものです！」

ライに気がついたフリードが叫び声を上げるがライは木刀を持ちながら元気よくそう言い放ち、それを聞いたフリードはやれやれと呆れた様子を見せるがすぐに気を取り直すと言った。

「まあいい。それよりもこの世界ではお前達は普段のデュエルのようにモンスターを召喚する事は出来ん」

「……あ、ホントだ。やけにデッキが削れてると思ったたらこれ全部魔法、罠カードだ」

フリードの説明を聞いたライが一旦木刀を腰の紐の輪に挿して自分のデッキを見ると気づいたように声を出し、フリードはこくんと頷いて続けた。

「つまりここでのおぬしはその魔法、罠の札によるサポートに専念してくれ。まあ戦えない事はないだろうが木刀では心もとないからな……」

「了解！」

フリードの言葉にライは頷いてそう答え、フリードはよしと頷くと剣を構えて相手の方に向かっていく。それを見ながらライは自分のデュエルディスクを見た。

「無敗將軍フリードと切り込み隊長、忍者マスター SASUKE が攻撃表示で出てる……だったら「連合軍」発動！」

ライがカードを発動すると不思議な光がデュエルディスクに表示されている三人の戦士カードに宿り、それに呼応したようにフリードと切り込み隊長、SASUKEの攻撃力が上昇した。

「よし、次は……？ なんだこのアイコン」

デュエルディスクの端っこに今まで見たことない矢印が表示されているのをふと見つけ、ライはなんとなくそれにタッチする。するとデュエルディスクに表示されているカードが六武衆の内イロウ、ニサシ、ザンジ、ヤイチの他大將軍紫炎のカードに変わる。横を見ると

そのカードの戦士達が戦っていた。

「はあっ!!」

イロウとニサシ、ザンジがそれぞれ刀と槍で相手を斬り崩し、そこをヤイチが寸分違わずに矢を撃って追撃、さらに紫炎も手に持つ刀を巧みに且つ力強く扱って敵を次々と斬り倒していた。しかし六武衆より数歩ほど先を進んでいた紫炎の背後を何かが取った。

「危ない！」

咄嗟にライは飛び出ながら二本の木刀を使ってその攻撃を受け止めて弾き返す。その一撃で木刀が二本とも斬れたように折れ、その相手も舌打ちすると後ろに下がって止まる。それは戦士族モンスター

白い忍者だった。

「何!？」

「捕まえてください！」

振り返った紫炎他六武衆も仲間が襲ってきた事に驚きを露にするがライはすぐに指示し、咄嗟にカモンとヤリザが暴れようとした白い忍者を取り押さえる。それからライはしっかりと押さえてくださいねと念を押すと白い忍者の身体を探り始めた。そして何か手ごたえを掴むとそれを思いっきり引き抜き、同時に白い忍者が糸の切れた操り人形のように倒れふす。

「なんだ？」

「多分永續罫、洗脳光線だよ。A細胞が取り付いたモンスターに催

眼をかけるカード。ジャックさんが忍者部隊を偵察にいかせたって
言っていましたよね？」

「なるほど。そこにその細胞とやらが取り付いたという訳か」

「多分……」

覗き込んできた紫炎の問いにライは掴んでいる気持ち悪い細胞
A細胞を見ながら説明し、理解した紫炎がそう言つとライはこく
と頷いてA細胞を地面に叩きつけ、紫炎の刀がA細胞を斬り裂いた。

「多分エーリアンの力だ……厄介だな……」

ライは息をつきながらぼそりとそう言い、紫炎は刀を持ち直すと油
断するなと六武衆に呼びかける。するとまた別の方から悲鳴にも近
い叫び声が聞こえてきた。

「何だ!？」

「俺が行きます! 紫炎さんはこの辺の敵をお願いします!」

紫炎の声にライはそう言つて声の方に走つていき、アイコンにタッ
チして表示されているカードを変える。今度出てきたカードにはさ
つきのフリード、切り込み隊長、SASUKEにゴブリン突撃部隊
と翻弄するエルフの剣士が加わっていた。ちなみに連合軍は相手モ
ンスター勢が何かの除去効果を使ったのか知らないが消えている。
そしてその相手は骨のように白い蛇のようなモンスター 竜骨鬼。

「厄介な……我ら戦士族を亡き者にする呪いの牙を持つモンスター

……」

フリードは用心して剣を構えながら眩き、他の面々も警戒を強める。するとゴブリン突撃部隊が声を出した。

「任してくださいえ將軍さん。俺達やゴブリン突撃部隊！ 突撃して突破口を開く事こそ我らが役目え！！」

ゴブリン突撃部隊の一人がそう言って金棒を振り上げると他の面々も「オオー！」と叫び声を上げて突進していく。そこにライが参入してカードを取った。

「よし、俺も手助けだ！ 速攻魔法「収縮」！！」

そのカードが発動した瞬間竜骨鬼の身体が縮んでいきその力が半減する。それを見たゴブリンはよしと頷きあつと竜骨鬼をたこ殴りにした。しかしその身体は破壊されずまるで霧のように霧散した。

「なんだあ！？」

「ぐああつ！？」

ゴブリンの一人が驚いたように声を上げるとまた別のゴブリンが悲鳴を上げて倒れ、それによって部隊に動揺が走ると次々に部隊を構成していたゴブリンが倒れていく。しかしゴブリンが倒れていくとどんどん相手の正体も見切れてきた。

「竜骨鬼……」

ライの言葉と共にその場に現れたのはさつき破壊されたはずの竜骨鬼、その牙によってゴブリン突撃部隊は壊滅していた。

「なぜだ！？ ゴブリン突撃部隊が倒したはず！？」

「ククク……」

切り込み隊長が驚いた声を上げると共に竜骨鬼はくっくつと笑うとその身体が霧散し、戦士族メンバーの間にとよめきが走る。その次の瞬間切り込み隊長の背後に霧が集まった。

「危ない！」

「はっ！？」

エルフの剣士の叫びでようやく気づいたがもう遅く、切り込み隊長の身体に竜骨鬼の牙が突き刺さる。いや、ぎりぎりで牙をかわしたもののその巨体によるタックルが追撃にやってきた。

「ぐはっ！！」

「くそっ！！」

切り込み隊長の身体が吹き飛ばされ、エルフの剣士が斬りかかるが相手の身体に剣が刺さろうとした瞬間また相手の身体が霧散する。それを見た瞬間やはりとばかりにライが声を上げた。

「ミスト・ボディだ！」

「ククク、その通り。私の身体は霧となりいかなる物理攻撃をも無効にする。肉弾戦を主軸とする貴様ら戦士族では太刀打ちできない……この身体と我が呪いの牙で貴様らを駆逐してくれよう。まずは

……」

ライの言葉に竜骨鬼が笑いながらそう言い、じろりとさっきのタックルの衝撃で未だに体勢を立て直せずにいる切り込み隊長を見る。そして身体が霧散した。

「切り込み隊長を狙う気だ！」

「させん！」

ライの言葉通り霧は切り込み隊長に向かっていているがそうはさせないとばかりにSASUKEも走り出す。そしてギリギリのところまで竜骨鬼の牙より先にSASUKEの足が上回った。

「サスケ！ そのまま切り込み隊長を連れて退け！」

「エルフもついて行ってくれ！……もしサスケが怪しい事をしたらすぐ斬って、さっき白い忍者が洗脳されてたんだ」

「御意！」

「わ、分かった！」

フリードの声に続けてライもエルフの剣士にそう言い、SASUKEが頷いてその場を離脱すると共にエルフの剣士も頷いてその後を追う。それを見た瞬間竜骨鬼がくっくつと笑う。

「あと二人、不敗を誇る將軍フリードと救世主……他の戦士は我が同胞との戦いで援護にはこれまい」

「霧の身体はいかなる物理攻撃をも無効にし、その牙をくらえば我らは倒れる……厄介な」

竜骨鬼の言葉にフリードは剣を構えなおしながらそう呟き、竜骨鬼はフツと笑って霧散する。そして素早くフリードの死角から襲い掛かった。

「むう！」

本来の攻撃力も負けておりさらに効果による破壊、フリードになす術はなかった。と思いきやその身体に力が湧いてくる、まるで心の奥底から何かに鼓舞されるように。

「ぬうんっ！」

フリードの剣が竜骨鬼を吹き飛ばし、竜骨鬼は地面に叩きつけられると吼える。

「ば、馬鹿な!？」

「フィールド魔法「侍の戦場」！ この場の戦士族は侍の信念の力を受けて攻撃力が上昇し効果での破壊を免れる！ つまりお前の破壊効果は無効になる！」

「助かった。しかしこのままではいずれやられるだけだ……」

竜骨鬼の言葉にライがそう声を出す、いつの間にか辺りの雰囲気は僅かに変わっていた。それを聞いたフリードが助かったと言うが次の表情を険しくする。しかしライはにっと笑って言った。

「大丈夫、手はあります。しばらくここであいつを食い止めててください」

ライはそう言うとその場を走り去っていき、それを見送るとフリードはふっと笑って竜骨鬼の方を向きなおす。

「救世主は逃げたか！ なんとも無様だな！！」

「あ奴は必ず戻ってくる！ それまで我が相手となるう！！」

笑いながら叫び声を上げる竜骨鬼にフリードはそう叫んで剣を構え、竜骨鬼も上等だとばかりに牙を剥けた。

その瞬間フリードと竜骨鬼の戦いが始まるがフリードの剣は霧となる相手の身体に当たらずしかし相手の牙は実体を持ってフリードに襲い掛かる。状況は圧倒的に不利、あつという間にフリードは追い込まれてしまった。

「不敗將軍フリード、その不敗伝説はここで消える！！」

竜骨鬼は叫び声と共に突進し、フリードは無念とばかりに歯を噛む。するとその前に盾が出現した。

「畏カード発動「ドレインシールド」！」

「へぐぶっ！？」

その声と共に現れた盾をフリードは前方に構え、突進していた竜骨鬼は情けない声を上げて吹き飛ばされる。それと共にフリードの横に一人の少年が立った。

「遅くなりました。中々見つかんなくって……」

「ロケット戦士？」

少年　ライの横に立っているというか浮遊しているのはロケット戦士、それにフリードはきょとんとした様子を見せ、ライははいと返す。

「こいつこそが犠牲を出さずにあのミスト・ボディを攻略する切り札です」

「そのような雑魚が俺様を倒す切り札だと！？　笑わせるな！！」

「雑魚って言うな！！　見せてやるうよ、ライ！」

ライの言葉に竜骨鬼が叫ぶとロケット戦士がプンと怒った様子を見せて叫び、ライもオツケーとばかりに笑って一枚のカードを手を取った。

「装備魔法発動「ライトレイザー」！　こいつをロケット戦士に装備！」

ライがカードを発動した瞬間ロケット戦士の右手からいつもの剣が消え去り、代わりにナックル状の武器が装備される。それを握り締めるとロケット戦士はライを見て頷き、ライも頷き返した。

「ロケット戦士で竜骨鬼を攻撃し、この瞬間効果発動！　ロケット戦士、無敵モード！！」

ライの掛け声と共にロケット戦士の姿が変形、ミサイルの形になって竜骨鬼にその先を向ける。そしてブースターが点火され、ロケット戦士は一直線に竜骨鬼目掛けて飛んでいった。

「馬鹿め、そんな雑魚一噛みで破壊してくれる！」

「ロケット戦士は無敵モードになった時戦闘で破壊されず、さらにこの場の侍の戦場の効果によって効果破壊はされない！　そしてライトイレイザーの効果で戦闘を行ったモンスターを除外する！！　消去せよ、ロケットブースト・イレイザーアタック！！」

ライの掛け声と共にロケット戦士の身体が不思議な光に包まれ、それに貫かれた竜骨鬼の身体が己の意思とは別に霧散し、完全に消え去る。それを見届けるとライとフリードはふうと息を吐き、戻ってきたロケット戦士とライは「いいーい」と言い合ってハイタッチを行った。

そして戦も終結し、一同は改めて王城へと向かう。そしてフリードが口を開いた。

「このような状況になったからには救世主達は早めに合流させるべきだと思う。そして現在の状況と他の者達が飛ばされた場所を推測すると恐らく全員が魔法都市エンディミオンに向かうはずだ」

「それもそうじゃのう。しかしライ一人では危険じゃろう？　どうする」

「何人が腕の立つ護衛をつけましょう。まず我は行かせていただきたい、後は隊長に連絡係にもなるサスケを」

「分かりましたわ。では急いで必要な物資を集めます」

「食料が数日分と野営の道具があればそれで構いません」

フリードの言葉にキングが頷いてそう返すとフリードがそう言い、後ろに待機しているSASUKEをチラッと見て続け、SASUKEも承知したというように小さく頷く。それを聞いたクイーンが尋ねるとフリードはそうとだけ言い、クイーンも頷くとジャケットを連れて部屋を出て行った。

それから数分後、フリードに言われた道具をクイーン達が調達しているまでの間ライ達は街の入り口で待っていた。するとそこに紫炎がやってくる。鎧は脱ぎ西洋風の服に身を包んだ天下人の姿だがその威厳に変わりはない。

「ライ、フリード殿、拙者からもこれを送ろう」

そう言う紫炎の後ろからやってきたのは六武衆が連れてきた四体の黒い馬、それを見た瞬間フリードが驚いたように声を上げた。

「これはそちらの国の名馬では！？ 構わないのですか!？」

「ほう、そちが焦るとは珍しいものが見られた。構わぬ、特にライには命を助けてもらった恩というものもある、遠慮するな」

「すげー、乗馬なんて初めてだ……」

「……」

フリードの言葉に紫炎はくっくつと笑いながら言い、フリードはしまったとばかりに目を逸らす。それに対してライは目をキラキラさせながら呟き、SASUKEは黙って三人から馬の手綱を貰うと彼らの近くに歩かせる。

「ありがたく借り受けます」

「うむ。ああそれとライ、これもやるう」

「え？　ってこれ真剣!？」

紫炎が渡した二振りの刀を見たライが驚いたように声を上げ、紫炎はこくんと頷いた。

「拙者を守るために木刀を折ってしまったからな。護身になるだろ
う、二刀流で振り回しやすいようにしておいた」

確かに普通の刀より短く二本の刀を使う時は振り回しやすいそうだ、
実際鞘に収めたまま少しひゅんひゅんと振るうが振り回しやすい。

「ありがとうございます」

ライがそうお礼を言うと言うと紫炎もうむと頷いて歩き去っていき、
フリードは馬を見る。するとそこにまた別の、今度は元気のある声
が聞こえてきた。

「ライ！　行くのか？」

「ロケット戦士！　ああ、食料や道具が届いたら」

声の主　ロケット戦士にライもそう返す。それにロケット戦士はふ
うんと呟いた後言った。

「俺もついてっついていいか？」

「別にいい……よね？」

ロケット戦士の言葉にライはそう言ってフリード達を見るとフリードは頷いて言った。

「構わんが……馬がないぞ？」

「ああ大丈夫つすよ！ ほら俺空飛べるんで」

フリードの言葉に返すようにロケット戦士はそう言つと足のブーツターを点火して空を飛び、フリードもそうだったなと笑つ。そこにクイーン達が到着した。

「遅れましたわ。食料一週間分と野営セット！」

「……食料は三日分もあれば充分なのですが……」

「予備のためにこれだけあれば絶対に困らないと聞かないのです」

クイーンはその言葉と共に家来らしき戦士達に食料と野営セットをライ達の前に置かせ、フリードは少し黙つた後そう返す。それにジャックはため息をついてそう呟くように言った。

「お、お心遣い感謝すると言えはいいだろうか？」

「黙つて従つてください。こうなつたクイーンは意地でも引きません、私が一番分かつているつもりです」

フリードの言葉にジャックはやれやれというよつな調子で言い、フリードは頷くとクイーンに言った。

「お心遣い感謝します」

「構いませんわ……あら、馬？……だったら馬車も用意しましょう！ その方が移動も楽です、お気づきなさらず申し訳ありませんわ！」

クイーンはそう言うのとまたターツと街の方に走り去り、家来もその後を追う。それを見届けながらフリードはため息をついた。

「お心遣い感謝する……」

「もう構いませんよ、馬車が来たらとっとと荷物を積んで出発した方がいいですよ？ また何かに気がついてあれを用意しようこれを用意しようなんて言い出したらきりがありません。最悪日をまたぎます」

フリードの言葉にジャックは額に手をやって悟ったような口調で言い、フリードも黙って頷く。

その数分後馬車が到着し、フリード達は紫炎から借りた黒馬を馬車に繋ぐとそういう心得があるらしきSASUKEが手綱を握り、他のメンバーは馬車に乗る。

「ではお気をつけて！」

「はい！ 色々ありがとうございました！」

クイーンは満面の笑みを浮かべながらそう言って手を振り、馬車から顔を出してライがそう返して手を振る。そしてSASUKEが小さく手綱で馬を叩くと馬車は動き出し、一行はエンディミオンに向けて出発した。

第二部第二話 デュエルモンスターズワールド到着、戦士族の国（後書き）

第二話、今回は戦士族の国……後アルフの機械族とエルフィの天使族を書いて最後にメリオルのところまで全員合流となる予定です。問題はあと二つ、三つ同じようなを書けるかですけどね……最悪アルフとエルフィは省略しようかな……。ま、それでは。

第二部第三話 デュエルモンスターズワールド到着、機械族の街

レオ達がそれぞれの国に辿り着いたのと同時刻、アルフは光の中から出てきた後困ったように歩いていた。今自分がいるのはどこか自分達の世界の都会に似た場所、しかし全く人影がなかった。すると突然街の中から何者かが飛び出してアルフに襲い掛かる。

「わっ!?!」

咄嗟にバックステップを踏んでその蹴りをかわすが相手は攻撃の手を休めず蹴りを主軸に攻撃を仕掛けてくる。中国風の服装に顔に張られた呪の字の札、達人キョンシーだ。

「とっ!?!」

顔を狙ってくる手を使った突きをアルフは左右に動いてかわし、タイムリングを計ると相手の右手の突きを自分の左手で逸らし、そのまま腰の回転を使って右の足を相手の顔面に迫るように蹴り出す、ハイキックだ。しかしそれをキョンシーは伏せてかわすと左手を構えた、その瞬間キョンシーの頭に衝撃が走る。そこにはアルフの踵落としが炸裂しており、キョンシーは力なく倒れると姿を消していく。それを見るとアルフはふうと息を吐いて構えを解いた。大人しい外見に似合わずこの子、実は空手の有段者だ。素手の喧嘩ならライにだって負けていない。

しかしその背後にさらなる気配を感じ、アルフは振り返る。そこにいたのはゴブリンゾンビに酒呑童子、ヴァンパイア・ロードと言ったアンデット族、しかも思いつきりアルフに敵意を向けていた。

「くっ!?!」

やばいと瞬間的に考えて構え、同時にアンデッド群がアルフに襲い掛かる。最初に向かってきたゴブリンゾンビを右の正拳突きで吹き飛ばし、その隙に背後を取ったヴァンパイア・ロードを振り向きざまの回し蹴りで吹き飛ばした後向かってくる酒呑童子の顎をジャンプ蹴りで蹴り上げる。しかし相手の数が多すぎた。

「サイバー
電脳エナジーショック！」

と思ったその瞬間アルフの背後から飛んできた電撃の波動がアンデットを破壊し、さらに光線が次々とアンデットを撃ち抜いていく。それに驚いて振り向いたアルフが見たのは自分をここに連れてきた人造人間 サイコ・ショッカーと自身も好んで使用する白銀の機械竜 サイバー・ドラゴンの姿だ。しかもサイバー・ドラゴンは二体いる。

「無事か!？」

「無事も何もなんでいないんですかつか姉さん達は!？」

サイコ・ショッカーの言葉にアルフがそう叫び、サイコ・ショッカーはああと呟くと言った。

「すまん、恐らく転送のミスで全員別々の国に行ってしまったな、まあ全て仲間の国だから心配はいらん。それよりも街中は既に戦場と化している、とりあえず我らの陣営に行きましょう」

「はい！」

サイコ・ショッカーの言葉にアルフは素直に頷くと二体のサイバー・

ドラゴンと共にサイコ・シヨツカーについて歩き出す。それから辿り着いたのは古代機械の兵士や騎士他兵隊に分類される機械族が警戒を行っている場、サイコ・シヨツカーは一礼のみでほぼ素通りし、アルフは一旦足を止めて失礼しますと言って頭を下げた後サイコ・シヨツカーを追いかけた。

そしてサイコ・シヨツカーが足を止めたのは一つの部屋、サイコ・シヨツカーは後ろにアルフがいる事を確認するとドアを開けて部屋に入る。その中には白い身体の人間の数倍はあるだろう巨大なロボット　パーフェクト機械王がいた。

「そちらが救世主の者か？」

「はい」

「は、初めまして。アルフと言います」

パーフェクト機械王の問いにサイコ・シヨツカーはこくと頷き、アルフはぺこりと頭を下げて挨拶するとパーフェクト機械王も軽く頷いて言った。

「そうかしこまらずともよい。こちらこそ機械族を統べる王として救世主と直接会うべきだったのに、無礼をお詫びしよう」

「いえ、そんな巨体でこっちに来られても困りますし……あ、すいません」

「構わん。さて、今この国はアンデット族に攻め込まれている。まずはこれをどうにかしないと……下手に打って出ても奴らの展開力から消耗戦に持ち込まれてはこっちが不利だ」

パーフェクト機械王の言葉にアルフは苦笑を漏らしながらそういつ

た後失言に気がついて謝るがパーフェクト機械王は構わないと返し、
続けてそう言う。それを聞くとアルフは少し考え、尋ねた。

「相手の勢力がどれくらい分かかりますか？」

「ん？ ああ……報告では街の外にかなりの数がいるとの事だが正
確な数までは分からん」

「そうですか……」

アルフの問いにパーフェクト機械王は首を横に振ってそう言い、そ
れを聞いたアルフはそう呟くとなんとなしにデッキに触れる。とデ
ッキが削れてるのに気がついた。

「あれ？……メインデッキのモンスターカードがなくなってる」

「ああ、フリード達から聞いたがこの世界ではデュエル時以外我ら
の札は使えずお前達は魔法、罫しか使用できないそうぞ」

デッキを見ながらアルフが呟くとサイコ・ショッカーがそう言い、
アルフはそうなんだと呟く。それから三枚のカードを見て呟いた。

「ねえ……この世界で破壊されたり除外されたモンスターってどう
なるの？」

「ん？ ああ……まあこの世界における破壊と除外は似たようなも
のだからな……別にどうという事はない、ただ痛いのは確かだな。

後は……種族によって差異はあるが戦士や魔法使い等大体の種族は
天使族の者が転生を行う。アンデッドは相当な時間がかかるが転生
を介さず自己再生を行う分厄介なんだ」

「機械族は？」

「俺達はもつと簡単だな、何しろ機械なだけに修理や修復作業をすればすぐに直る。それがどうかしたのか？」

「あ、いや何でもありません。ただ気になっただけ」

アルフの問いにサイコ・ショットカーがそう答えた後それがどうしたと尋ね返し、それを聞いたアルフは慌てて笑みを浮かべながらそう返して持っていたカードを慌ててデッキ内に隠すように戻す。すると突然古代機械の兵士が部屋に入ってきた。

「失礼致します！ アンデット群が総攻撃を仕掛けてきました！」

「救世主が来たと知ってなりふり構わなくなったか……サイコ・ショットカー、応戦するぞ！」

「はっ！！！」

「僕も手伝います！」

兵士の言葉を聞いたパーフェクト機会王はすぐにそう指示を出し、サイコ・ショットカーが頷いて部屋を出て行くとアルフもその後を追った。

陣営を出て広がった機械族の街には確かに無数のアンデット達がこっちに向かってきており、古代機械シリーズやサイバー・ドラゴン、ガジェット等様々な機械族モンスターが応戦していた。

「俺達も行くぞ！」

「はい！」

サイコ・シヨツカーの言葉にアルフはこくと頷いて拳を構え、それを見るとサイコ・シヨツカーは近くを見回すと何故か落っこちていたナツクルをアルフに投げ渡す。

「使っておけ、素手で殴ってたら手が持たんぞ」

「ありがとう」

サイコ・シヨツカーの言葉にアルフは頷いてナツクルをはめると改めて拳を構えて走っていき、サイコ・シヨツカーが後ろで声を上げた。

「援護は任せておけ！ お前の背中俺が守ろう！」

「はい！」

サイコ・シヨツカーの言葉にアルフはそう叫び返した後目の前のゴブリンゾンビを殴り飛ばし、さらに空から襲い掛かってきた黒竜の黒騎士にはサイコ・シヨツカーが己の波動の力で攻撃、ぐらついたところをアルフが後ろ回し蹴りで仕留めた。

「よし！」

さっと辺りを見回すが他のアンデット族に対してもこっちの機械族の方が押している。このままいけば案外あっさりと決着がつくはずだ。そう思ったアルフはあまり犠牲が出ずに済むかもと笑みを浮かべる。

「アルフ！」

「!?!」

サイコ・シヨツカーの叫び声で我に返って後ろを振り向くとさつき確かに倒したはずのゴブリンゾンビがこっちに接近している。

「わっ!?!」

咄嗟に打ち込んだ正面蹴りでゴブリンゾンビは吹き飛んで倒れたが妙な呪文が聞こえてきたと思うとゆらりと何もなかったと言わんばかりに立ち上がる。

「も、もう再生したの!?!」

「いや、再生能力はいくら強くとも数週間かかるはず……」

アルフが悲鳴のような声を上げるとサイコ・シヨツカーはそう呟き、援軍に来てくれた古代機械の騎士がゴブリンゾンビを木っ端微塵にする勢いで槍を突き出す。しかし次の瞬間また呪文が聞こえ、その瞬間木っ端微塵に吹き飛んだゴブリンゾンビの肉片が集まったと思うと姿が再生、驚いたのか動きが止まった古代騎士を返り討ちに吹き飛ばした。

「さつきから呪文が……呪文?……あ、そうか。生者の書だ!……多分こっちの世界じゃ本の呪文によって効力を発揮する……って事は!?!」

アルフがぶつぶつと呟いてその正体を掴んだ後やばいというような表情を見せて辺りを見回す。さつき倒れていていたアンデット達

はさつきからひっきりなしに聞こえてくる呪文に呼応するように復活、機械族達も応戦するものの何度も何度も再生されていた。すると突然辺りの町並みが消え去っていき、辺りが薄気味悪い墓場のような状態に変わっていく。

「アンデット・ワールド!？」

今度はすぐに正体を掴めたがいきなり街が変わってしまったのは動揺が起きる。その隙について空から黒竜の竜騎士がアルフ目掛けて急降下攻撃を叩き込もうと迫っていた。

「救世主殿!」

そんな叫び声と共にアルフは突き飛ばされ、驚いたアルフは受け身を取りながらその方向を見る。自分を突き飛ばした古代機械の騎士は次の瞬間黒竜の竜騎士の刃を受けてしまった。

「古代騎士!？」

思わずそう叫び声を上げて駆け寄ろうとするがアルフは何か反応するとバックステップを踏む。その直後さつきアルフが立っていたところに古代機械の騎士の槍が振り下ろされていた。

「フシユウ……」

「黒竜の黒騎士の効果、戦闘で破壊したレベル4以下のアンデット族モンスターを特殊召喚する。アンデット・ワールドによって古代騎士もアンデット化……まずい」

アルフの表情が一変する。黒騎士は自分の目の前にいるが黒騎士が

「一体だけだという保障はどこにもない。それに似たような効果を持つモンスターなら他にもいる。」

「サイコ・シヨツカー、一旦街中に退こう！ 仲間を探して一固まりにならないと危険だ！」

「分かった！」

アルフの言葉にサイコ・シヨツカーは頷くと牽制にエナジーシヨツクを放って攻撃し、それで敵の動きが止まったところにアルフ達は街中に逃げ込む。

しかし街は既に敵の手の中、会う機械族の面々はアンデット化状態ではあり他にもいた黒竜の黒騎士や真紅眼の不死竜の効果を受けたのか敵に回っていた。さらに元々アンデットの敵の数も多く、アルフとサイコ・シヨツカーはなんとか建物の影に逃げ込んだ。

「はあ、はあ……」

「同胞もアンデットの手に落ちた……一体誰が敵で誰が味方なのか検討がつかん……」

「おお、お前達もいたか」

アルフが息を切らしているとサイコ・シヨツカーがそう呟き、そう思ったら別の声が聞こえてそっちを向く。そこにはサイコ・シヨツカーと同じくらいの大きさのパーフェクト機械王とサイバー・ドラゴン二体の姿があった。

「パーフェクト機械王さん！……なんで小さく？」

「ああ、ミクロ光線を浴びてな。お前達もこの状態に困っているんだろう？……手立てはあるか？」

「あればこうして逃げ回っていたりなどしません」

アルフは声を上げた後そう尋ね、それにパーフェクト機械王は問いに返した後逆に尋ねる。それにサイコ・シヨッカーはそう返すがアルフはふと呟いた。

「一瞬、ほんの一瞬の間アンデット・ワールドを無効に出来れば……アンデットと化した機械族だけ倒す手はあります。そして上手く行けば他のアンデット達も一網打尽に……サイバー・ドラゴンが二体いればそれが可能です……ただ……犠牲が伴います」

「……どんな作戦だ？」

アルフの声は続くにつれて小さくなり、パーフェクト機械王はアルフの言葉が終わるのを確認すると説明をするよう言い、それを聞いたアルフは一呼吸置いてから説明する。それを聞いたパーフェクト機械王はなるほどなと呟いた。

「確かに……だがやるしかないだろう」

「でも！ 提案した僕の言える事じゃないですが……酷すぎますよ、他の皆を見捨てるような……」

パーフェクト機械王の言葉にアルフがそう抗議のような声を出すがサイコ・シヨッカーはそれを静かに制する。

「同胞をアンデットにはしておけない。それに大丈夫だ、俺達機械

族は破壊されようが除外を受けようがこっちじゃ修理すればすぐに直る。では俺とアルフ、サイバー・ドラゴンであいつらを中央広場に引きつけます。パーフェクト機械王様は」

「うむ。気をつけろよ」

サイコ・シヨツカーの言葉を聞くとパーフェクト機械王は頷いて歩いていき、サイコ・シヨツカーもサイバー・ドラゴン二体に頷くと二体も頷き返し、サイコ・シヨツカーは乗り気じゃなさそうなアルフを掴み上げると一気に影から走り出た。

「いたぞー!!」

あつという間に見つかった一行は街中を走り回って最後には円形の広場へと辿り着く。しかしそこで一行は敵に囲まれてしまった。そして敵の一人　ヴァンパイア・ロードが口を開く。

「覚悟するんだな。機械は我が同胞に、救世主は……ま、なんとかしよう」

ヴァンパイア・ロードはそう言うとマントを翻してかかれと合図しようとする、その瞬間辺りに光が走り、そう思った瞬間薄気味悪い風景が近未来的な機械の街へと戻っていく。

「マジック・キャンセラー！　修理が終了したようだな！」

サイコ・シヨツカーはパーフェクト機械王とその横にある変な光を発する機械を見ながら言い、パーフェクト機械王はこくと頷く。しかしヴァンパイア・ロードもそれに気がついた。

「くそっ！ あいつらを仕留めろ！！」

ヴァンパイア・ロードの指示と共にアンデット族とまだ洗脳が解けてないのか機械族がパーフェクト機械王とマジック・キャンセラーに向かう。パーフェクト機械王も肩からミサイルを発射して応戦するが相手の数が多すぎた。

「早く！」

「でも機械族の皆が……サイバー・ドラゴンも……」

サイコ・シヨツカーの言葉にアルフはまだそう呟くがそれを聞いたサイコ・シヨツカーは声を荒げた。

「このままマジック・キャンセラーがやられたらどの道俺達はやられる！ どうせなら逆転のための犠牲になりてえよ、俺達は！」

その言葉にサイバー・ドラゴンも頷き、それを聞いたアルフは覚悟を決めたように頷いた。

「僕のフィールドのサイバー・ドラゴン一体とサイコ・シヨツカー、パーフェクト機械王、そして相手の機械族を全て墓地へと送り、エクストラデツキから「キメラテック・フォートレス・ドラゴン」を召喚！」

モンスターが削られていたのはメインデツキ、エクストラデツキのモンスターはミスだったのか削られていなかった。アルフの叫び声と共にサイバー・ドラゴンの一体、サイコ・シヨツカー。パーフェクト機械王、そしてアンデットに洗脳された機械族が光に包まれ、サイバー・ドラゴンが円盤状の身体を持った機械竜へと生まれ変わ

る。その直後マジック・キャンセラーが破壊され、辺りは薄気味悪い墓場へと変わっていく。

「くっ……だがこれで貴様らはあと三人、数で押し切れればそんなもの恐るるに足りんわ！」

「フィールド魔法カード「ギア・タウン歯車街」！ このカードの発動によりア
ンデットワールドは上書きされるはずだ！！」

アルフの言葉どおり辺りは薄気味悪い墓場から古代機械の街へと変わっていく。そしてアルフは最後のカードを発動した。

「そして魔法カード「オーバーロード・フュージョン」！ 僕のもう一体のサイバー・ドラゴンと墓地の機械族全員とを除外融合！！ 現れる闇の機械竜「キメラテック・オーバー・ドラゴン」！！！！」

アルフのフィールドに残っていたサイバー・ドラゴンが突然爆発を起こし、そう思ったら光が発生する。その光が止んだ時その場にいたのは黒い六本の頭を持った機械竜。

「キメラテック・オーバー・ドラゴンの効果によって僕のフィールドに存在するこれ以外のカードは全て破壊……皆の力は無駄にしない、キメラテック・オーバー・ドラゴンの融合に使ったのはもはやこの街全ての機械族と言っても過言ではない。その力を受けてみる！ キメラテックの攻撃、エボリューション・レザレト・バースト、インフイニティ！！！！」

アルフの指示と同時にキメラテック・オーバー・ドラゴンは六本の頭から数え切れないほどの数の光線を撃ち出し、アンデットを次々

と殲滅していく。

「だが呪術の書がある限り我らは不滅……」

「どこに書があるかが分かんないならこの場全てを破壊しつくす、それだけだ！」

ヴァンパイア・ロードの言葉にアルフはきつい表情でそう叫び、その命令を実行するかのごとくキメラテックは周り全てに光線を撃ち放つ。光線の雨が止んだ後呪いの言葉は聞こえず、歯車街を生み出していた魔法も消え去って辺りは近未来的な街へと戻っていた。

「ハア、ハア……」

辺りを見回してそれを確認したアルフはがくと膝をつく、その身体が震えていた事を本人が気づいているかは分からない。

それから一日が経った後、戦いが終わった後サイコ・シヨッカーにあらかじめ教わった通りに機械族達の修復装置を操作して半日でパーフェクト機械王やサイコ・シヨッカー等機械族の面々は修理が完了して復活、それを見たアルフがやっと安心して気が緩んだのか泣き出してしまい彼が泣き止むまで数時間を有した。そして泣き止んだ後アルフはパーフェクト機械王の元をサイコ・シヨッカーと共に訪れる。

「しかしいきなりアルフが泣き出した時はどうしようかと思ったぞ」

「ご、ごめんなさい。本当に復活するのか不安でしょうがなくって操作した後ずっと直りますようにって祈ってたから……本当に復活したのを見たら気が緩んじゃって……他の機械族の人達怒ってませんでした？ 勝手に生贄にされちゃって」

「ああ、それなら心配いらん。むしろアンデットの呪縛から助けてくれてありがとうと感謝しておったぞ……さて、本題に戻るとしよう。このような状況は恐らく他の国でも起きている、そうなると思えば早めに合流した方がいいだろう。となるとあの者達の思考から考えて恐らく魔法都市エンディミオンへと向かうはずだ。サイコ・シヨッカー、護衛として行ってくれ」

「はっ！」

パーフェクト機械王の呆れたような口調の言葉にアルフは恥ずかしそうに頬をかきながら言い、その後尋ね返す。それにパーフェクト機械王はこくと頷いてそう言った後話を本題に戻した。

そしてその説明をした後パーフェクト機械王がサイコ・シヨッカーにそう言うと言ったサイコ・シヨッカーはこくと頷く。するとアルフが声を出した。

「あ、あの、サイバー・ドラゴンも連れて行かせて貰っていいでしょうか？ 僕のフェイバリットなのでいてくれたら気が楽です」

「ああ、構わんど。なんなら古代機械の巨人はどうだ？」

「切り札の一枚ですし欲しいですけどお断りします。巨大すぎて困りますから」

アルフの言葉にパーフェクト機械王は頷いた後そう尋ね返し、それにアルフは苦笑を漏らしながら返す。それを聞いたパーフェクト機械王はそうかと呟くと続けて言った。

「それじゃあ後は移動手段か……安上がりと言う点ではサイクロイ

「のだが」

「絶対にお断りします」

パーフェクト機械王の言葉にアルフはにっこりと微笑んで断言し、パーフェクト機械王はむうと呟くと言った。

「冗談だ……妥当な線とすればトラックロイドだな、あやつなら移動の間の食料など積んで置ける」

「分かりました。至急手配します」

「ありがとうございます。じゃあ行ってきます、色々お世話になりました」

パーフェクト機械王の言葉にサイコ・ショッカーはこくと頷いてそう言い、アルフも深く一礼するとサイコ・ショッカーの後に続いて部屋を出て行く。

それからサイコ・ショッカーがトラックロイドにエンディミオンまで行く手配をつけた後生物用の食料を調達、サイバー・ドラゴンも来たところで一行はトラックロイドに乗り込んだ。

「エンディミオンに着くのは明後日になる計算だ、休んでおけよ」

「はい……」

サイコ・ショッカーの言葉にアルフは頷くとトラックの壁に背を預けてアンデットとの戦いを思い出す。

（あの時僕は全てを破壊するって言った……何であんな事言ったんだろ？……）

心の中で眩き、その時を思い出すとアルフの身体に寒気が走り、アルフは自分の身体を抱きしめる。彼の身体が僅かに震えているのにサイコ・シヨツカーもサイバー・ドラゴンも気づいていなかった。トラックロイドはエンディミオンに向けて走っていく。

第二部第三話 デュエルモンスターズワールド到着、機械族の街（後書き）

第三話、機械族の街。こうなりや最後の天使族のどこまでちゃんと書いてエンデイミオンで全員集合までしっかり書くとするか。

えーっと……ほぼ同じ事の繰り返しだしなあ……あと一作二作、ご辛抱してお付き合いお願いします、そうしたらまともなデュエル案も考えてはいますので。それでは。

第二部第四話 デュエルモンスターズワールド到着、天空の聖域

レオ達がそれぞれの国に来たのと同時刻、エルフィは光の中から出てくるときよるきよると辺りを見回した。雲に覆われた幻想的とも称せれそうな純白の神殿、まるで聖域と言われそうだ。

「……天空の聖域」

「あ、いたいた！」

実際そこは天使族の聖域こと天空の聖域。エルフィは辺りを見回しながらそう呟いており、そう思ったらそんな声が聞こえてきてエルフィは声の方を向いた。

「フレイヤ!……皆は?」

「転送魔法の失敗で別々の国に飛ばされたらしいわ。ま、なんでもいいからとりあえずアテナ様の元に向かいますよ?」

「ア、アテナの!?!」

「ええ、私は元々アテナ様の代理人として救世主を探しに来たんだから。さ、行きましょ」

エルフィの言葉にフレイヤははあと呆れたようなため息をついて言い、気を取り直すようにそう言つとエルフィはまた驚いたような表情を見せる。それに対してフレイヤはそう説明するとエルフィの手を取って歩き始めた。それからエルフィが連れてこられたのは中世の上流階級のような屋敷が立ち並ぶ場、思わずエルフィはフレイヤ

に話しかけた。

「え、あの、フレイヤ？……本当に大丈夫なの？」

「私はアテナ様の代理人だしあなたは救世主。ま、心配いらな
いわよ」

エルフィの言葉にフレイヤはふふつと笑いながら言い、エルフィは
そうなのかと自分を無理矢理納得させてフレイヤの後に続いて歩い
ていく。そして立ち並ぶ屋敷を抜けて辿り着いたのはもはや城と呼
べそうな屋敷、しっかり門番も立っていた。

「……ほんつとうに大丈夫なのよね？」

「心配性ねえ。大丈夫よ、私を信じて」

「……うん」

念のためと言わんばかりに尋ねるエルフィにフレイヤはくすくすと
笑ってから安心させるような笑みを浮かべてそう言い、エルフィは
少し黙った後こくと頷く。それからフレイヤは城の門番に話しか
けて説明すると門番はこくと頷いて門を開ける。そしてフレイヤ
が行きましょというように微笑みかけるとエルフィは覚悟を決めて
頷いた。それからフレイヤは城の中を歩いていき、一つの部屋のド
アの前に立つとドアをコンコンとノックした。

「アテナ様、救世主を連れてまいりました」

「入りなさい」

フレイヤの言葉に返すように優しい声が聞こえ、フレイヤは失礼しますと言うとドアを開けてエルフィに行くよと視線で促し、エルフィもこくと頷いてフレイヤと共にアテナのいる部屋に入っていく。部屋の中にいるのはブロンドの髪を長く伸ばした凜とした高貴な雰囲気漂わせる女性、兜や武具はつけていないが彼女がアテナだと気づくのに時間はかからなかった。

「は、初めましてアテナさん。エルフィと申します」

「アテナで構いませんよ？ それと楽にしてください、エルフィさん」

思わず時片膝をついて頭を下げながらエルフィがそう言うとアテナは柔和な笑みを浮かばせながら返し、エルフィは軽く頷くと立ち直す。それからアテナが口を開いた。

「改めましてアテナと申します。本来こちらから出向くのが筋なのですが直接出向かなかったご無礼をお許してください」

「あ、いえそんなとんでもない……」

アテナがうふふと笑いながらそう言うとエルフィは少し慌てた様子を見せながら言い、アテナはまたふふつと笑う。

「ありがとうございます。ここ最近悪魔族の襲来が多すぎて、私もここを離れられないのです……噂をすれば影が差す……ですね」

アテナはそう説明しているとふと顔を上げてそう呟き、それにエルフィが首を傾げたかと思うとドアが開いてそこから天使族の一人シャインエンジェルが入ってきた。

「失礼します！ 悪魔群が襲来してきました！」

「分かりました、すぐに行きます」

シャインエンジェルの言葉にアテナは頷いてそう返すとシャインエンジェルはこくと頷いて部屋を出て行き、アテナは部屋に置いてあった兜や盾、壁に立てかけていた槍を取ると言った。

「フレイヤ、あなたはエルフィさんを安全な場所に」

「あ、は、はい！」

アテナはそう言ってさっと兜をつけて武具を持って部屋を出て行き、アテナの言葉に頷いたフレイヤはエルフィの手を取る。しかしエルフィはフレイヤの手をさっと払った。

「ちょっと!？」

「救世主が黙って逃げているわけにはいかないでしょ?……武器ならあるし」

フレイヤが驚いたように声を上げるとエルフィは不敵な笑みを浮かべながらそう言い、アテナの部屋の壁に飾られていた細身の剣レイピアを手にとってヒュンヒュンと軽く振るう。

「少し重いけどまあ問題ないわね」

「ちょっと！ 本気で戦うつもり!？」

「大丈夫よ、これでもフェンシング部所属なんだし腕に自信はあるわ」

エルフィの言葉にフレイヤが慌てたように声を上げるとエルフィはふふつと笑って部屋を出て行く。それを見たフレイヤは思わず彼女の後を追った。

「あーもう！ 勝手に行かれたら後で私がアテナ様から小言をくらうのよ！……だからその……ついてってあげる！」

フレイヤはそう言ってエルフィの横に並び、エルフィはありがと笑って言う。それから二人は城を出て屋敷の立ち並ぶ場を走り抜ける。そこから二人の目に広がったのは天使と悪魔が戦いあっている光景だった。それを見た瞬間エルフィもフレイヤを連れて戦場に飛び込む。

「はああっ！」

戦場で光を纏って戦う勇敢な天使　デュアミス・ヴァルキリアの背後をヘルポーンデーモンが取って右手の剣でヴァルキリアの左肩の部分を一闪する。

「くっ！？」

「もらった！」

痛みで思わずヴァルキリアの動きが止まり、ヘルポーンが声を上げて剣を振り上げる。しかし振り下ろされた剣はヴァルキリアに当たる前に受け止められた。

「何！？ ぶわっ!？」

受け止めたのはエルフィ、それにヘルポーンは驚いた声を上げた次の瞬間その顔面に何か投げつけられ直後顔を蹴り飛ばされる。その不意打ちとも言える一撃にヘルポーンの身体がふらつき、その隙をついたエルフィが相手の身体をレイピアで貫いた。そしてレイピアを抜いた反動でヘルポーンデーモンは倒れて消えていき、エルフィはさつき両手に持っていたポンポンを投げてヘルポーンに蹴りを入れたレイヤとぱちんとハイタッチをした後ヴァルキリアの方に振り向いた。

「大丈夫？」

「あ、ああ………すまん」

エルフィの言葉にデュナミス・ヴァルキリアは頷いた後怪我をした立ち上がって戦場を見る。それを見るとエルフィが声を上げた。

「ま、まだ戦う気？ そんな怪我じゃ無茶よ！」

「いや、私は誇り高き光の天使。いかなる悪の戦いでも逃げるわけにはいかない」

エルフィの言葉にヴァルキリアはそう言うがエルフィはやれやれとため息をつくと怪我している部分をレイピアの柄でゴンと強く叩いた。もちろん痛みでヴァルキリアは声なく悲鳴を上げると左肩を押さえてうずくまり、それを見下ろしながらエルフィが声を出す。

「その程度で動けなくなるんだから戦いなんて絶対無理、私は無鉄

砲で元気な幼馴染持ってるんだから空元気かどうかくらい分かるのはい帰った帰った」

「だ、だが……」

エルフィの言葉にヴァルキリアはそう諦めないともいうように言い、エルフィは呆れたように額を押さえる。そしてレイピアをフレイヤに持っつてと言っつて渡すとデュエルディスクからデッキを抜き取っつて一枚の魔法カードを取り出した。

「魔法カード「ご隠居の猛毒薬」」

その言葉と言葉にカードの中からそれぞれ緑色の液体と紫色の液体が入った二本のビンが現れ、エルフィは緑色のビンを取ると紫色のビンを捨てる。それからヴァルキリアに左肩を見せてと促しヴァルキリアもそれに従っつて左肩の傷口を見せる。

「少し染みると思うけど我慢してね」

エルフィはそう言っつて薬をヴァルキリアの傷口に少しこぼし、やはり染みて痛いかわアルキリアは表情を歪める。しかし薬で濡れた傷口はあっつという間に塞がっつていく。

「わあ……」

ヴァルキリアは軽く左腕を動かして痛みがない事を確認し、ありがとうとエルフィに微笑みかける。それにエルフィも笑い返すとフレイヤからレイピアを返してもらった。

「よし、それじゃ行こっか！ 一人で無茶しないように私達も一緒

に行くわ」

「ああ、怪我の治療のお礼に護衛してやる」

エルフィのヴァルキリアはそう言いあうとパンとハイタッチし、フレイヤも行こつかと声を出すと二人は頷き、三人は一緒になって戦場を駆け出した。

「はっ！」

「いっけー！」

エルフィがレイピアを使用した剣術で相手を斬り倒し、その背中をデユナミス・ヴァルキリアが両手から発される光弾で守る。

「エルフィ！ 右から新手！！」

そしてやる事がないのか彼女なりの応援代わりなのかフレイヤがさらに後ろからエルフィとヴァルキリアの周りを見てそう指示を出していた。フレイヤの言葉通りエルフィはレイピアを構えなおしつつ右の方に向けて振り切り、その剣先がシャドウナイトデーモンを斬る。

「ぐっ」

「もらった！」

斬撃を受けて怯んだシャドウナイトにヴァルキリアが光弾で追い討ちをかけ、止めとばかりにエルフィが右足を踏み込んで体重をかけた突きを放ち、抜いた後左足で正面蹴りをくらわせ吹き飛ばす。

「よし！　ありがとうフレイヤ！」

体勢を整えながらエルフィはそう言って左手をフレイヤに向けて振り、フレイヤもきつい表情ながら小さく手を振る。とその目が見開かれた。

「エルフィ後ろ！」

「!?!」

その言葉と同時にエルフィは後ろに圧力を感じ、振り向く前に横に飛ぶ。その直後さつきまでエルフィが立っていたところには巨大な手がエルフィを押し潰すように振り下ろされていた。

「ジェノサイドキングデーモン……」

その正体を見ながらエルフィはそう呟いてレイピアを構え、ヴァルキュリアも翼を羽ばたかせて空を飛ぶ。フレイヤは変わらずポンポンを小さく振っている。

「やあつ!?!」

自分より明らかに巨大な相手にもエルフィは果敢に向かっていき、レイピアを突き刺すようにして攻撃する。しかしレイピアは全くと言っていいほど刺さっておらずエルフィはええ？と呟いて思わず動きが止まってしまった。その頭上にはさつきのように手が構えられている。

「危ない!?!」

そしてそれが振り下ろされそうになった直前デュナミス・ヴァルキリアが素早く飛んでエルフィを助け出す。しかしさっきの攻撃が全く効いていないとなるとまずい。

「ど、どうする？」

「逃げる事は許されないわよ！」

エルフィの言葉にヴァルキリアはそう言い、分かっているとエルフィは息を吐いた。するとジェノサイドキングデーモンはこっちに左手を向けるとそれを開く。そう思ったら左手から光線が発射された。

「くあっ!？」

ぎりぎりでかわしたが直撃したらひとたまりもない、さらにジェノサイドキングデーモンは右手を振り回しての攻撃までくわえてきた。ヴァルキリアは上下左右に飛んで右手の攻撃と左手から発射される光線をなんとかかわしていたが流石に限界はある、右手の攻撃が掠ったと思ったらその風圧によって地面に叩きつけられてしまった。そこに狙いをつけるように左手をかざす。

「くっ……」

それを見た二人はぎゅっと目を閉じて身を縮めるが光線が放たれたような雰囲気はあるのに攻撃が全く来ない、それにエルフィは不思議そうに目を開けると自分達の前にはアテナが立っており、その盾で相手の攻撃を完全に防いでいた。

「アテナさん！」

「全く、フレイヤに後で感謝なさいね？……ゼラート！」

「はっ！」

エルフィの言葉にアテナは困ったような笑みを浮かべて言った後凛々しい声で続け、それに白い兜を被り紅いスカーフをつけた純白の羽の大天使は剣を持ってジエノサイドキングデーモンに迫り、一太刀で相手を斬り裂く。そしてゼラートはひゅんと宙を舞ってエルフィ達の近くに降り立ち、それと共にフレイヤも息を切らしてエルフィ達の元に駆け寄った。

「ふう……無事だったみたいね。全く世話の焼ける」

「フレイヤは大急ぎで私達を探すとエルフィ達が危ない事を伝えにきたのよ。命令を破った処罰は私一人で受けますから助けてくださいって」

「ア、アアアアアテナ様あ！！！」

フレイヤはふんつと鼻を鳴らしてそう言うが、アテナがくすくすと笑いながらそう言うのと途端に顔を真っ赤に染め上げて叫び声を上げる。それを聞いたデュナミス・ヴァルキリアはきょとんとした目を見せ、アテナはくすくすと楽しそうに笑い、フレイヤはうううと唸りながらうつむいている顔を背ける。それからゼラートが口を開いた。

「アテナ様」

「ああそうね。それじゃ三人ともこの戦いが終わるまで私と一緒にいなさい。そして戦いが終わった後エルフィとフレイヤは私の屋敷

「来なさいね？」

ゼラートの言葉を聞いたアテナは皆まで聞かずにそう言い、三人はこくと頷く。それから五人は一気に戦場を動き始めた。

そして悪魔群との戦いも終了した後エルフィとフレイヤはアテナの屋敷のアテナの自室に呼ばれていた。そこには大天使ゼラートもアテナの横で護衛のように立っている。

「さてと……」

「アテナさんの言葉を聞かずに飛び出したのは私です！ だから責任は私にあるはずです！」

「いえ、アテナ様の命令を受けながら守れなかったのは私の落ち度です！」

アテナが口を開くとエルフィとフレイヤがお互いを庇うように声を出す。それを聞いたアテナは面白そうにくすくすと笑い、二人が呆けた表情を見せるとアテナが声を出した。

「違います、命令違反については別にいいですよ。ただこのような事が起きたからには救世主には早目に合流してもらわなければならない。恐らく集合場所は魔法都市エンディミオン、そしてそこに行くのにエルフィ一人は危険でしょう。フレイヤにはその護衛を頼みたいの、もちろんフレイヤ一人というわけじゃないわ。ゼラート」

「はっ」

アテナの言葉にゼラートはそう返し、アテナはゼラートを指しながら続けた。

「大天使ゼラート、その実力はさっき見たわよね？ 口数は少ないし少し無愛想だけど腕は確かよ」

「……」

アテナの言葉にゼラートは沈黙を以って返し、エルフィとフレイヤはよろしくお願ひしますと頭を下げる。

それからアテナに渡されたエンディミオンに行くまでの食料や野営の道具を大半ゼラートが持つような形で持つてから天空の聖域を出ようとするところに一人の天使が降り立つ。

「ヴァルキリア」

「行くの？」

エルフィが声をかけるとデュナミス・ヴァルキリアはそう尋ね返し、エルフィはこくと頷く。するとヴァルキリアは意を決したように言った。

「私も連れていってもらえない？」

「いいわよ。ね？ ゼラートさん」

「そちらがよければ俺に異存はない」

ヴァルキリアの言葉に即答するほどの早さでエルフィは返した後ゼラートの方を見る。それにゼラートはさりとそつ言い、じゃあ決まりねとエルフィは微笑んだ。

それから一行はエンディミオンへと向かって出発した。

第二部第四話 デュエルモンスターズワールド到着、天空の聖域（後書き）

第三話、天使族の国こと天空の聖域。ようやくデュエルモンスターズワールド到着パターンも終了、後はメリオルがいるエンディミオンでの全員合流だけだ。

それからまともなデュエルも書くことになりですね、実はその相手を考えてないんですが……あ、勘違いしないでくださいね？相手の名前や使用デッキをほとんど決めてないだけであってこれからの構成を全く考えてないわけじゃないので、まあ構成も大雑把ですけど……。ま、それでは。

第二部第五話 全員集合、魔法都市エンディミオン

とある都市の一角、ここに突然光が走ったと思うと光が弾け飛び、中から二人の少女が姿を現した。

「はいとーちやーく！ ってありや、メリオルだけ？……」

「……みたいね」

光が弾け飛んだと共に少女の一人　ブラック・マジシャン・ガールが声を上げて後ろを振り向くが次に首を傾げてそう言い、辺りを見回したもう一人の少女　メリオルもそう呟く。それにブラック・マジシャン・ガールが困ったような表情で頬をかいていると突然声が聞こえてきた。

「ネラー！！」

「あ、師匠！ たっだいまー！」

その声を聞いたと思ったらブラック・マジシャン・ガールはその声を上げて手を振りながら声の主　紫色の衣装に身を包んだ青年、ブラック・マジシャンの元に走り出す。そしてブラック・マジシャン・ガールが歩き寄って抱きつこうとした瞬間ブラック・マジシャンの上がっていた右手が握り締められ、ブラック・マジシャン・ガールの頭に振り下ろされた。

「にゃぐっ！？ し、師匠何すんのさ！？」

「転送魔法を思いつきり失敗しただろう！？　幸い全員がそれぞれ

の種族の国に飛ばされていたからいいがもし敵地のご真ん中に放り込まれていたらどうする気だったんだ!？」

「あ、あはは、だ、誰しも失敗はあるって師匠も言ってたじゃない?」

「時と場合による! 全くエンディミオン様からの命令を受けそれを任せてと言ったならば責任を持って」

「あ、あのー……」

ブラック・マジシャンが怒号を上げて説教を開始しようとしたところにメリオルがその声をかけるとブラック・マジシャンはそこで気づいたようにあつと声を上げると彼女に言った。

「失礼致した救世主殿。私はブラック・マジシャン、ヴァルツと呼んでください」

「ヴァルツ?」

「師匠の名前、ブラック・マジシャンってのは優れた黒魔術師に送られる称号名だから。私のブラック・マジシャン・ガールもブラック・マジシャンの称号を持つ者の弟子の中で一番の実力を持つ者だけが名乗れる称号、私の名前はネラよ」

「ヴァルツにネラね、よろしく。私はメリオル、救世主じゃなくってそう呼んで」

ブラック・マジシャンことヴァルツの名乗りにメリオルが首を傾げるとブラック・マジシャン・ガールことネラがそう説明し、それを聞いて頷いたメリオルも自身の名を名乗ると二人はこくと頷いた。

「ではエンディミオン様の元に向かいます。こちらです」

ヴァルツの言葉にメリオルもはいと頷いてネラと肩を並べて歩き出
す。

それから彼女が連れてこられたのは魔法都市エンディミオンにある
巨大な王城の一室、彼女の目の前には神聖魔導王エンディミオンが
玉座に座っていた。

「そちらが救世主の者か？ ブラック・マジシャン」

「はっ」

エンディミオンの言葉にヴァルツは片膝をついてそう言い、メリオ
ルは自分の胸元に手を当てると口を開いた。

「メリオルと申します。救世主という称号名ではなく出来るならば
メリオルという名で呼んでほしいですわ」

「……強かな者だな。一国の王に向けてそんな口を聞けるとは」

「あいにく幼馴染が小さい頃無鉄砲で、おかげさまで怖いもの知ら
ずになってしまったんです。まあ身の程はわかまえているつもりで
すよエンディミオン陛下？」

メリオルの言葉にエンディミオンが返すとメリオルはふつと笑みを
浮かべながらそう続ける。それを聞くとエンディミオンはくっくつ
と笑った。

「分かった、メリオル。では状況の説明を行わねばならんな……聞

いた話だと数日前に他の種族の国は敵に襲われ、そこで戦った他の者達は既にこっちに向かっているとの事だが」

「ありゃ？　もしかして空間転送だけじゃなくって時間転送までミスっちゃった？」

「当たり前だ！　そうでなければどうやって同時に来たお前達が違う国に行った事が分かる！？　あ、失礼致しました」

エンディミオンの言葉にネラがそう呟くとヴァルツはまた怒号を上げ、それから気づいたように頭を下げる。するとエンディミオンは笑いながら言った。

「まあ仕方がなからう、聞いた話に寄ると人間五人にプラスしてネラ込みで精霊五人、そんな数の転送は流石に無理がある。それぞれの国に飛ばせただけよしとしよう」

「ネラを甘やかさないでくださいエンディミオン陛下……」

エンディミオンの言葉にヴァルツがまた呆れたような口調を見せ、エンディミオンはすまんすまんと笑うとまたメリオルに言った。

「ところで質問だが、メリオルは武術をたしなんだ事はあるかな？　人間界に魔術がない事は知っているが」

「え？　ああ……舞踊を少ししたしなんでましたけど……質問ですが鉄扇みたいなものはありますか？　なかつたら最悪ナイフでも構いませんけど」

「いや、ある。ブレイカー」

「はっ！」

エンディミオンの問いにメリオルがそう返すとエンディミオンはさらっとそう言っただけで横に護衛として待機していたらしき魔道戦士ブレイカーに指示を出し、ブレイカーは一旦部屋を出て行く。そして数分経って戻ってきた彼の手には二本の鉄扇があった。

「へえ、よく出来てるじゃない」

「その紙の部分の先は刃になっている、一種の暗器だ」

二本の鉄扇を両手に持って広げたり閉じて振ったりを繰り返しているとエンディミオンがそう説明し、メリオルはなるほど扇子の先を見る。そしてメリオルはブレイカーに言った。

「ちょっとかかってくるみてくれる？ 遠慮はいらないわよ？」

「え？ あ、はい」

メリオルの問いにブレイカーはこくと頷いた後鞘に収めている状態の剣を構えて勢いよくメリオルに飛び掛る。その瞬間メリオルはタイミングを計って舞うように動くと次の瞬間ブレイカーが斬られ床に倒れた。

「いつっ！？」

「私の幼馴染は剣道をやってたね。よくその練習相手をやってたのよ、それに舞踊の動きを応用すればちょっと荒いとは言え即興の剣術くらい軽いわ。実際護身の一環でやってたし」

ブレイカーの苦痛の声にメリオルがそう返すとエンディミオンとヴァルツは思わず啞然とし、ネラは凄いと拍手を送っていた。それからメリオルはブレイカーを見て続ける。

「まあこの人も流石に生身の人間相手に本当に本気でかかる訳にはいかないって手を抜いてたみたいだし実戦に使うにはもう少し鍛える必要があるかしらね」

「なるほど……よし、ならもういい。ヴァルツ、彼女を客室に案内してやってくれ」

「はっ！」

メリオルの言葉にエンディミオンがそう言うとヴァルツはこくと頷き、メリオルとネラを連れて部屋を出て行く。それからメリオルは客間に連れてこられた。

「すごい……」

屋根付きの大きなベッドに高級そうなソファとテーブル、ふかふかの絨毯。ドアを開けて中をただで動きが止まってしまいとても部屋に入るなんて出来そうにない。すると一足先に部屋に入っていたヴァルツが言った。

「入らないのか？」

「あ、いやあ流石に汚したりとか思ったら抵抗が……」

「心配いらぬ。別に弁償とかいうわけじゃあるまいし」

「そーそー。さー入った入った！」

ヴァルツの問いにメリオルが苦笑交じりにそう言っているとヴァルツは笑みを浮かべてそう言い、次にネラがメリオルの背中をドンと押しつけてメリオルを部屋に押し込む。ようやくメリオルは部屋の中を歩き回って部屋中を眺め、ソファーに座るとヴァルツが言った。

「それじゃあ俺は行く。ネラ、メリオルの世話を頼むぞ………それから後で転送魔法の復習だ」

「は、あゝい………」

ヴァルツの出ていき様の言葉に最初ネラは元気よく言おうとするが最後の言葉を聞いた瞬間その元気が消えていく。それからヴァルツが部屋を出て行くとメリオルが尋ねた。

「魔法の勉強嫌いなの？」

「そんな事ないよ、これでも師匠の一番の弟子だよ？ でも転送魔法って色々やっつきしいから苦手なの。黒魔法とか炎魔法とかなら得意なんだけどなあ」

メリオルの言葉にネラは隣に座って前にあるテーブルに突っ伏しながら呟き、メリオルはくすくすと笑う。

「それに師匠ってすぐ怒るしあれをしるこれをしるって口うるさい
つたら」

「入るぞ」

「わ！？ し、師匠！？ あ、いや〜でもそんなでも師匠は優しいし……」

ぶすくれたように頬を膨らませながらネラがそう言っているとヴァルツが再度部屋に入ってきてそれを見たネラは慌てて弁解するように続けて言う。それを聞いたヴァルツは首を傾げた。

「何を言っているんだ？ それよりメリオル、さっき聞くのを忘れていたが魔法を学んでみる気はないか？」

「魔法？」

ヴァルツはネラに向けて首を傾げて尋ねた後まあいいと彼女から目を逸らしてメリオルに尋ね、メリオルもまた首を傾げて返す。それにヴァルツはこくと頷いて続けた。

「ああ。もちろんここデュエルモンスターズワールドの術だから人間界に戻ったら使えなくなるが護身として簡単なものを覚えておくに越した事はない。無理にとは言わないがどうだ？」

「なるほど……面白そうだしとりあえず体験ぐらいはしてみるわ」

「決まりだな。ネラ、お前も来い。メリオル一人だと何かと不安だろっ」

「はい」

ヴァルツの問いにメリオルが頷いてそう返すとヴァルツも頷いて言い、ネラについてくるようにと促す。それにネラも右手を挙げて返すと三人は部屋を出て行った。

そして城を出て彼らがやってきたのは一軒の学校らしき建物、そこに入るとヴァルツは一つの方を指して言った。

「とりあえずネラと同じコースを受けてもらおう、もちろん基礎も教えるから安心してくれ。ネラ、連れて行っておいてくれ」

ヴァルツはそう言うと忙しそうに走っていき、それを眺めながらメリオルが呟く。

「忙しそうね」

「まあね。私も数日休みの扱いになったし久しぶり」

「こつちでまで勉強するなんて聞いたらレオやライ辺り逃げそうね」
メリオルとネラはそう話し合いながら校舎内を歩いていき、ネラは一つの教室に入ると声を上げた。

「皆ー、ひっさしぶりー！」

「あ、ネラ。お久しぶりです！」

ネラに言葉に返して来たのは風霊使いウィン、彼女はにこにここと柔らかな微笑みを浮かべており、ネラは久しぶりという風にパチンと彼女とハイタッチを行う。次にその隣に座っていた少女　アウスが会釈をした後ネラの後ろのメリオルに気づいて声を上げる。

「あ、そちらは……まさか」

「そう！　私が見つつけてきた救世主！」

「メリオルよ、一時的にここで魔術を習う事になったの。よろしく」

アウスの言葉にネラが胸を張りながらそう言うとメリオルは苦笑を見せながら挨拶して教室に入る。その前にウインが立って挨拶した。

「私はウイン、風霊使いです。よろしくお願いします」

「ボクはアウス、地霊使いです。まだまだ未熟ですけどよろしくお願いします」

ウインがぺこりと頭を下げた挨拶した次にアウスが挨拶する。それにメリオルはよろしくと会釈した後教室の中を見回すと後三人の魔術師がいた。それを確認したメリオルがネラに尋ねる。

「少ないの？」

「ううん、一クラス十人の少数精鋭クラス。師匠が先生やるのよ…
…そっぴやダルクとライナは？」

「ああはい、ライナさんが寝坊したらしく少し遅れるとの連絡が…
…ねえ？」

メリオルの問いにネラはそう返し、メリオルはへえと頷く。ついでにネラの問いにウインは説明した後近くを浮遊しているD・ナポレオンに確認するように尋ね、ナポレオンはこくと頷く。その間にメリオルはぐっすり寝こけている赤毛の少女に近づいて彼女を起こそうと手を伸ばした。

「止めた方がいいわよ、寝てるヒータを起こしたら色々うるさいから」

その瞬間そんな言葉が聞こえ、メリオルはビクッと手を止めて声の方を見る。そこにいたのは水霊使いエリア、となるとやっぱりこの少女はヒータで合っているらしい。そしてエリアはメリオルの方を向く。

「メリオルさんだったわね。私はエリア、そっちの世界に私達の札があるそうだから知ってるでしょ？」

「ええ。霊使いの六人って人気カードよ」

エリアの言葉にメリオルがそう返すとエリアはふうんと頷いて彼女から目を逸らす。とメリオルの後ろからうわあ〜という大欠伸が聞こえ、メリオルは後ろを振り向く。さっきまで寝こけていたヒータは目を覚まして眠たげに目を擦っており、それから彼女はメリオルに気づく。

「ん？ あんたは？」

「あ、私はメリオル。救世主って呼ばれてるわ」

「おおあんたが救世主さんか！ オレはヒータ！ よろしく頼むぜ
！！」

ヒータは男勝りな口調に元気な笑みを浮かべて右手を差し出し、メリオルもよろしくと握手に応じる。それからチラリと窓際で静かに読書をしている少女を見た。

「サイレント・マジシャン？」

「ああレンか？ あいつはエリアより静かだからなあ……そつとしてあげた方がいいんじゃないか？」

「……いえ、挨拶くらいしてくるわ」

メリオルの言葉にヒータが気づいたようにそう言うとメリオルはふふっと笑ってそう言うと言とレンと呼ばれたサイレント・マジシャンの方に歩いていき、彼女の肩をトントンと叩いて彼女が振り向くと口を開く。

「初めまして」

「あ、どうも……初めまして、救世主さん……」

「メリオルでいいわよ。えーっと、レンよね？」

メリオルの言葉にレンはぺこりと頭を下げてぼそぼそとした声で言い、それを聞いたメリオルはくすっと笑ってそう言った後確認するように続け、それを聞いたレンは小さく頷く。するとドアが開いてヴァルツが入ってきた。

「全員席につけ、メリオルはネラの隣だ」

そして教卓の前に移動しながらそう言い、それを聞いたクラスのメンバーはささっと席に座る。するとタタタと足音が廊下から聞こえ始め、ドアが開く。

「遅れました」

それと共に静かにそういう少年の声が聞こえてメリオルは振り向く、

そこにいたのは闇霊使いダルクに光霊使いライナの姿。

「珍しいな」

「私が寝坊をしてしまって、ダルクが辛抱強く起こしてくださって
たんです」

「変な言い方をするな。僕はただ夜更かしさせてしまったから置いていく事に気が引けただけだ」

ヴァルツの言葉にライナがにこにこ微笑みながら言うとダルクが返し、それを聞いたライナはふふっと笑って言う。

「宿題を教えたくらいでそこまで考えなくていいですし、やっぱりダルクはお優しいですね」

「う、うるさい！ ぼ、僕はお前みたいな能天気なタイプはきらい…
…もういい！」

ライナの言葉にダルクは頬を赤く染めながら叫びを上げるがふいつと顔を背けると自分の席につき、ライナもその隣に座る。それを見たヴァルツは慣れたように目を逸らすと改めるように言った。

「今日からしばらくだがネラが人間界から連れてきた救世主、メリオルも共に魔術を学ぶことになった。そのため今日の授業は基礎知識の復習を行ってから訓練を行う方式で行く。いいな？」

『はい！』

ヴァルツの言葉にヒータやウィン、アウスにライナ、ネラが元気に

声を上げて答え、エリアも手をひらひらと振って肯定の意思を示し、ダルクも頬杖をついてはいるが小さく頷き、レンも静かに頷く。それを見回してからヴァルツはメリオルに尋ねた。

「そういえばメリオル、さっき渡された扇子は持ってきているな？」

「ええ」

ヴァルツの言葉にメリオルは頷いて二本の鉄扇を見せ、それを見たヴァルツはよしと頷く。

「とりあえずそれを杖代わりの魔術の媒介にしよう。じゃあ基礎知識の復習を行う、全員テキストを開け。ネラ」

「はいはい、はいメリオル」

「え？ ネラのは？」

ヴァルツの言葉にネラは頷くとテキストをメリオルに渡し、それにメリオルが尋ねるとネラはあっさりと言った。

「だって私もうその部分完全暗記してるもん。応用もばっちり」

「そ、そう……」

ブラック・マジシャンの弟子の異名は伊達ではないとばかりにさらりとそう言っただけ、メリオルは引きつった笑みを浮かべながらテキストを読む。

それから授業がスタートし魔術の種類やその種別による違い、詠唱についてを無駄なくすらすらとヴァルツは説明、メリオルが分から

ないところはネラがすぐさま補足をしていった。そして授業終了のチャイムが鳴るとヴァルツはテキストを閉じる。

「それじゃあ次の時間は魔術訓練を行うからグラウンドに集合してくれ。遅れるなよ」

ヴァルツはそう言うと教室を出て行き、メリオルはテキストをネラに返すと軽く伸びをする。

「分かった？」

「まあなんとかね。ヴァルツさん教えるの上手だしネラも流石」

「えへへ、ありがとう。そんじゃグラウンド行こっか。それ忘れちゃ駄目だよ」

「ええ。ネラも杖を忘れないようにね」

メリオルとネラはそう話し合いながら席を立ち、ヒータやウィン達とおしゃべりをしつつグラウンドに向かう。彼女らがグラウンドに着いた時には既にヴァルツはやってきており、彼女らが並ぶと口を開く。

「それじゃ訓練を始めるぞ。まずは……実際に魔術を使い方をメリオルに見てもらおうか。アウス、少し魔術を使ってくれ」

「はい！」

ヴァルツの言葉にアウスは真面目そうな返事をする。杖を構える。その横にはデーモン・ビーバーが浮遊していた。彼女の周りに大地

の魔力が集まっていき、アウスが杖を突き出すとそこに石つぶてが弾丸のように飛んで地面に着弾した。

「ここの魔力を集中し、放つのが基本だな」

「なるほどね。ここの？」

ヴァルツの言葉にメリオルは頷くと扇子を広げて目を閉じ、ヒュンと風を切るように扇子を振るう。それと同時に扇子から風の刃が飛び、グラウンドの地面に抉ったような深い切り傷を作る。

「なっ……」

それを見たヴァルツ他メンバーは絶句し、メリオルはえつと驚いたような表情を見せる。それからヴァルツはふむと頷いて呟いた。

「ど、どうやらメリオルは風魔術に長けているらしいな……それにしても初めてでこれとは……」

「す、凄いの？」

ヴァルツの言葉にメリオルは苦笑を見せながらそう言い、ヴァルツは静かに頷く。するとヴァルツは突然顔を上げ、杖を握り締めた。

「お前達、絶対に学校から出るんじゃないぞ」

「え？ どつたの師匠？……あ」

ヴァルツはそう言ったと思ったらグラウンドから走り出ていき、その後姿にネラが話しかけるがヴァルツは無視して走っていく。それ

にネラは首を傾げた直後ようやくという風に気がついた。

「入り口の方から魔力を感じる、これって」

「多分、他の種族が襲ってきたんだと思います……」

ネラの言葉に続いてレンが言い、それを聞いたヒータはふうんと悪い笑みを浮かべる。

「何をする気？」

「とーぜん！ ついてってみようぜ！ ヴァルツ先生の魔術戦なんて滅多に見られないぜ！」

「え！？ でも先生はここから出るなって……」

「こっそりついてきや大丈夫だって！ 行こうぜウイン、ライナ！」

気づいたエリアがため息混じりに呟くとヒータはにっこり元気な笑みを浮かべながら言い、それにアウスが止めようと言うがヒータはもう止まらず、ウインとライナの手を握ると走っていく。彼女の杖はきつね火が器用に銜えて後を追っていた。

「……………どうする？」

「……………行くしかないですよ、心配です」

「そつだな……………僕達が見ていないところで怪我でもされたら後味が悪い」

額に手をやってため息をつきながらエリアが尋ねるように呟くとアウスがそう返し、ダルクもそう続けるとレンも静かに頷く。そしてエリアを先頭に彼女らもグラウンドを出て行った。

「はあぁっ！」

一方都市の入り口付近、この場は既に戦場と化しており、ヴァルツの杖から放たれた黒き魔法の光が敵である悪魔族を数体一気に撃ち砕き、ヴァルツはふうと息を吐く。その背後を取ったニユートが一気に殴りかかるがヴァルツはそれを察知すると振り向いて杖で拳を受け止め、押し返すと杖で薙ぐように殴った後至近距離から黒魔法を浴びせてニユートを破壊した。

その近くの建物の屋上からヒータはひよこつと顔を出して戦場を覗き込む。

「おお〜さっすが先生見事なお手前だよ」

「ねえ、大丈夫なのかなあ？ 怒られたりしない？」

「ばれなきや大丈夫だって」

「……な訳ないだろう」

ヒータが感嘆の声を上げてそう言う後ろでウィンが首を傾げながらそう聞くがヒータは手を振ってそう言う。とそれに返す声があり、ヒータはへつと呟くとゆっくり振り向く。彼女の視線の先ではエリアが腕を組んで仁王立ちをしていた。

「あ、い、いい子ちゃんのエリアやアウスが抜け出すなんて珍しい

「じゃんあつははは……」

ヒータは苦笑を浮かべながらそう言うがその頭上にエリアの杖が振り下ろされ、それを受けたヒータは声なく悲鳴を上げてうずくまる。それを見下ろしながらエリアは言った。

「さ、見つからない内に帰ろう。先生はもちろん悪魔族に見つかったら色々厄介よ」

「ケケケケケ！」

エリアがそう言う背後でそんな笑い声が聞こえ、エリアははっと振り返る。そこにはクリッターがおり、エリアはしまったと呟くと鉄砲水を生み出して攻撃、さらにギゴバイトが飛び出して何度も殴って止めをさす。しかし既に遅くウィップテイル・ガーゴイルやガーゴイル・パワードのような飛行能力を持つモンスターに見つかってしまった。

「やばっ！？ ダルク、闇使いなんだし何とかできない！？」

「無茶を言うな！ いくらなんでも相手の力が上過ぎる……」

ヒータの言葉にダルクがそう叫び返し、それと同時に悪魔族が襲い掛かってきた。

「ブラック・バーニング！」

「逃げましょう！」

その瞬間ネラが黒魔道の炎で攻撃し、それを合図にアウスが声を上げると全員一斉に建物から飛び降りる。そしてもうどうこう言っ

られないのかヴァルツの近くに走っていった。

「お前達！？……ヒータは後で説教！ 残りはまた後だ！ それと俺から離れるんじゃないぞ！」

ヴァルツは一瞬呆れた表情を見せた後主犯を見抜いたのかそう言い、それからそう続けると悪魔達目掛けて魔法を放つ。ネラはその背後と皆を守るようにヴァルツとは逆方向を向いて魔法を放ち始めた、もちろんヒータやエリア達も各々の属性の魔術を放って攻撃している。

しかし流石にまだまだ未熟か攻撃の合間をぬってデスクリバー・ナイトが突撃、右手に握った剣をこっち目掛けて振り回してきた。

「きゃっ！？」

運悪くその攻撃の対象となったレンは咄嗟に後ろに飛んでその攻撃をかわしたがその瞬間レンは孤立、しかもそこに狙いを定めたようにツインヘッド・ケルベロスがレン目掛けて突進、その双頭が牙を剥いた。

「きゃあぁっ！ー！」

杖を前に守るように構えるが噛み砕かれるがオチだろう。するとレンの前に誰かが立ちはだかり、拳を構えるとワンツールのパンチでツインヘッド・ケルベロスを殴り飛ばす。

「え？……」

「大丈夫ですか？」

きよとんとしているレンにそう尋ねたのは柔和な微笑みを浮かべている少年　アルフ。その微笑みに思わずレンは見惚れてしまうが我に返るとこくこくと頷いて言った。

「あ、は、はい。ありがとうございます……」

「よかった。君みたいに可愛い子が怪我しちゃったら大変だもんね」レンの言葉にアルフは安心したようにまた笑ってそう言い、レンを連れてメリオル達の元に行く。そしてレンをメリオルに引き渡すと言った。

「レオさんやライ、エルファイも到着したみたいだから。姉さんはブラック・マジシャン・ガールと一緒にここを守って」

「はいはい。ちなみに彼女の本名はネラって言うんだって」

「あ、そうなんだ。すいません、ネラさん」

「あ、いやいや別に気にしなくていいよ名乗らなかつたこつちが悪いんだし……」

アルフの言葉にメリオルが笑みを零しながら言うつとアルフはぺこりと頭を下げながらネラに言い、それにネラは慌てたようにそう返す。彼女の頬は少しばかり赤く染まっていた。しかしアルフはそれに気づかずにまたにこつと笑いながら口を開く。

「じゃあ僕はあいつらを追っ払ってきますね。あなた方に被害が出ないよう頑張りますから」

そう言い終えると共にアルフは地面を蹴ってタタタと走り去っていく。そこに残ったメンバーはヴァルツとダルク、メリオルを除いて皆顔を赤く染めていたがお互い顔を見合わせて苦笑していたヴァルツとメリオルを除くと誰も気づいていなかった。

そしてレオや彼らの護衛としてついでにきたメンバーが参戦した事もあってかここでの戦いも一旦終結、レオ達はエンディミオンのところへと連れてこられた。そして五人を眺め回すとエンディミオンが口を開く。

「君達が救世主に選ばれた者達か」

「ああ。俺はレオ、あとこっちからライにアルフ、エルフィンな」

エンディミオンの言葉にレオは物怖じせず自身の名と他のメンバーの名を言い、エンディミオンはくっくくと笑う。

「本当、怖いもの知らずになるわけだな……。よろしく頼む、君達にはこの城に滞在してもらつことになるから客室を個室一部屋ずつ与えよう。何か不自由な点があったら遠慮なく申し出てください」

「それはどうも。ああそれと不自由つつか必要なものなんですけど剣なんてもらえないでしょうか？ 出来れば片刃の刀みたいなのなら嬉しいんですが」

「そういえばレオもライも木刀どうしたの？ ライに至っては真剣なんて持ってるし」

エンディミオンの言葉にレオがそう尋ねるとメリオルが気づいたようにそう言い、レオは少し笑うと言った。

「いやあ地獄の使いの攻撃をかわして崖から落ちそうになったから崖に突き立てて、ドラゴン族封印の壺を突き割って最後にスカル・デーモンを殴り倒したら折れた」

「俺も紫炎さんを守って折れちゃって、これは紫炎さんに貰ったんだ」

メリオルの問いにレオはさらっとそう言っただけ、ライも苦笑を交えて言う。するとエンディミオンも少しくくつと笑うと言った。

「分かった。片刃の刀だな、用意させよう。他にはないか？」

「どうせカードはないでしょ？ 気づいたら言う方向で」

「分かった。ではヴァルツ、彼らを部屋に案内してやってくれ」

エンディミオンの言葉にレオはそう言い、エンディミオンは頷くとヴァルツに指示し、ヴァルツは頷くとネラと共に彼らを連れて退室する。

それから部屋に案内されたレオ達はその内装にメリオルと同じような反応を見せたり魔法を学んでおくという事に決まってレオやライがめんどくさいというような声を上げるのはまた別のお話。

第二部第五話 全員集合、魔法都市エンディミオン（後書き）

いやあ考えてはいたものの色々あって書きそびれててようやく書けました。まあ長い割りにグダグダ感が否めませんがね、一応ここ魔法都市エンディミオンが主な拠点になるんだからそこに登場するメンバーを思いつく限り出しましたけど、霊使いや思いつきで出したサイレント・マジシャン。

あ、そうそう質問なんですけど霊使いで唯一ダルクは男子で、またサイレント・マジシャンは女の子だって話をどこかで聞いたような気がするんですが……本当なんでしょうか？両方とも実物カードを持つてないからイラストでの判別が出来なくて……少し前まで使ってたカードの画像が閲覧できるサイトいつの間になくなってしまいました……情けないです。違ったら違ったらで修正入れないといけませんし。

ちなみに正直アルフ登場の部分は半分ほど悪ノリで書きました。確かに元々の設定に天然タラシは入ってますけどここまでやってしまふとは……やれやれです。笑顔で落とす、スマイリイ・デスの称号でも与えてしましましょうかね某物語風テイルズに。実力は足元にも及ばないでしょうけど異性に惚れられてハーレム状態になるって点だけならレーネスさんとこの主人公セツにも負けない自信がありますよ？（待て）。まあセツが自覚あるのに対してアルフは自覚抜きで素でたらしをやつてのけて気づかないだけ性質悪いですけど。

さてこの先どうしようか？次回は休題の外伝的な奴でも入れるかな、レオ達主要メンバー同士のデュエルとかアルフに惚れちゃったメンバーのアルフ争奪戦とか（後者待て）。ま、長々と失礼しました。それでは。

第二部第六話 戦いの始まり

レオ達がデュエルモンスターズワールドに来てその一つ、魔法都市エンディミオンを拠点に暮らし始めてからもう一週間が経とうと
していた。

ここはエンディミオンから少し離れた平原、ここで戦いが起きていた。

「はあっ！」

魔法使い族と悪魔族の戦い、その中で刀を片手に果敢にレオは敵中に斬り込んでおり、その振るう刀は一太刀でクリッターやスカル・ナイトを斬り倒し、さらにレオはぶつぶつと何かを詠唱すると刀に力を込める。それと共に刀身に電撃が走った。

それを確認したレオはふつと笑みを浮かべて刀を構えなおして一斉に襲い来る悪魔族の集団目掛けて鋭く振るう。それと共に刀から雷の衝撃波が走って一瞬で敵の集団を吹き飛ばした。

「雷刃斬ってな！」

レオはふつと息を吐きながらそう言う、その背後をさっきの攻撃に耐え切ったらしいスナイプ・ストーカーがレオ向けて銃を構えるが、そいつが銃を撃つより早く風の刃がそいつを切り裂いた。

「レオ、まだ残ってたわよ」

「気づいてたよ。そっちが片付けてくれると思ってた」

風の刃を放った主　メリオルの言葉にレオは刀を肩に担ぎながら

そう言い、メリオルははいはいと言つ。
一方そこから少し離れているところではライとアルフ、エルフィが共に戦っていた。

「はっ、やあっ！」

右手の刀を振り下ろしてクリッターを斬り倒し、さらに襲い掛かってくるガーゴイルを左手の刀で一突きにする。

「次！」

二刀を構えなおしながらライがそう叫ぶと急にライの上が暗くなり、上を見上げたライは素早くその場を飛び退く。その直後さっきまでライが立っていたところに巨大な鉄球が落とされた。

「外したか」

『うおおおおお！！！！』

その鉄球を振り下ろしたのは魔轟神ガルバス、しかもその援護がゴブリンエリート部隊までやってきた。

「あーもう！ アルフ！」

「はいはい」

ゴブリンエリート部隊の方を見たライがその声を上げるとアルフは苦笑を浮かべて返し、両手を地面につける。するとアルフの両手から何かが地面を伝わってゴブリンエリート部隊に向かっていき、そう思ったなら突然ゴブリンエリート部隊の足が凍りついた。

「な、なにいい!?!」

「氷の力、攻めには弱いけど防御は自信あるんだ」

ゴブリンエリート部隊の一体が声を上げるとアルフはそう言う。すると彼のデュエルディスクにブラック・マジシャン・ガールのカードが表示された。

「よし、アルフ! 後は私に任せといて」

「無理は駄目ですよ? 相手はたくさんいるんだし」

「大丈夫大丈夫、私は魔法使いだよ? いくよー、ブラック・バ
ーニング!」

『ギヤアアアアアア!!!』

ブラック・マジシャン・ガールことネラの言葉にアルフが心配そうに言うとネラは笑ってそう言う。杖に魔力を集中し、一気に闇の炎でゴブリンエリート部隊を一掃する。そしてネラはくると杖を回転させると言った。

「ま、ざっとこんなもんよ」

「流石ですね。頼りになります」

ネラの言葉にアルフがにこっと微笑みながらそう言う。途端にネラの顔は真っ赤に染まり彼女はぶんぶんとう首を横に振る。

「い、いやいやいやそんな恐縮って言うかひゃわっ!?!」

赤い顔でネラが叫んでいると突然アルフが彼女を押し倒すように飛びつき、ネラは驚いたように悲鳴みたいな声を上げる。がアルフは彼女を押し倒した後すぐさま側転のように飛んで体勢を立て直す。そこには三人のゴブリンエリート部隊が立っていた。

「げっ、しとめ損ねてた……」

「残念だったな、もう氷は通じないぞ」

「ライもエルフィもガルバスを相手にしてるし……」

ネラがしまったというように呟くとゴブリンエリート部隊残党の一体が言い、アルフはガルバスと戦っているライとエルフィの方を見るとそう呟いて拳を構える。するとそこに白い光線が走った。

「ぐはっ!?!」

「隙あり!」

光線を受けた一体が体勢を崩したところにアルフは飛び後ろ回し蹴りでそいつを蹴り飛ばし、剣を振り下ろしてきたもう一体の腕にもう一発回し蹴りを叩き込んで剣を落とさせ兜を砕く勢いの拳を叩き込んで実際兜を破壊しそいつをも倒す。その背後を取っていた残る一体はネラの魔術をくらって吹き飛んだ。

「よし!」

「大丈夫でしたか?」

腕をクロスするようなポーズを決めてアルフがよしと言つとその背後からそんな声が聞こえ、振り向いたアルフの前にいたのはサイレント・マジシャンことレンだった。

「ああレンさん、さっきの魔術はあなただったんですか。ありがとうございます、助かりました」

「あ、いえ、そんな……」

アルフの言葉にレンは頬を淡い赤色に染めながらうつむいて返し、アルフは不思議そうに首を傾げる。

「ぬんっ！」

「さて、そろそろ終わらせるか」

一方その頃ライとエルフィ、二人はガルバスの振り下ろした鉄球をそれぞれ左右に動いてかわしながらライがそう呟き、エルフィもこくと頷く。その次の瞬間ライは右の刀を振り上げ、エルフィはレイピアを構える。

「やつ！ はっ、でりゃあっ！！」

「はああっ！！」

ライは右の刀を振り下ろした後に左の刀を振り下ろして斬り、その間に逆手に持ち替えた右の刀を振り上げながらジャンプして斬り上げる。そしてライが右の刀を振り下ろしたのと同時にエルフィも素早い連続突きでガルバスを次々と貫いていった。

「ぐはっ……」

ガルバスはたまらずに倒れ、ライとエルフィはそれぞれの武器をしまうとパチンとハイタッチをする。

それから周りを見ると辺りにもう敵はいない、レオ達は一旦街へと帰っていった都市を統べる王 エンディミオンの元に向かった。

「終わったか」

「はい」

エンディミオンの言葉にレオはこくと頷いて返し、エンディミオンはふうと息を吐く。

「ここをお前達の拠点としてからひつきりなしに敵が攻めてくる。

おかげで本来札使用したるお前達まで武器を手に前線に出なければならぬほどだ……」

「別に、俺達はこのこれで鍛錬になるし。部活の剣道よりずっと緊張感がある……殴り蹴りを交えるのに慣れちまうってのはいただけないけど」

エンディミオンの言葉にレオはおどけたようにそっくり、エンディミオンはそれならいいがなと呟く。するとそこに左肩を押さえながら忍者マスター SASUKE が入ってきた。

「サスケさん！ どうしたんですか？」

「敵襲にござる、数は五……ぐっ」

SASUKE は言い終えると膝をつく。よく見ると押さえていた肩

には血がにじんでおり、それを見たライは慌ててカードを探すがエルフィがライにどいてと言ってどかせ、ご隠居の猛毒薬を具現するとSASUKEの肩に塗った。

「かたじけない……」

「いいのよ。それよりまた敵襲だって言うし」

「しかも五つて……確かサスケさん以外にもヴァルキリアやサイコ・シヨツカーが見回りに行つてたよな？」

SASUKEが呟くように言うとエルフィはふつと微笑みながら言い、それから皆の方を振り向いて続ける。それにレオが息を吐いて言った後はつとした表情で呟くとエルフィとアルフの表情が変わった。

「ヴァルキリア！」

「サイコ・シヨツカーさん！」

そしてそう叫んだと思うと二人は部屋を出て行き、レオとメリオルはそれを見てしょうがないと呟くとエンディミオンに言った。

「とにかく俺達も行きます！ ライ！」

「ブレイカーとディフェンダーはサスケさんを救護室に！」

レオの言葉にライはサスケの方を見ながら曖昧に頷くがメリオルが続けてそう指示すると魔道剣士と騎士はこくと頷いてSASUKEに肩を貸し、それを見てライはようやくきちんと頷いて三人は部屋を走り出て行く。そして再度街を出るとそこには白に似た銀髪を後ろに結った青年がにこやかな笑顔を浮かべて立っていた。

「やあ救世主の皆様方、初めまして」

「なにもんだてめえ？ アルフとエルフィはどうした？」

「ん？ ああ水色髪の男の子に蒼髪の女の子？ それなら天使と人造人間を甚振ってるって教えたら飛んでったよ。でもどこだったっけなあ？」

青年がにこにここと微笑みながら言うのに対しレオは刀を抜きながらそう尋ね、それに青年は笑いながらさらっとそう言うてのける。それにレオは少し表情をきつくしながら続けた。

「お前何者だ！？」

「僕かい？ 僕は……ソーマとでも呼んで」

レオの怒号にも似た言葉に青年 ソーマはのらりくらりとした声で答え、レオはちつと舌打ちを叩く。

「まあまあ落ち着いて……それより悪いけど君達は倒すよう命令を受けてるんだ。まあ今回の僕の役目はこれのテストだけだね」

ソーマはへらへらと笑いながらそう言うってパチンと指を鳴らし、そう思ったらソーマの背後から二人の鎧をつけた人間が歩いてくる。いや、人間というよりむしろ人形。

「なんだ？」

「人形兵士って言えばいいかな？ もちろんデュエルディスク装備、

デュエリストレベルもそれなりに設定してるよ。今回はそうだね、折角二人いるんだしタッグデュエルなんてどうだい？」

「……面白い」

レオの言葉にソーマが相変わらず笑みを浮かべながらそう言う。レオは鼻で笑うようにそう言ってデュエルディスクを起動、その横にメリオルも立ってデュエルディスクを起動した。

「へえ、バトルシティタイプにアカデミアタイプか」

「こいつが使い慣れてるんでな、外見的にも気にいっているというのもあるが……てめえこそ珍しいな、ドーマタイプか？」

「まあね。苦労したよ」

レオはそう言いながらディスクからデッキを一旦のけて除外されていたモンスターカードを加えて改めてシャッフルし、挿し直す。それからソーマが思い出したように口を開いた。

「あ、そーそー言い忘れてた。今回のタッグデュエルだけどルールはライフポイントは一チーム4000、これは共通と考えるから気をつけてね。んでドローは一チームのうち一人でドローした人がその自分のターンと相手ターン終了時までプレイ権利を得る。そしてモンスター、魔法、罫ゾーンは共有。パートナーの墓地も効果対象に出来るよ」

「ようは一つのフィールドを二人で共有して使えってこつたる？」

「そゆ事。だから後攻チームは後攻一ターン目から攻撃できるから

ね

ソーマの説明を聞いたレオが簡単にそう言つとソーマはそうそうと頷いて補足をし、それを聞いてから二体の人形兵とレオ、メリオルは向かい合った。

「……デュエル……！」

そしてその声が響き、それと同時に人形兵Aがカードをドローした。

「俺から行く、ドロー。俺は「ミイラの呼び声」を発動し手札から「闇より出でし絶望」を特殊召喚。さらにモンスターを守備表示で召喚しカードを一枚伏せてターンエンド」

「俺のターンだ、ドロー！ 俺は「未来融合 フューチャー・フュージョン」を発動！ デッキから五体のドラゴンを墓地に送ってエクストラデッキの「F・G・D」ファイブ・ゴッド・ドラゴンを選択、二回目のスタンバイフェイズ時にこのモンスターを融合召喚扱いで特殊召喚する。さらに俺は「仮面竜」を召喚し、仮面竜を除外して「レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン」を特殊召喚！！」

いきなり魔法カードを発動したと思つたらデッキから五体のドラゴンを墓地に送り、さらに仮面のような顔をした竜を召喚した瞬間それは闇に包まれ、鉄の身体をした闇の竜がレオの場に姿を現した。

「まだ終わらないぜ、ダークネスメタルドラゴンの効果で墓地から「青眼の白龍」を特殊召喚！ カードを二枚セットしてターンエンドだ」

（攻撃はしないか……まあしてきたとしてもミラーフォースで返り

討ちだが)

機械の閻竜の横に白き龍が姿を現す。そしてカードを二枚セットするとレオはターンを終了した。それに人形兵Aが声に出さず考えている間に人形兵Bがターンを進める。

「俺のターン、ドロ……俺は「魔轟神レイヴン」を召喚しレイヴンの効果で手札を二枚捨てる。またこの二枚は「暗黒界の尖兵 ベージ」と「暗黒界の武神 ゴルド」、よって効果によって召喚され己の効果でレベルが二上がりレベル四となったレイヴンとレベル四のシルバをチューニング。現れる「魔轟神ヴァルキュルス」」

人形兵Bの場に三体の悪魔が現れたと思ったらその内二体の悪魔が闇に包まれ、その闇の中から黒い鎧を着けた悪魔が現れる。そして人形兵Bはさらに続けた。

「そして俺は手札の悪魔族モンスターを捨てることでヴァルキュルスの効果発動、デッキからカードを一枚ドロする」

「ヒュウ　速え速え」

人形兵Bのコンボにレオは思わず口笛を吹きながらそう言い、人形兵Bはさらに引いたカードを発動した。

「フィールド魔法「ダークゾーン」発動、このカード効果により全ての闇属性モンスターの攻撃力は500上昇、また守備力は400ダウンする」

その言葉と共に辺りが闇に包まれていき、その闇の力を受けるモンスターは攻撃力を上昇させていった。

闇より出でし絶望	攻撃力：2800	3300	守備力：3000
0	2600		
暗黒界の武神	ゴールド	攻撃力：2300	2800
400	1000		守備力：1
レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン		攻撃力：2800	3
300	守備力：2400	2000	

「……なるほど、双方闇属性メインだから上手い具合にパワーアップしてくれるって寸法か。見事な連携だ」

「感心してどうすんのよ!？」

一気に攻撃力が跳ね上がった敵メンバーを見ながらレオが感心してそう言うのとメリオルが突っ込み、人形兵Bは青眼の白龍を指差す。

「闇より出でし絶望で青眼の白龍を攻撃する」

「おっとそうはいかねえ、そっちの攻撃宣言の前にリバーズカード発動、「威嚇する咆哮」! このターン攻撃宣言は行わせない!」

「……ターン終了」

人形兵Bの言葉を遮る勢いでレオは伏せていたカードを発動し、攻撃が出来なくなった人形兵Bがターンを終えるとメリオルはカードをドローする。そしてふっと一つ笑った。

「一気に決めるわよ?」

「おう、任せる」

メリオルの合図にレオはそう返し、メリオルは手札のカードを発動した。

「私は「魔力儉約術」を発動し、さらに「黒魔術のカーテン」を発動！ コストのライフ半分は儉約術の効果で支払わなくて済み、デッキから「ブラック・マジシャン」を特殊召喚！ ダークゾーンの効果で攻撃力は500上昇し守備力は400減少する」

メリオルの場に黒いカーテンが姿を現し、それが翻ったと思うとカーテンの中から黒き魔術師が姿を現す。そして彼の魔力は闇のフィールド効果で上昇していった。

ブラック・マジシャン 攻撃力：2500 3000 守備力：2100 1700

「だが我らが闇には敵うまい」

「まあね。さらに手札から魔法カード「ブラック・マジック黒・魔・導」を発動！ あなた達の場の魔法・罫を全て破壊させてもらう！」

人形兵Bの言葉にメリオルは笑いながら返した後もう一枚のカードを発動、その言葉と共にブラック・マジシャンの杖に魔力が溜まり、放たれた黒い光が人形兵の場のカードを全て破壊する。闇のフィールドも消え去っていった。

闇より出でし絶望 攻撃力：3300 2800 守備力：2600
0 3000
暗黒界の武神 ゴルド 攻撃力：2800 2300 守備力：1000 1400

レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン	攻撃力：3300	2
800	守備力：2000	2400
ブラック・マジシャン	攻撃力：3000	2500
700	2100	守備力：1

「ふむ……だが」

「戦況はまだまだこつちが不利とでも言いたいんでしょう？でも違う、その魔法・罠が消え去ってくれば怖いものなんてないのよ。ね、レオ？」

「ああ」

人形兵Bの言葉にメリオルはチチチと指を振りながらそう言ってレオの方を見、レオは意味ありげにこくと頷く。そしてメリオルはレオの伏せた一枚リバーズカードを指差した。

「レオの伏せたりリバーズカードを発動！魔法カード「滅びの爆裂疾風弾」！！」

「なっ！？」

メリオルの宣言通り発動した魔法カードは滅びの爆裂疾風弾。そのカードイラストのように青眼の白龍は口の中にエネルギーを溜めて相手のモンスターフィールドにプレス攻撃を叩き込む。そのプレスが止んだ時人形兵のフィールドには何も残っていなかった。

「おお。まさかお互い一ターンで決着がつかなくてね」

後ろで観戦していたソーマはパチパチと拍手をしながらそう言い、メリオルは人形兵を指差した。

「ブラック・マジシャンでダイレクトアタック！ ブラックマジック！」

「「がああつ！！」「LP4000 1500

人形兵を黒き闇の魔法が襲い、ライフポイントを一気に削る。そしてそれから何も起きない事を確認するとメリオルは続けてもう一度指を指す。

「ゴーズはいないみたいね。じゃあ止めよ、レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンでダイレクトアタック！ ダークネス・メタル・フレア！！」

「「ぐあああああつ！！」「LP1500 0

闇の機械竜の吐いた炎のプレスが相手に止めを指し、人形兵は崩れ落ちる。それを見届けるとソーマはまだ笑いながらすたと彼らと距離は取っているものの少し歩き寄った。

「いやあ流石流石、聞いたとおりの腕だよ」

「あつけねえな。ご自慢の兵士がこの程度か？」

「いやいやこれは起動テストだって。デッキだって五分か十分程度でぱっぱと作ったのを渡したただけだもん」

「じゅっ……」

ソーマが笑いながら言うのにレオはそう尋ねるように威圧的な口調

で言うがソーマは笑いながらそう言い、それにメリオルが沈黙する。するとソーマは思い出したように言った。

「それより二人の間を探さなくていいの？ 言っとくけど彼らが向かっている先にいるのはこんなガラクタよりずっと強いよ？……そしてここでのデュエルに負けた者は……」

「ま、まさか……」

ソーマはふっふつと怪しげな笑みを浮かべながらそう言い、それにライがまさかと不吉なものを見たような顔を見せる。とソーマはふっつと笑って言った。

「いやいや死んだりはしないって、多分。でも凄い苦痛を感じるのは確かだし負ける、つまりライフがゼロになるぐらいにもなると体力にもよるけど最低気は失っちゃうね。そうだったら素手でくびり殺すのも造作じゃないよ」

「！ あいつらはどっちに向かった!？」

「さあ？ 最近物忘れが激しくって」

ソーマはににここと笑いながらそう言い、それを聞いたライが二刀を構えながら叫ぶとソーマはへらっと笑ってそう言いバックステップを踏む。それを見るのと同時に三人も武器を構えて突進しようとした。その時彼がパチンと指を鳴らす。

「……うわっ!？」

その時起きた突風が三人を押し、その間にソーマは逆にその風に乗

ったように宙に浮かんだ。

「せいぜい頑張って探すといいよ。それじゃいつか君達とも戦ってみたいし、また会える日を楽しみにしてるね。」

ソーマはばいばーいと手を振ると風に乗ったように空を飛んでいき、ライはくそつと声を上げる。そして三人はやはり個別行動は危険なためひとかたまりになってアルフ達を探しに走っていった。

その頃アルフとエルフィは都市エンディミオンからかなり離れたところを走っており、ついに二人は目的の相手を発見する。

「ヴァルキリア！」

「サイコ・シヨツカーさん！」

倒れているデュナミス・ヴァルキリアとサイコ・シヨツカーに二人は走り寄って抱き上げようとするがその背後には敵らしき女性と青年が立っており二人はその相手に向かい合う。すると茶色い髪を長く伸ばした女性が口を開いた。

「おや、そいつらが心配じゃないのかい？」

「……あなた達がやっただんですか？」

「ああ。正確に言うと僕がその天使を、こいつが人造人間だな」

女性の言葉にアルフがそう問うと金髪がつんつんとなっている眼鏡の青年が返す、それを聞いた瞬間二人は身構えてデュエルディスクを構えた。

「許さない!!」

そしてその言葉と同時にディスクが起動、女性と青年もめんどくさそうな表情を浮かべてディスクを起動した。

「んでどうする？ タッグデュエル？」

「馴れ合うのは嫌いだ」

女性の言葉に青年は眼鏡を直すような仕草を取りながら返し、女性
はだよねと言うとアルフに言う。

「あんたが人造人間の友達だろ？ あたしが相手してやるよ」

女性の言葉にアルフは望むところとばかりにディスクを構え、それを青年は横目で見た後エルフィを見る。

「となると僕の相手は君か。まあせいぜい楽しませてくれよな」

「油断していると足元すくわれるわよ、お兄さん」

青年の言葉にエルフィはそう言ってディスクを構える。

「デュエル!!」

「デュエル!!」

そして同じ場所で二つのデュエルが開始された。

第二部第六話 戦いの始まり（後書き）

やっと久々のデュエル、そして敵の登場です。ちなみにアルフとエルフィの相手の名前は考えておらずエルフィの相手に至っては使用デッキすら決定してません。まあ次はアルフのデュエルを書く予定なのでその間に考えますわ。使用デッキについて希望があつたらもしかしら通るかもしれませんよ？（おい）。ちなみにエルフィの相手は冷静沈着でクールがイメージです。

ついでに言うと相手は全員遊戯王アニメオリジナル、ドーマ編のドーマが使っていたデュエルディスク、レオとライはバトルシティ、まあ遊戯達が使っていたタイプ、メリオル、アルフ、エルフィはアカデミアデュエルディスクを使用しています。デュエル自体とはあんま関係ないですが裏設定的と想像する時的な？ま、それでは。

第二部第七話 機械VS女性部族

サイコ・シヨッカーとデュナミス・ヴァルキリアが襲われたという報告を受けたアルフとエルフィは街を飛び出すとその二人を探し出し、さらにそこに敵らしき二人の青年と女性を見つけ出す。

そしてアルフはその内の女性に向かい合うとデュエルディスクを起動、相手もデュエルディスクを起動するとデッキを差し込んだ。すると女性が声を出す。

「アタシはクメト！」

「僕はアルフです」

女性　クメトが名乗るとアルフも静かに自分の名を名乗り、クメトはくくつと笑うとデッキに指を置いた。

「アタシが先攻を取らせてもらおうよ、ドロー！　アタシは「アマゾネスの聖騎士」を攻撃表示で召喚しフィールド魔法「アマゾネスの里」を発動、アマゾネスの攻撃力は200ポイントアップする！　そして聖騎士はアマゾネスと名のつくモンスターの数だけ攻撃力が100ポイント上昇する！」

アマゾネスの聖騎士　攻撃力：1700　1800　2000

「そしてカードを一枚セットし、ターンエンド」

「僕のターン、ドロー……僕は「サイバー・ドラゴン」を召喚！

このカードは相手の場にもみモンスターが存在する時特殊召喚できる。一気に決める！　サイバー・ドラゴンでアマゾネスの聖騎士に

攻撃―！」

「おっとそうはいかないよ！ リバースカード発動「攻撃の無力化」！ サイバー・ドラゴンの攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了させる！」

「ちっ、カードを二枚セットしてターンエンド」

クメトがターンを終了するとアルフはすぐにカードをドロ―して白銀の機械竜を召喚。一気にサイバー・ドラゴンが聖騎士目掛けて口から光線を発射するがクメトはそれをあっさり封じ、アルフは舌打ちをするとカードをセットしてターンを終える。そしてクメトにターンが移った。

「アタシのターン。ふっ、永続魔法「強者の苦痛」を発動！ 相手の場のモンスターは全てそのレベル×100攻撃力がダウンする！」

「サイバー・ドラゴンのレベルは5、つまり500ポイントの攻撃力ダウン……」

サイバー・ドラゴン 攻撃力：2100 1600

「そういう事さ！ さらにアマゾネスの剣士を召喚、フィールド効果で攻撃力上昇！」

クメトの発動した魔法カードから発された光がサイバー・ドラゴンの力を弱体化させ、さらにクメトはたくましい女性剣士を召喚する。

アマゾネスの剣士 攻撃力：1500 1700

アマゾネスの聖騎士 攻撃力：2000 2100

「アマゾネスの剣士でサイバー・ドラゴンに攻撃！ アマゾネス・スラッシュュ！」

「くっ」LP4000 3900

「そしてアマゾネスの聖騎士のダイレクトアタック！ アマゾネス・セイント・スラッシュュ！」

「こっちは通すわけにはいかない！ リバーズカード発動「ドレイン・シールド」！」LP3900 6000

アマゾネスの剣士の斬撃を受けたサイバー・ドラゴンはショートしたように電気を身体中に流して爆発し、続けてアマゾネスの聖騎士は一気にアルフ目掛けて斬りかかるがそれは不思議な障壁に阻まれてしまい、聖騎士は弾き飛ばされつつも受け身を取る。

「ふうん、ターンエンドだ」

クメトはくくつと笑いながらターンエンドを宣言し、アルフはふうつと息を吐いて心の中で呟いた。

「（落ち着け、相手のモンスターは二体でこっちはゼロ、サイバーは一体やられた……これ以上犠牲を出すわけにはいかない……僕のターン！」

アルフは自分を落ち着けた後ターンを進め、引いたカードを見ると伏せていたリバーズカードを指差した。

「リバーズカードオープン「血の代償」！ 「イエロー・ガジエツ

ト」を召喚しその効果でデッキから「グリーン・ガジェット」を手札に加え血の代償の効果で通常召喚、効果で「レッド・ガジェット」を手札に加える。そして血の代償の効果でイエロー・ガジェットとグリーン・ガジェットをリリースし、「古代の機械巨竜」をアドバンス召喚！！」LP6000 5500 5000

「強者の苦痛の効果！ その巨竜のレベルは8、よって800ポイント攻撃力がダウンする！」

古代の機械巨竜 攻撃力：3000 2200

「古代の機械巨竜よ、その秘めたる力を二つの歯車の力によって解き放て！ イエローギア、グリーンギア、起動！！」

召喚された巨大な機械竜はクメトの場の魔法で攻撃力を下げられるがアルフはそれに返すように巨竜を見上げて叫び声を上げ、それと共にイエロー・ガジェットとグリーン・ガジェットが巨竜の首にある歯車をはめ込むような窪みに入ると回転を始める。それと共に巨竜の目が光り、咆哮を上げた。

「古代機械の巨竜はその召喚の時グリーン・ガジェットをリリースした時貫通効果を得、イエロー・ガジェットをリリースした時相手モンスターを破壊することに相手ライフに600のダメージを与える効果を得る。いくぞ、古代の機械巨竜でアマゾネスの聖騎士を攻撃！ アンティーク・タックル！！」

「ちいっ！ アマゾネスの里の効果によりアタシはデッキから聖騎士のレベル4以下のアマゾネス、「アマゾネスの吹き矢兵」を特殊召喚！」LP4000 3900

巨大な機械竜はその巨体を生かして聖騎士にタツクルをぶちかまし、聖騎士はまるでトラックに引かれたかのように吹っ飛ばされるとがくんと崩れ落ちる。すると彼女の意味をついだかのようにその場に女性の吹き矢兵が姿を現した。しかし巨竜はその隠された効果を起動する。

「イエローギア効果発動！ 相手モンスターを破壊した事により600のダメージを与える！」

「くっ」LP3900 3300

「リバースカードを一枚セットしてターンエンドだ」

アルフの掛け声と同時に巨竜は密かに装備されていたらしい銃火器でクメトを追撃し、それにクメトのライフが削られた事を確認するとカードをセットしてターンを終える。すると突然クメトが笑い出した。

「面白いねえ、さっきまで親の仇でも見るような目で睨みつけてたのに今じゃ落ち着いちゃって。さっきみたいな怒りの形相の方がお姉さん好きなんだけど」

「変な挑発には乗りません」

「つれないねえ。まあ女を傷つけた報いは受けさせるけどね、アタシのターン！」

クメトのわざとらしい言葉にアルフは目を瞑ってそう返し、それを聞いたクメトはやれやれというように首を振ってそう言った後にやっつと変な笑みを浮かべてそう言い、ターンを開始した。

「アタシはスタンバイフェイズにアマゾネスの吹き矢兵の効果を発動！ 古代機械の巨竜の攻撃力を500ポイント下げさせてもらおうよ」

クメトがそう言ったと思ったら吹き矢兵は巨竜に向けて吹き矢を吹き、変な毒でも仕込んでいたのか巨竜はその攻撃力を下げた。

古代機械の巨竜 攻撃力：2200 1700

「そして吹き矢兵をリリースして「アマゾネス女王」をアドバンス召喚！ 当然里の効果で攻撃力は上昇するよ！」

役目を終えた吹き矢兵は消えていき、そこに女王とばかりの風格と威厳を見せる女性が姿を現してアルフを睨みつける。

アマゾネス女王 攻撃力：2400 2600

「教えといてやるよ、女王が君臨している限りアタシの場のアマゾネスは戦闘では破壊されない。里の効果が使いづらくなっちゃうけどまあ仕方ないさね。さあいくよ？ アマゾネス女王で古代機械の巨竜に攻撃！」

「ぐあつ!?!」 LP5000 4100

アマゾネス女王はその手に持っていた大剣で豪快に巨竜を叩き斬り、その衝撃がアルフのライフを削る。その時クツとした痛みを感じ取った。

「そしてアマゾネスの剣士でダイレクトアタック！」

「ぐあああつ!?」LP4100 2400

続いたアマゾネスの剣士の一撃をアルフはなすすべもなく受ける
と彼の身体に痛みが走り、彼は思わずがくと膝をつく。とクメト
が笑みを浮かべながら言った。

「ああ、そついや言つてなかつたっけね? ここでのデュエルは受
けるダメージに応じて痛みが走る。さつきまで200とかそんな軽
い攻撃だったけどダイレクトにもなるときついだろ? こつからが
本番だよ? ターン終了」

「つつ……僕のターン……魔法カード「リロード」、僕の手札は二
枚、この二枚をデッキに戻してシャッフルし新たに二枚のカードを
引く。そしてモンスターをセットしてカードを一枚セットしターン
エンド」

クメトが笑いながらそう言つてターンエンドを宣言するとアルフは
カードをドロースし、魔法カードを発動すると手札をデッキに戻し
てシャッフルし新たな弾を装填する。そして手札から二枚のカード
を抜き取つて場にセットするとターン終了を宣言し、それを見ると
クメトはため息のような息を吐いた。

「なんだいネタ切れかい? 情けないねえ。んじゃまあ可哀想だし
この辺で終わりにしてやるよ」

クメトはそう言つてカードを引き、手札の一枚を取る。

「アマゾネスペット虎^{タイガー}」を召喚! 里の効果でパワーアップ!
さらにこのカードはアタシのフィールド上のアマゾネス一体につき

攻撃力を400上げる。当然この子自体もアマゾネスに入るためアマゾネスの数は三体、よって攻撃力は1200ポイントアップするよ」

アマゾネスペット虎 攻撃力：1100 1300 2500

「ついでに言うところの子が存在する限りあんたはこの子以外のアマゾネスに攻撃できない。この子はアマゾネスの護衛、主人は命を賭けて守るって事さ……アマゾネス女王で守備モンスターに攻撃！」

「リバーズカード「マジカルシルクハット」を発動！ デッキからモンスター以外のカードを二枚選びフィールド上のモンスターを一体選んでシャッフル、裏守備表示でセット。ダミーシルクハットはバトルフェイズ終了時に破壊される」

「チツ、しぶとい！ 全軍攻撃！！」

アルフの場に三つのシルクハットが姿を現し、それを見たクメトは舌打ちすると場のアマゾネス全員に攻撃を指示、アマゾネスの剣士の剣、女王の大剣、虎の牙がシルクハットを全て破り捨て、その内剣士の剣に手ごたえがあった。

「守備モンスターは「魔装機関車 デコイチ」、そのリバーズ効果によってカードを一枚ドロ。そしてダミーに使われた魔法カード「歯車街」二枚の効果により僕は墓地から「古代の機械巨竜」を、デッキから「古代の機械騎士」を特殊召喚！」

「ヒユウ 悪あがきかと思ったらコンボ召喚とは恐れ入ったよ、でも忘れちゃいけないかい？ 強者の苦痛の効果により攻撃力はダウンするよ。カードを二枚セットしてターンエンド」

古代の機械巨竜 攻撃力：3000 2200
古代の機械騎士 攻撃力：1800 1400

シルクハットの中にいたモンスターの効果でカードを一枚ドロし、さらにダミーに使われていた魔法の効果でアルフのフィールドに二体の古代の機械が姿を現す。それにクメトが口笛を吹いて言い、カードをセットしてターンを終了するとアルフはカードを引いた。

「僕のターン……騎士を守備表示に変更、サイクロンで強者の苦痛を破壊し、カードを一枚セットして巨竜で」

「おっと待った、攻撃宣言で効果が発動される前にリバースカード発動「威嚇する咆哮」、これでこのターン攻撃宣言は行えないよ」

古代の機械巨竜 攻撃力：2200 3000
古代の機械騎士 攻撃力：1400 1800

「くっ、ターン終了」

アルフは竜巻で今までこっちを苦しめていた魔法を破壊して巨竜での攻撃を行おうとするもののその前にクメトはリバースカードを発動し、攻撃を封じられたアルフはくっと思ってターンを終了した。

簡易状況説明

アルフ LP2400 手札一枚

フィールド 古代の機械巨竜攻撃表示、古代の機械騎士守備表示
血の代償発動中、伏せカード一枚

クメト LP3300 手札零枚

フィールド アマゾネス女王、アマゾネスの剣士、アマゾネスベ
ット虎全て攻撃表示 アマゾネスの里発動中、伏せカード一枚

「アタシのターンつと……ふうん、んじやお姉さんからのプレゼン
トだ、魔法カード「壺の中の魔術書」。互いのプレイヤーはデッキ
からカードを三枚ドローする」

「……！」

クメトの発動したカードの効果で手札を増強したアルフははっとし
た表情を一瞬見せ、クメトは手札を確認するとそれらを取る。

「アタシは「アマゾネスの賢者」を召喚しさらにリバーズカードオ
ーブン、「アマゾネスの意地」！ 墓地からアマゾネスを特殊召喚
する。もっともこのアマゾネスは表示形式が変更できず攻撃可能状
態ならず攻撃しないといけないけどね。アタシが特殊召喚するの
は「アマゾネスの聖騎士」！」

クメトの場に杖を持ったアマゾネスが姿を現し、さらに伏せていた
カードの効果で傷だらけの状態の聖騎士が姿を現す。これで相手の
場に五体のアマゾネスが出てきた事になる。

「里の効果で全員攻撃力が上昇し、さらに聖騎士と虎は自身の効果
により攻撃力が上昇する」

アマゾネスの賢者	攻撃力：1400	1600	
アマゾネスの聖騎士	攻撃力：1700	1900	2400
アマゾネスベット虎	攻撃力：2500	3300	

「いくよ？ アマゾネスの聖騎士で古代の機械騎士を攻撃！」

「リバーズカードオープン「攻撃の無力化」！」

「チツ、カードを二枚セットしてターンエンドだ」

クメトの攻撃宣言にアルフは瞬時に反応して障壁で守り、クメトは残った手札二枚を伏せるとターンを終える。

「僕のターン、僕は「サイバー・ドラゴン・ツヴァイ」を召喚し効果発動、手札の魔法カード、「パワー・ボンド」を相手に見せてこのカードの名前をサイバー・ドラゴンとして扱う。そして魔法カード「パワー・ボンド」！！ フィールドのツヴァイと手札のサイバー・ドラゴンを融合し「サイバー・ツイン・ドラゴン」を召喚！
パワー・ボンドの効果で攻撃力は倍になる！」

サイバー・ツイン・ドラゴン 攻撃力：2800 5600

「へえ、こりゃやばいね」

「全てを破壊しつくせ！ サイバー・ツイン・ドラゴンの攻撃！！」

「おっと、攻撃宣言の瞬間リバーズカード発動「アマゾネスの弩弓隊」！ 相手のモンスターは全て攻撃表示に変更され攻撃力は500ダウンする！」

アルフの攻撃指示と同時にクメトはリバーズカードを発動し、その瞬間翻ったカードから放たれた矢がアルフの場のモンスター全てを襲う。

サイバー・ツイン・ドラゴン 攻撃力：5600 5100
古代の機械巨竜 攻撃力：3000 2500
古代の機械騎士 攻撃力：1800 1300

「だが攻撃力はまだこつちが上だ！」

「これで終わったと思ったたら大間違いさ！ もう一枚のリバースカード発動！ 「銀幕の鏡壁」^{ミラーウォール}！！ 相手の攻撃モンスター全ての攻撃力は半減する！」

アマゾネス達を守るように現れた鏡の壁にサイバー・ツインは攻撃してしまい、反射された光線をアルフの場のモンスターはくらってしまつて攻撃力が半減した。

「なっ!?!」

サイバー・ツイン・ドラゴン 攻撃力5100 2550
古代の機械巨竜 攻撃力2500 1250
古代の機械騎士 攻撃力1300 650

「これでアタシのタイガーの攻撃力が上回つたね？ 噛み千切つちまいな!?!」

「うわあああああつ!?!」 LP2400 1650

サイバー・ツイン・ドラゴンにアマゾネスの虎は飛び掛り、牙を剥いてその機械の身体を噛み千切る。その破片を受けてアルフはダメージをくらってしまった。

「(やばい、ここは守備で耐えるしか…)…えっ!?!」

アルフはモンスターを守備表示にしようとするがアルフの場のモンスター達は勝手に攻撃行動に移っており、アルフが驚いたような声を上げるとクメトは高笑いをしながら言った。

「アマゾネスの弩弓隊にはもう一個効果があるのさ！ このカードの効果を受けたモンスターは全て攻撃しなければならない。もちろん攻撃力は半減してるよ？ 全部噛み砕け！！」

クメトの指示と共にタイガーは突進してくる巨竜に飛び掛ってその身体を噛み砕き、さらに向かってくる騎士を爪で破壊する。その飛び散った破片がまるで弾丸のようにアルフの方に飛んでいった。

「うわああああっ！！！！」LP16500

その破片を身に受けたアルフの身体中に急激な痛みが襲い、それに耐え切れずにアルフはぐらっと揺れる。

「あなたのパワーデッキは流石だよ、だが攻撃力がばかり高くって何にもなりやしない。アタシの攻撃力が低いアマゾネス達にいいようにやられてばっかじゃないか！！！！」

薄れゆく意識の中クメトの高笑いしなからのそんな言葉が聞こえ、それを聞きながらアルフの意識は消え去った。

第二部第七話 機械VS女性部族（後書き）

よっし書きあがった。アルフの相手ことクメトのデッキはアマゾネス、これはもう決めてました。ほらライが初めてデュエルモンスターズワールドに来た時戦士族の国でアマゾネスの里がやられたという知らせがあつたでしょ？あれはこれの伏線です！（分かるかい）。まあ訳の分からん伏線ですけどね、伏線と言えるか自体既に分らないという。

えーつと時間が無いんで今回はこの辺で、時間が空いたら追記しますから。あ、まだエルフィの相手のデッキは決定してませんので。それでは。

第二部第八話 天使VS不死者

アルフがクメトとデュエルを始めたのと同じ頃にエルフィも金髪がツンツンと立っている眼鏡の青年を相手にデュエルディスクを構えていた。するとふと思ったように青年が口を開く。

「まあ、最低限の礼儀に名乗るぐらいはするか。僕はアレウス」

「私はエルフィ」

青年　アレウスが名乗るとエルフィも自分の名を名乗り、それから二人はデュエルディスクを構えて向かい合う。

「デュエル!!!」

そして二人は声を合わせて叫び、それからアレウスが続けるように言う。

「僕から行かせてもらう、ドロー」

アレウスはそう言ってカードをドローし、手札を眺め回すとその内の何枚かを取った。

「僕は「ミイラの呼び声」を発動しその効果で「闇より出でし絶望」を特殊召喚。さらにモンスターを一体守備表示でセットしてカードを伏せターンを終了する」

「アンデット……私のターン、ドロー！」

アレウスの場にいきなり巨大な影というようなモンスターが姿を現し、その横に一枚のモンスターカードが伏せられる。それから彼のターンエンド宣言を聞くとエルフィはぼそりと呟いてカードを引いた。

「私は「神の居城 ヴアルハラ」を発動しその効果で手札から「The splendid VENUS」を特殊召喚しさらに「ジェルエンデュオ」を召喚！ VUNESの効果で天使以外のモンスターは攻撃力が500ポイントダウンする！」

エルフィの場には金色の天使とその横に小天使が現れ、続けてのエルフィの言葉にVENUSは光を発して相手の場の絶望の力を減少させる。

闇より出でし絶望 攻撃力：2800 2300

「……ちっ」

「VENUSで闇より出でし絶望を攻撃！ ホーリー・フェザー・シャワー！」

アレウスは舌打ちをし、それを聞いたエルフィは攻撃を指示をする。それを聞いたVENUSは光の羽根で絶望を貫き、霧散させた。

「やるな……だが甘い、リバーカード発動「道連れ」！ 黄泉へと共に向かうんだな、VENUS！」 LP4000 3500

アレウスがリバーカードを発動した瞬間VENUSの足元の地面にヒビが入り、そう思った瞬間さつき倒したはずの絶望が地面から這い出てVENUSを捕まえ、地面の中に引きずり込んだ。

「くっ……ジェルエンデュオで裏守備モンスターを攻撃！」

「守備モンスターは「ピラミッドタワー」、その効果で「邪神機獄炎」を特殊召喚する。本来こっちで道連れを使う予定だったんだが……計算が狂ったな」

二人の小天使が破壊したピラミッドを背負ったような亀は破壊され、そう思ったら背負っていたピラミッドが割れてその中から一体の機械みたいなアンデットが姿を現す。そしてアレウスがそう呟くとエルフィはふっと笑って手札の一枚を取った。

「フィールド魔法「天空の聖域」を発動。これで私の天使族モンスターのバトルで発生する私への戦闘ダメージは全てゼロになる。ターンエンド」

簡易状況説明

エルフィ：LP4000 手札二枚

フィールド：ジェルエンデュオ攻撃表示 天空の聖域、神の居

城 ヴアルハラ発動中、伏せカードなし

アレウス：LP3500 手札二枚

フィールド：邪神機 獄炎攻撃表示 ミイラの呼び声発動中、伏せカードなし

「なるほど。ジェルエンデュオは戦闘ダメージを受けない限り破壊されない、これで擬似マシユマロンとでも言ったところか。僕のターン」

エルフィの後ろに現れた純白の神殿を見ながらアレウスはそう呟いてカードを引き、ふむと呟くと手札を取った。

「とりあえず魔法カード「生者の書 禁断の呪術」を発動、その効果で闇より出でし絶望を特殊召喚しお前の墓地からVENUSを除外する」

アレウスの場合に一冊の緑色の本が現れたと思うと本は開かれて不思議な呪文が聞こえ出し、そう思ったならアレウスのフィールドにヒビが入って地面の中からさつきVENUSが倒した絶望が姿を現し、逆にVENUSは次元の狭間に吸い込まれていく。

「後は「馬頭鬼」を召喚、ターンエンドだ」

「私のターン……ジェルエンデュオを守備表示に変更してモンスターをセット、ターンを終了」

小天使は守りの体勢を取り、さらにモンスターが守備表示で場に出される。そしてエルフィがターンエンドを宣言するとアレウスはデツキに指を置いた。

「僕のターン、ドロ……馬頭鬼に自爆特攻されないようにジェルエンデュオを守備にした読みはいい、いや当然か……だが、遅い」

「え？」

「僕は「ゾンビキャリア」を召喚。そしてレベル2のゾンビキャリアとレベル4のアンデット、馬頭鬼をチューニング！ 冥界の魔王よ、今ここに蘇れ！ 「蘇りし魔王 ハ・デス」シンクロ召喚！！」

二体のアンデットが闇に包まれ、その中からゾンビと化した魔王が姿を現す。あつという間に三体の上級アンデットが現れ、エルフィの顔が少し青くなる。そしてアレウスはエルフィの場を指差して声を出した。

「蘇りし魔王ハ・デスで守備モンスターを攻撃！」

「くっ、スケルエンジェルのリバー効果」

「蘇りし魔王ハ・デスの効果！ 僕の場のアンデットがモンスターを破壊したときそのモンスターの効果は無効になる」

ハ・デスの拳が小さな天使を握りつぶし、その命がエルフィに最期の力を与えようとするがそれをハ・デスが眼力で破壊する。

「ジェルエンデュオは破壊できないからリバーカードをセットし、ターンエンドだ」

「わ、私のターン……」

アレウスがターン終了する事を聞くとエルフィはデッキからカードをドローして手札に加え、それをさっと見回した。そしてうんと頷くと手札を取る。

「私はジェルエンデュオをリリースして「ガーディアン・エンジェル守護天使 ジャンヌ」をアドバンス召喚！ ジェルエンデュオは光属性天使族のモンスターをアドバンス召喚する時一体で二体分のリリースにできる。そしてジャンヌに「ダグラの剣」を装備し攻撃力を500ポイントアップ！」

守護天使 ジャンヌ 攻撃力：2800 3300

「ほっ」

「ジャンヌで闇より出でし絶望を攻撃！ ガーディアン・セイントソード！」

ジャンヌの両手に独特の形をした剣が握られ、エルフィの攻撃指示と同時にジャンヌは翼をはためかせて巨大な影に向かっていき、その影を二本の剣で斬り倒す。その時に発された光の波動がアレウスにもダメージを与えた。

「ふん」LP3500 3000

「ジャンヌの効果で破壊モンスターの元々の攻撃力分、ダグラの剣の効果で相手に与えたダメージ分、合計3300のライフ回復！
ターン終了！」LP4000 7300

簡易状況説明

エルフィ：LP7300 手札一枚

フィールド：守護天使ジャンヌ攻撃表示（ダグラの剣装備）

天空の聖域、神の居城 ヴアルハラ発動中

アレウス：LP3000 手札零枚

フィールド：邪神機 獄炎、冥界の魔王八・デス攻撃表示 ミ
イラの呼び声発動中、伏せカード一枚

エルフィの場に戻ってきたジャンヌが癒しの光を発し、それに共鳴するようにダグラの剣も光りだすとエルフィのライフが一気に回復し、エルフィはよしと頷くとターン終了を宣言する。相手の手札は

ゼロ、それにこつちには強力モンスターがいる。このまま押し切れれば勝てるはずだ。

「僕のターン……中々だな、少し想定を超えていた。じゃあ、そろそろいく」

「え？」

アレウスは意味ありげに笑ってそう言い、それにエルフィが呆けた声を出すとアレウスは動き出した。

「僕はハ・デスをリリースしてリバースカード「闇霊術 「欲」」を発動。このカードは相手が手札の魔法カードを見せることで破壊される」

「私の手札に魔法カードはない」

「二枚ドロ……獄炎をリリースして「砂塵の悪霊」を召喚。その効果でこのカード以外の表側表示モンスターは全て破壊される」

突然現れた悪霊が奇声のような声を上げたかと思うと辺りに砂塵が吹き荒れ、ジャンヌはそれを受けて破壊される。

「砂塵の悪霊でダイレクトアタック」

「きゃっ!?!」 LP7300 5100

「エンドフェイズ、スピリットモンスターである砂塵の悪霊は僕の手札に戻る。カードをセットしてターンエンドだ」

「私のターン！ 私はヴァルハラの効果で「デユナミス・ヴァルキリア」を特殊召喚し、「勝利の導き手フレイヤ」を通常召喚！ フレイヤの効果で私の場の天使族は攻撃力が400ポイント上昇！」

デユナミス・ヴァルキリア 攻撃力：1850 2250

勝利の導き手フレイヤ 攻撃力：100 500

エルフィの場のこの世界で共に戦う二人の天使が姿を現す。そしてエルフィは続けて言った。

「スピリットモンスターは特殊召喚が不能、そしてあなたの場にモンスターはいない。今のうちに殴り勝つ！ ヴァルキリアで攻撃！」

「僕のデッキがアンデット、不死である事を忘れたか！？ リバー・スカードオープン「リビングデッドの呼び声」！ その効果で「闇より出でし絶望」を特殊召喚！」

ヴァルキリアがアレウス目掛けて飛び立った瞬間アレウスはそう声を上げてリバー・スカードを発動、その瞬間地面からまた絶望の影が姿を現した。

「くっ！？ バトルフェイズの巻き戻しにより攻撃せずにターン終了」

巨大な影を見たヴァルキリアは思わず動きを止め、エルフィの指示を受けると渋々下がっていく。それからエルフィはターンを終了した。

簡易状況説明

エルフィ：LP5100 手札零枚

フィールド：デュナミス・ヴァルキリア、勝利の導き手フレイヤ攻撃表示 天空の聖域、神の居城 ヴァルハラ発動中、伏せカードなし

アレウス：LP3000 手札一枚（砂塵の悪霊）

フィールド：闇より出でし絶望攻撃表示 ミイラの呼び声、リビングデッドの呼び声発動中、伏せカードなし

「僕のターン……ふむ、闇より出でし絶望でデュナミス・ヴァルキリアを攻撃」

「ごめん、ヴァルキリア」

アレウスの攻撃指示と同時に闇より出でし絶望は闇を発してヴァルキリアを包み込み、破壊する。神殿の光に守られてダメージは受けなかったもののエルフィは仲間に謝罪の言葉を口にした。

「ターンエンドだ」

「私のターン！」

アレウスが冷めた口調でそう言うとエルフィは対称的にそう叫んでカードをドロウし、見る。とそれをモンスターゾーンに置いた。

「私はモンスターを守備表示でセットしフレイヤを守備表示に変更、ターン終了」

「壁で固めるのがやっとか。僕のターン、ドロウ」

アレウスはカードをドロウすると三枚の手札をさっと眺め直し、一

枚の手札を取る。

「フィールド魔法「アンデットワールド」発動、ルールにより天空の聖域は破壊される」

カードの発動と同時に純白の神殿が崩れ落ち、辺りは不気味な雰囲気
気が漂う場へと変化する。二人の足元には髑髏も転がり、エルフィ
は気持ち悪そうな顔を見せる。

「僕は砂塵の悪霊をデッキトップに戻して墓地からゾンビキヤリア
を特殊召喚。そしてゾンビキヤリアをリリースして「レッドアイズ・アンデットモ
ラゴン真紅眼の不死
竜」を攻撃表示でアドバンス召喚。ゾンビキヤリアは自身の効果で
特殊召喚された場合、フィールドから離れる時ゲームから除外され
る」

アレウスの場の髑髏が動き出したと思っただけの下からさっきのゾ
ンビが姿を現し、そう思った瞬間ゾンビは闇に包まれドロンという
ように赤い目を光らせたゾンビのような黒竜が姿を現す。

「アンデットワールドの効果によりお互いのフィールド、墓地のモ
ンスターは全てアンデット族として扱われ、またアンデット族以外
のモンスターのアドバンス召喚は不可能になる」

「そんな!?!」

アレウスの言葉と同時にフレイヤから妖気みたいなものが溢れ始め、
フレイヤは少し嫌そうな顔を見せる。とアレウスはフレイヤを指差
した。

「不死竜でフレイヤを攻撃、アンデット・ブラック・フレア!」

アレウスの指示を聞いた不死竜は口から赤黒い炎を吐いてフレイヤを焼き尽くし、続いてアレウスは守備モンスターを指差す。

「闇より出でし絶望で攻撃！」

その言葉と共に絶望の闇がエルフィの場のモンスターへカテリスを包み込み、破壊する。しかしこのターンダメージは受けずに済んだとエルフィはふうと息を吐く。

「勝利の導き手フレイヤでプレイヤーにダイレクトアタック！」

「え！？」LP5100 5000

アレウスの言葉にエルフィが驚いたように声を上げると共にその腹部に重い蹴りが入る。その時エルフィの目に映ったのは服がボロボロでアンデットっぽくなっているフレイヤの姿、それにエルフィが驚いているように沈黙しているとアレウスはくっくつと笑って言った。

「不死竜に破壊されたアンデットは僕のしもべとして召喚される、当然アンデットワールドの影響内では全てのモンスターがその効果を受けるというわけだ。自分の仲間が攻撃された気分はどうだ？」

「この……」

「僕はターン終了だ」

アレウスの言葉を聞いたエルフィに目に怒りが宿り、アレウスがターン終了を宣言するとエルフィはデッキに指を置いた。

「絶対に許さない！ 私のターン、ドロー！！」

エルフィは引いたカードを一瞥するとうんと頷き、そのカードを發動する。

「魔法カード「壺の中の魔術書」！ 互いのプレイヤーはデッキからカードを三枚ドローする！」

エルフィはカードを發動した瞬間三枚のカードを一気にドローする。するとヴァルハラが光を放ち始めた。

「私はヴァルハラの効果で「エンジェルナイト天空騎士パーシアス」を召喚！ フレイヤ、今解放してあげるからね……パーシアスでフレイヤを攻撃！」

エルフィの指示にパーシアスはくつと苦しそうな表情を見せながらアンデットと化しているフレイヤに攻撃し、フレイヤはくあつと短い悲鳴を上げて破壊される。

「ふうん、仲間に対し攻撃を仕掛ける覚悟は流石」LP3000
1200

「パーシアスの効果で一枚ドローし、ターンエンドよ」

簡易状況説明

エルフィ：LP5000 手札三枚

フィールド：天空騎士パーシアス攻撃表示 ヴァルハラ発動中、伏せカードなし

アレウス：LP1200 手札三枚（うち一枚砂塵の悪霊）

フィールド：真紅眼の不死竜、闇より出でし絶望攻撃表示 ミ
イラの呼び声、リビングデッドの呼び声発動中、伏せカードなし

「僕のターン、攻撃力の劣るモンスターをこの状況で敢えて攻撃表示で放置するという事は手札にオネストがある確率が高いという事、しかしこのタイミングで砂塵の悪霊を呼び出したら次のターン殴り負ける。だったら絶望を守備表示に変更して不死竜は……このままでいいか。カードを一枚セットしてターンを終了」

「私のターン！ このターンでけりをつけるわ！！ フィールド魔法「天空の聖域」！ ルールによってアンデットワールドは破壊される！！」

エルフィの背後に純白の神殿が現れ、その光によって気味の悪い場が浄化されるように消え去っていく。それからエルフィは残る手札を全て手に取った。

「「ゼラの戦士」を召喚！ そしてゼラの戦士は聖域に辿り着いた事により大天使の称号を得る！ ゼラの戦士をリリースし、「大天使ゼラート」光臨！！」

エルフィの場に現れた戦士が光に包まれ、その中から純白の大天使が姿を現す。そしてエルフィは最後の手札を発動した。

「天空の聖域が場に存在する時ゼラートは手札の光属性モンスターを捨てる事で相手のモンスターを全て破壊する！ 私は最後の手札、天空勇士パーシアスを捨ててゼラートの効果発動！ 天空の裁きで相手を裁け！！」

「輝く御名の元、地を這う穢れし魂に裁きの光を雨と降らせん。安息に眠れ、罪深き者よ……ジャツジメント!!!」

エルフィの言葉を聞いたゼラートは呪文を唱えて剣を振り上げ、それと共に天から無数の光が雨のように降り注いで敵の場のモンスターを一掃する。

「ゼラートでダイレクトアタック！ アークエンジェル・ブレイド
!!!」

この攻撃が通ればエルフィの勝ち。しかしアレウスは涼しい表情を見せており、息をふうと吐くと呟いた。

「実力も度胸も申し分ない、しかし怒りで頭に血が上って冷静さを欠いているな。リバースカードオープン」聖なるバリア ミラーフ
オース」!!!」

「!!!」

アレウスが伏せていたカードを発動した瞬間ゼラートの振り下ろした剣を不思議な障壁が防ぎ、その攻撃が光となって跳ね返るとゼラートとパーシアスを貫く。逆にエルフィの場ががら空きになってしまった。

「手札はゼロ、もうやれる事はないだろう？」

「……タ、ターンエンド」

アレウスの言う通りエルフィの手札は完璧に尽きており、抵抗なんて出来ない状態。エルフィは悔しそうに歯を噛みながらそう呟いた。

そしてそれを聞くとアレウスはデッキからカードを引き抜く。

「僕のターン、ドロ。僕はミイラの呼び声の効果で「ヴァンパイア・ロード」を特殊召喚し、魔法カード「生者の書 禁断の呪術」の効果で墓地から「蘇りし魔王 ハ・デス」を特殊召喚してお前の墓地から大天使ゼラートを除外する。さらに馬頭鬼を除外して墓地から「真紅眼の不死竜」を特殊召喚し、最後に手札から「闇竜の黒騎士」を通常召喚」

「あ、あ、あ……」

たったワンターンでがら空きだったフィールドに四体のアンデットが並び、それを見たエルフィは顔を青くする。

「僕の勝ちだな。生ける屍よ、死の世界へと引きずり込め」

「いやあああああ！！！！」 LP5000 0

アレウスの言葉を攻撃の指示として聞いたようにアンデット達はエルフィに向かっついていき、エルフィは悲鳴をあげて崩れ落ちた。完全に気を失っている、この世界でのダメージの影響か、はたまた恐怖ゆえか。アレウスがそう考えていると突然高笑いが聞こえてきた。

「あつはつはつは、案外手間取ったじゃないか。情けないねえ」

「まあ少し手間取ったのは事実だ。負ける気は一ミクロンとしなかったがな」

高笑いの主 クメトにアレウスは眼鏡を直しながらそう返し、クメトの方を振り向いて続けた。

「それよりもう一人は？」

「お寝んね中さ、攻撃力の高い機械族使いだっただけどアタシのアマゾナスの敵じゃないね。で、どうすんの？ 今なら殺すなんて造作もないけど？」

クメトは笑って言った後どこからか重厚な斧を取り出してそう続け、アレウスは少し考えた後言った。

「いや、連れて行こう」

「はあ！？」

「こいつらの実力は申し分ない。仲間に引き込めば十分な戦力になるだろう」

アレウスの言葉にクメトが呆けたような声を上げるとアレウスはそう続け、それにクメトははあと息を吐いて髪をかく。

「引き込むつたってそんな面倒な真似」

「誰が説得などという甘っちょろい事をすると言った？ ようは味方につければいいんだ、無理矢理でもな」

クメトの言葉を遮るようにアレウスはそう言い、にやっと笑う。それにクメトはヒュウと息を吐いた後ふっと笑って言った。

「やれやれ、怖い怖い」

「下らん事を言う暇があるならその男をそっちに連れて来い」

「はいよー!」

クメトの言葉にアレウスはそう言い、それを聞いたクメトは気を失っているアルフを担ぎ上げてエルフィの方に持っていく。それから二人がアルフとエルフィのすぐ横に立つとアレウスは何かの呪文を唱え、それを唱え終えると共に四人の姿はどこかへと消え去っていった。

第二部第八話 天使VS不死者（後書き）

二人分の手札枚数調整に壺の中の魔術書が便利だと凄い勢いで実感しています、その内天からの落とし物も出るかもしれない手札増強タイプの原作オリカ。

とまあそれはさておきエルフィの相手ことアレウスのデッキはアンデット、魔轟神がいいというリクエストがあつたんですが考えてみるとデユエルモンスターズワールドを襲う相手の関係上アンデット使いがいた方が都合がいいので、すいませんでした。しかし想定以上に苦戦したなあアレウス、ここまでのダメージは流石に想定外だった……エルフィが負けるってのは当初からの予定だったんだが。

あ、この後アルフとエルフィがどうなるかは既に決定しているのでお楽しみに。それでは。

第二部第九話 望まぬ再会

ここは魔法都市エンディミオンにそびえる城、その一室のベランダにライは出ていた。するとそこに一個の小さなロケットが飛んできたと思っただらそれはライの前で止まり、変形する。

「どうだった？」

「全然、この辺適当に飛び回って見たけど見つからなかった」

「そう……ありがとう」

「気にすんなよ。しっかしアルフもエルフィもどこ行っちゃったんだろうな？ 探しに出てったヴァルキリアとゼラートも戻ってこないし……」

ライの言葉に変形したロケット　ロケット戦士は首を横に振って返し、それにライは少し浮かない顔を見せた後微笑みながらロケット戦士にお礼を言う。それを聞いたロケット戦士はそう返した後首を傾げて続けるように言った。

レオ達が敵と思しき青年　ソーマと会ってからもう三日、アルフとエルフィが行方不明になったという事で大急ぎの搜索が行われたが見つかったのは傷だらけで倒れていたデュナミス・ヴァルキリアとサイコ・シヨツカーのみ、その二人も何も覚えていないらしく、しかも昨日心配したヴァルキリアがゼラートと共に辺りに搜索にいらってまだ戻ってこない。

すると突然キイと音を立てて部屋のドアが開き、ライはそつちを見る。そこにいたのは自分の兄　レオだ。

「ここにいたのか。エンディミオンが呼んでる、俺ら三人だ」

「あ、うん」

レオの言葉にライはこくと頷いて返すとロケット戦士にバイバイと手を振り、ロケット戦士もおうと頷くとベランダから飛ぶように、というか実際飛んで去っていく。それからライはレオと共にエンディミオンの部屋まで歩いていった。

「連れてきたぞ」

「ああ。そこに座ってくれ」

ドアを開けながらのレオの言葉にエンディミオンは頷いて返すと今はメリオルが座っている五人くらいは座れそうなソファを指して言い、レオとライは頷くと座り込む。それからエンディミオンが口を開いた。

「今日の朝にフリードがレッドアイズとサイコ・シヨッカー達を率いて敵がいるという情報のある場に向かったのは知っているな?…」
「そのフリード達から連絡が途絶えた」

「嘘!？」

エンディミオンの言葉にライがその声を上げ、レオ達も信じがたいというような表情を見せる。それにエンディミオンは無言をもって返し、少し間が空いてから言った。

「とにかくレオ達にはフリード達が無事かの確認に行ってもらいたい。ここから少し離れているから馬車も用意させよう。頼めるか?」

「ああ」

エンディミオンの言葉にレオはこくと頷いて返し、メリオルとライも頷く。

それから一行は馬車を用意したという街の入り口に向かい、馬車を見る。とライが声を出した。

「あ、俺がここに来た時に使った馬車だ。漆黒の名馬もいるし」

ライの言葉通りそこにあつたのは漆黒の名馬が繋がれている西洋風の馬車、ライが戦士族の国からここまで移動するために使用したものだ。すると馬車の中から誰かが顔を出して声を出した。

「やっと来たの？」

「フレイヤ!？」

「遅いわよ皆!」

少女　フレイヤにメリオルが驚いたように声を出し、さらにブラック・マジシャン・ガールことネラが顔を出して続ける。それを見たレオは思わず沈黙し、はあとため息をつくと言った。

「なんでここにいるんだ？」

「あたしらもフリードさん達が無事かの確認調査を手伝おうと思っ
てね。ついでにアルフとエルフィ探しも手伝うから、人手は多い方
が得っしょ?」

レオの言葉にネラはにかつと笑いながらそう返し、それを聞いたレオはやれやれという風に首を横に振ると言った。

「分かった、許可してやる」

「おー！ だつてさ、よかつたね、皆！」

「皆？……まさか!？」

レオの言葉にネラは嬉しそうに馬車の中に向けて言い、それを聞いたレオは合点がいったというような表情で馬車に近づいて中を覗きこむ。

「ど、どうも……」

「連れてつてくれるんだよな？ よろしくな！」

「よろしくお願いします」

そこにいたのは霊使い六人＋サイレント・マジシャンことレン。レオが馬車内を覗き込むと最初にレンがぺこりと会釈をして口を開き、次にヒータが元気な微笑みを浮かべて言う。そしてウィンとライナがよろしくお願ひしますと礼をするとその後ろのエリアとアウス、ダルクがすまなそうな笑みを見せる。それを見たレオは判断を誤ったかと呟いた後しようがないとばかりに言った。

「分かった、俺が許可したんだから責任は持つ。ただし勝手に行動するなよ？」

『はい！』

レオの言葉にネラ、ヒータ、ウィン、ライナが手を上げて元気な声

を出し、他のメンバーも各々声を出して了承の意を示すために手を上げる。それを見たレオはメリオルに向けて肩をすくめ、メリオルも仕方がないというように笑って返す。そしてメリオルとライも馬車に乗ってからレオは手綱を握って馬車を出発させた。

「……で、どこら辺かは分かってるのか？」

「ええ、基本的にはこのまま真っ直ぐ行けばいいそうよ。後は私が指示するわ」

「了解」

手綱を握りながらレオが尋ねるとメリオルが地図を持ちながらそう言い、それを聞いたレオは頷いてスピードを上げるために手綱で馬をパシンと叩き、それからまた思い出したように言った。

「そういえばネラ、ヴァルツには言って来てるのか？」

「え？ 言ったら反対されるに決まってるじゃん」

「つまり黙ってきたのね……」

「まーねー」

レオの言葉にネラはいけしゃあしゃあとそう答え、それを聞いたメリオルが呟くとネラはあっさりそう返す。するとアウスがすまなそうに言った。

「すみません、ボクとエリア、ダルク、レンはヴァルツ先生に言うておくべきだと言ったのですがネラとヒータが無理矢理……」

「大丈夫だつつの、オレ達の魔術がどれほど上達したかを実戦で試すいい機会だ！」

「言っておくが戦わせる気はないぞ。メリオル、いざ戦いが避けられなくなったら護衛頼む」

「ええ」

アウスの言葉を遮る勢いでヒータが言うとレオは呆れたように息を吐いて言った後メリオルに頼むようにそう続け、それにメリオルは頷いて返すと武器である扇子の調整を始める。

それから馬車はどんどん進んでいく。するとライが遠目に何かを発見したように指を差して口を開いた。

「あれ？……ねえ、あそこに誰か倒れてるよ!？」

「本当か!？」

ライの言葉を聞いた途端レオは手綱で馬を叩いてスピードを上げさせ、ライが指差した方向にかわせる。そして馬車を止めてレオとライが馬車を降りる、そこに倒れていたのは傷だらけのフリードだった。

「フリードさん!」

「う……ライ、それにレオか……」

ライが呼びかけるとフリードは絶え絶えの声でそう呟き、二人はそつたと頷く。するとフリードはぼそぼそとした声で続けた。

「大変な事になった……油断するな……ア、ル……」

「え、何ですか？ 最後の方が聞こえませんか？」

フリードの声は絶え絶えで聞き取りづらく、ライは必死で聞き取るうとフリードに顔を近づける。するとレオは何か反応したように顔を上げるとライを馬車の方に投げ飛ばした後フリードを抱えてその場を離れる。その直後さつきまでフリードが倒れていた場から地面から氷の槍が突き出た、と思っただけから声は聞こえてくる。

「おや、外してしまいましたかあ」

「!？」

冷たく、楽しそうな声。しかし声の調子は違うものこの声質には覚えがあった。

「アルフ!？」

レオはそう叫んで声の方を見る。そこに立っていたのは確かに行方不明になっていた仲間 アルフの姿、その両手には巨大な爪のような刃がつけられたナックルがはめられており、また顔には返り血のような跡がついている。しかしアルフはそれを気にする事もなくただただ楽しげに、冷たく笑っていた。

「お久しぶりです、レオさん」

「うっ……」

視線で射抜かれた瞬間身体中が冷えるような寒気を感じる、その笑

み自体が絶対零度のように感じ取れた。アルフはくすくすと冷たく笑いながらレオにゆっくりゆっくりと近づいていき、レオも相手の動向を見逃す事無く捉える。そして射程距離に入った瞬間アルフは拳を構えてレオに飛び掛ってきた。

「くっ！」

直後予想していたようにレオは刀を抜いてアルフのナックルと刃と刃の間に刀を挟ませて受け止め、逆に押し返す。しかしアルフはくると宙を舞うようにバツク宙をするとトンと優しく両手で地面を押し。それと同時にレオ目掛けて先の尖った氷がまるで波のようにレオに襲い掛かった。

「ちっ！？」

「ファイアボール！」

咄嗟に飛び上がり、そこにヒータが氷目掛けて火の玉を飛ばして氷を溶かす。そしてレオを見ながら声を出した。

「どうだ！ オレらも役に立つだろ！？」

「ああ、ありがとよ！」

ヒータの言葉にレオは背中を向けながらだがしっかりと礼を返してアルフを見る。その左腕にはドーマ型のデュエルディスクが装備されていた。

「どういう事だ？ アルフ」

「あなた方の敵になったと言えば満足でしょうか、レオさん」

「どうにも納得はいかねえが……もう一個だけ聞かせる。お前、いつものアルフじゃないな？」

レオの問いに冷たく微笑みながらアルフがそう返すとレオはふうんと呟いてそう答え、さらに目を研ぎ澄ませながらそう尋ねるとアルフは一瞬驚いた表情を取って、また微笑みを浮かべると言った。

「……ええ。僕を裏、いつもの方を表と言いましょつか、表のアルフさんには少々眠ってもらっています。僕はそうですねえ……二重人格って言えばいいでしょうか？」

「もう一個の人格を強制的に生み出したってのか!？」

「そう考えてくださって構いません。もっとも、二重人格を植えつけられたのは僕一人じゃありませんけど」

裏のアルフの言葉にレオが驚いたように声を出すとアルフはにこっと微笑みながらそう言う。それにレオがまさかとはかりの表情を浮かべた瞬間背後からネラ達の悲鳴が聞こえてきた。

「まさか!？」

悲鳴にレオは思わず振り向いてしまう、そこにはライと剣のせりあいを繰り広げているエルフィの姿があった。

ライは二本の剣を巧みに操ってエルフィの容赦ない突きと斬りのコンビネーションをなんとか受け流している。

「ふうん、やっぱりやるわねえ。じゃあこれならどうかしら!？」

「!?!」

エルフィがそう叫んだ瞬間ライは後ろに素早くバックステップを踏む。その直後エルフィの剣がまるで鞭のように伸びてライがさつきまで立っていたところをその切っ先が通り抜ける。エルフィの言葉に反応して避けていなければ確実に貫かれていた。さらに振り下ろした剣先をライは横にかわし、剣はバチインと痛々しい音を響かせる。

「くそっ!」

「さてと、前座はここまで……ここにおける戦いの方式はこっちですよね」

レオがアルフを睨みつけるとアルフはまだくすくすとした笑いを消さずにそうとだけ言ってデュエルディスクを起動し、それを見たレオもデュエルディスクを起動すると声を出した。

「ライ、エルフィは頼むぞ! メリオル達はフリードを手当てしてこの辺をくまなく探せ! レッドアイズやサイコ・ショッカー達もこの辺にいるはずだ!」

『了解!』

レオの指示を聞くと全員領いて馬車にフリードを乗せるとメリオルは馬車を走らせ、ライはエルフィの方を見てデュエルディスクを起動、エルフィもクスクスと冷たく笑いながらデュエルディスクを起動した。デュエル方式はシングルデュエル、レオはアルフを、ライはエルフィを睨みつけた。

「デュエル!!」
「デュエル!!」

そして二組のデュエル開始の叫び声が辺りに響き渡った。

第二部第九話 望まぬ再会（後書き）

一週間ちよつと過ぎくらいは久しぶりって言うべきなんでしょうかね？ま、それはさておき前回敵に攫われてしまったアルフとエルフイはこの通り、人格が変わった状態で敵として立ちはだかつてしまいました。ちなみにこれもまた彼らのオリジナル設定の名残です。そして彼らの事はそれぞれ黒アルフ、黒エルフイとお呼びください。あれ通称黒モードというので。

もちろん使用デッキも変わってます。まあ正確に言うならば黒エルフイは元々のデッキにちよつとしたアレンジを加えただけ、黒アルフは元のデッキの欠片もないと言っておきましょう。なんなら何デッキでしょうかというクイズでも出しましょうか？もつとも僕に感想を下さる方の中に一名、彼らの使用デッキを知っているはずの方がいますけどね。あ、いや黒エルフイはどうだったかな？

ヒントは黒エルフイはさっき言ったとおり元々使用していたデッキにちよつとあるカード群を入れる。黒アルフは……完全に変わりますからね、せめて言うなら近いデッキ使いがマリクです。あ、でもラーの翼神竜を使わせるわけじゃありませんのでご安心ください。この話には一切神のカードは出てきません。それじゃあ今回はこの辺で。それでは。

第二部第十話 龍VS拘束

魔法都市エンディミオンから大分離れた荒野、レオは敵と化したアルフ 黒アルフを相手にデュエルディスクを起動しており、また黒アルフも相変わらずくすぐすと冷たさを感じさせる笑みを浮かべていた。そして黒アルフがふと口を開く。

「そうだ、レオさん。今回のデュエルですが……ライフポイント8000で行いませんか？」

「……別にいいぜ」

黒アルフの言葉にレオは少し考えた後そう返す。アルフのデッキは高攻撃力の機械族モンスター主軸、それらは貫通効果をも併せ持つ事が多いためワンキルされないためにはライフは多いに越した事はない。こっちから攻めにくい点もあるが高攻撃力モンスターの展開力と連続攻撃という点においてはこっちが上だ。

自分の提案を受けてもらった黒アルフはありがとうございますとわざとらしく言い、デッキから五枚の手札を引き抜く。そして黒アルフが先攻を取った。

「僕のターン、ドロー」

楽しそうな、しかし恐ろしさも同時に感じさせる口調でカードをドローすると黒アルフは手札をさつと眺め、数枚の手札を手を取った。

「僕はモンスターを守備表示でセットし、カードを一枚セットします。そして永続魔法「怨霊の湿地帯」を発動」

黒アルフの場に謎のモンスターカードが姿を現し、さらに急に地面から泥が染み出してきたと思っただら辺りが湿地帯に変化する。湿地帯からは怨霊らしき嫌な気配まで漂ってきた。

「怨霊の湿地帯の効果により全てのモンスターは召喚、反転召喚、特殊召喚されたターンに攻撃できません。ターン終了です」

「（怨霊の湿地帯なんてあいつのデッキに入ってた……って事はデッキを入れ替えたのか？）ちっ、やりにくい。俺のターン！」

黒アルフの楽しげな微笑の中のターンエンド宣言を聞いたレオはそう考えを巡らしつつカードをドロースする。そしてそのカードを見るとディスクに置いた。

「俺は「ランス・リンドブルム」を攻撃表示で召喚し、カードを一枚セット。ターンを終了する！」

長槍を持った竜人が現れたと思っただら湿地帯から謎の手が伸びてきてリンドブルムを捕まえて湿地帯に引きずり込む。それからレオがカードを一枚伏せてターン終了宣言をしてようやくリンドブルムを捕まえていた手は離れ、リンドブルムは戦闘体勢を取り直す。

「僕のターン、ドロース」

黒アルフは微笑みながらカードをドロースし、それを見る。とくすくすくすと笑いながらディスクに手をやった。

「僕はモンスターを反転召喚します。反転召喚「スカラベの大群」、その効果によりランス・リンドブルムを破壊します」

黒アルフの場のモンスターカードが翻つたと思つたらそこから大量のスカラベが現れてランス・リンドブルムに向かつていく。ランス・リンドブルムはあつという間にスカラベに埋もれ悲鳴を上げて破壊されてしまった。そして元の位置に戻つていったスカラベ達の姿が消えていき、裏側表示のカードがまた現れる。

「スカラベの大群は効果によりターンに一度だけ裏守備表示に出来ます。さらにモンスターをセットしてターンを終了します」

「くそつ、鬱陶しい！」

怨霊の湿地帯で召喚時の攻撃を防いで返しのターンでスカラベによる破壊、めんどくさいコンボだ。黒アルフのくすくす笑いを聞きながらレオはそう叫んでカードを引き、引いたカードを見るとよしと頷いてそれを場に出す。

「魔法カード「サイクロン」、その効果で怨霊の湿地帯を破壊する！」

レオの言葉と共に辺りに竜巻が舞い、湿地帯を吸い上げていく。それから続けてレオは手札を取った。

「「ブリザード・ドラゴン」を召喚、バトル！」

「おっと、リバーカードを発動させてもらいますね？」「グラヴィティ・バウンド 超重力の網」、その効果でレベル4以上のモンスターは攻撃できなくなります」

レオの場に現れた青い竜は意気揚々とばかりに吼えるがその瞬間レオの場と黒アルフの場の間に超重力の網が張られ、ブリザード・ド

ラゴンの攻撃を阻む。

「くそっ、ターンエンドだ！」

簡易状況説明

レオ：LP8000 手札三枚

フィールド：ブリザード・ドラゴン攻撃表示 伏せカード一枚

黒アルフ：LP8000 手札三枚

フィールド：モンスター二体裏守備表示（内一枚スカラベの大群）
グラヴィティ・バウンド発動中、伏せカードなし

「僕のターン、ドロー」

にこにこ楽しそうなでも冷たい微笑みを浮かべながら黒アルフはカードをドローし、それを見ると黒アルフはデュエルディスクに手をやる。

「スカラベの大群を反転召喚し、ブリザード・ドラゴンを撃破。そしてもう一体のモンスターを反転召喚、「ステルスバード」」

超重力の網の間をぬって接近してきたスカラベの大群に襲われてブリザード・ドラゴンは破壊され、さらにもう一枚の守備モンスターが姿を現したと思ったらそれは超重力の網を潜り抜けてレオにダメージを与える。

「があっ!?!」 LP8000 7000

ステルスバードの翼によるまるで斬撃のような攻撃を受けた瞬間レオの身体に刃物で斬られたような痛みが走り、思わずレオは苦痛の

表情を出してうずくまりかける。それを見た瞬間黒アルフは恍惚そのな微笑みを浮かべた。

「痛いでしょ？ いきなり1000のダメージを受ければそうなりますよ 今回のデュエルのライフポイントは8000、ゆっくりゆっくり甚振ってあげますからね 「豊穣のアルテミス」を召喚し、スカラベの大群とステルスバードを裏守備表示に変更。カードを二枚セットしてターンエンドです」

「俺の場はから空きだぞ？ その二体ならグラヴィティ・バウンドの効果を受けずにダイレクトアタックができたんじゃないか？」

「攻撃なんてナンセンスですよ ようは相手のライフを0にすれば勝てるんです。変に罠にかかるよりゆっくりゆっくりと甚振ってあげます。あなたのターンですよ？」

黒アルフは微笑みながら新たな天使を召喚し、ステルスバードとスカラベの大群を裏守備に戻してカードを伏せるとターンを終了する。それにレオが不思議そうに尋ねると黒アルフはくすつと微笑みを浮かべながらそう返す。それを聞くとレオはちつと舌打ちした。

「（口車に乗りそうにねえなこりゃ…）…俺のターン！」

レオはそう叫んでカードをドローするとさつと手札を見る。

（しかし、俺のデッキのモンスターは大半がなあ…）

「ああそうそう、表のアルフからあなたの情報は大方聞いてます。というか勝手に記憶を読み取ったって言う方が近いですかねえ？ あなたのデッキのモンスターは大半が高レベルモンスターで占めら

れておりそれらをレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンやキング・ドラゴン、他にも様々なサポートカードで素早く展開して勝負を決める。その代わりに低レベルモンスターはほとんどシンクロ召喚に使うため戦闘向きのモンスターはほとんどいない。ってね」

レオが考えていると黒アルフはくすくすと笑いながらそう言い、それを聞いたレオはくつと唸った。さっきの言葉は大正解、レオのデッキはほとんどがグラヴィティ・バウンドのようなロックタイプには相性が悪い。

「俺は「ミンゲイドラゴン」を召喚し手札から「スタンピング・クラッシュ」を発動！ グラヴィティ・バウンドを破壊する！」

「リバーストラップ発動「魔宮の賄賂」、スタンピング・クラッシュを無効にし破壊します」

レオは新たな竜を呼び出すと魔法カードを発動し、それと共に竜は超重力の網を破壊しようとして飛び上がる。しかしその瞬間黒アルフがカードを発動し、そのカードから発された力が竜の力を奪い取り、超重力の網に阻まれて吹き飛ばされる。

「ちっ、賄賂の効果でカードをドロ―！」

「カウンター罠が発動した事によりアルテミスの効果でカードをドロ―し、さらにこの瞬間リバースカードを発動「強烈な叩き落とし」、今ドロ―したカードは捨ててもらいます。そしてアルテミスの効果でさらにドロ―」

「くつ……ターンエンドだ」

こっちの魔法が防御された上にさらに相手はカードを二枚ドロークした。それにレオはくそつと呟いてターンを終了した。黒アルフにターンが移り、彼はカードをドロークする。

「僕のターン、ドローク　永続魔法「悪夢の拷問部屋」を発動します　そしてスカラベの大群を反転召喚してミンゲイドラゴンを破壊し、ステルスバードを反転召喚して相手ライフに1000ダメージを与えます。そして悪夢の拷問部屋の効果でさらに300ダメージ」

黒アルフは一枚の魔法カードを発動した後スカラベの大群でミンゲイドラゴンを破壊し、さらにステルスバードはレオを翼で切る。その瞬間黒アルフの場に存在している悪夢の拷問部屋が光り、レオをまるで鞭が打ったような衝撃が襲った。

「がはっ!?!」LP7000　5700

レオはぐらりとふらつき、それを見る黒アルフは楽しそうに嬉しそうに微笑む。

「ステルスバードとスカラベの大群を裏守備表示に変更し、豊穣のアルテミスを守備表示に変更。カードを一枚セットしてターンを終了します」

「俺のターン……」

黒アルフの場のモンスターが全て守備を取り、レオは表情を歪めながらカードをドロークする。今まで何も出来ずにただなぶり殺しにされている、このままではまずいと分かっているがデッキの相性が悪かった。そう考えつつドロークしたカードを見る。とはっとした表情

を見せた。

「いくぞ、ミンゲイドラゴンの効果発動！ このカードは俺の場にモンスターがない時特殊召喚が可能となる！」

その言葉と共にさつきスカラベに喰い殺されたドラゴンが姿を現し、そう思ったらドラゴンの身体が光に包まれる。

「ミンゲイドラゴンをリリースし、「マテリアルドラゴン」をアドバンス召喚！」

その言葉と共に新たなドラゴンがレオの場に現れ、その姿を見た瞬間黒アルフの表情がほんの僅かだが歪められる。

「そのカードは……」

「そう、こいつこそがお前のロックバーンデッキを切り抜ける切り札。お前のデッキは大体読めた、グラヴィティ・バウンドのような攻撃抑制カードでこっちの攻撃を防ぎつつスカラベの大群で効果破壊、ステルスバードで効果ダメージ、さらにパーミッションまで兼ね揃えている。防御に関しては完璧だ。だが、このドラゴンがお前のデッキを制圧する！ ターンエンドだ！」

黒アルフの呟きにレオは雄々しくそう返すとターンエンドを宣言し、黒アルフはデッキに指をかけた。

簡易状況説明

レオ：LP5700 手札二枚

フィールド：マテリアルドラゴン攻撃表示 伏せカード一枚

黒アルフ：LP8000 手札三枚

フィールド：スカラベの大群、ステルスバード裏守備表示、豊穡のアルテミス守備表示　グラヴィティ・バウンド発動中、伏せカード一枚

「僕のターン、ドロー……カードを一枚セットしてターンエンドです」

「俺のターン、ドロー……よし、俺は「伝説の白石」を墓地に送って魔法カード「調和の宝札」を発動しカードを二枚ドロー。さらに伝説の白石の効果によりデッキから「青眼の白龍」を手札に加える。そして青眼の白龍を墓地に送って魔法カード発動「トレード・イン」！　さらにカードを二枚ドロー！」

レオは流れるようにドローカードを発動してカードを引いていき、計四枚になった手札を見比べていく。

「カードを一枚セットしてターンエンドだ」

レオは四枚に増えた手札の内一枚をセットするとターンを終え、黒アルフはくすつと笑いながら自分のターンを進める。

「僕のターン、ドロー……フフフ。スカラベの大群を反転召喚、マテリアルドラゴンを破壊します」

「！　マテリアルドラゴンの効果発動！　手札を一枚捨てる事によりフィールド上のモンスターを破壊する効果を無効にし破壊！」

「リバーズカード発動、天罰　手札を一枚捨てる事によりマテリアルドラゴンの効果を無効にし破壊します」

黒アルフはスカラベの大群を反転召喚し、それと共に大量のスカラベがマテリアルドラゴンに向かっていくがレオはそれに素早く反応して手札を一枚捨てる。と声を出し、マテリアルドラゴンはスカラベの大群をなぎ払おうと咆哮の準備をする。しかし黒アルフは伏せていたカードを発動し、それと共にマテリアルドラゴンの頭上に暗雲が出来上がる。

「リバースカード発動「盗賊の七つ道具」！ ライフを1000支払う事により天罰の発動を無効にし、破壊！」 LP5700 4700

「!?!」

「お前のデッキがパーミッションを兼ね揃えている事は分かってるって言っただろ？ そうなった時この状況で一番警戒するのはマテリアルドラゴンの効果をわざと発動させて天罰でカウンターする事。まあブラック・コアとか使われたらどうにも出来なかったがな。盗賊の七つ道具が天罰をカウンターし、破壊する。よってマテリアルドラゴンの効果は有効！ 手札一枚をコストにスカラベの大群の効果は無効にし破壊！」

「しまっ」

レオの発動したカウンタートラップが天罰の暗雲を払いのけ、マテリアルドラゴンの咆哮がスカラベの大群を吹き飛ばす。それに黒アルフが少し動揺したように目を開くがレオのコンボはまだ終わっていない。

「さらにお前の罠をカウンターした事により手札から「冥王竜ヴァンダルギオン」を特殊召喚！ ヴァンダルギオンは罠をカウンター

して特殊召喚された時相手フィールド上のカードを一枚破壊する。
俺が破壊するのはグラヴィティ・バウンド！」

「くっ」

冥府より現れた黒き巨竜の咆哮が超重力の網を引きちぎり、黒アルフは表情を少し歪める。

「カウンター罠、盗賊の七つ道具が発動した事によりアルテミスの効果でドロー……僕はカードを一枚セットしてターンエンドです」

「俺のターン、ドロー」

黒アルフの場に新たな伏せカードが現れ、ターンエンド宣言を聞いてからレオは自分のターンを進める。

「俺は「ミラーージュ・ドラゴン」を攻撃表示で召喚し、バトルフェイズ、ミラーージュ・ドラゴンの効果で罠は発動出来なくなる！マテリアルドラゴンで豊穡のアルテミスを攻撃！」

「くっ……」

「さらにヴァンダルギオンで裏守備モンスター、ステルスバードを攻撃！」

マテリアル・ドラゴンのブレスが天使を破壊し、ヴァンダルギオンのブレスがステルスバードを冥府に送る。これで相手の場のモンスターが消えた。

「ミラーージュ・ドラゴンでダイレクトアタック！」

「この程度の痛みじゃ……怖くもありませんよ」LP8000
6400

金色の竜のプレスを受けながらも黒アルフは楽しそうに笑っており、レオはちつと舌打ちをするとターンを終了する。

「僕のターン、ドロー……まさか第一の布陣を破られるとは想定してませんでした、それならこれでどうでしょう？　僕はあなたの場のマテリアル・ドラゴンとヴァンダルギオンをリリースし」

「まさか!?!」

「「溶岩魔獣ラヴァ・ゴーレム」をあなたの場にアドバンス召喚
いくらマテリアル・ドラゴンといえどリリースのコストは破壊では
ありませんからね」

レオの場の巨竜二体が溶岩に呑み込まれ、レオの場に巨大な溶岩で出来た魔獣が姿を現す。その熱気たるや近くにいるだけでダメージを受けそうだ。

「もちろんプレゼントはこれだけではありません、リバーズカード
発動「呪魂の仮面」」

黒アルフは笑いながらさつき伏せていたカードを発動し、それと共にラヴァ・ゴーレムの上に変な仮面が着けられる。

「呪魂の仮面を装備したモンスターは攻撃できず、装備モンスターの
コントローラーはスタンバイフェイズ時に500のダメージを受
けます。カードを一枚セットしてターンエンドです」

「俺のターン！ ドロー！」

「スタンバイフェイズ、溶岩魔獣ラヴァ・ゴーレムの効果で1000ダメージ、呪魂の仮面の効果で500のダメージを受けてもらいます。もちろんそれぞれに悪夢の拷問部屋の効果が発動し、300ポイントずつダメージが増えます。合計ダメージ2100」

「くっ……」 LP4700 2600

ラヴァ・ゴーレムの熱気に仮面の呪いがレオの体力を奪い取り、さらに身体に鞭が打つようなダメージが来る。しかしレオは笑みを浮かべていた。

「……運が悪かったな」

「？」

「もし最初のから空きの二ターンにステルスバードとスカラベの大量にダイレクトアタックをくらっていたら俺は負けていた。詰めが甘かったな！俺はラヴァ・ゴーレムとミラージュ・ドラゴンを取り返す！ライトアンド光と闇の狭間から現れ、全てを制圧しろ！「光の闇の竜」ダイクネス・ドラゴン！！！」

ミラージュ・ドラゴンが光に、ラヴァ・ゴーレムが闇に包まれたと思ったらその二つが組み合わさって弾けとび、中から半身が白で半身が黒の竜が現れた。そしてレオは黒アルフを指差す。

「光と闇の竜でダイレクトアタック！」

「リバーズカード「威嚇する咆哮」を発動」

「光と闇の竜の効果により無効にし、破壊！ 効果により攻撃力、守備力は500ダウンする」

光と闇の竜 攻撃力：2800 2300 守備力：2400 1
900

「……」 LP6400 4100

「ターンエンドだ」

簡易状況説明

レオ：LP2600 手札一枚

フィールド：光と闇の竜攻撃表示 伏せカード一枚

黒アルフ：LP4100 手札二枚

フィールド：モンスターなし 悪夢の拷問部屋発動中、伏せカードなし

「僕のターン……モンスターを守備表示でセットし、カードを二枚伏せてターンエンド」

「俺のターン……光と闇の竜で攻撃！」

「「デス・コアラ」のリバーズ効果は無効にされ、光の闇の竜の攻撃力、守備力ダウン」

光と闇の竜 攻撃力：2300 1800 守備力：1900 1
400

光と闇の竜のブレスで破壊されそうになったコアラは最後の力を振り絞って攻撃しようとするがそれを光と闇の竜は自分の力の一部を使って無効にする。

「……ターンエンドだ」

抵抗の様子が全くうかがえず、レオは不思議そうな表情を見せながらターンを終了する。

「僕のターン……モンスターを守備表示」

「変に引きが強いな。俺のターン！ 光と闇の竜で攻撃！」

「守備モンスターは「剣の女王」、効果は無効にされる」

光と闇の竜	攻撃力：1800	1300	守備力：1400	9
00				

「ターンエンドだ」

「僕のターン……終了」

ついに何もしてこない、そう考えながらレオはカードをドロウする。しかし引きが少し悪くなってきているのはこっちも同じだった。

「さっきから下級モンスターが来ないな……光と闇の竜でダイレクトアタック！ ターンエンドだ」

「……」 LP4100 2800

レオの指示で光と闇の竜は最後の力を振り絞るように攻撃し、黒アルフはそれを無防備に受ける。そしてレオがターンエンドを宣言した瞬間黒アルフはくすくすくと笑い始めた。

「僕のターン……手札を一枚捨てて「ブラック・コア」発動」

「効果により無効！」

光と闇の竜 攻撃力：1300 800 守備力：900 400

ついに光と闇の竜の効果の限界が来てしまった。そして黒アルフの不気味な笑みも強くなる。

「僕の勝ちですね リバーズカードオープン」「リビングデッドの呼び声」、その効果で僕は「溶岩魔獣ラヴァ・ゴーレム」を特殊召喚します」

「くっ……」

「攻撃するのはナンセンスですがあなた確か言いましたよね、ステルスバードとスカラベの大群に攻撃されたら負けていたと。そしてその伏せカードは最初から伏せられていた……つまり攻撃無効カードではない」

「……ご名答だ」

黒アルフの場に溶岩の魔獣が姿を現し、レオは表情を歪める。そして黒アルフがくすくすくと笑いながら言うとレオは少し黙った後肩をすくめてそう言った。

「では、まずはリバースカード「仕込みマシンガン」、あなたの手札とフィールド上のカード合計は六枚、よって1200のダメージに悪夢の拷問部屋で300増えて1500です」

「いででっ！」LP2600 1100

黒アルフが発動したカードから何十発もの銃弾がレオを襲い、ダメージを受けたレオは少しくらつく。ライフは風前の灯となっていた。

「終わりデスね。ラヴァ・ゴーレムで光と闇の竜に攻撃、ボルケーノ・ファイアー！」

そして黒アルフの指示と共に溶岩魔獣が光と闇の竜に向けて炎を噴き出す。するとその瞬間レオが声を出した。

「リバースカード、オープン！」

「なっ！？」

「俺はこいつを攻撃無効カードじゃないとは言ったがこの状況で使えないカードだなんて一言も言っていない！ リバースカード「禁じられた聖杯」！」

レオの出した声に黒アルフが驚いた声を上げるとレオはそう一喝するように叫んでリバースカードの名前を叫ぶ。それと共に光と闇の竜に力が戻っていった。

「聖杯の効果によって光と闇の竜の効果は無効になるため攻撃力は元に戻り、さらに攻撃力が400ポイント上昇する！ 迎撃しろ光と闇の竜！！ ダークパプティズム！！」

光と闇の竜 攻撃力：800 2800 3200

光と闇の竜は目を見開くと闇のブレスを吐いて溶岩を吹き飛ばし、ラヴァ・ゴーレムを貫いて破壊する。そのブレスは黒アルフにも直撃した。

「がはっ!?!」 LP2800 2600

「もう何も出来ないだろ？ 俺のターンだ！ 光と闇の竜よ、アルフを闇から解放しろ!!! シャイニングブレス!!!!」

「うわあああああ!!!」 LP2600 0

レオの指示と共に光と闇の竜は光のブレスを吐いて黒アルフに止めを指す。そしてデュエルが終わった事によりソリッドビジョンが消えていくとレオはアルフの方に向けて走っていった。

「よっど」

そして力なく倒れそうになったアルフを受け止めるとその場に優しく寝かせる。そして息を吐くと身体を少し動かしながら呟いた。

「いてて……危ないところだったな、相手のライフを0にする効率で言ったら今まで戦った中でトップだ」

そしてさっきのデュエルを思い返しながらそう呟いた。少し離れたところではまだライと黒エルフィのデュエルが続いている。

第二部第十話 龍VS拘束（後書き）

……高レベルモンスター主体ビートダウンでロックバーンに勝つのがこんなに難しいとは思いませんでした……最初の二ターンで攻撃されてりや実質負けでしたし……なんたるこのデュエル……すつきりしねえ気が……あ、悪夢の拷問部屋発動させなきゃよかったのかあ、でもそれがないと嫌だし……。

ま、とりあえずそんな訳で黒アルフのデッキはロックバーン、何気にパーミッションまで組み込んでみました。攻撃は一切考えない仕様です。最後無茶な攻撃したのもまたこっちの都合ですけど。

さて次回はライとエルフィ……次は大丈夫かな？両方ともビートダウンだから今回みたいな書き慣れないデッキタイプだから混乱する事はないはずだけど……ま、それでは。

第二部第十一話 侍VS墮天使

レオと黒アルフがデュエルを行おうというのと同じ時、ライもデュエルディスクを構えて目の前の少女 黒エルフィを見ていた。彼女は自分が知らない冷酷な微笑みを浮かべており、こうして相對しているだけで背筋に寒気が走るような感覚さえしてくる。

「あなたを倒すのが命令よ……勝負」

「……ああ」

黒エルフィの静かな言葉にライは頷いて返しデュエルディスクを構える。そして二人はデッキから手札を五枚抜き取って叫んだ。

「デュエル!!」

「そっちからどうぞ、レディファーストだ」

「じゃあ遠慮なく、ドロー」

デュエル開始の宣言の直後ライがそう言っていると黒エルフィはくすつと冷たく笑いながら言っけてカードを引く。

(あいつのデッキは上級天使のビートダウン、そういうタイプは後攻が得意のはずだ)

「私は魔法カード「エンジェルキャッチ」を発動、デッキからカードを二枚ドローし、その後手札を一枚捨てる」

黒エルフィは天使の施しの下位互換のようなドロカードを発動してカードをドロし、手札を眺め回すとその内の一枚を取った。

「永続魔法「神の居城　ヴァルハラ」を発動し、効果で手札から「墮天使アスモディウス」を特殊召喚」

「墮天使！？」

黒エルフィが召喚したのは黒き闇の天使　墮天使、その姿にライが驚きの声を上げる。墮天使なんて知る限りエルフィのデッキに入っていないかった。そんなライの考えをよそに黒エルフィは続ける。

「アスモディウスの効果によりデッキから「墮天使スペルビア」を墓地に送る。ターンエンド」

「俺のターン！　ドロー！」

黒エルフィはデッキからまたもや黒い壺みたいな姿をした墮天使のカードを墓地に送るとターンを終了し、それを聞いたライはカードをドロして手札を見た。

「（エルフィとのデュエルでワンターン目からでかいのが来るのは普通だけど……攻撃力3000か……）よし、俺は「切り込み隊長」を召喚し効果で「ロケット戦士」を特殊召喚！　永続魔法「連合軍」を発動し、二人の戦士の攻撃力はそれぞれ400ポイント上昇する！」

切り込み隊長	攻撃力：1200	1600
ロケット戦士	攻撃力：1500	1900

「さらに切り込み隊長に装備カード「デーモンの斧」を装備、攻撃力1000アップ!」

ライの場に二人の戦士が現れ、その後ろに数人の戦士が現れた事で彼らの心が鼓舞されたのか攻撃力が上昇し、さらに切り込み隊長の左手には剣の代わりに悪魔の顔が象られた斧が握られる。

切り込み隊長 攻撃力：1600 2600

「行くぞ、ロケット戦士で堕天使アスモディウスを攻撃! この瞬間ロケット戦士の効果発動、無敵モード!」

ライの指示と共にロケット戦士はその姿をミサイルのように変わっていきアスモディウスに突進、アスモディウスは闇の波動を撃ち出して攻撃するがロケット戦士はそれを力づくで突破するとアスモディウスの腹を抉るように突進を決めた。

「くっ……」

「俺のバトルフェイズ時ロケット戦士は戦闘で破壊されず、また戦闘ダメージも0になる。そしてロケット戦士がモンスターを攻撃した時そのモンスターの攻撃力は500ダウンする」

堕天使アスモディウス 攻撃力：3000 2500

ロケット戦士の突進をどてっ腹に受けては流石にきついのかアスモディウスの攻撃力がダウンする。これで切り込み隊長の攻撃力が上がった。

「切り込み隊長でアスモディウスに攻撃! 切り込み斬!」

ライの指示と共に切り込み隊長は一気に敵陣に切り込んでアスモディウスに斬りかかり、左手に持った斧がアスモディウスを斬り倒した。

「やるじゃない……墮天使アスモディウスの効果発動！ このカードが破壊されて墓地に送られた時、フィールド上にアスモトークンとディウストーンを特殊召喚。アスモトークンはカードの効果によって破壊されず、ディウストーンは戦闘によって破壊されない」
LP4000 3900

「くっ、カードを一枚セットしてターンエンド」

黒エルフィはアスモディウスがやられたのを見てウッフと笑いながら呟き、続けるように声を出す。それと共にアスモディウスが残した闇が二体のトークンを形作った。それを見たライは少し唸ってカードを一枚伏せるとターンを終了する。

「私のターン、ドロ。ディウストーンを守備表示に変更し、アスモトークンをリリースして」ライトニングギア「光神機 轟龍」をアドバンス召喚。このカードはリリース一体での召喚が可能、その代わりにエンドフェイズに破壊されるけど……切り込み隊長を破壊する分には充分。轟龍で攻撃！」

「ぐっ！」 LP4000 3700

轟龍の突進を受けた切り込み隊長はなすすべなく破壊され、ライはその衝撃に表情を歪める。

「エンドフェイズ、轟龍は自身の効果で破壊される。ターン終了」

「俺のターン！ ドロー！」

黒エルフィの言葉に従うように轟龍はその姿を消していき、彼女のターンエンド宣言を聞くとライはカードを引く。しかし相手の場にしているのは戦闘で破壊できないディウストークン、厄介な事この上なかった。

「……カードを一枚セットし、モンスターを守備表示。ロケット戦士を守備表示に変更してターン終了」

今やれる事といえばこれくらい、そういうようにライはモンスターを一体、伏せカードを一枚場に出してロケット戦士に守りの体勢を取らせるとターンを終了した。

簡易状況説明

ライ：LP3700 手札零枚

フィールド：ロケット戦士守備表示、モンスター一体裏守備表示
連合軍発動中、伏せカード二枚

黒エルフィ：LP3900 手札四枚

フィールド：ディウストークン守備表示 ヴァルハラ発動中、
伏せカードなし

「私のターン、ドロー」

黒エルフィはカードをドローするとそれを見、少し考えるように黙り込んでから動き出した。

「勝利の導き手フレイヤ」を召喚して永続魔法「コート・オブ・ジャスティス」を発動。私の場にレベル1の天使族が存在する時手札から天使族モンスターを特殊召喚できる。私が特殊召喚するのは「アテナ」！」

ポンポンを持った天使が姿を現したと思うと黒エルフィの場に出てきた物体が光だし、その光の中から凜とした雰囲気を漂わせる女神と呼ばれそうな女性が姿を現した。

「アテナの効果発動、私はフレイヤを墓地に送って墓地の「墮天使スペルビア」を特殊召喚。そしてスペルビアの効果発動、このカードが墓地から特殊召喚された時スペルビア以外の天使を特殊召喚できる。その効果で私は「光神機 轟龍」を特殊召喚」

「エルフィの得意パターン……がスペルビアで強化されてる……高レベルモンスターが三体……」

黒エルフィの言葉を聞いたフレイヤは光に包まれて消えていき、その瞬間フレイヤを包んだ光が黒く染まると光の中から壺みたいな身体をした墮天使が姿を現す。さらにその壺のような身体の中からさつき破壊された光神機まで現れた。それにライが啞然としながら呟くと黒エルフィは続ける。

「アテナの効果発動、私の場に天使が召喚、特殊召喚されることに600ポイントのダメージを与える。スペルビアと轟龍が特殊召喚された事により1200のダメージ。ジャッジメント・レイ！」

「ぐあつ!?!」 LP 3700 2500

黒エルフィの言葉と共にライに天からの光が降り注いでライのライフを削り、それを見た黒エルフィはふつと鼻で笑うと相手の場を指差した。

「終わりね？ 轟龍でロケット戦士を攻撃」

「そうはいかない、リバースカード発動「攻撃の無力化」！ 轟龍の攻撃を無効にしてバトルフェイズは終了だ！」

「チツ、ターン終了」

黒エルフィの冷めた言葉での指示と共に轟龍はロケット戦士に突進をするがそれにカウンターするようにライが発動した障壁に攻撃は阻まれ、黒エルフィは舌打ちをするとターンを終了した。

「（な、なんか怖いな…）…俺のターン！ ドロー！」

黒エルフィの変な威圧感にライは押されつつもカードをドローし、それを見るとおとした表情を見せて動いた。

「俺はロケット戦士をリリースし、「光帝クライス」をアドバンス召喚しクライスの効果を発動！ フィールドのカードを二枚まで破壊し、そのカードのコントローラーは破壊された数だけカードをドローする。俺が破壊するのは俺の場の伏せモンスターと伏せカード一枚ずつ。そしてこの瞬間破壊される伏せカードを発動「強欲な瓶」！ 俺はカードを一枚ドローし、強欲な瓶と伏せモンスター、ネクロ・ガードナーが破壊された事によりさらにカードを二枚ドロー！」

ライの場に光り輝く帝が姿を現してその光の波動を受けたライの場

のカード二枚が破壊され、ライは一気に三枚のカードをドロウする。そしてその内の一枚を見るとよしと頷いた。

「さらに光帝クライスをリリースして「ターゲット・ウォリアー」を特殊召喚！ このカードは戦士族モンスター一体をリリースする事で特殊召喚でき、その効果で特殊召喚した時このカードの攻撃力はリリースしたモンスターの元々の攻撃力分上昇する！ もちろん連合軍の効果も適用される！」

クライスが光に包まれたと思うと光の中から巨人が姿を現し、黒エルフィの場を見下ろす。そしてライは一気に攻撃を指示した。

ターゲット・ウォリアー 攻撃力：1200 3600 3800

「ターゲット・ウォリアーでアテナを攻撃！」

「かはっ……」 LP3900 2700

ターゲット・ウォリアーの拳にアテナは打ち砕かれ、黒エルフィの身体にも衝撃が走る。

「ターン終了」

簡易状況説明

ライ：LP2500 手札二枚

フィールド：ターゲット・ウォリアー攻撃表示 連合軍発動中、伏せカードなし

黒エルフィ：LP2700 手札二枚

フィールド：墮天使スベルビア、光神機 轟龍攻撃表示、デイ

ウストークン守備表示　ヴァルハラ、コート・オブ・ジャスティス
発動中、伏せカードなし

「私のターン、ドロー……スペルビアをリリースし、「光神テテュ
ス」を召喚。轟龍を守備表示に変更してカードを一枚セット、ター
ンを終了」

「俺のターン、ドロー！……（…普通に考えればあの伏せカードは攻
撃無効カード……下手に攻撃したら逆にまづくなるよな、今手札に
この状況で使えるモンスターもないし……）…カードを一枚セット
してターン終了」

ライは黒エルフィを見ながらそう考え、カードをセットするとター
ン終了を宣言する。すると黒エルフィはくすつと笑った。

「私のターン、ドロー。ドローカードは天空騎士パーシアス、よっ
てテテュスの効果が発動してさらにドロー、コーリング・ノヴァ。
ドロー、ジェルエンデュオ。ドロー、スケルエンジェル。ドロー、
シャインエンジェル。ドロー、マシユマロン」

「どれだけ引くんだよ……」

黒エルフィが淡々とカードをドローしていくのにライがそう呟くと
次に引いたカードは天使族モンスターではなかったらしく黒エルフ
イはドローを止める。そして黒エルフィはまた動き出した。

「……リバースカード発動「打ち出の小槌」」

「ブラフ！？」

「私は四枚の手札をデッキに戻してシャッフル、新たに四枚のカードをドロウする。この内一枚はヘカテリス、よってテテユスの効果でさらにドロウ、スケルエンジェル。ドロウ、ダーク・ヴァルキリア。ドロウ、アルカナフォーエクス EX THE DARK RULE R。ドロウ、天空勇士ネオパーシアス」

「……」

もうツツコミが思いつかないとばかりにライは黙って黒エルフィのドロウを眺める。そしてドロウが終了するとエルフィは最後に引いたカードを発動した。

「魔法カード「非常食」、コート・オブ・ジャステイスとヴァルハラを墓地に送ってライフを2000回復し、轟龍をリリースして」^{エンジェルナイト}天空騎士パーシアスを召喚、手札からフィールド魔法「天空の聖域」^{エンジェルブレイブ}を発動、天空騎士パーシアスをリリースし「天空勇士ネオパーシアス」を特殊召喚」LP2700 4700

黒エルフィの場の城と光を放つ物体が白い光の粒子となって黒エルフィに降り注ぐと彼女のライフが回復し、轟龍が消えていったと思つたらそこに天空騎士が出現、さらに辺りが天使達の聖域に変わっていく。そして最後に先ほど出てきた天空騎士が光に包まれたと思つたらその姿は結晶化したような天使へと変わっていた。

「天空勇士ネオパーシアスは天空の聖域が存在し且つ私のライフがあなたのライフを超えている場合その分だけ攻撃力を上昇させる。ライフの差は2200、よってネオパーシアスの攻撃力は4500」

天空勇士ネオパーシアス 攻撃力：2300 4500

「くっ……」

黒エルフィの言葉と共に天空勇士の身体に光が纏われ、その攻撃力が一気に跳ね上がる。それを見たライの表情が歪み、黒エルフィはふふつと冷酷に笑うとターレット・ウォリアーを指差した。

「天空勇士ネオパーシアスでターレット・ウォリアーを攻撃！」

「墓地のネクロ・ガードナーを除外し、攻撃は無効になる！」

黒エルフィの指示と共にネオパーシアスは白い光線でターレット・ウォリアーを狙い撃つがライがそれに反応したように叫ぶとライの墓地から一人の戦士の魂がターレット・ウォリアーを守るように立ちはだかつて光線を受け止めた。

「チツ、ヘカテリスを手札から捨ててデッキから神の巨城　ヴァルハラを手札に加える。カードを三枚セットしターン終了」

黒エルフィはまた舌打ちを叩くとカードを三枚セットしてターンを終了した。これで相手の手札は六枚、そしてその全てがモンスターであるはずである事は分かった。

「俺のターン、ドロー！……（…伏せカードの内一枚はさっき手札に加えたヴァルハラのはず。だとするともう一枚は……いやそれ以前にあの攻撃力のネオパーシアスをなんとかしないと押し切られる…）
…「戦士の生還」を発動し、墓地から切り込み隊長を手札に加えて召喚！ その効果で「復讐の女戦士ローズ」を特殊召喚し、レベル4のローズとレベル3の切り込み隊長チューニング！ シンクロ召喚「パワー・ツール・ドラゴン」！」

ライの場に現れた二人の戦士が光に包まれ、その光の中から工具を背負ったような機械竜が姿を現す。

「それが何？」

「パワー・ツール・ドラゴンの効果発動！ 俺はデッキから三枚の装備魔法カードを選択し、お前がランダムにその中の一枚を選択。選択したカードを手札に加えて残りはデッキに戻す。俺はこの三枚を選択する」

機械竜の姿を見た黒エルファイが冷めた目でそう言うとライはそう返してデッキの中から三枚のカードを選ぶとそれが装備魔法であると確認するように見せ、黒エルファイが頷くとその三枚をシャッフルした。

「さあ、どれにする？ お前から見てでいいぞ」

「……左」

「よし、後はデッキに戻してシャッフル。そして装備魔法「融合武器ムラサメブレード」を発動！ ターレット・ウォリアーの攻撃力が800ポイント上昇する！」

ターレット・ウォリアー 攻撃力：3800 4600

ライは黒エルファイが選択した装備魔法を手札に加えた直後に即発動し、ターレット・ウォリアーの右手が剣と融合する。

「ターレット・ウォリアーでネオパーシアスに攻撃！ さらにパワ

「ツール・ドラゴンでテテユスに攻撃！」

「ちっ……でも天空の聖域の効果でダメージは0よ」

「カードを一枚伏せてターン終了」

二体の天使は一気に破壊され、黒エルフィは少し表情を歪める。そしてライは続けてターンエンドを宣言した。

簡易状況説明

ライ：LP2500 手札なし

フィールド：ターレット・ウォリアー、パワー・ツール・ドラ

ゴン攻撃表示 連合軍発動中、伏せカード一枚

黒エルフィ：LP4600 手札六枚

フィールド：デイストークン守備表示 天空の聖域発動中、伏せカード三枚

「私のターン、ドロ……魔法カード「打ち出の小槌」」

「二枚目!？」

「私は手札を一枚のみ残して残りはデッキに戻してシャッフル、五枚ドロ……リバーズカードオープン、「光神化」」

「何が来る?……」

黒エルフィはモンスターばかりの手札を一気に交換すると魔法カードを発動し、そのカードはは神々しい光を発し始める。それにライが緊張しているように呟いていると手札を取った。

「スケルエンジェル」を特殊召喚」

「……え？」

そこに現れたのは通常召喚可能なレベル2である小さな天使、しかもスケルエンジェルはリバーズモンスターだ。それにライが思わず声を出すと黒エルフィはまた別の手札を取った。

「速攻魔法「地獄の暴走召喚」、このカードは相手の場にモンスターが存在し、私が攻撃力1500以下のモンスターの特殊召喚に成功した時発動できる。私は手札、デッキ、墓地からスケルエンジェルを攻撃表示で二体特殊召喚。あなたも場のモンスターと同名モンスターを特殊召喚できるわよ？」

「くっ、俺のデッキにターレット・ウォリアーとパワー・ツール・ドラゴン一枚だけだ……というかパワー・ツール・ドラゴンは大会でアルフに貰ったやつだし……」

黒エルフィの言葉にライが悔しそうにそう呟くと黒エルフィはあらそうと返し、さっき交換しなかった手札を取った。

「スケルエンジェル三体を墓地に送り、さあ来なさい黒き運命の力……」「アルカナフォーSEX THE DARK RULER」

小さな三体の天使が闇に包まれ、その闇の中から現れたのは黒い身体の天使というよりドラゴンのような外見の天使。その攻撃力は4000を誇っていた。

「DARKRULERの効果発動、コイントスを行いその表裏によって効果が決定する。コイントス」

その言葉と共にソリッドビジョンのコインが現れ、黒エルフィのコイントスの言葉と共にコインが弾かれたように回転して宙を舞う。そのコインは表を見せていた。

「表の効果は二回攻撃可能と二回目の攻撃後守備表示になり次のタインの表示形式変更不能、まあいいかしら。「勝利の導き手フレイヤ」を召喚し、DARKRULERに「ダグラの剣」を装備、攻撃力を500上昇。さらにフレイヤの効果で攻撃力が400上昇」

アルカナフォースEX THE DARK RULER 攻撃力：
4000 4400 4900

黒き竜天使の身体に不思議な形状の剣がくつついて攻撃力が上昇し、さらにフレイヤの応援みたいな仕草が黒き天使に力を与える。これで攻撃力はターゲット・ウォリアーを上回った。

「DARKRULERでターゲット・ウォリアーを攻撃」

「ぐっ!？」 LP2500 2200

「ダグラの剣の効果で与えた戦闘ダメージ分ライフを回復、さらにDARKRULERでパワー・ツール・ドラゴンを攻撃、これで終わりよ！」 LP4600 4900

「リバースカード、オープン「ガード・ブロック」! この戦闘による俺への戦闘ダメージを0にし、俺はカードを一枚ドロウする」

DARKRULERの放った闇の波動がパワー・ツール・ドラゴンを貫くがその闇の波動はライが発動した障壁に阻まれ、その効果で

ライはカードを一枚引く。

「効果によりDARKRULERは守備表示になり次のターン表示形式は変更できない……往生際の悪い。あなたの手札はそれ一枚でフィールドには何も無い。対する私には手札も、次のターンこそ攻撃できないものの強力なモンスターもいる。あなたの敗北はもはやアルカナの力が示す運命！」

「……御託はいい、ターンエンドか？」

黒エルファイが笑いながらそう話しているとライはそう尋ね返し、それを聞いた黒エルファイは笑って頷く。そしてライはデッキに指をかけた。

「俺は絶対に諦めねえ、これが俺の信念だ！ ドローー！！」

ライはまるで侍が刀を抜くかのようにカードをデッキから引き抜き、それを見ると動いた。

「リバースカードを一枚セットし魔法カード「神より賜りし宝札」を発動！ 俺のライフ1000をコストにお互いのプレイヤーは手札が六枚になるようにドローする。リバースカードオープン「増援」！ その効果でデッキから鉄の騎士ギア・フリードを手札に加え召喚し魔法カード「拘束解除」発動、拘束となりし鉄の鎧を捨て真の力を解き放て！ デッキより「剣聖 ネイキッド・ギア・フリード」特殊召喚！！」LP2200 1200

ライは黒き鎧の騎士を呼び出すとその鉄の鎧が内部から光を放ち、鉄の鎧が弾け飛ぶと中から筋骨隆々の男性が姿を現し、どこからともなく現れた光の剣を握り締めた。そしてライは続けて手札を取る。

「装備魔法「団結の力」をネイキッド・ギア・フリードに装備！
ネイキッドの効果でディウストークンを破壊！」

「!?!」

ライの指示と共にネイキッドの放った衝撃波がディウストークンを斬り裂くが黒エルフィはそれより前に破壊対象がそれである事に驚く。戦闘破壊されないのは確かに厄介だがこの場合DARKRULERを破壊するべきだ。そう考えているとライは続けて声を出した。

「お前の言う敗北の運命は正々堂々、俺の剣が斬り倒す！ 魔法力
ード「二重召喚」発動！ その効果で「切り込み隊長」を召喚し、
効果で「コマンド・ナイト」を特殊召喚！」

ライの場にさらに二人の戦士が呼び出される。とコマンド・ナイトから発される覇気がネイキッドに力を与えていき、さらに背後の戦士達の鼓舞が強くなった。

「コマンド・ナイトの効果で俺の場の戦士達は攻撃力が400上昇し、さらに連合軍の効果で全員攻撃力600アップ！ そしてネイキッドは団結の力の効果で攻撃力2400アップだ！」

「攻撃力……6000」

「まだだ！ フィールド魔法「侍の戦場」を発動！ ルールにより
天空の聖域は破壊され、俺の場の戦士達の攻撃力が500上昇する
！」

ライの言葉に黒エルフィが即暗算したようにネイキッドの攻撃力を

言い当てる。ライは最後の手札を手にとって発動。それと共に黒エルフィの場にあつた聖域が崩れ去り、辺りは合戦の場へと変わっていった。その影響を受けてライの場の戦士達は攻撃力をさらに上昇させる。

剣聖	ネイキッド・ギア・フリード	攻撃力：2600	3000
3600	6000	6500	
切り込み隊長	攻撃力：1200	1600	2200
2700			
コマンド・ナイト	攻撃力：1200	1600	2200
2700			

「我が最強の剣よ、運命を斬り拓け！ 剣聖ネイキッド・ギア・フリードでアルカナフォーSEX、THE DARKRULERを攻撃
！！」

黒エルフィの表情が強張り、ライの攻撃指示と共にネイキッドはDARKRULERに突進していく。そして一気に地面を蹴って跳躍すると手に持っている光の剣を振り下ろし、DARKRULERを斬り倒した。

「嘘!？」

「これで終わりだ！ 切り込み隊長でフレイヤを攻撃し、破壊！
コマンド・ナイトでダイレクトアタック!!」

「きゃあああああつ!!」LP4900 0

ネイキッドの切り拓いた道を切り込み隊長とコマンド・ナイトが走って黒エルフィを斬り倒す。相手のライフが0になった事を確認し、ライはふうと安堵の息を吐いた。すると黒エルフィの様子が変わっ

たのに気づく。

「う……あ……」

「とつと、大丈夫か!？」

彼女の声を聞いたライがその声をかけながら走り寄るとエルフィは翡翠色の瞳をこっちに向ける。その輝きに陰りは感じられず、ライはふうと息を吐いた。

「元に戻ったんだよな? あっちの人格は?」

「え、ああ、うん、私の中に残ってるけど多分大丈夫……で、でも私はライを……」

ライの問いにエルフィはこくと頷いて返した後すまなそうな口調で言うがそれを聞いたライは笑うと返した。

「大丈夫だつて、気にすんな。とにかくお前が生きて戻ってきてくれただけで嬉しいよ」

「ライ……」

ライの言葉を聞いたエルフィは突然ライに抱きつき、それにライも照れたように笑いながらよしよしと彼女の頭を撫でる。

それを少し遠くで見っていたレオはくすくすと苦笑しながら未だに気絶しているアルフを見る。するとガラガラガラと車輪の音が近づいてきたのを聞き、音の方に目をやる。メリオル達が乗った馬車がやってきた。

「遅かったな、皆は？」

「流石にレッドアイズとか大きいのを乗せるのは無理だったから皆の使役している精霊をエンディミオンに飛ばして位置を報告したから多分もうすぐ応援が来るはずよ」

「そうか……ま、何もなかったみたいで何よりだ」

「え、ええ……」

レオの問いにメリオルがそう返すとレオは安心したように言い、それにメリオルは微笑みながら頷く。そしてアルフを見て言った。

「大丈夫なの？」

「多分な。まあデュエルに負けたエルフィが元に戻ってんだから大丈夫だろ」

メリオルの言葉にレオはそう言いながら指を差し、指の方を見たメリオルはくすつと笑う。

そしてエルフィが泣き止むのを待ってからレオが二人を呼びかけ、ライとエルフィ、アルフを乗せてからレオは馬車に乗ってメリオルから手綱を受け取ると馬車をエンディミオンに向けて走らせる。

ちなみにライとエルフィは帰るまでの間ネラやヒータ達に色々弄られまくったのはまた別のお話。

第二部第十一話 侍VS墮天使（後書き）

やっと書きあがったわライVS黒エルフィ。いや黒エルフィの墮天使アルカナフォース混合天使デッキが予想以上に無茶苦茶で参った。結局ライの切り札の一枚の予定だった「D・HERO B100 D」は出せずじまいでしたし。まあそれを言ったら本来黒エルフィはアルカナフォースEX、DARKとLIGHTの両方を出す予定だったんですけどね。どんな無茶苦茶なバトルになっただけでしょう？というか今更ながらDARKを召喚した後どうやってLIGHTを出せばいいんだろうか？……。

ちなみに説明すると黒エルフィのデッキは見ての通り普通の天使に墮天使、拳句にはアルカナフォースまで組み込んだごちゃ混ぜ天使デッキ。ちなみに普通のエルフィに戻った後もこのデッキを少し改良して使用する予定です、むしろこのために黒モードをやったんですから。まあアルフは今まで通りの機械デッキですけどね、あの口ツクバーンは考え中です。

いやあアルカナコラボデュエルにセツとのデュエル希望でのレオと一緒にエルフィまでアテナとの戦い希望でオファーしちゃったから難航していたこのデュエルを無理矢理書き上げちゃいました……いやあうん、疲れたよ……手札枚数足りなくて結局最後ライにもあのチートドロリーオリカを使わせちゃったし。むしろこのデュエルあれだけドロリーやって黒エルフィの手札にオネストが一枚も来なかった事が奇跡に近いよ……。

さて次はどうするか？この辺で一回閑話休題とかいうやつでも出するか？ま、それでは。

第二部第十二話 魔術師達のどたばた日和

「という訳で！ アルフを元気付け隊の会を始めます！」

「ちょっと待った」

ここは魔法都市エンディミオンにある魔法学校の一教室。その黒板にでかでかと最初に言った言葉を書きながらブラック・マジシャン・ガールことネラの言葉にエリアがストップをかけ、ネラがどしたのという風に首を傾げるとエリアはため息をつきながら口を開いた。

「何よそのアルフを元気付け隊というのは？ メンバー誰？」

「見ての通りアルフを元気付けさせたための隊だよ？ メンバーはこの全員」

「勝手に決めるな！」

エリアの問いにネラがさらっというツツコミを入れるがごとくエリアが叫び、それにヒータがやははと笑いながら言った。

「別にいいじゃねえか。なっ？ ウィン、ライナ、アウス」

「うん。アルフ君この前帰ってきてから元気がないもん」

「はい、何が出来るかは分かりませんがどお力にはなりたいです」

「そ、そうですね……ボクも協力します」

「僕は知らん、勝手にやっている」

ヒータの言葉にウィンとライナがにこにこ微笑みながら言うつとアウスもそれに説得されたように頷き、ダルクは魔術の教科書を読みながら我関せずとばかりに返す。エリアもしょうがないとため息をつくと諦めたように呟いた。

「……分かったわよ。で、具体的に何するの？」

「それを今から考えるのよ！ で、何か意見ある？」

エリアの問いにネラはあっさりともう堂々とした声で言い、今ここにいる六人を見回しながら尋ねる。まあダルクは参加するつもりがないため実質五人と考えていいだろう。すると最初にヒータが手を挙げた。

「そつだ、手料理を作って渡すつてのはどうだ！」

「おおいいねえ！ やっぱそついうのを元気付けるには一番の手だよ！」

ヒータの提案にネラも瞳を輝かせながらそつ言い、二人はうんうんと頷きあう。すると呆れたようにため息をついたエリアがゆっくりと手を挙げながら少し言いくそつに言った。

「一つ聞くけど、この中にまともに料理が出来るメンバーっているの？……私はあんまり自信ないわよ？」

「「あ……………」」

エリアの言葉にヒータとネラは忘れてたといわんばかりに声を合わせ、お互いをゆっくりと見る。するとヒータはふるふると首を横に

振った。

「い、いや、うん。ほら、オレって食う専門だから……」

「あたしも…… ウイ、ウイン、アウス、ライナ……」

「…… プチリュウにご飯を作ってあげたら逃げられました……」

「デーモン・ビーバーに、同じく……」

「ハッピー・ラヴァーにこれ以上ないくらい不幸な表情されました……」

ヒータの言葉にネラもこくこくと頷いた後何かを頼むような視線でウインとアウスとライナを見るが、三人はしゅんとうつむきながらそう呟く。つまり霊使いは料理全滅、するとそこで思い出したようにライナがダルクを見ながら言った。

「そういえば前に一度だけ、ダルクに美味しい料理をご馳走になりました」

その言葉に五人は一斉にダルクを見る。彼は教科書で隠してはいるものの苦々しい表情を作っており、やがて言いにくそうに口を開いた。

「別に大したものじゃない。ただ遅くまで勉強をしていると腹が減って、たまに夜食を作るだけだ……それに、教えるほど上手くはないぞ」

「でも、とっても美味しかったです。また作ってくださいね？」

「き、気が向いたらな……」

ダルクがぼそぼそと呟くように言うとライナがにっこりと微笑みながら返し、それにダルクは少し恥ずかしそうに呟く。するとネラがはあくため息をつきながら呟いた。

「じゃあ料理は駄目つと……あ、じゃあ宝石つてのはどう!？」

「ボク達のお小遣いじゃ全員分集めても買えませんよ？」

ネラのはつとした表情での提案にアウスが冷静にそう突っ込むとネラはふむうと口元に手をやって考え出し、やがて思いついたように目を輝かせると言った。

「そつだ！ 宝玉獣のそこに行つて盗んでくるとか！」

「ギゴバイト、ちょっとあの馬鹿の頭ぶん殴りなさい」

ネラの言葉を聞いた瞬間エリアがまた呆れたようにため息をついた後自身の使い魔ことギゴバイトにそう指示し、ギゴバイトはよしとばかりにぼきぼき拳を鳴らし始める。それを見た瞬間ネラは両手を前に突き出しながら声を出す。

「わわわ待つた待つた！ 流石に冗談だつて！ そんな事したら師匠に怒られちゃう」

「ヴァルツ先生どころかエンディミオン陛下からお叱りをくらうわよ。宝玉獣の命の源たる宝玉を盗もうなんて」

ネラの言葉にエリアは頭痛がしてきたというように額を右手で押さえ、ネラにはやははと笑う。するとダルクがふと口を開いた。

「そついえばいいのか？ レンを放っておいて」

「ほえ？ ありゃ、そついやレンがいない……いつつも静かだから気づかなかつた」

ダルクの言葉にネラは教室を見回しながら気づいたように言つと他のメンバーも教室を見回す。確かにサイレント・マジシャンことレンの姿がどこにもない、するとダルクは続けて言った。

「そりゃそつだろう、レンは今日はアルフと約束があると言つてすぐさま帰つていった」

「ええっ！？ ちょっとダルク、なんで言わないのさー!!」

「聞かれなかつたからな。それに本を読みながら聞き流していたから正直今まで忘れていた」

ダルクの言葉にネラが驚愕の声を上げてわめくようにダルクに言い、それにダルクはさらつと返す。それを聞いたネラはうっつと唸つた後声を出す。

「こつなつたらアルフとレンを探そう！ いいとこ取りされてたまるもんかー!!」

「おつしゅあ！ ほら行くぞー!!」

ネラとヒータはそつ言つとアウス、ウイン、ライナを捕まえて教室を出て行き、エリアはやれやれと息をつくつとダルクの方を見て肩をすくめ、彼もふつと笑みを浮かべる。それから放つておくわけにも

いかないために二人も教室を出て行った。

一方魔法都市エンディミオンの城下町商店街とでもいうべき場所を歩いているアルフとレン、二人は肩を並べて少し雑談をしながら歩いており、端から見たらまるで恋人のようだった。そして一軒の店でアルフが二人分のジュースを買ってその内の一つをレンに手渡しながら言った。

「なんかごめんね、こんな事に付き合わせちゃって」

「そんな……き、気にしないでください」

アルフのどこかすまなそうな言葉にレンはどきまぎしたような表情でそう返す。それにアルフは左手で髪をかきながら続ける。

「この前レオさんと……あいつが戦ってから変にもやもやしちゃってさ……ありがと、少しは気が楽になった気がするよ」

「ちょっと待ったー!!!」

アルフがレンにそう言っていると突然そんな声が響き、アルフとレンは声の方を向く。それと共にそこにネラ達が到着、僅かに遅れてエリアとダルクもやってきた。そしてネラはアルフとレンを見ながら声を出す。

「もうレンずるいよ！ アルフとデートってなんで言ってくれなかったのさー！」

「デ、デート!? ち、違う、私は昨日たまたまアルフさんと会って今日散歩に付き合っ……って言われただけで……」

ネラの言葉にレンは頬を少し赤くしながらおどおどとした声で返し、ネラはじとーっとした目でレンを見る。するとアルフがきよとんとした顔を見せながら言った。

「え、えつと……どうしたの？」

「へ？ あ、いやその……さ、散歩ならなんであたし達にも声かけてくんなかったのかな……って……」

「え？ でも皆忙しいかなって思って……魔術の勉強って大変だし……」

アルフの疑問の声にネラは我に返ったような呆けた声を出した後ごまかすように言い、それにアルフは髪をかきながらそう返す。それを聞くとネラはぐつと拳を握りながら声を出した。

「アルフが元気ないってのなら勉強なんて放って行くってば！ ね、皆！」

ネラはアルフに向けてそう言った後くるりと後ろの霊使い達の方を向いて確認するように続け、それにダルクだけはどうかなのかなというような表情を見せるが他のメンバーは大なり小なり頷く。それを確認するとネラはアルフの方を向き直して元気よく続けた。

「ほらー！」

「そうなんだ……皆も僕の事を心配してくれてたの？」

「当たり前じゃん！ あたしアルフの事が好きなんだしっ！？」

ネラの言葉を聞いたアルフは少し表情を和らげながら言い、それにネラは思わずそう叫ぶように言った後自分の言った事に気づいて口を両手で押さえる。それを聞いたアルフはくすつと笑った後にっこりと柔和に微笑んだ。それにネラだけでなくレンも、後ろの霊使い達もダルクを除いて思わず顔が赤くなる。

「そうなんだ。ありがとう、僕もネラの事が好きだよ」

「えっ？」

アルフの言葉にネラはドキツとした表情になり、次にアルフはレンやヒータ達霊使いの方を見る。

「もちろん、レンさんも皆も好き」

「……えっ？」

その言葉にネラは呆けた声を出し、次にアルフは満面の笑顔で告白した。

「皆、僕の大好きな友達だよ！」

「と、ともだち……」

その言葉を聞いた瞬間ネラは崩れ落ち、その後続くようにレンも、ダルクを除いた霊使い達も次々と崩れ落ちる。ただ一人残ったダルクは呆れたといわんばかりに右手を顔に押し当ててため息をついていた。

「え？ あれ、皆！ どうしたの!？」

そして一人訳の分かっていないアルフは慌てた声でそう言っていた。それからまた場所は変わってここは城の食堂、その広い席を占領してネラ、レン、ヒータら霊使い達はジューズをヤケだというように飲みまくっていた。そして無理矢理そこに引つ張られてきた少年ライが呆れたように声を出す。

「で、勢いでアルフに告白したら友達だと返された？ そんな事でわざわざヤケジューズに巻き込むな」

「だっていきなり友達発言だよ！？ あのシチュエーションじゃあ恋愛要素の告白って見るもんでしょ普通！！」

ライの言葉にネラはテーブルをばんばんと叩きながら声を上げる。するとライは呆れて諭すような言葉で言った。

「あの人……あいつに普通の恋愛感情つてもものがあつたら今頃あいつには恋人がいるっつの」

「へ？」

「あいつは優しいし容姿端麗、元の世界の学校でもモテてた方だ。幼馴染で仲がいいからって俺に紹介してくれて頼んできた女子だけでも……十人過ぎた辺りで数えるのを止めたが結構いたぞ。んで、その全員が今のお前らと同じように友達発言で玉砕している」

ライの説明にネラ達は全員黙り込み、それからライはふうと息を吐いてからやれやれと首を振りながら続けた。

「あいつの鈍感さははや異常と言っておかしくない。あいつをオト

せる女がいるってんならお目にかかってみたいもんだ」

「そうなんだ……よし！」

ライの言葉にネラはふんふんと頷いて何かを考えた後バンとテーブルを叩きながら立ち上がり、それにライが驚いたような目を見せると彼女はグツと拳を握りながら言った。

「まだ友達だと思われてるなら今からランクアップする事だって可能はず！ 諦めないよ！！」

「ああそうかい。ま、頑張ってくれ……」

ネラの拳を握り締めながらの言葉に僅かなりレンが頷き、ライはひらひらと手を振って呟くように言う。

それからまた場所は変わって城の一室、レオ達が借りている部屋の中でレオは自分のデッキの中身をさーっと眺め回しながらふと笑みを浮かべながら近くにいるメリオルに向けてだるうか話しかけた。

「で、さっき戦った異世界人、セツなんだけどな。あいつ、大会で戦った切雄とデッキタイプが似てたんだよ。パーミッションと三銃士デッキ、最後もアルカナナイトジョーカーをオネストで強化してきたんだがあれでこっちのモンスターが閻魔だったら本当に決勝戦のバッドエンドを再現してたぞ」

「そうみたいね……」

「あいつとの戦いはいい経験になった。ここ最近遊戯王で負けたなんてお前とのデュエルぐらいだったからな。そっぴやエルフィのア

テナ暴走召喚コンボでも対処が間に合わなくて一回やられたっけ」

「そうね……」

レオの笑いながらの言葉をメリオルは心ここにあらずといった様子で返し、それを聞いていたレオは一回口をつぐんで何かを考えるような様子を見せると不意打ちのように言った。

「そんなにソーマの事が気になるのか？」

「ええ……！？ な、なんで分かったの！？」

レオの言葉にメリオルはさっきのように淡々と返した後驚いた様子で叫び、それを見たレオはふつと息を吐くと苦笑を浮かべながら言った。

「俺達は何年の付き合いだ？ 何考えてるかなんて見りゃ大体想像がつく。何があったんだ？ 隠すよりは話せ、無理して隠す事が一大事に繋がる恐れもある」

レオの言葉を聞いたメリオルは口元に手をやりながら少し黙り込み、やがて意を決したように口を開いた。

「レオとライがアルフ、エルフィと戦って、私達が他の仲間を探しに行っていた時よ……」

メリオルが操る馬車は広原を進んでいた。すると突然馬車の中が騒がしくなり、メリオルは手綱を握りながら中の方に声をかける。

「どうしたの？ 静かにしてくれる？」

「す、すみません。私のプチリュウが……あっ！」

メリオルの言葉にウインが謝りの声でそう言っていると突然プチリュウが馬車を飛び出して飛んでいき、メリオルはしょうがないと馬車の方向をプチリュウが飛んで行った方に変えて走らせる。すると遠目からでも分かるほどに巨大な、黒い竜が姿を現した。

「レッドアイズ！ そっか、プチリュウは彼の気配を感じ取ったんだわ」

流石は同じドラゴン族。そう締めくくりながらメリオルはレッドアイズの元に馬車を急がせる。しかし彼女らが近づこうとした瞬間、レッドアイズの巨体が地面に倒れ伏せた。

「レッドアイズ！？ 皆はここにいなさい！」

メリオルは驚いた声を上げた後ネラ達にそう言って馬車を降り、レッドアイズの元に走り出す。

そこで気づいたがレッドアイズの近くにはもう一人の男がいた。褐色の肌に灰色の髪をした筋肉質な男、その手には長い鎖が握られており、さらにその先には鉄球がついている。また左腕にはドーマ製デュエルディスクがつけられていた。

「……あなたがレッドアイズを倒したの？ ソーマの仲間？」

「おうよ。俺様はメテウス、てめえが救世主って奴かい？」

メリオルの言葉に男性　メテウスはくっくくと笑いながら返し、

それを聞いたが早くメリオルはズボンにつけていたデッキケースから自分のデッキを取り出すと素早くデュエルディスクに装着した。

「あなたもデュエリストなら話は早い！ デュエルで決着つけてあげるわ！！」

「そりゃあいい、女を武器で甚振んのは性に合わねえがデュエルで甚振んのは好きだからなあ」

メリオルの言葉にメテウスも笑いながら鎖付き鉄球をその場に捨ててデッキを取り出すとデュエルディスクに取り付ける。そして二人はデュエルディスクを起動しながら向かい合った。

「デュエル！！」

第二部第十二話 魔術師達のどたばた日和（後書き）

いやあようやく書けた。もう一ヶ月振りになるとこだったなあ。

今回は繋ぎ？ちなみに当初の予定では番外編で最初のネラ達のアルフを巡るとはばたコメディーだけの予定だったんですが上手く書けなかった+予定より引つ張れなかったので急遽次の話への繋ぎも入れました。ああ遥さんが羨ましい、こういうネタをいくつも上手いのを書けてるのに僕はこんなグダグダ中途半端なのが精一杯……しかも急遽次への繋ぎを組み込んでるし。

今回はメリオルVS敵の一人メテウス、ちなみに彼のデッキは候補が二つあるんですがそこから絞り込めていません。むしろ候補の一個によつては主要メンバーの内一人がデッキを変更する可能性だつて出てくるんですから、ある意味重要です。ま、それでは。

第二部第十三話 魔術師VS恐竜

魔法都市エンディミオンからだいぶ離れた広原、メリオルは目の前にいる相手　メテウスを睨みつけながらデュエルディスクを起動し、メテウスもくつくつと笑いながらデュエルディスクを起動する。

「デュエル！！」

そして二人は声を合わせて叫び、次にメリオルがいち早くデッキに指をかける。

「先攻はもらうわ、ドロー！」

メリオルはそう言ってカードをドローし、手札を眺め回す。そしてよしと頷くと一枚のカードを取った。

「私は「熟練の黒魔術師」を召喚し、魔法カード「魔法吸収」を発動！　魔法カードの発動によって黒魔術師に魔力カウンターが一つ乗るわ。さらに魔法カード「魔力掌握」！　私の場の黒魔術師に魔力カウンターを一つ乗せ、さらにデッキから魔力掌握を手札に加える。魔法カードの発動によってさらに黒魔術師に魔力カウンターが乗り、魔法吸収の効果でライフを500回復！」LP4000　4500

流れるように魔法を発動していき、黒魔術師の両肩と胸元の装飾に魔力の光がとる。さらにメリオルを魔力掌握によって出てきた光が包み込み、彼女のライフが回復した。

「魔力カウンターを三つ乗せた黒魔術師をリリースし、デッキから

「ブラック・マジシャン」を特殊召喚！」

メリオルの言葉に従うように黒魔術師は己が溜めた魔力を解放し、彼の身体が闇に包まれる。そして闇が払われると、そこには黒い衣装を身に纏ったブラック・マジシャンが立っていた。

「カードを一枚セットし、ターンを終了するわ」

最後にメリオルは二枚のカードをセットするとターンを終了し、メテウスはくつくつと笑いながらカードをドロースする。

「俺のターン、ドロー。俺はカードを一枚セットし、ターンを終了」

「私のターン、ドロー……悪いけど一気に決めさせてもらおう！」

「見習い魔術師」を召喚しリバーズカードオープン「デイメンジョン・マジック」、見習い魔術師をリリースし「カオス・マジシャン」を特殊召喚！ さらに魔法吸収の効果によりライフは500回復する」LP4500 5000

メリオルの場に一人の魔術師が姿を現したと思ったら、その魔術師は背後に現れた棺桶に入り込み、その棺桶が一回光を放ったと思ったら、扉の開いたその中から出てきたのは黒い鎧のようなものを纏った魔術師。しかしそれを見たメテウスはむしろ笑っており、声を上げた。

「てめえの特殊召喚に合わせてリバーズカード発動、「狩猟本能」

！ お前が特殊召喚した時、俺は手札から恐竜族を特殊召喚できる。

俺は「エンシェント・ダイノ超古代恐獣」を特殊召喚！」

突然メテウスの場になんとも不思議な外見

の恐竜らしきものが姿を現す。しかしその攻撃力はメリオルの場の魔術師を凌駕していた。

「くっ……ターン終了」

「俺のターン、ドロー！」

メリオルはそのままターンを終了し、メテウスはくっくっとならからカードをドローする。そしてそのカードを見るとふっと笑みを浮かべて手札に入れ、別のカードを取った。

「俺は「俊足のギラザウルス」を特殊召喚扱いで召喚！ この効果でお前は墓地からモンスターを特殊召喚できるぜ？」

「熟練の黒魔術師を守備表示で特殊召喚」

「続いてギラザウルスをリリースし魔法カード「大進化薬」発動！ このカードは発動後お前のターンで数えて三ターン場に残り続け、このカードが存在する限りレベル五以上の恐竜族をリリースなしで召喚できる！」

メテウスが小さな肉食風の恐竜を呼び出すとメリオルも黒魔術師を呼び出す。さらにメテウスはさつき呼び出した恐竜を媒体にして魔法を発動、その効果にメリオルは表情を歪めた。ちなみに魔法吸収の効果でメリオルのライフは5500に回復している。

「ギラザウルスは特殊召喚扱い、よって俺はまだ通常召喚が可能！

俺は「スーパーコンダクターティラノ超伝導恐獣」を召喚！！」

メテウスの場の魔法の効果を受けて彼の場に巨大な恐竜が姿を現す。

それにメリオルはまずいと表情を完全に歪ませた。

「非力な奴らを蹂躪しろ！ 超古代恐獣でカオス・マジシャンを、超伝導恐獣でブラック・マジシャンを攻撃！！」

「くあぁっ！！」LP5500 5200 4400

メテウスの指示とともに超古代恐獣は口から吐いたビームらしき光線でクルセイダーを貫き、恐獣はブラック・マジシャンを踏み潰す。そのビームの残りど踏み潰した風圧が衝撃波となってメリオルのライフを削り取った。

「ターンエンドだ」

メテウスはそのままターンを終了し、それを聞いたメリオルはくつと唸りながらもデッキに指をかけた。

簡易状況説明

メリオル：LP4400 手札二枚

フィールド：熟練の黒魔術師守備表示 魔法吸収発動中、伏せカードなし

メテウス：LP4000 手札二枚

フィールド：超古代恐獣、超伝導恐獣全て攻撃表示 大進化薬発動中、伏せカードなし

「私のターン、ドロー！……光の護封剣を発動してターンエンド」

LP4400 4900

メリオルは引いたカードをすぐに発動し、相手の場に三本の光の剣が刺さって相手の攻撃を封じるとターンを終了する。

「ちっ、大進化薬破壊まであと二ターンつと、俺のターン。「セイバーザウルス」を召喚して超伝導恐獣の効果発動！ セイバーザウルスをリリースして1000ポイントのダメージを相手に与える」

「くっ！」 LP 4900 3900

メテウスの場に新たな恐竜が姿を現したと思つたらその恐竜を超伝導恐獣が喰らい、その次の瞬間恐獣から放たれた電撃がメリオルを襲う。そして彼のターンエンド宣言とともに光の剣が一本消えた。

「私のターン……ターン終了」

「俺のターンつと、大進化薬の効果でリリースなしで「暗黒ドリケラトプス」を召喚。ターンエンドだ」

メリオルは引いたカードをそのまま伏せるとターンを終了し、次にメテウスはくちばしや羽のついた恐竜を呼び出す。そして彼のターンエンド宣言とともに光の剣が残り一本になる、恐竜達も僅かに動き出していた。

「（このターンの終了で大進化薬は効果が消えるけど次のあいつのターン終了時に護封剣も消える、そうになったら防ぎきる手立てはない……）私のターン！ ドロー！」

メリオルは思考をしながらカードをドローし、ドローカードを見る。

「魔法カード「魔力掌握」を発動！ 黒魔術師に魔力カウンターが
一つ乗り、デッキから魔力掌握を手札に加える」LP3900 4
400

「ちっ」

メリオルの言葉とともに黒魔術師の胸元の装飾に光が灯り、黒魔術師の身体が闇に包まれる。

「三つの魔力カウンターが乗った黒魔術師をリリースし、蘇れ、「
ブラック・マジシャン」！」

メリオルの言葉とともに黒魔術師を包んでいた闇が弾けとび、その
中からさっきの黒いブラック・マジシャンが姿を現す。

「「魔術の呪文書」をブラック・マジシャンに装備！ 攻撃力を7
00ポイント上昇させる！」LP4400 4900

ブラック・マジシャン 攻撃力：2500 3200

ブラック・マジシャンの手元に一冊の本が現れ、その本を読んで知
識を吸収したブラック・マジシャンの魔力が上昇し、それを見たメ
テウスはくつと唸る。

「ブラック・マジシャンで超古代恐獣を攻撃！ ブラックマジック
！！」

「ぐうっ！！」LP4000 3500

ブラック・マジシャンの放った闇の波動が不思議な外見の恐竜を貫

き、その波動の残りがメテウスをも貫く。

「ターン終了。そしてこの瞬間大進化薬の効果も切れる」

「ちいつ、俺のターンドロー!!」

メテウスの場の大進化薬のカードが弾けとび、それを見たメテウスは舌打ちをした後カードをドロウする。まだ光の護封剣の効果は生きているため攻撃することは出来ない。

「……暗黒ドリケラトプスを守備表示に変更、リバースカードを一枚セットしてターンエンドだ。こいつで光の護封剣の効果も消える」

メテウスの言葉通り、最後の一本となっていた光の剣もついにその姿を消し、守備を取っているドリケラトプスはともかく超伝導恐獣は高らかに咆哮を上げた。

簡易状況説明

メリオル；LP4900 手札三枚

フィールド：ブラック・マジシャン攻撃表示 魔術の呪文書装備、魔法吸収発動中、伏せカードなし

メテウス；LP3500 手札二枚

フィールド：超伝導恐獣攻撃表示、暗黒ドリケラトプス守備表示、伏せカード一枚

「私のターン、ドロウ!……「マジカル・コンダクター」を召喚し、魔法カード「エネミーコントローラー」発動! その効果で超伝導恐獣を守備表示に変更、そして魔法カードの発動によりマジカル・

コンダクターに魔力カウンターが二つ乗る。ブラック・マジシャンで超伝導恐獣を、マジカル・コンダクターで暗黒ドリケラトプスを攻撃！」LP4900 5400

メリオルの場に現れたコントローラーのコードが超伝導恐獣に刺さったと思うとその操作を受けて恐獣は守りの姿勢を取り、召喚された新たな魔術師とブラック・マジシャンがそれぞれの魔力で二体の恐竜を破壊する。

「ターン終了」

「俺のターン！ リバースカード発動、「リビングデットの呼び声」！ 俺は墓地から「超伝導恐獣」を特殊召喚！ さらに魔法カード「フォース」を発動！ ブラック・マジシャンの攻撃力の半分を超伝導恐獣に吸収させる！」

メテウス場にさっきの恐獣が姿を現し、さらにブラック・マジシャンの魔力の半分が恐獣に吸収されていく。

ブラック・マジシャン 攻撃力：3200 1600
超伝導恐獣 攻撃力：3300 4900

「いくぜえ、恐獣でブラック・マジシャンを攻撃！」

「くああああっ！！ でも魔術の呪文書の効果で私のライフは1000ポイント回復する！」LP5400 2100 3100

超伝導恐獣の牙がブラック・マジシャンを食いちぎるが、ブラック・マジシャンは死に際に呪文書に書かれた命を懸けた治癒魔術を発動、その光がメリオルのライフを回復させた。

「リバーズカードを一枚伏せてターンエンドだ」

「私のターン、ドロー！……マジカル・コンダクターの効果発動、コンダクターに乗っている魔力カウンターを二個取り除いて墓地からレベル2の魔法使い、見習い魔術師を守備表示で特殊召喚、マジカル・コンダクターを守備表示に変更してターン終了」

「守備固めか？ 俺のターン、ドロー！」

メリオルの場の二体の魔術師は揃って防御の姿勢を取り、それを見たメテウスははっと笑いながらカードを引く。そして引いたカードを見て一つふつと笑った。

「「ジュラック・グライバ」を召喚！ 超伝導恐獣でマジカル・コンダクターを、グライバで見習い魔術師を攻撃！！」

メテウスの場に新たな恐竜が召喚され、二体の恐竜の牙が二人の魔法使いの身体を食いちぎる。しかも戦闘の後グライバは突然遠吠えを始めた。

「ジュラック・グライバの効果により俺はデッキからジュラック・デイノを特殊召喚！ デイノで攻撃といきたいところだがグライバの効果で特殊召喚されたジュラックは召喚ターンに攻撃できない。ターン終了だ」

グライバの遠吠えを聞きつけたかのように新たなジュラックが姿を現し、メリオルは表情を歪めた。こっちのモンスターはゼロなのに対し相手は三体、状況がかなり悪くなっていた。次の引きでなんとかしないと間違いなく負ける。

「私のターン、ドロー！」

カードを引いたメリオルは突然驚いた表情を見せ、目を瞑って何か考えている様子を見せだす。そして小さくうんと頷くと目を開いた。それから発動するのはさつき引いたばかりのカード。

「魔法カード「黒魔術のカーテン」を発動！ ライフを半分支払うことによりデッキから「ブラック・マジシャン」を特殊召喚！ 魔法吸収の効果でライフも回復！」 LP 3100 1550 2050

メリオルの場に赤黒いカーテンが現れ、そのカーテンが翻るとその中であつた石版が光を放ち始め、その石版の中からブラック・マジシャンが姿を現す。

「はっ！ だが攻撃力はたかだか2500、ジュラックぐらいなら倒せるだろうが次のターンに俺の恐獣の攻撃で終わりだ！」

「私は元の世界でマジック・マスターなんて仰々しい肩書きがついてるのよ。その理由は簡単、自らの魔法のみならず相手の魔法をも使いこなすゆえ！ 魔法カード「ダブルマジック二重魔法」を発動！ 手札の魔力掌握を捨て、あなたの墓地にある魔法カード、フォースを使用する私が対象とするのは超伝導恐獣とブラック・マジシャン！」 LP 2050 2550

「しまっ!?!」

メリオルの言葉とともに超伝導恐獣の力がブラック・マジシャンに奪われてゆき、ブラック・マジシャンの魔力が倍増していった。

超伝導恐獣 攻撃力：3300 1650
ブラック・マジシャン 攻撃力：2500 4150

「さらに魔法カード「拡散する波動」を発動！ ライフポイント1000ポイントを支払う事により私の場のレベル7以上の魔法使い族は相手モンスター全てに攻撃する事ができる！」LP2550
1550 2050

メリオルの言葉とともにブラック・マジシャンは己の魔力を開放し、相手の場の恐竜達に杖を向ける。

「ブラック・マジシャンの攻撃！！
エクスペロード・ブラックマジック
黒魔導爆裂破！！！！」

「うおおおおお！！？」LP3500 0

ブラック・マジシャンの爆裂する波動がメテウスの場の恐竜を全て貫いていき、その波動がメテウスをも撃ち砕く。そしてブラック・マジシャンの姿が消えていくとメリオルはふうと息を吐いて目の前で倒れているメテウスを見る。

「とりあえず、あいつを捕まえれば何か情報が手に入るはず……」

メリオルはそう呟いて一歩一歩用心しながらメテウスに近づいていく。するとメリオルは突然何かに気づいたようにその場を飛びのいた。それと同時にメリオルがさっきまで立っていた部分に銃弾が突き刺さり、メリオルは鉄扇を取り出しながら銃弾が飛んできた方を見る。

「や、久しぶり」

「ソーマ」

そこに立っていたのは敵の一人　ソーマ。彼は敵に見せているとは思えないほどに柔和な微笑みを浮かべながら銃をメリオルの方に向けており、ゆっくりとメテウスの方に近づいていく。

「いやあ助かったよ、ここの制圧はアレウスとアンデット軍の役目だったのにこの馬鹿勝手に飛び出してたからさ。まあ、アンデッド軍も撤退してるみたいだし僕もこいつを連れてとつと帰るか」

「待ちなさい！　逃げるって言うなら今ここであなたも倒す！！」

ソーマが笑いながら配下らしきレッドサイクロプスにメテウスを担ぎ上げさせるがメリオルはデュエルディスクを構えながら叫ぶ。するとソーマはそれを手で制した。

「まーまー。僕は今デッキを持ってないんだよつと、デッキで思い出した」

ソーマは飄々とした雰囲気ですう言いながらふと思いついた表情を見せるとどこから取り出したのか二つのデュエルディスクを取り出す。その二つともが丸いフォルム　アカデミアタイプだ。

「！　まさかそれ！？」

「そう、君の仲間のアルフ君とエルフィさんの。ないと困るでしょ？　それにエルフィさんはともかくアルフ君はデッキ大幅に改造してたしね。渡してあげなよ、エルフィさんのデッキからのけたのも入れてるから」

ソーマはそう言つと二つのデュエルディスクをメリオルに向けて投げ、メリオルは扇子を振つて弱い竜巻を起こすとそれを優しく着地させる。

「じゃ、そういう事で。次に会つた時には戦つてあげるから……この際に援軍を呼ばれて困まれたら困るしね」

「……ちっ」

読まれていた。メリオルは舌打ちをしながらそう考え、その際にソーマはレッドサイクロプスを連れて逃げるように去っていく。それを見届けてからメリオルはふうと息を吐いて後ろの霊使い達に呼びかける。

「援軍呼んだ？」

「ええ、ここの座標や状況を知らせておいたわ。流石にレッドアイズさんをこの馬車に乗せるのは無理だし」

メリオルの言葉にエリアが返し、メリオルはよしと頷くと馬車の方に戻っていく。そして馬車に乗る前にさつと空を見上げる。

「キング・ドラグーンさんに、ロケット戦士ね。じゃあ大丈夫そうだし……レオ達が気がかりだわ、戻りましょう」

メリオルはこっちに援軍が来た事を確認するとよしと頷き、後は任せようと呟くと皆が乗っている事を確認してから馬車を走らせた。

「……という訳よ」

「なるほどな……だが妙だな？ その言い方じゃまるで俺達が黒達に勝つのが分かってたみたいだな」

話を聞き終えたレオがふうんと呟き、口元に手を当てながら続ける。それにメリオルもこくと頷いた。

「ええ、どういう訳かしら？……」

「さあな？……まあ、一つ言える事はあいつらに負ける訳にはいかないって事だな」

メリオルの言葉にレオは首を横に振って返した後顔を上げながら続けて呟く。そしてよじつと頷くとメリオルに言った。

「とにかく、油断は出来ないな……メリオル」

「え？」

「頼りにしてるぜ」

突然呼ばれたのにメリオルが呆けた声で返すとレオは笑いながらそう言い、それにメリオルはまたえつと声を出す。それにレオはまた微笑みながら言った。

「俺達五人の中で強いのは俺達二人だし、特に俺とお前の実力はほぼ拮抗してる。もし俺に何かあってもお前がいてくれればなんとかなるからな。頼りにしてるぜ？」

「え……あ、うん。当然よ！」

レオの言葉にメリオルは一旦どもりながらもこくこくと頷いて返し、それを聞くとレオは満足そうに頷いて立ち上がった。

「よし。んじゃ、ちょっとブレイカー達と剣の練習をしてくる」

レオは気合を入れなおすようにふうつと息を吐きながら立ち上がった。そう言う部屋を出て行き、それを見送ってからメリオルはふうと息を吐いて天井を見上げた。

第二部第十三話 魔術師VS恐竜（後書き）

ああやつと終わったVSメテウス。そのデツキは恐竜族、ちなみにこれは言っていたデツキ候補にすら上がってませんでした。上がった二つはフレムベルと戦士族、だったんですが戦士族はネタ切れ、フレムベルは……なんかあっさり終わりすぎる感じがしちゃって……ここはパワー感を出すためあえて候補になかった恐竜族を使いました。ちなみにメテウスがこれだったら主要メンバーのデツキ変更となりうったのは戦士族です、どうでもいい蛇足ですけどね。さてと……次どうしょ？本当に考えてないや……ストーリーを一気に進めるにしろ何かきっかけが欲しいしな……。ま、それはまた考えるところとして今回はこの辺で。それでは。

第二部第十四話 頂上決戦！？龍VS魔術師

ここは魔法都市エンディミオン、この街に住む魔術師の一人 ブラック・マジシャンことヴァルツはこきこきと肩を鳴らしながら街を歩いていた。

「やれやれ、やっと仕事が終わった。ネラやヒータのせいで余計な時間をくつたな全く」

ヴァルツはぶつぶつと独り言を呟きながら街を歩いており、するとその背中に何かがドンと当たってヴァルツは驚いたように振り向いた。

「ライ、アルフ」

「あ、ヴァルツさん。ごめんなさい」

「ほら、急いごうぜー！」

そこに立っていたのはライとアルフ。アルフはヴァルツにぶつかつた事を謝り、その横にいるライは妙に目をキラキラさせながら声を出す。その様子をヴァルツは不思議に思って尋ねた。

「どうしたんだ？」

「ああ、この先にある広場で兄さんとメリオルさんがデュエルやるんだよ！」

「レオさんと姉さんのデュエルを見るなんて随分久しぶりだからね。」

エルフィはもう行ってるみたいだし急ごう!」

ヴァルツの問いにライが元気のいい口調で言うとアルフもふふつと微笑みながら続ける。そして二人がまた走っていくとヴァルツもどうせ暇だしとその後をういて行つた。

そして広場に辿り着くとそこには観客としてエルフィの他ブラック・マジシャン・ガールことネラやサイレント・マジシャンことレン、ヒータ達霊使い、そしてフレイヤ達も揃っていた。するとネラがライとアルフ、ヴァルツがやってきたのに気づく。

「あ、ライにアルフ。わ、師匠まで!? し、仕事はいいの!?!」

「もう終わった。お前らのこの前の食堂での馬鹿騒ぎに対するクレームまで俺が対応する羽目になつたがな」

『ごめんなさい……』

「え、ネラ達何かやつたんですか!? じゃあ僕からも謝ります」

ネラの言葉にヴァルツはふつと微笑みながら言うが後半の笑みには怒りが含まれており、それを見たネラ達が思わずぺこりと頭を下げ、謝るとアルフもそう言つて頭を下げる。その元々の原因が自分だということを知らない。するとエルフィが声を出した。

「始まるわ!」

その言葉を聞くと全員レオとメリオルに視線を向ける。二人はお互いのデッキシャッフルを終えて移動、デュエルディスクを自分の胸元に構える。そしてデュエルディスクが起動した。

「楽しいデュエルにしようぜ、メリオル！」

「ええ。でも手加減はしないわよ、レオ！」

「「デュエル！！！」」

レオとメリオルは互いにそう言い合った後声を合わせて叫び、続けてレオがデッキに指をかける。

「俺から行かせてもらうぜ！ ドロー！」

レオはふっと笑いながらカードを引き、手札を見眺める。そして一枚のカードを手にとった。

「リバースカードを一枚セットし、魔法カード「手札抹殺」発動！
俺の手札は四枚」

「私は当然五枚ね」

レオの言葉にメリオルは慣れたように手札を全て捨て、新たなカードをドローする。レオも同じようにカードをドローし、それから伏せカードを発動した。

「リバースカードオープン、「龍の鏡」！ 墓地のラグナロクとロード・オブ・ドラゴンを除外して「龍魔人 キング・ドラグーン」を融合召喚！」

「やっぱり」

レオの場に巨大な鏡が現れ、それに二体のモンスターが映し出され

るとその二体の姿が混ざるように消えていき、そう思ったら鏡の中から魔人というべきだろう龍の身体に人の上半身をしたモンスターが現れる。

「さらにキング・ドラグーンの効果で手札から「タイラント・ドラゴン」を特殊召喚！ ターンエンドだ」

「私のターンね。ドロー」

いきなり相手の場に攻撃力2500以上のモンスター二体が出ているにも関わらずメリオルは落ち着き払っており、彼女はカードをドローするとふうんと呟きながら手札を見る。

「キング・ドラグーンの効果で魔法・罠・効果は受け付けない！ お得意のディメンジョン・マジックは通じないぜ！」

「分かってるわよそれくらい……じゃあ戦闘破壊させてもらっわ」

レオの言葉にメリオルは手札を見ながら返した後くすつと微笑んで続ける。そして手札の一枚を手にとった。

「魔法カード「魔力儉約術」発動！ さらに「黒魔術のカーテン」を発動しその効果でデッキから「ブラック・マジシャン」を特殊召喚！ 儉約術の効果でカーテンのライフコストは支払われないわ」

メリオルの場に一枚のカーテンが現れ、それが翻るとその中からは黒い衣装のブラック・マジシャンが姿を現す。

「限定版か……でもそれでもよくてドラグーンと相打ちだぜ？」

「さらに手札から「魔術の呪文書」を装備！ ブラック・マジシャンの攻撃力は700ポイント上昇する！」

ブラック・マジシャン 攻撃力：2500 3200

「げっ……」

メリオルが発動した魔法カードから現れた本を読んだブラック・マジシャンの魔力が増大し、それにレオは表情を歪める。

「タイラントは後でもいいからでかいのを呼び出される前にドラゴンから片付けさせてもらうわね！ ブラック・マジシャンでキング・ドラゴンを攻撃！」

メリオルの指示を聞くとブラック・マジシャンは杖に魔力を溜め、一筋の光線にしてキング・ドラゴン目掛けて撃ち放つ。その一撃はキング・ドラゴンを容易に貫いてなお勢いを止めずにレオまでも貫いた。

「がはっ！」 LP4000 3300

「ターンエンド！」

光線が貫いた胸を押さえながらレオは息を吐き、それを見ながらメリオルはターンエンドを宣言する。それを聞いたレオはデッキからカードをドロ―して手札を見るが、少し表情を歪めた。

「……モンスターを守備表示でセット、タイラント・ドラゴンを守備表示に変更してターンエンドだ」

「事故かしら？ 私のターン」

レオの場に新たなモンスターがセットされ、隣の巨竜は守りの体勢を取る。それを見たメリオルはくすくすと笑いながらそう言ってカードをドロークした。

「「クルセイダー・オブ・エンディミオン」を召喚し、ブラック・マジシャンでタイラント・ドラゴンを、クルセイダーで守備モンスターを攻撃！」

メリオルの指示を聞くと二人の魔術師の魔力の波動がレオの場の二体のモンスターを貫く。しかし正体不明だったモンスターの姿がちらりと見えるとメリオルはあららというような表情を見せる。それと共にレオが口を開く。

「「仮面竜」の効果発動！ このカードが戦闘によって破壊された時デッキから攻撃力1500以下のドラゴンを特殊召喚できる。俺は「デルタフライ」を特殊召喚する！」

「デルタフライ……シンクロに繋げてくるわね。じゃありバースカードを一枚セットしてターンを終了するわ」

メリオルは特殊召喚されたモンスターの姿を見るとぼそりとそう呟き、手札の一枚を伏せるとターンを終了した。

簡易状況説明

レオ：LP3300 手札三枚

フィールド：デルタフライ攻撃表示 伏せカードなし

メリオル：LP4000 手札二枚

フィールド：ブラック・マジシャン、クルセイダー・オブ・エ
ンディミオン全て攻撃表示 魔力儉約術発動中、伏せカード一枚

「俺のターン、俺は「ロード・オブ・ドラゴン ドラゴンの支配者
」を召喚！ そしてデルタ・フライの効果を発動してレベルを一
つ上げ、デルタ・フライと闇属性のロード・オブ・ドラゴンをチュ
ーニング！ 闇の中から現れる「ダークエンド・ドラゴン」！！」

デルタ・フライとロード・オブ・ドラゴンが地面から吹き出した闇の
中に消え、その闇の中から巨大な黒いドラゴンが姿を現す。その腹
に顔のようなものがあるのが妙に不気味だ。

「ダークエンド・ドラゴンの効果発動！ 攻撃力、守備力を500
下げることにより相手モンスター一体を墓地に送る。俺はブラック・
マジシャンを墓地に送る！ ダーク・イヴァポレイション！」

ダークエンド・ドラゴン 攻撃力：2600 2100 守備力2
100 1600

ダークエンド・ドラゴンの腹にある顔みたいなもの口から出てき
た闇がブラック・マジシャンを包み込み、地中へと消えていく。

「くっ、でも魔術の呪文書が墓地に送られたとき私のライフが10
00回復するわ」LP4000 5000

「ここで一気に攻める！ ダークエンド・ドラゴンでクルセイダー・
オブ・エンディミオンを攻撃、ダーク・フォッグ！！」

「くっ！」LP5000 4800

ダークエンド・ドラゴンの口から吹き出た黒い霧状の物質がクルセイダーを包み込んで破壊、メリオルは表情を僅かに歪めた。

「リバースカードを一枚セットし、ターンエンドだ」

「私のターンね……」

メリオルはカードをドローするとふむと唸り、その内の一枚を取った。

「マジカル・コンダクター」を召喚して魔法カード「サイクロン」を発動！」

発生したサイクロンがレオの場のリバースカード 禁じられた聖杯を破壊、それを見るとメリオルは予想があたったというようにくすくすと笑って口を開いた。

「もしも私がブラック・マジシャンを速効召喚して攻撃してきたらそれで返り討ちにするなんてえげつない事考えるわね」

「なあに。コンダクターの効果で手札抹殺により墓地に捨てた見習い魔術師を召喚、マジシャンズ・クロスで攻撃力を上げて相打ちに持ち込んだ上に伏せカード、マジシャンズ・サークルで別の魔術師を召喚しようなんて目論むお前に比べりゃ可愛いもんだ」

メリオルの言葉にレオはふっと笑いながらそう返し、それを聞いたヴァルツはぼそつと呟いた。

「なんて奴らだ……お互いのプレイングをそこまで鮮明に読みあうなんて……」

「そりゃ兄さんとメリオルさんはほぼ確実に町内デュエル大会優勝準優勝をかつさらう二人だもん。二人を除くと表彰台に上れるのは実質三位を争った一人」

「特にタッグ部門においてレオさんと姉さんのタッグは町内じゃ全面禁止令を出されてます。エグゾディアとかの特殊勝利特化でもないと勝てっこありませんから」

「本当にね。上級ドラゴンの連続召喚によるビートダウンとそれをサポートする魔術師、さらにはアイコンタクトのみで意思疎通をやりあうツーカーの仲。この読み合いも当然のもの」

ヴァルツの言葉にライ、アルフ、エルフィがそう返し、それを聞いたヴァルツは息を吐くと二人のデュエルをまた眺め始める。

「ばれてるならとつといかせてもらうわ。マジカル・コンダクターに乗っている魔力カウンター二つを取り除いて墓地から見習い魔術師を特殊召喚。そして見習い魔術師の特殊召喚に成功したためコンダクターに魔力カウンターを一個乗せるわ。そして私の場に二体の魔法使いがいるため手札から「マジシャンズ・クロス」を発動！他の魔法使いが攻撃できなくなる代わりに見習い魔術師の攻撃力を3000にするわ」

メリオルの場のマジカル・コンダクターが新たな魔術師を呼び出し、その魔術師はマジカル・コンダクターに魔力を与える。そしてメリオルが新たな魔法を発動するとコンダクターが魔術師に膨大な魔力を与え、魔術師の攻撃力が爆発的に増加した。

「見習い魔術師でダークエンド・ドラゴンを攻撃！そして攻撃宣言の瞬間リバースカード発動「マジシャンズ・サークル」。お互いのプレイヤーはデッキから攻撃力2000以下の魔法使いを特殊召喚する。私が特殊召喚するのは「ブラック・マジシャン・ガール」！」

「俺のデッキに魔法使いはもういねえ……一体とも墓地もしくは除外だ……」LP3300 2400

「ブラック・マジシャン・ガールは墓地にブラック・マジシャンがいる事により攻撃力が300上昇する」

見習い魔術師の魔力の波動がダークエンド・ドラゴンを破壊し、さらにメリオルが作り出した魔方陣の中から可愛い女魔法使いが姿を現す。するとその背後にブラック・マジシャンが半透明の姿で現れて弟子である彼女に己の魔力の一片を与えた。

ブラック・マジシャン・ガール 攻撃力：2000 2300

「あ、あたしだ！ さっきは師匠も出てたね！」

そして観戦しているネラは楽しそうに笑ってそう言った。横に立っているヴァルツも心なしか頬が緩んでいる。

「他の魔法使いは攻撃できないためターンエンドよ」

「俺のターンだな。ドロロー」

メリオルのターンエンド宣言の後にレオはカードを引き、手札を見

眺めるとその内の一枚を取った。

「ブリザード・ドラゴン」を召喚！ その効果でブラック・マジシャン・ガールの次ターンでの攻撃と表示形式変更を封じる！」

レオの場に現れた青きドラゴンの息吹がブラック・マジシャン・ガールに氷に包み込み、それを見たネラが思わず寒そうに身体を縮ませる。そしてレオは一体の魔術師を指差した。

「マジカル・コンダクター」を攻撃！」

「っと!?!」LP4800 4700

ブリザード・ドラゴンの息吹がマジカル・コンダクターを氷付けにすると続いたの突進がコンダクターを打ち砕き、その破片がメリオルにダメージを与える。その攻撃にメリオルが驚いたような目を向けるとレオはふっと笑って口を開いた。

「ダメージはでかくなるけど見習い魔術師は破壊してもデッキからセットされる。そして次ターンでの反転召喚から魔力カウンターを溜められコンダクターの効果で墓地から見習い魔術師を特殊召喚。リリース要員を増やす手助けになりかねないからな。カードを一枚伏せてターンエンドだ」

笑いながら説明し終わるとレオはカードを一枚セットしてターン終了を宣言し、メリオルは読まれてたかというように苦笑をするとカードをドロウする。そして手札を見るとふふっと笑う。

「私が観客を喜ばせるためだけにブラック・マジシャン・ガールを召喚したと思ったら大間違いよ！ 魔法カード「賢者の宝石」を発

動！ デッキから「ブラック・マジシャン」を特殊召喚！」

氷づけになったブラック・マジシャン・ガールの頭上に一個の宝石が現れ、それが光を放つとブラック・マジシャン・ガールの横に石版が現れ、石版は光を放つと消えていってそれと入れ替わりにブラック・マジシャンが姿を現した。

「おおーあたしと師匠が揃ったあー!!」

「見習い魔術師を守備表示に変更し、ブラック・マジシャンで」

「リバーカード発動「威嚇する咆哮」！ このターン攻撃宣言はさせない！」

ネラがびよんびよんと飛び跳ねながら歓声をあげ、それを見てふふっと笑った後メリオルが攻撃指示をしようとした直前レオはリバーカードを発動。それに合わせてブリザード・ドラゴンが咆哮を上げてブラック・マジシャンの攻撃を阻害した。

「残念、ターン終了」

ブラック・マジシャンの攻撃を防がれたメリオルはふふっと笑ってターンを終了する。その宣言と共にようやくブラック・マジシャン・ガールは氷から出てこれた。

簡易状況説明

レオLP：3300 手札一枚

フィールド：ブリザード・ドラゴン攻撃表示 伏せカードなし

メリオルLP：4700 手札零枚

フィールド：ブラック・マジシャン、ブラック・マジシャン・
ガール攻撃表示、見習い魔術師守備表示 魔力儉約術発動中、伏せ
カードなし

「俺のターン、ドロー！」

状況を見ればライフ、ボード両アドバンテージでレオは負けており、
勝っているとするれば手札のみ。レオはその二枚の手札を入念に見比
べてふむと考え込んでいた。

「……つかさっきの賢者の宝石の、観客を喜ばせるための……ってく
だりたまたまだろ？」

「い、いいじゃない！ なんか次のターンに賢者の宝石が来るよう
な気がしたのよ！」

ぼそりと呟いたレオの言葉にメリオルはそう叫び返した。それから
レオは手札を見て考え込み、やがて動き出す。

「……モンスターを守備表示、ブリザード・ドラゴンを守備表示に
変更して効果でブラック・マジシャンの次ターンの攻撃と表示形式
を封印。カードをセット、ターンエンドだ」

「ホントに調子悪いわね……私のターン」

レオの行動は防戦一方、それにメリオルは思わずそう言ってカード
を引いた。

「でも手加減はしないわよ。見習い魔術師をリリースし、魔法の
・マリオネット

操り人形」をアドバンス召喚！」

メリオルの場に三体の上級魔術師が揃った。

「確かレオのデッキにミラーフォースは入ってなかったはず。一気に決めるわよ！ 魔法の操り人形でブリザード・ドラゴンを」

「威嚇する咆哮！」

「ターンエンド！」

メリオルの攻撃宣言前にレオは二枚目の威嚇する咆哮で攻撃を防ぎ、メリオルはくつと唸ってターン終了を宣言する。それを聞いてからレオは力強くカードをドロし、そのカードを見るとよしと呟く。

「とりあえずこいつでしのぐ！ ブリザード・ドラゴンとセットモンスターをリリースし、フルフェイス・ホワイト・ドラゴン「青眼の白龍」をアドバンス召喚！」

レオの場に青き眼の白竜が姿を現し、雄々しく咆哮する。

「白龍で魔法の操り人形を攻撃！ 滅びの爆裂疾風弾！！」

「くつ！」LP4700 3700

そしてレオの指示で白龍は破壊のブレスを放って魔法の操り人形を屠り、そのブレスの衝撃がメリオルにダメージを与える。

「ターンエンドだ」

「やっと調子が出てきたかしら？ 私のターン！」

レオのエンド宣言にメリオルは笑ってそう返しながらカードを引く。

「……全員守備表示に変更、カードを一枚伏せてターンを終了するわ」

「よし！ 俺のターン！」

メリオルの指示と共に二人の魔術師は防御の体制を取り、それを見たレオはこのまま押し切るとばかりにカードをドロウした。

「白龍でブラック・マジシャンを攻撃！」

「和睦の使者を発動！ このターン私のモンスターへの戦闘ダメージは0になり、戦闘で破壊されなくなる」

白夜龍のブレスを不思議な女性達が結界を張って防ぎ、それを見たレオはおいしいと呟く。

「カードをセットしてターンエンドだ」

「私のターン！」

レオのエンド宣言にメリオルはくすつと笑ってカードをドロウし、そのカードを見るとよしと呟く。

「魔法カード「ソウル・サークル」を発動！ ライフを半分支払って墓地の魔法使い族を四体まで除外、除外した魔法使いの数だけカードをドロウできる。私は墓地の見習い魔術師、マジカル・コンダクター、クルセイダー・オブ・エンディミオン、魔法の操り人形を除外して四枚のカードをドロウ。魔力儉約術の効果でライフコストは支払われないわ」

メリオルは仲間の魂を受け継いだ四枚の手札を取り、それを見
るとよしと頷いた。

「出でよ我が最強の魔術師！ 魔法カード「融合」発動！！」

「つつ！！」

「「最悪だ！ この状況で！！」」

メリオルが融合カードを発動した瞬間レオの表情が見て分かるほど
に歪み、ライとアルフも同時に叫ぶ。それにヴァルツやネラ達がど
うしたんだというような表情を見せるとエルフィもまた苦しそうな
表情を見せる。

「メリオルさんのデッキ最強のレオさんのデッキに対するメタカ
ード……それは竜の魂を以って攻撃力を無限に上げる」

「フィールドのブラック・マジシャンと手札のバスター・ブレイダ
ーを融合！！ 竜破壊の戦士、その魂は黒き魔術師へと受け継がれ
る！ 融合召喚、「超魔導剣士 ブラック・パラディン」！！」

メリオルの場のブラック・マジシャンの背後に一人の戦士が半透明
の姿で現れ、その二人の身体が重なり合うとその場が闇に包まれる。
そして払われた闇の中からは薙刀を持った魔法使いが姿を現す。そ
して彼がレオに薙刀を向けるとレオのデュエルディスクの墓地部分
とレオの場のドラゴンから不思議な光が発され、ブラック・パラデ
インはそれを吸収していった。

「知っでの通りブラック・パラディンは全てのフィールド、墓地の

ドラゴンの数だけ攻撃力を上げる。さあ、墓地のドラゴン族は何体
?」

「……フィールドに出ただけで七体、あと手札抹殺で二体墓地に送
つてる。合計九体」

「そしてフィールドに一体、よって攻撃力は5000ポイント上昇
するわ」

メリオルの笑みを浮かべながらの問いにレオは苦々しい表情で答え、
メリオルがくすくすと笑いながらそう言うと言いつつブラック・パラディン
のオーラが増加した。ちなみにその横でブラック・マジシャン・ガ
ールも墓地へといった師の魔力を受けて地味に攻撃力をアップさせ
ている。

超魔導剣士 ブラック・パラディン 攻撃力：2900 7900
ブラック・マジシャン・ガール 攻撃力：2300 2600

「こ、攻撃力7900!?!」

桁外れの攻撃力にヴァルツが叫び声を上げ、ネラ達も反則だよと話
し合う。そしてメリオルは白夜龍を指差した。

「終わりね……ブラック・パラディンで白龍を攻撃！ 超魔導無影
斬!」

「リバーストラップ「攻撃の無力化」!」

ブラック・パラディンの太刀が白龍を斬り倒そうとするが、突然白
龍の目の前に張られた不思議な障壁がその斬撃を防ぐ。

「流石しぶとい！ ガールを守備表示に変更してターン終了」

簡易状況説明

レオLP：3300 手札零枚

フィールド：青眼の白龍攻撃表示 伏せカードなし

メリオルLP：3700 手札二枚

フィールド：ブラック・パラディン攻撃表示、ブラック・マジ

シャン・ガール守備表示 魔力儉約術発動中、伏せカードなし

「俺のターン！」

メリオルがどこか楽しそうにターン終了を宣言するとレオはカードをドローする。そのドローカードを見るとレオは僅かに表情を動かした。

「リバースカードをセット、白龍を守備表示に変更してターンエンドだ」

「私のターン！……ブラック・マジシャン・ガールを攻撃表示に変更！ 何を考えてるか知らないけど乗ってあげるわ、ブラック・パラディンで攻撃！」

「リバースカード発動「バーストブレス」！ 青眼の白龍をリリースする事で白龍の攻撃力3000以下の守備力のモンスターを全て破壊するー！」

ブラック・パラディンの攻撃に対し白龍は己の命を賭けたブレスで

応戦、そのブレスを身に受けたブラック・パラディンとブラック・マジシャン・ガールは共々破壊され、その後白龍自身も力尽きる。フィールドはお互いから空きになった。

「しまった……メインフェイズ2にモンスターをセットしてターンエンドよ」

「うわぁ、力づくで押し込んだ……」

メリオルはがら空きになったフィールドを見て呟くとモンスターをセットしてターンを終え、見ていたライはそうぼそりと呟く。そしてメリオルのターンエンド宣言を聞くとレオはデッキに指をかける。しかしレオの手札どころかフィールドは今から引くカード一枚、ほぼこれにかかっていると云って間違いはなかった。

「…………ドロー！」

そして引いたカードを見ると彼の頬は緩み、素早くそのカードを発動する。

「魔法カード「神より賜りし宝札」！ 俺の場に他のカードは存在しないためこいつの発動のためのライフコストは支払われない。お互い手札を六枚になるようにカードをドローする」

「仕切り直しね」

レオの発動した魔法にメリオルはふつと微笑んでそう言い、お互いに手札が六枚になるようカードをドローする。そして引いたカードを見たレオはよしつと頷いた。

「よし、勝った!!!」

「!?!」

新たに引いた六枚の手札で勝利宣言、それにメリオルの表情が驚きのものになり、レオは一枚のカードを手取る。

「まずは黒竜の雛を召喚！ 雛を墓地に送って真紅眼の黒竜を特殊召喚！ さらに黒竜をリリースし、「真紅眼の闇竜」を特殊召喚！

小さな竜の雛があつという間にレオのデッキの切り札へと変貌を遂げ、メリオルは口をぽかんと開ける。しかしレオのコンボはまだ終わっていないかった。

「魔法カード「竜の鏡」を発動！ 墓地の青眼の白龍三体を除外融合!!!」

「ちよつええっ!?! 最初に手札抹殺で墓地に送った二体つてよりもよつてそれ!?!」

レオの発動した魔法の鏡に映った三体の白い龍を見たメリオルは悲鳴のような声を上げる。そして鏡の中から一つの身体に三本の首が生えたシャープな外見の白き竜が姿を現す。

「出でよ、ブルーアイズ・アルティメットドラゴン「青眼の究極竜」!!!」

姿を現した竜は雄々しい咆哮を上げ、それを見たメリオルは額に手を当てていた。

「さらに、究極竜をリリースして「青眼の光龍」を特殊召喚！！」

フルフェイス・シャイニングドラゴン

「うわ、出たよ兄さん最強の陣形が一つ。光と闇の双龍」

究極竜が光に包まれ、その中から青眼の白竜の最終進化形態が姿を現す。そしてそれを見たライがそう眩き、メリオルはもはや何も言えなくなっていた。アルフとエルフィも額に手を当ててうつむいている。

「闇竜も光龍も墓地のドラゴンの数だけ攻撃力を上昇する。俺の墓地のドラゴンは十体！」

レオの言葉と共に墓地から竜の力が溢れ出て二体の龍に力を与えていく。

真紅眼の闇竜	攻撃力：2400	5400
青眼の光龍	攻撃力：3000	6000

「……はあ」

メリオルは呆れたようにため息をつく。そしてレオはメリオルのフィールドを指差した。

「真紅眼の闇竜で守備モンスターを攻撃！　ダークネス・ギガ・フレア！！」

レオの指示に闇竜が闇の炎でメリオルの守備モンスター　マジシヤンズ・ヴァルキリアを焼き尽くす。メリオルの場がから空きになった。

「青眼の白竜でダイレクトアタック！ シャイニング・バースト！
！」

「……負けね」LP37000

どことなく納得がいかないようにため息をつきながらメリオルはそう呟き、二人は互いに歩き寄るとまずメリオルが口を開く。

「……納得いかない。何よあの最後の引き！？」

「俺も驚いた……ま、まあ最初引きが悪かった分最後が良かったって事で……」

「うう……ま、デュエルの言い訳するのは好きじゃないしそういう事でいいわ。あなたがイカサマをするような人じゃないってのはよく知ってるしね」

メリオルは開口一番思っていた事をレオに詰め寄るように言い、それに対してレオは数歩後ずさって両手を前に出しながら返し、それを聞いたメリオルは髪をかいた後息を吐いてそう言い、くすつと微笑むとそう続ける。それに対してレオもそりやどうもという風に笑うと二人はパチンとハイタッチを行った。

一方また別の場所、薄暗く、どこかの隠れ家を思わせるこの場所にはレオ達と対立している存在　ソーマ達があった。そしてその内の一人　クメトが口を開く。

「ねえソーマ！ どうせ上から命令が来たんだろ！？」

「ああ……そろそろあの時が近づいてくる。もうしばらく奴らを足止めしないといけない……」

ソーマはそう言うとデュエルディスクを腕につけ、それを見たクメトが笑いながら言う。

「お、我らが四天衆、リーダーの出陣かい？ さぞかしでかい獲物を取ってくるんだろうねえ」

「まあね。あいつとはデュエルするって約束もしてるし……んじゃ行ってくるよ。アレウスよろしく」

クメトの言葉にソーマはひらひらと手を振って彼女の前を去っていく、ソーマは一人歩きながら指をパチンと鳴らす。それと共に彼の近くにウィップテイル・ガーゴイルが姿を現した。

「相手の状況は？」

「暢気にデュエルなんてやってた。どうする？」

「ふうん……んじゃ決行は今夜。でも僕一人で行くから絶対手出ししないでね……もし手出ししたりしちゃったら、分かってるよね？」

ウィップテイル・ガーゴイルの報告を受けたソーマはそう言ってガーゴイルに微笑みかけ、その笑みを直視したガーゴイルは承知と小さく頷くことしか出来なかった。

(さて、どれほどの実力が楽しみだよ……マジック・マスター)

ソーマはふっと笑みを浮かべながら心中でそう呟いた。

第二部第十四話 頂上決戦！？龍VS魔術師（後書き）

疲れた……今回はたまには負けは許されないうって真剣なデュエルじゃなく仲間内での楽しいデュエル……すごい無茶苦茶なバトルになつてしまいました。というか最後のレオの連続召喚コンボが我ながらバカヅキとしか言いようがありません……予定ではハイライト、ブラック・パラディンVS陣形、光と闇の双龍だったんだけどなあ。んで次回はついに今までひよひよ暗躍していた存在　ソーマがデュエリストとしてのベールを脱ぐ！……と言いたいんだけどこのまま一気に本編を進ませるか今度はライ達トリオの仲間内デュエルかで迷ってます。ま、それでは。

第二部第十五話 カップル対決？ 戦天使VS機械

レオとメリオルの凄まじいデュエルが終了した後、ライとアルフ、エルフィはふうと息を吐いて伸びをする。それからライがデュエルディスクをふと見始め、それに気づいたアルフがふつと笑いながら呟いた。

「デュエル、やる？」

「おう。さっきのデュエル見てたらなんかやりたくなってきた」

「んじゃ私も……って言いたいとこだけど、三人じゃね……トライアングルデュエルでもやる？」

アルフの言葉にライが頷きながらデュエルディスクを構えて返し、それだったらとエルフィも声を出す。しかし三人でデュエルをやると言つのは少々めんどうかい、あと一人ぐらい欲しいところである。

「ね、あたし、参加していい？」

するとそこにネラが入り込んできた。その目は妙にキラキラとしており、さっきのデュエルを見て自分もデュエルをやってみたくても思ったのだろう。しかしライは首を傾げながら尋ねた。

「いいけど……ネラ、デツキ持ってるの？」

「いや、おおまかな知識なら本能的にあるんだけどここじゃ礼使つての戦いつてしないから。アルフ、貸して」

「はいはい。んじゃいつも使ってるこれを貸すよ、僕は予備を使うから。じゃあタッグデュエルで、僕とネラが組むね」

「オツケー。んじゃよろしくな、エルファイ」

ライの問いにネラは首を横に振って返した後アルフに向けて手を伸ばす。それに対してアルフはしょうがないなあというように笑った後普段使用しているデッキをネラに渡し、自分は腰のデッキケースに入れているデッキを一つ取り出してデッキケースに差し込んだ。アルフの言葉にネラは楽しそうに嬉しそうに満面の笑みを浮かべている。

「じゃあ今回のタッグデュエルはライフポイントは共同8000、フィールドは互いに独立してるけどダイレクトアタックからパートナーを守る場合モンスターでの防御は可能、先攻一ターン目での攻撃は全員禁止、魔法・罫はお互いのフィールドに影響を与える。でいいね？」

「ああ」

それからネラがメリオルからデュエルディスクを借りて左腕につけ、今回のタッグデュエルのルールを確認してから四人はデュエルディスクを起動させる。

「……デュエル……!……!……!」

そして四人の声がエンディミオンの一画に響き渡った。そして最初にカードを引いたのはエルファイだ。

「私が先攻をもらうわね、ドロー!」

エルフィは引いたカードを手札に加えて見眺める、しかし手札が悪いのか表情を少し歪めていた。

「ん〜……永続魔法「コート・オブ・ジャスティス」を発動！そして手札から「勝利の導き手フレイヤ」を召喚し、コート・オブ・ジャスティスの効果で「ダーク・ヴァルキリア」を特殊召喚。ターン終了よ」

ダーク・ヴァルキリア 攻撃力：1800 2200

エルフィの場に二体の天使が現れ、一步下がっているフレイヤがポンポンを揺らして前に出ているダーク・ヴァルキリアに力を与える。それからエルフィはターンを終えた。

「えーっと、あたしのターン！ ドロー！」

エルフィのエンド宣言を聞いたネラはカードをドロし、手札に入る。そしてん〜と眩きながら手札を見眺めてその内の一枚を取った。

「プロト・サイバー・ドラゴン」を召喚して「融合」発動！手札のサイバー・ドラゴンと場のプロトを融合して「サイバー・ツイン・ドラゴン」を融合召喚！！」

ネラの場に二つの首を持つ白銀の機械竜が姿を現し、機械竜が遠吠えのような声を上げる。

「リバースカードを一枚セットして、ターン終了」

サイバー・ツイン・ドラゴンを見上げてにししと微笑んだネラはカードを一枚セットしてターンエンドを宣言し、それを聞いたライがカードをドローする。

「俺のターン！ 俺は「六武衆の御霊代」を召喚し、手札から「六武衆の師範」を特殊召喚。師範は俺の場に六武衆が存在する時特殊召喚できる。そして六武衆の師範に御霊代をユニオン！」

何かが宿っているような鎧がライの場に現れ、それに導かれるようにもう結構な年でありそうな侍が姿を現す。そしてライがそう叫んで手を掲げると突然鎧が老人侍に装着されていく。それと共に老人の目の覇気がどんどん強くなっていった。

「御霊代を装備した六武衆の攻撃力は500ポイント上昇し、さらにモンスターを破壊した時カードを一枚ドローできるようになる。カードを二枚セットしてターンエンドだ」

六武衆の師範 攻撃力：2100 2600

ライが笑いながら説明し、カードを伏せてターンを終了するとアルフはふふつと笑いながらカードを引く。そして引いたカードを見た。

「行くよ……」ディフォーマー「D・モバホン」を召喚しモバホンの効果発動！ 攻撃表示の時、サイコロを振って出た目の数だけデッキをめくる。その中にレベル四以下のディフォーマーが含まれている場合、召喚条件を無視して特殊召喚が出来る。ダイヤル・オン！」

アルフの指示と共にモバホンが電波を発し始め、フィールドに機械っぽさ漂うサイコロが現れて転がり始める。その目は四を指していた。

「四枚めくって……よし、「D・ボードン」を攻撃表示で特殊召喚！ボードンが守備表示で存在する時僕のデIFOーマーはダイレクタアタックが可能になる。そしてフィールド魔法「D・フィールドデIFOーマーを發動して、カードを二枚セットしてターンエンドだ」

「私のターン、ドロ……ダーク・ヴァルキリアを再度召喚してデュアル効果発動！ヴァルキリアに魔力カウンターを乗せる。そして魔力カウンターを一つ取り除いてサイバー・ツイン・ドラゴンを破壊！」

エルフィは最初から決めていたようにダーク・ヴァルキリアの秘めたる力を開放させ、闇の波動で双頭の機械竜を破壊する。そしてさつき引いた手札を取った。

「コート・オブ・ジャステイスの効果で「ウィクトーリア」を特殊召喚。フレイヤの効果で攻撃力上昇！いくわよ？ダーク・ヴァルキリアでモバホンを攻撃！」

エルフィの指示と共にダーク・ヴァルキリアはふわりと空を飛んでくると華麗に回転しながらモバホンに突進していく。しかしその動きが急に歪んだ。

「リバーズカード発動「重力解除」！表側表示で存在する全てのモンスターの表示形式を変更する」

急に重力がなくなつたせいでダーク・ヴァルキリアを始め全てのモンスターのバランスが崩れてしまい、体勢がさっきまでと逆になつてしまう。しかもそれだけではない。

「D・フィールドの効果発動、モンスターの表示形式が変更されるごとにこのカードにディフォーマーカウンターを乗せる。僕の場のディフォーマーの攻撃力はそのカウンター数×300上昇する。さっきの重力解除によって場の全てのモンスターの表示形式が変更された。D・フィールドの効果でカウンターは一つつ乗り、僕の場のディフォーマーの攻撃力は300上昇するよ」

D・モバホン	攻撃力：1000	400
D・ボードン	攻撃力：5000	800

まだ攻撃力は怖くない、しかし攻撃できなかった事で若干作戦が狂い、それにエルフィはくつと唸る。

「くつ、ターンエン」

「エンドフェイズの前にもう一枚のリバースカードを発動させてもらうね。永続罠「悪夢の迷宮」、エンドフェイズ時ターンプレイヤーの場の全てのモンスターの表示形式を変更する。そしてD・フィールドに一つカウンターを乗せるよ」

D・モバホン	攻撃力：4000	700
D・ボードン	攻撃力：8000	1100

また増えていく。しかも今は守備表示だがボードンは攻撃表示時でディフォーマーにダイレクトアタックを可能とさせる能力を持つ、1000程度とはいえダイレクトアタックになるとかなり痛い。

「あたしのターン、ドロー！……えーつと、エンドフェイズ時に表示形式が変わるんだから……「巨大ネズミ」を召喚！ エンドフェイズ時に悪夢の迷宮の効果で守備表示になって、ターン終了」

「この時D・フィールドの効果でカウンターが乗る」

D・モバホン	攻撃力：700	1000
D・ボードン	攻撃力：1100	1400

「じゃ、洒落になんねえ……俺のターン！」

雪ダルマ式にどんどん攻撃力を上昇していくディフォーマーを見ながらライはそう呟いてカードをドロウする。幸いライフは8000だから攻撃されても痛くはないがそんな攻撃を毎度毎度受けていては致命傷になる、しかも新たなディフォーマーを呼び出されても面倒だ。

「でもなあ……」

現在ボードンは守備表示、その状態だとディフォーマーは戦闘で破壊させられなくなる。八方塞とはまさにこの事だった。

「（アルフの奴いつの間にあんな洒落にならないデッキを組んだんだ？……）魔法カード「エンジェルキャッチ」を発動！ デッキからカードを二枚引いて手札を一枚捨てる。よし！ 「忍者マスター SASUKE」を召喚！！」

「ちっ」

ライは引いたカードを見るとよしと声を上げてそれを召喚、それを見たアルフは舌打ちをした。

「いくぜ！ 忍者マスター SASUKEでボードンを攻撃しその瞬間 SASUKEの効果発動！ 表側守備表示モンスターを攻撃した

際そのモンスターをダメージ計算を行わずに破壊できる！」

SASUKEの苦無がボードンの壁をこじ開けてその隙を突いた一撃がボードンを破壊する。

「さらに師範でモバホンを攻撃！」

「あっちゃあ、いい具合に回ってたのになあ」

「残念でした。装備している御霊代の効果で一枚ドローしてターンエンド……の前に悪夢の迷宮の効果か」

「うん、二体の戦士には守備表示になってもらって、D・フィールドにカウンターが一つ乗る。これでカウンターは四個だ」

こじ開けた防御の隙について一気に攻撃を仕掛け、それにアルフが苦笑しながら呟くとライも笑いながら返してカードを引く。そしてターン終了しようとしたところで二体の戦士は守備の状態に変化した。

「僕のターン、ドロー！……」「D・ラジカッセン」を召喚！ ラジカッセンは攻撃表示の時二回攻撃が可能となる。そしてD・フィールドの効果により攻撃力は1200アップ！」

D・ラジカッセン 攻撃力：1200 2400

「いきなり！？ リバースカード発動「鎖つきブーメラン」！ ラジカッセンを守備表示に変更して装備カードとして師範に装備、攻撃力を500上昇させる！」

六武衆の師範 攻撃力：2600 3100
D・ラジカッセン 攻撃力：2400 2700

「おしい、でも表示形式が変更されたからD・フィールドにカウンターが乗るよ。カードを一枚セットしてエンドフェイズに悪夢の迷宮の効果でラジカッセンを攻撃表示に変更、カウンターを乗せる」

D・ラジカッセン 攻撃力：2700 3000

ついに青眼の白龍に並んだローレベルの二回攻撃モンスター。反則としか言いようがないものにライとエルフィはただ沈黙し、次のターンプレイヤーであるエルフィはデッキからカードをドローする。

簡易状況説明

ライ・エルフィペア LP8000

ライ 手札四枚

フィールド：六武衆の師範、忍者マスターSASUKE全て守備表示 鎖つきブーメラン、六武衆の御霊代全て師範装備中、伏せカード一枚

エルフィ 手札三枚

フィールド：ダーク・ヴァルキリア、勝利の導き手フレイヤ、ウイクトリア全て攻撃表示 コート・オブ・ジャスティス発動中、伏せカードなし

アルフ・ネラペア LP8000

アルフ 手札二枚

フィールド：D・ラジカッセン攻撃表示 D・フィールド、悪夢の迷宮発動中、伏せカード一枚

ネラ 手札二枚

フィールド：巨大ネズミ守備表示 伏せカード一枚

「私のターン、ドロー！」

エルフィはカードを引いて手札に加え、手札を見眺める。しかし相手の場のラジカツセンをなんとか出来るようなカードは手札にない。

「くっ……コート・オブ・ジャスティスの効果で「光神テテウス」を攻撃表示で特殊召喚してエンドフェイズ、悪夢の迷宮により私の場の天使は全て守備表示に変更される。カードを一枚セットしてターンエンド」

「これでカウンターが一つ乗る」

D・ラジカツセン 攻撃力：3000 3300

ワンターンごとに攻撃力がどんどん上がっていく。それを横目で見ながらネラはカードをドローした。

「あたしのターンドロ！ よし、永続魔法「古代の機械城」を發動して、「古代の機械騎士」を攻撃表示で召喚！ 巨大ネズミも攻撃表示にして、一気に攻撃！！ 古代の機械騎士で光神テテウスを、巨大ネズミで忍者マスター SASUKE を攻撃！」

「リバースカード発動「死力のタッグ・チェンジ」！ その効果で手札から「コマンド・ナイト」を守備表示で特殊召喚！」

ネラの場の二体のモンスターが一気に天使と忍者を倒し、しかしライが発動した罠の力で SASUKE の代わりに赤い帽子を被った女

性騎士がその場に姿を現した。

「あっちゃー……エンドフェイスに二体とも守備表示になって、ターンエンド」

D・ラジカツセン 攻撃力：3300 3600

「俺のターン、ドロー!!」

ライは力強くカードをドローし、ドローカードを見る。と彼はよしと頷いた。

「速効魔法「月の書」発動! その効果でラジカツセンを守備表示に変更する」

「わお」

ライの発動した魔法の効果によりラジカツセンが月が雲に隠されるように姿を消していき、ライはそこを狙った。

「「翻弄するエルフの剣士」を召喚し、全員攻撃表示に変更! コマンド・ナイトの効果で攻撃力が400ポイント上昇する!」

六武衆の師範 攻撃力：3100 3500

翻弄するエルフの剣士 攻撃力：1400 1800

コマンド・ナイト 攻撃力：1200 1600

「いくぜ! コマンドナイトで裏守備モンスター、ラジカツセンを攻撃し破壊! そして追撃!!」

「リバースカード発動「サイクロン」！ その効果で僕の場のD・フィールドを破壊！」

「へっ！？」

「D・フィールド効果発動！ このフィールド魔法が破壊された時墓地のデイフォーマーを特殊召喚できる。D・ボードンを守備表示！！！」

「くそっ、ターンエンドだ」

アルフの場のフィールド魔法が破壊されたと思うとアルフの場にさつきまでライ達を苦しめていたデイフォーマーが守りの姿勢で姿を現す。その姿を見たライはくそっと呟いてターン終了した。もちろんエンドフェイズでライの場の戦士族は全員守備体形を取っている。

「僕のターン！ 魔法カード「ジャンクBOX」を発動、その効果で墓地からD・モバホンを特殊召喚、この効果で召喚されたデイフォーマーはエンドフェイズに破壊される。けどとりあえず効果発動、ダイヤル・オン！」

アルフの掛け声と共にサイコロが転がり、三の目を示す。それを見たアルフは素早く三枚のカードを引いて見た。

「「D・パッチン」を特殊召喚し、ボードンを攻撃表示に変更。ボードンの効果発動！ 僕の場のデイフォーマーは相手にダイレクトアタックが可能になる。全員攻撃！」

「リバースカード発動「和睦の使者」！ その効果で戦闘ダメージは0になる」

「残念、じゃあメインフェイズ2にパツチンの効果発動、モバホンをリリースして……そうだな……コマンド・ナイトを破壊」

「くっ!？」

エルフィの発動したカード効果で戦闘ダメージは免れたもののパツチンから射出されたモバホンがコマンド・ナイトを貫き、破壊する。

「エンドフェイズ、悪夢の迷宮の効果でボードンとパツチンを守備表示に変更。ターンエンド」

「私のターン、ドロ……魔法カード「打ち出の小槌」を発動！
私の手札は二枚、両方をデッキに戻してシャッフル、新たに二枚のカードを引くわ」

エルフィは手札を全てデッキに戻してシャッフルし、念を込めるように目を閉じて指をデッキの上に置く。そしてカツと目を見開いて二枚のカードを抜き取った。

「……よし！ ウィクトーリアとダーク・ヴァルキリアをリリースし、「アテナ」をアドバンス召喚！ さらにコート・オブ・ジャスティスの効果で「エンジェルナイト天空騎士パーシアス」を特殊召喚し、アテナの効果で相手ライフに600のダメージを与える、天罰てきめん！」

「くっ……先手は取られたか」LP8000 7400

「きゃあんっ……」

「フレイヤの効果で二体の天使の攻撃力は400上昇する。全員攻撃表示に変更、ここで一気に攻め込むわ！ アテナで巨大ネズミ、

「パーシアスで古代騎士を攻撃！」

アテナ 攻撃力：2600 3000

天空騎士パーシアス 攻撃力：1900 2300

エルフィに指示と共にアテナが槍の一撃で巨大ネズミを貫き、パーシアスが光の剣で古代の機械騎士を切り裂く。そして光の剣から発された粒子が弾丸のようにネラを襲った。

「パーシアスは貫通ダメージを与える効果を持ち、相手に戦闘ダメージを与えた時にカードを一枚ドロォできるわ」

「うー……巨大ネズミ効果発動！ デッキから攻撃力1500以下の地属性……」
アンティーク・ギアエンジンニア
「古代の機械工兵」を特殊召喚！」 LP7400 5600

「ダイレクトアタックは免れたわね。エンドフェイズ、悪夢の迷宮の効果で三体とも守備表示に変更し、ターンエンド」

エルフィの得意げな顔での説明とカードドロォに対しネラは右手がドリルになっている古代の機械を呼び出す。それを見たエルフィはふっと笑みを浮かべてそう言い、アテナ達が守備の体形に移るのを見ながらターンを終了した。

「あたしのターン、ドロォ！……えーっと……あ、そだ。カウンタ―が一つ以上乗ってるから問題ないね、古代の機械城を墓地に送って、手札から」
アンティーク・ギアピースト
「古代機械の獣」をアドバンス召喚！」

ネラの背後にそびえていた古めかしい機械城が消えていき、その代わりに古代機械の獣が姿を現してそいつはギシギシと音を鳴らしな

がら遠吠えみたいな声を上げる。そしてネラはエルフィの場の天使を指差した。

「お返しだよ！ 古代の機械工兵でアテナを、古代の機械獣でパーシアスを攻撃！！」

ネラの指示を聞いた二体の機械がエルフィの場に突進していき、機械工兵のドリルがアテナの盾を貫いてアテナをも貫き、機械獣の牙がパーシアスを噛み砕く。しかも機械工兵はまだ動いている。

「古代の機械工兵が攻撃したダメージステップ終了時、相手の場の魔法・罫を一枚破壊できる。コート・オブ・ジャスティスを破壊するよ！ んでターン終了」

「俺のターン、ドロー！」

ネラの指示で工兵がエルフィの場に発動されていた魔法カードを破壊し、それと共にエルフィの場に現れていた天使を呼ぶ力が消え去っていく。そしてネラのエンド宣言と共にライはカードをドローした。

「翻弄するエルフの剣士をリリースして「光帝クライス」をアドバンス召喚！ クライスの効果で鎖つきブーメランを破壊し、破壊力ードのコントローラーである俺はカードを一枚ドロー！」

六武衆の師範 攻撃力：3100 2600

「六武衆の師範で古代機械の工兵を攻撃！」

「ふにゃあつ！」 LP5600 4500

ライの指示を受けた師範は一気に機械工兵に突進していき、その太刀が一撃で機械工兵を斬り倒す。そして師範の纏った鎧が光を放ち始めた。

「師範の装備している御霊代の効果でカードを一枚ドロウ！ クライスは召喚ターン攻撃できない。エンドフェイズに両方とも守備表示になって、ターンエンドだ」

「僕のターン！」

ライはデッキからカードを引くと二体の戦士が守備の体勢を取るのを見ながらターンを終了し、それを聞いてからアルフはカードをドロウする。そのドロウカードを見るとアルフは不敵に微笑んだ。

「「D・ラジョン」を攻撃表示で召喚し、全員攻撃表示に変更！ラジョンが表側表示で存在する時僕の場のデIFOォーマーは攻撃力が800上昇し、ボードンが攻撃表示の時僕の場のデIFOォーマーはダイレクトアタックが可能になる！」

D・ボードン	攻撃力：500	1300
D・パツチン	攻撃力：1200	2000
D・ラジョン	攻撃力：1000	1800

「「げっ……」」

「全員でダイレクトアタック！」

「「うわああああ……！」」LP8000 3900

アルフの場のモンスターはライとエルフィの場のモンスターを潜り抜けてライ達に直接攻撃し、一瞬でライフのリードを奪っていった。

「リバーズカードを一枚伏せてエンドフェイズ、悪夢の迷宮の効果により僕の場のディフォーマーは全員守備表示になってボードンの効果、僕の場のディフォーマーは戦闘で破壊されなくなる。ちなみにラジオンの効果で守備力も1000上昇するよ。ターンエンドだ」

D・ボードン 守備力：1800 2800

D・ラジオン 守備力：900 1900

D・パッチン 守備力：800 1800

さっきまで攻撃態勢を取っていたディフォーマーが一斉に防御の構えを取り、ボードンが他のディフォーマーにも攻撃耐性の力を与える。

簡易状況説明

ライ・エルフィペア LP：3900

ライ 手札四枚

フィールド 六武衆の師範、光帝クライス全員守備表示 死力のタッグ・チェンジ発動中、六武衆の御霊代師範装備中、伏せカードなし

エルフィ 手札一枚

フィールド 勝利の導き手フレイヤ守備表示 伏せカードなし

アルフ・ネラペア LP：4500

アルフ 手札一枚

フィールド D・ボードン、D・パッチン、D・ラジオン全員守備表示 伏せカード一枚

ネラ 手札二枚

フィールド 古代の機械獣守備表示 伏せカード一枚

「攻撃表示でダイレクトアタック、守備表示で戦闘破壊無効……なんちゅうモンスターよ……私のターン！」

ボードンを見つめながらエルフィはそう毒づいてカードをドロし、手札を見る。そして少しうくと唸った後動く。

「モンスターをセット、ターンエンドよ」

「あたしのターン、ドロー！」

エルフィはモンスターをセットするターンを終え、それを聞いたネラがカードをドロする。するとよしと頷いた。

「あたしは「サイバー・ドラゴン・ツヴァイ」を召喚して効果発動！ 手札の魔法カード、リミッター解除を見せてツヴァイのカード名をサイバー・ドラゴンにするね」

「……嫌な予感」

この流れにネラの場合には伏せカードが一枚、この状況から考えられることなんて一つしかない。

「リバーズカード発動「DNA改造手術」！ その効果で全てのモンスターを機械族に変更するよ。そしてサイバー・ドラゴンになったツヴァイと師範、クライス、フレイヤを融合！ 「キメラテック・フォートレス・ドラゴン」を特殊召喚！ 融合素材モンスターは四

体だから攻撃力4000!!」

やっぱりとライとエルフィは顔を見合わせ、ネラは得意げな表情を見せる。

「いつけー！ 古代獣でエルフィの守備モンスターを攻撃!!」

ネラの指示と共に古代獣がエルフィの場に唯一残ったモンスターに突撃、牙を剥く。しかし噛み付かれた相手は柔らかく形状を変化させるとひゅるんと牙を潜り抜けた。

「守備モンスターは「マシユマロン」！ このカードは戦闘で破壊されず、相手が裏守備だったこのモンスターを攻撃した場合相手ライフに1000ダメージを与える！」

「うええ……」 LP 4500 3500

守備モンスター マシユマロンが光を放ってネラに反撃し、それにネラは嫌そうな顔を見せる。

「むう、甘いものは好きなのになんか嫌な感じ……エンドフェイズ、二体とも守備表示に変更され、ターンエンド」

「俺のターン、ドロー！」

ネラはむうとした表情を見せてターンを終え、それを聞いてからライはカードをドローする。そしてそのカードを見るとよしと目を輝かせた。

「うっとおしい迷宮を脱出だ！ 魔法カード「大嵐」を発動！」

一気に吹き荒れた大嵐がアルフの場の魔法・罫カードを一瞬で破壊していき、アルフはしまったというような表情を見せる。

「反撃開始だ！ 切り込み隊長を召喚しその効果で復讐の女戦士ローズを特殊召喚しレベル4のローズとレベル3の切り込み隊長をチユーンング！ シンクロ召喚「セブン・ソード・ウォリアー」！！」

二人の戦士が光に包まれ、その光の中から新たな戦士が姿を現す。

「手札から「デーモンの斧」をウォリアーに装備し効果発動！ このカードに装備カードが装備されたとき相手に800のダメージを与える！」

セブン・ソード・ウォリアー 攻撃力：2300 3300

「くっ……」 LP3500 2700

「まずはセブン・ソード・ウォリアーでキメラテック・フォートレス・ドラゴンを攻撃！」

フォートレスの守備力は0、斧の一撃が機械竜を破壊した。するとウォリアーはその斧を掲げる。

「セブン・ソード・ウォリアーの効果発動！ このカードに装備された装備カードを墓地に送る」

ライの宣言と共にウォリアーの手から斧が光の粒子となって消えていく。しかしその光の粒子はウォリアーの周りを舞っていた。

「ただ墓地に送るだけじゃない！ このカードに装備された装備カードが墓地に送られた時相手の場のモンスターを一体破壊できる。俺が破壊するのはD・ボードン！」

「しまった……」

「ターンエンドだ」

ウォリアーの周りを舞っていた光の粒子はボードンを包み込むとボードンもろとも消えていき、アルフは顔をしかめる。それからライはターンエンドを宣言した。

「僕のターン、ドロー！……D・パッチンの効果でラジオンを墓地に送り、マシユマロンを破壊、そして魔法カード「D・スピードユニット」を発動！ D・パッチンをデッキに戻してセブン・ソード・ウォリアーを破壊する。そしてカードを一枚ドロー」

アルフの場からパッチンの姿が消えていき、それと共にセブン・ソード・ウォリアーが破壊される。そしてアルフはカードを一枚ドローした後フィールドを見た。

「……モンスターをセット、ターンエンドだ」

「私のターン、ドロー！」

アルフのエンド宣言を聞いたエルフィはカードをドローする。そのドローカードを見るとエルフィはぱつと表情を輝かせた。

「大遅刻よ全くもう！ 永続魔法発動「神の居城 ヴァルハラ」！」

「このタイミングで……何が来る？」

「ヴァルハラの効果で」ライトニング・ギア「光神機 轟龍」を特殊召喚！ 轟龍で古代機械の獣を攻撃！ 貫通ダメージが通るわよ」

「ううっ……」 LP 2700 1800

「ターンエンド！」

エルフィの発動した神々しき城から機械天使が姿を現して古代獣に突進、破壊した衝撃がネラにまでダメージを与え、エルフィは小さくガッツポーズを取ってターンを終えた。

「あたしのターン、ドロー！」

エルフィのエンド宣言を聞いてカードをドローしたネラはきよとんとした表情を見せ、声を出した。

「ね、これってモンスターゾーンは互いに独立って解釈でいいんだよね？」

「え？ うん、そっでいいんだよね？」

「ああ」

「うん」

ネラの問いにアルフは頷いた後ライとエルフィに確認を取り、二人も肯定の意思を示すために頷く。それを聞くとネラはよしと頷いた。

「だったら問題ない！」「サイバー・ドラゴン」を攻撃表示で特殊召喚！でもって魔法カード「リミッター解除」！機械族サイバー・ドラゴンの攻撃力を倍にする！」

サイバー・ドラゴン 攻撃力：2100 4200

「うわぁ」

「サイバー・ドラゴンで轟龍を攻撃！エヴォリユーション・バースト・マキシマム！！」

「くっ……」LP：3900 2600

目が黄色く妖しく輝きだしたサイバー・ドラゴンの発射したブレスが轟龍を貫き破壊し、その一撃がエルフィのライフを削り取る。

「カードを一枚セットしてターン終了」

「俺のターン、ドロー！……魔法カード「カップ・オブ・エース」！」

「ギャンブルカード……本当に入れたんだ」

ネラがカードを一枚伏せてターンを終了するとライはカードを引き、素早くそのカードを発動する。そのカードを見たアルフはくすつと笑ってそう呟き、バーチャルにコインが表示される。

「裏だった時のドロー権利はエルフィに渡すぜ」

「変則タッグデュエルの盲点コンボだね」

これならどう転んでも損しない。ライの発言にアルフは肩をすくめて笑い、ネラはどことなく卑怯なというような目を見せる。その間にコインは弾かれたように空を舞った。そして落ちてきたコインは……表を見せていた。

「よし、二枚ドロー！ よっしゃ、魔法カード「壺の中の魔術書」、その効果の相手にはエルフィを選択！ 互いのプレイヤーはカードを三枚ドローする」

二枚ドローしたライは続けてさらなるドロー強化カードを発動し、エルフィも共にカードをドローした。アルフは苦笑しながらはあと息を吐き、ネラはむうと頬を膨らませている。まあ確かに二人ともデメリットなしのカード三枚ドローなんてされたら普通むかつくだろう。

「よし、「クイーンズ・ナイト」を召喚して魔法カード「二重召喚」発動！ その効果で「キングス・ナイト」を召喚、クイーンとキングが揃ったことによりデッキから「ジャックス・ナイト」を特殊召喚。そして魔法カード「融合」！ 絵札の三剣士を融合し「アルカナ ナイトジョーカー」を融合召喚！！」

ライの場に一気に絵札の三剣士が揃ったと思っただら彼女らは光に包まれ、その光の中から天位の騎士が姿を現す。

「アルカナナイトジョーカーの攻撃！ ロイヤルストレートフラッシュュ！」

「くっ」

「ターンエンド」

ジョーカーの一閃がアルフの場の伏せモンスター D・カメラ
ンを斬り倒し、それを見てからライはターンエンドを宣言する。

「僕のターン……モンスターをセットしてターンエンド」

アルフはカードをドロワーして手札を見眺めるがいいカードはないの
かモンスターをセットするとターンを終える。

「私のターン！……よし、終わらせるわ！ ヴァルハラの効果で手
札から「アテナ」を特殊召喚！」

「二枚目！？」

エルフィの召喚したモンスターにアルフとネラは息ぴったりにつ
コミを入れ、エルフィはさらに魔法カードを発動した。

「洗脳 ブレインコントロール」！ その効果で800ライフを
コストに表側表示モンスター、「アルカナ ナイトジョーカー」の
コントロールをエンドフェイズまで得る」LP2600 1800

ライの場のジョーカーはライと頷き合つとエルフィの場に移動し、
アテナの横に立つ。

「ネラの伏せカードが攻撃反応系じゃないのはさっきのジョーカー
の攻撃で確認できた。いくわよ、アテナで守備モンスターを攻撃！
アイギス・スピア！！」

エルフィの指示と共にアテナの槍の一撃がアルフの場の守備モンス

ター D・モバホンを破壊する。

「これで止めよ！ アルカナナイトジョーカーでダイレクトアタックー！」

「ロイヤルストレートフラッシュー！！！」

「うわあああああ！！！」 LP1800 0

ライとエルファイが声を合わせて叫び、ジョーカーの剣がアルフとネラをぶった斬る。アルフとネラの共同ライフポイントが0を示した。

「か、勝った……」

「危な……」

「あっちゃー、いいとこまでいったと思ったのに……残念残念」

「うあー！！！」

ライとエルファイはほおつと胸を撫で下ろして眩き、アルフは髪をかきながら微笑んで残念と呟いてネラは敗北の悔しさを示しているのか声を上げる。

それからヴァルツが「そろそろ帰るぞ」と声を出し、ライ達は「はい」と口々にそう言うつとネラがメリオルにデュエルディスクを、アルフにデッキを返してから一行は城の方へと帰っていった。

そして夜エンディミオン城の一室、この部屋ではメリオルがすやすやと寝息を立てていた。しかし彼女は何かの気配に感じて目を開け、起き上がる。

「や、こんばんは」

「ソー」

メリオルの前に立っているのは敵　ソーマ。その姿を視認したメリオルは素早く武器である扇子に手を伸ばすが扇子は突然何かに弾き飛ばされた。

「動くな。動いたら今度は肩を撃ち抜くよ」

ソーマはメリオルが動くより先にサイレンサー付きの銃を構えており、メリオルはくつと眩く。

「こんな夜中だ、うるさくするのもなんだしすぐに用件を言おう。僕とデュエルしないか？」

「……断つたら？」

「残念だけどここで銃を乱射する」

「選択の余地ないじゃないの……分かったわ」

ソーマの問いにメリオルが問い返すとソーマは真顔でそう言い、それを聞いたメリオルは諦めたように息を吐いて眩き、それから頷いてそう続ける。それにソーマはよしと頷いて銃を下ろした。

「とはいえこんなところでデュエルして誰かに来られたら厄介だ……誰もいないところに案内するよ」

「そういつて私を捕まえようって気じゃないの？」

「そんな不躰な事はしないよ、正真正銘ここには僕一人だけで来た。」

まあ君が負けたらどうなるか分からないけどね、僕が負けたら僕は大人しく君に捕まる。ここに拘束されても構わないし目的も全て告白しよう」

「それが本当という保障は？」

「残念だけどこればかりはそちらに信じてもらわないとね。でも、僕は軽い冗談こそ言うけど嘘はつかないし約束は守る事を信条にしてるから」

「……分かった。けど武器ぐらい持って行かせてもらっわね」

「どうぞ自由に」

ソーマとメリオルはそう話し合い、ソーマの最後の言葉を聞いてようやくメリオルは警戒を解いたようにそう言った後扇子に手を伸ばしながら続け、それにソーマはこくと頷いた。そしてメリオルはさつき銃弾で弾き飛ばされた扇子に異常がないかをソーマに注意をむけつつ点検し、異常なしということを確認するとベッドから降りる。

「壁の方向いてて、私がオツケー言うまで絶対振り向かないですよ…
…振り向いたら大声上げて皆を呼び寄せてから殺す」

「はいはい」

それから殺気を見せて睨みながらソーマに壁の方を向くように指示し、ソーマは指示に従って壁の方を向き、ご丁寧に目も閉じる。それを確認してからメリオルは寝巻きを普段の私服に着替えて、着替え終えてからオツケーを出した。それを聞いてようやくソーマは振

り返る。

「んじゃ戦いの場にご案内いたします、お姫様」

ソーマはわざとらしく仰々しく礼をすると指をぱちんと鳴らし、それと共にソーマの隣に黒い変な空間が発生する。

「……暗黒界に続く結界通路？」

「心配しなくても暗黒界には続いてないよ。行き先をちよつといじつといたから。さ、入って入って……僕が先に入るべきだね」

メリオルの言葉にソーマはそう言った後入ってと言うがその後気づいたように呟いて先に空間に入る、それを見届けてからメリオルも空間の中に入っていった。

それから二人が来たのはどこかの広原、メリオルが抜けた後空間通路は消え、メリオルがきよるきよると警戒するように辺りを見回しているソーマが口を開く。

「誰もいないよ、それとここは……後ろ見てみなよ」

「?……あ、エンディミオン」

「そう、エンディミオンから少し離れただけの地点。さあ、道案内も済んだことだし……デュエルといくかい？」

警戒しているメリオルに安心させるような口調でソーマはそう言い、後ろを向くように示すとメリオルは正直に振り向く。その視界の先には魔法都市エンディミオンが見え、それをメリオルが確認するとソーマは頷いて返す。それからソーマはデュエルディスクを起動し、

それに気づいたメリオルも振り返る。

「……ええ、私が勝つたらあなた達の目的全て吐いてもらうからね」

「仰せのままに……勝てればね」

ソーマがデュエルディスクを起動しながら言うのに対してメリオルもデュエルディスクを起動しながら返し、それを聞いたソーマはくすくすと笑いながら言い返した。

「デュエル!!!」

そして二人のデュエル開始の音が広原に響き渡った。

第二部第十五話 カップル対決？ 戦天使VS機械（後書き）

あゝ疲れた……まずはお久しぶりです。でもって今回は仲間内タッグデュエル、アルフにはとある別場所を使っているディフォーマーを使ってもらいました。ちなみに彼は設定上ライとのタッグデュエル専用のHEROデッキ、黒アルフ状態で使ってたロックバーンも持ってます。

ちなみにディフォーマーは未経験だったんですがまさかこんな事になるうとは……ライとエルフィが最初連呼してた「洒落にならない」は僕の心情です。あんな凄い攻撃力をあっさり生み出すとは恐るべしディフォーマー……ってのは僕の勘違いで修正しましたが……それでも結構な攻撃力になりますねえ……。まあ一番凄いのは知識こそあれどデュエル自体は初めて、しかも初めてのデッキを苦もなく使いこなすネラだったりするかもしれないんですけど。

んで今回はメリオルVSソーマ、いつになるやら分かりませんが、とりあえずそれでは。

第二部第十六話 魔術師対暗黒

もう既に日も暮れた夜、ここはインディミオンから少し離れた広原。そこでメリオルとソーマがデュエルを始めようとしていた。

「デュエル!!!」

二人は声を合わせて叫び、続けてソーマが素早くデッキに指をかける。

「先攻はもらうね、僕のターン！」

ソーマは素早くそう言うのとデッキからカードをドロ―し、手札を見る。そして一つふつと微笑んだ。

「手札からレベル五以上の闇属性「バーサーク・デッド・ドラゴン」を捨てて「ダーク・グレファア」を特殊召喚。そして手札の「ネクロ・ガードナー」を捨ててデッキから「ジャイアント・オーク」を墓地に送る。そしてこれで僕の墓地に三体の闇属性モンスターが揃った。「ダーク・アームド・ドラゴン」を特殊召喚!!!」

デュエルフィールド地面に闇が現れ、その闇の中から黒き龍が姿を現す。その姿を見たメリオルは啞然とした表情を浮かべていた。

「は、速い……」

「「悪夢再び」を発動、その効果でジャイアント・オークとバーサーク・デッド・ドラゴンを手札に加える。僕はまだ通常召喚を行ってないよね?」「ジャイアント・オーク」を召喚。バーサークを捨

てて「トレード・イン」を発動し二枚ドロ、二枚カードを伏せてターンエンドだ」

一枚の手札も無駄にせずワンターン、一瞬でモンスターを揃えて伏せカードまで整えた。それにメリオルはくつと唸る。

(しかも墓地には……)

墓地には一度だけとはいえ攻撃無効能力を持つネクロ・ガードナーが眠っている。恐らく防御は完璧と言っただろう。

「ターンエンドだよ、君のターンだけど？」

「分かってる！ 私のターン！！」

ソーマがおちよくるように言うのにメリオルは激昂したかのように叫んでカードをドロする。

「「熟練の白魔術師」を召喚し「二重召喚」発動。白魔術師に魔力カウンターが一つ乗り、「熟練の黒魔術師」を召喚！「魔力掌握」を発動し黒魔術師に魔力カウンターを乗せデッキから魔力掌握を加える、魔法が発動したことにより二人の魔術師に魔力カウンターが乗る。そして「打ち出の小槌」を発動し手札を一枚デッキに戻してシャッフル、新たに一枚ドロ。魔法が発動したことで魔力カウンターを乗せる」

メリオルの場に二体の魔術師が現れ、その肩と胸の宝玉に魔力が宿る。そしてメリオルはさらに宣言した。

「そして魔力カウンターが三つ乗った黒魔術師、白魔術師をリリー

スしてデッキから「ブラック・マジシャン」、「バスター・ブレイダー」を特殊召喚！」

「速い速い」

二体の魔術師がそれぞれ闇と光に包まれ、その闇の中からブラック・マジシャンが、光の中からバスター・ブレイダーが現れる。メリオルも負けじと自分のデッキの切り札である黒き魔術師と龍破壊の戦士を呼び出した。それを見たソーマはぱちぱちと拍手しながら返す。

「バスター・ブレイダーは相手の場、墓地のドラゴン族の数×500攻撃力を上昇させる。あなたの場のドラゴンはダーク・アームド・ドラゴン一体のみ。攻撃力は500上昇！」

バスター・ブレイダー 攻撃力：2600 3100

「死ねえダムドオ！ 魔法カード「千本ナイフ」発動、ダーク・アームド・ドラゴンを破壊！」

「甘いね。リバーカード発動、カウンター罠「闇の幻影」！ 千本ナイフの効果が無効にし破壊する！」

ダーク・アームド・ドラゴン目掛けて千本ものナイフが飛んでいくがそれらは全てダーク・アームド・ドラゴンをすり抜ける。千本のナイフが狙っていた標的は闇が生み出した幻影だった。

「くっ、リバーカードを伏せてバトルフェイズ！ バスター・ブレイダーでダーク・アームド・ドラゴンに攻撃！」

「リバーカード発動「攻撃の無力化」！ バスター・ブレイダー

の攻撃を無効にしバトルフェイズを終了させる」

「ターンエンド！」

バスター・ブレイダーの大剣の一撃は突然現れた不思議な障壁によって防御される。ソーマはへらへらと笑いながらメリオルの攻撃を全ていなしており、メリオルは苛々とした態度でターンを終えた。

「僕のターン、ドロー」

ソーマはわざとらしく華麗にカードをドローし、それを墓地にやりながら言った。

「……ダーク・グレフアーの効果で手札からシャドウ・ダイバーを捨てデッキから首領・ザルグを墓地に送る。そしてダーク・アームド・ドラゴンの効果で墓地のバーサーク・デッド・ドラゴンを除外しバスター・ブレイダーを破壊する！」

ソーマの宣言と共にダーク・アームド・ドラゴンが黒い息吹でバスター・ブレイダーを破壊する。そして次にブラック・マジシャンを指差した。

「ダーク・アームド・ドラゴンでブラック・マジシャンを攻撃！

アームドダークビッグパニッシャー！！」

「リバースカード発動「和睦の使者」！ その効果でこのターンのみ戦闘ダメージを0にし私の場のモンスターは戦闘では破壊されなくなる！」

「あらら。ターンエンドだ」

ソーマの指示と共にダーク・アームド・ドラゴンの手に何かの力が集まり、それがブラック・マジシャン目掛けて放たれる。しかしその直前ブラック・マジシャンの前に三人の貴婦人が集まって魔力の壁を張り、その攻撃を受け止めた。それを見たソーマはあららと呟いてターンを終える。

「私のターンドロー！」

ソーマの宣言を聞くと同時にメリオルは力強くカードをドローし、そのカードを見る。

「くっ……カードを一枚セットしてブラック・マジシャンでダーク・グレファアーに攻撃！」

「墓地のネクロ・ガードナーを除外して無効」

「ターンエンドよ」

しかし引きが悪かったらしく表情をゆがめるとそのカードを伏せてブラック・マジシャンに攻撃を指示、しかしそれは突然半透明の姿で現れたモンスターの幻影に阻まれ、それを見たメリオルはすぐにターンを終える。それを見るとソーマはふうんと笑みを浮かべた。

「引きが悪いみたいだね、僕のターン」

そう言つて彼はカードを引き、それを見るとふつと笑みを浮かべた。

「お互い手札は0、ここは一つ助け合いつて事で。魔法カード「壺の中の魔術書」を発動！」

「お互いに三枚ドロ―ね……少しは感謝するわ」

「君みたいな美人に感謝されるとは嬉しいよ。ドロ―」

ソーマの発動した魔法にメリオルが相変わらずきつい表情のまま返すと彼はわざとらしく笑いながらそう言っただけカードをドロ―する。それを見ると彼はにやりと笑みを浮かべた。

「じゃ、いくかな。魔法カード「魂吸収」、カードが除外される度に僕のライフは500回復する。そして魔法カード「闇の誘惑」、カードを二枚ドロ―し、手札からネクロフェイスを除外する」

「ネクロフェイス!？」

ソーマは新たな魔法を発動した後そう続け、ソーマの捨てた不気味な人形の顔らしきモンスターがフィールドに現れる。そしてメリオルのデッキに向けてその壊れた顔から出ている触手らしきものを伸ばしてくる。

「きゃっ!?!？」

「効果の視覚映像だよ。デッキの上から五枚のカードを除外してね」

思わずメリオルは小さく悲鳴を上げて飛び下がり、それを見たソーマは笑みを浮かべながらそう言っただけ自分もカードを除外し、メリオルは少し恥ずかしそうに顔を赤くしながらデッキの上からカードを五枚除外する。

「ブラック・マジシャン・ガール」「デイモンション・マジック」

「熟練の黒魔術師」「賢者の宝石」「魔法吸収」

「嘘……」

メリオルのデッキのメインカード、ブラック・マジシャン速攻召喚コンボの起点となるカードが除外されていた。

「僕も除外つと」

「ジャイアントウイルス」「冥府の使者ゴーズ」「ダークバースト

」「人造人間サイコショッカー」「ダーク・パーシアス」

「あらら、ゴーズが除外されたのは痛いな……あ、そうそう。カードが11枚除外されたから魂吸収の効果で合計5500ライフを回復するよ」LP4000 9500

「5500回復……」

ソーマも除外していったカードを見ながら軽い表情でそう言う。そう思ったら次元の狭間へと消え去ったカードの魂が光となってソーマに吸い込まれていき、彼のライフが一気に回復する。それにメリオルは顔をしかめた。自分も魔法吸収との回復コンボを利用するが回復の勢いが違った。

「じゃ、墓地のザルীগを除外してブラック・マジシャンを破壊！」
LP9500 10000

「くっ」

ダーク・アームド・ドラゴンの放った闇のプレスがブラック・マジ

シヤンを呑み込んでいき、それを見たメリオルは表情を歪める。

「終わりつと。ダーク・アームド・ドラゴンでダイレクトアタック」

「リバースカード発動「リビングデッドの呼び声」！ 墓地からバスター・ブレイダーを特殊召喚！」

ソーマがへらへらと笑いながら攻撃を指示するとメリオルは瞬時に伏せていたカードを発動、墓地から龍破壊の戦士を呼び出す。彼のオーラはダーク・アームド・ドラゴンが相手にいることにより上昇していた。

バスター・ブレイダー 攻撃力：2600 3100

「わあしまったしまったうっかり伏せカードを破壊し忘れてたよ。

じゃあ巻き戻しによって攻撃せずにメインフェイズ2、手札から速攻魔法「異次元からの埋葬」でネクロ・ガードナーとネクロフェイスを墓地に戻してネクロフェイスを除外し、バスター・ブレイダーを破壊。リビングデッドの呼び声も破壊され、さらにネクロフェイスの効果発動！」LP10000 10500

ソーマはわざとらしく笑いながらそう言うって攻撃を取りやめ、新たな魔法を発動したと思ったらその効果で墓地へと戻った先ほどのネクロフェイスは不気味な人形の頭をまた除外する。そのエネルギーを受けたダーク・アームド・ドラゴンの闇のブレスがバスター・ブレイダーを呑み込み、ネクロフェイスは不気味な触手をメリオルに向けて伸ばしてくる。それを見て少し表情を引きつらせながらメリオルは苛々とした様子でデッキから五枚のカードを抜き取る。

「五枚除外！」

「魔導騎士ブレイカー」「見習い魔術師」「カオス・ソーサラー」
「執念深き老魔術師」「魔術の呪文書」

「くっ……」

またもや結構主力となりうるモンスターが除外され、それにメリオルはさらに表情をゆがめた。

「除外つと」

「終末の騎士」「ダーク・グレフアー」「D・D・R」「速攻の黒い忍者」「闇王プロメテイス」

「ふむ、D・D・Rが落ちたか……おっと、リバースカードを一枚伏せてターンエンドだ。うっかりミスのせいで勝ちを逃しちゃったよ」LP10500 16000

ソーマも同じように除外したカードをふむと唸りながら呟き、その後思い出したように笑みを浮かべながらそう言う。その言葉を聞いたメリオルはむっとしながら心中で呟いた。

「（ミス？ いえ、違う……こいつ、自分が圧倒的に優勢だったから余裕を見せただけ……後悔させてやるわ！）私のターン！！」

メリオルは前方でへらへらと笑っているソーマを睨みつけながらカードをドロシー、手札を見眺める。

「「ジエスター・コンフィ」を攻撃表示で特殊召喚し、コンフィを

リリースして「ブリザード・プリンセス」をアドバンス召喚！」

メリオルの場に現れた魔術師が氷に包まれたと思うとそれが弾けとび、中から氷で出来たモーニングスターを持った少女魔術師が姿を現す。

「プリンセスの召喚に成功した時相手の魔法・罫をこのターンのみ発動不能にする。プリンセスでダーク・グレファアに攻撃！」

「ちえっ。でも攻撃は通さない！ 手札からクリボーを捨てるよ！」

「ぐっ……カードを伏せてターンエンド」

プリンセスの振り回すモーニングスターはダーク・グレファアに当たる直前で半透明のネクロ・ガードナーが壁になって防御する。それを見たメリオルはくっと思った後カードを伏せてターンを終えた。

簡易状況説明

メリオル：LP4000 手札二枚

フィールド：ブリザード・プリンセス攻撃表示 魔力俵約術発

動中、伏せカード一枚

ソーマ：LP16000 手札零枚

フィールド：ダーク・アームド・ドラゴン、ダーク・グレファア

ー、ジャイアント・オーク全員攻撃表示 魂吸収発動中、伏せカード一枚

「僕のターンつと、ドロロー……」

ソーマは相変わらずへらへら笑いながらカードを引き、それを見ると少し黙った後フィールドに目を向けた。

「ダーク・アームド・ドラゴンの効果で墓地のシャドウ・ダイバーを除外し、ブリザード・プリンセスを破壊！」 LP 16000 16500

「その効果にチェインしてリバーズカード発動「デイメンション・マジック」！ プリンセスをリリースして「ブラック・マジシャン」を特殊召喚し、ダーク・アームド・ドラゴンを破壊！ 対象を失ったダーク・アームド・ドラゴンの効果は無効よ」

「ありや、失敗失敗。グレファアとオークを守備表示に変更してカードをセット、ターンエンド」

ダーク・アームド・ドラゴンがプリンセス目掛けて吐いた闇のプレスをメリオルが発動した魔法の棺桶がプリンセスを入れて防ぎ、開いた棺桶からブラック・マジシャンが姿を現す。そしてその次にはダーク・アームド・ドラゴンの背後にその棺桶が現れて闇の竜を吸い込んでいき、地中へと消えていく。

「私のターン、ドローー!!」

メリオルははあっと息を吐きながらドローカードを見、そう思ったからそれを発動する。

「手札を一枚捨てて「ライトニング・ボルテックス」発動！ あなたの場のモンスターは全員表側表示、全て破壊!!」

「わお」

メリオルの言葉と共にソーマの場のモンスター目掛けて雷が落ち、全てのモンスターが破壊されていく。そこを突いてメリオルが攻撃を指示する。

「ブラック・マジシャンでダイレクトアタック！」

「ネクロ・ガードナーを除外して無効つと。でもこれでネクロが切れちゃった」LP16500 17000

「くっ、ターンエンド!!！」

ソーマが飄々とした調子で防御するのに対しメリオルは表情を歪めながらターンエンドを宣言する。それを見たソーマはカードを引きながらまた笑いながら口を開く。

「もうちょっと笑いなよ、君は笑った方が美人だと思うけどなあ？」

「うるさい!!……負けるわけにはいかないのよ、皆のために……レオのために」

ソーマの言葉にメリオルは怒鳴って返した後ぶつぶつと呟く。その最後の言葉は周りが静かなのに彼女にしか聞こえずに消えていった。

「ふう〜ん……まあいいや。じゃ、そろそろ終わらせるよ？ 君の場に伏せカードはなく場にはブラック・マジシャン一体、手札もない。つまりその黒き魔術師を倒せばこのデュエルは僕の勝ちでの終焉も同然」

「モンスターが一体もないあなたに何が？ 魔法や罫で除去？」

「いやいや、モンスターで正々堂々戦い、終焉を迎えさせるよ」

ソーマのにやりとした笑みでの言葉にメリオルがそう返すと彼は先ほどまでの飄々とした態度から一変し圧倒的なオーラを放ち始める。彼の持っているただ一枚の手札から黒き闇のオーラが発せられ始め、それをソーマはデュエルディスクに置いた。

「今ここに現れ終焉をもたらさん！ 現れよ、ジ・エント・スピリッツ「終焉の精霊」！！」

ソーマの凜とした叫び声と共に彼の場に黒き悪魔のようなモンスターが姿を現す。

「終焉の精霊の攻撃力は全ての除外されている闇モンスターの数×300、その数は……………まあざっと18つととこかな。よって攻撃力は5400」

「くっ……………」

ソーマの言葉と共に終焉の精霊から発されるオーラが増していき、メリオルとブラック・マジシャンはやばいというような表情を浮かべる。

「終焉の精霊で攻撃！ これぞ終焉をもたらす闇の力、エンド・オブ・ザ・ダークネス終焉の暗黒

！！」

「迎え撃て、ブラック・マジシャン！ ブラック・マジック黒魔導！！」

ソーマとメリオルの攻撃指示が重なり合い、終焉の精霊の闇の波動

とブラック・マジシャンの闇の魔力がぶつかり合う。しかしその威力の差は歴然、あつという間に闇の魔力ごとブラック・マジシャンが呑み込まれ、闇の波動がメリオルを襲った。

「つつ！……でも、このターンは耐え」LP4000 1100
「リバーズカードオープン、「異次元からの帰還」。ライフ半分をコストに除外されているモンスターを可能な限り特殊召喚する……
とはいえこいつだけで充分だね。ネクロフェイスを特殊召喚」LP
17000 8500

終焉の精霊 攻撃力：4800 4500

メリオルの言葉を遮ってソーマがリバーズカードを発動、それに合わせて次元が歪み、ネクロフェイスが姿を現した。それに対しメリオルの場はがら空き、もう何も出来ない。

「あ、あ、あ……」

「終焉だ。ネクロフェイスでダイレクトアタック」

その言葉と共にネクロフェイスが突撃、不気味な触手がメリオルを縛り上げて人形頭部部分の頭突きがメリオルの顔面に決まる。メリオルの視界一杯に割れた不気味な人形が写った。

「ひあつ……」LP1100 0

「君の負けだよ」

メリオルは恐怖に満ちた表情で小さくうめき声を上げ、ソーマがくすりと笑ってそう言った直後彼女はがくと崩れ落ちた。完璧に気

絶している。

「負け、たくない……レオ……」

「気絶しながらも呟く辺り度胸が凄いいね。外見可愛いけど中身がっついいよ」

メリオルがぼそりとそう呟くのを聞いたソーマが呆れ半分といわんばかりに苦笑しながら返し、彼女を支え上げる。

「さてと……負けたくない、か……面白いことができそうだね」

ソーマはにやにやと笑いながら気絶しているメリオルを眺め、指をばちんと鳴らす。それと共に彼の目の前にさつきここにメリオルを連れてきた結界通路が開かれ、ソーマはメリオルを運びながらその中に入ってしまった。

「すかー……」

それから日が昇って、ここは魔法都市エンディミオンの城。この一室でレオはぐっすり寝こけていた。

「レオオー！ 起きろおー！！」

すると突然そんな怒号とも呼べそうな叫び声と共に部屋にヴァルツが飛び込み、毎朝メリオルがしているように杖を寝こけているレオ目掛けて振り下ろす。

「つと！？」

するとそれに反応してレオは目を覚まし、枕元に置いていた刀で杖を受け止める。

「な、なんだ！？ まさか朝っぱらから敵襲か！？」

「違う！ メリオルがいなくなった！」

「はあ！？」

今の状況を寝ぼけ頭で確認したレオが叫ぶとヴァルツが叫び返す。それを聞いたレオは訳が分からないというような声を上げた。メリオルは魔法都市エンディミオンから姿を消した。

第二部第十六話 魔術師対暗黒（後書き）

今回はメリオルVSソーマ。そしてソーマのデッキはダークモンス
ター主軸、除外タイプっていうのかな？……一応魂吸収でのライフ
回復も組み込んで……。

とりあえず次回どうするか……この先メリオルがどうなるかはもう
決定してるしこの先のデュエルの流れまで決定してるけど、そこま
でどうやって持っていくの？ま、それでは。

第二部第十七話 望まぬ再会、VS禁断の魔術師

メリオルが魔法都市エンディミオンから姿を消してから一週間が経った。その間にも悪魔族やアンデット達は魔法都市を襲撃しており、ライ達も剣やナックルを手に戦いカードを使って他の仲間達をサポートしていた。

「ま、魔法カード「連合軍」！」

「ぬんっ！」

「はっ！」

ライの発動した魔法の効力を受けて力の上がったフリードとサスケの剣が最後の相手を斬り倒し、ライは終わったあと息を吐く。

「大丈夫か？」

「ああ、ヴァルツさん……正直きつい……」

ヴァルツの言葉にライがきゅうとなっているような調子で返す。それにヴァルツもああとどこか悔しそうな調子で頷いた。

「メリオル一人が抜けたのがこんなに痛いとはな……あいつの魔法サポートの技はお前達の中でも群を抜いていたとはいえ、情けない……」

「ともかく一度戻ろう。ここに残ってまた敵の襲撃を受けたら面倒だ、まず補給を行わねば」

ヴァルツの言葉にフリードが言い、三人はそれに頷くと一度魔法都市へと戻っていく。そしてフリードやサスケ達戦士族は剣を研ぎ、ヴァルツ達魔法使い族は魔力を補給する。その間にライはデュエルディスクを手に広場へと出て行った。するとそこにアルフとエルフイがいるのを発見し、声を出した。

「おーい」

「ああ、ライ……」

ライの呼び声にエルフイが疲れているような声で返し、ライが走り寄るとエルフイはふうと息を吐く。

「疲れてるみてえだな」

「流石にね……疲れが溜まってきてるわ」

「レオさんも普段は気丈に振舞ってるけど流石に限界近いよ。姉さんがいなくなつて一番心配してるし、それでなくてもドラゴン族のメンバーと一緒に空中戦を戦ってるんだから。今もぐっすり寝てるし」

ライの言葉にエルフイが息をつきながら返し、アルフもそう呟く。それにライもふうと息を吐きながら呟いた。

「メリオルさん、どこ行つたんだろ？」

「ホント……」

「だよ、ライならともかく」

「どつという意味だおい」

ライの言葉にエルフィとアルフがため息をつきながら答え、そのアルフの言葉にライがツツコミを入れていると彼らを覆うように小さな影が出来、三人は思わず上を向く。

「悪魔族!？」

彼らの頭上にはウィップテイル・ガーゴイルが浮いており、そいつはクククと笑いながら一枚のカードを手裏剣のように投げ、ライがそれを素早く受け止める。そしてそのカードを見ると絶句した。

「これ、ブラック・パラディン!? メリオルさんのカードだ!」

ライの声にアルフとエルフィもはっとした表情でウィップテイル・ガーゴイルを見る。とそいつは街の外の方に飛んでいきだし、三人は慌てて後を追い、街の外へと出て行く。しかし外に出て少し走った辺りで相手を見失ってしまった。

「見失った!」

「というかやばいよ、勝手に出てきちゃって……」

ライの声にアルフが引きつった表情で呟く。仮にこれが自分達をおびき寄せる罠だとしたら今は絶好のチャンス、それに気づいた三人は素早く円陣を組んで構えを取った。

するとそこに真空の刃が飛び、三人は別々の方向に飛んでかわす。そして刃の飛んできた方を見ると全員が目を見開いた。そこに立っていたのは間違いなく、自分達が探していた相手　メリオルだった。

「姉さん!!!」

「待て！ 嫌な予感がする……」

「ええ。あのデュエルディスク、ドーマのやつよ」

メリオルの姿を見たアルフが駆け寄ろうとするのをライが素早く制して呟き、エルフィもこくと頷いて彼女の左腕につけられているデュエルディスクを見る。すると彼女はふふつと妖しげな笑みを浮かべながらデュエルディスクを起動させた。

「あなた達が相手ね……勝負」

「黒アルフや黒エルフィと同じって訳か……よし、ここは俺が」

「いや、ここは僕が。様子見くらいは出来るし、もし僕が負けたら後はよろしくってね」

「いえ、先鋒は私が行くわ。二人じゃ平常心で戦えそうにないしね」

黒メリオルの言葉にライが声を出す但それを遮ってアルフが言い、そこにエルフィが続ける。すると黒メリオルはくすりとつめたい笑みを浮かべながら言った。

「三人纏めてかかってらっしゃい」

「……後悔すんなよ？ よし、全員フィールドは独立で俺ら一人ずつライフは4000、そうなるとあんたはライフ12000になるな」

「何言ってるの？ 4000で充分よ、あなた達如き……あなた達三人の後私のターン、私は最初のターンから攻撃あり、でいいかしら？」

黒メリオルの言葉を受けたライはにやりと笑みを浮かべながらル

ルを確認、ライフポイントについても確認するが彼女は冷たい微笑のままにそう返し、それを聞いた三人は瞬時にデュエルディスクを構えた。

「後悔させてやるよ！　いくら俺らでもライフハンディなしの三対一なら勝つー！」

「ええ。とつとと連れ帰って皆を安心させましょう！」

「手加減は抜き、最初から全力で行くよ！」

「勝利を得る……私はただそれだけ……」

ライ、エルフィ、アルフが声を上げ、それに対してメリオルはくすくすと冷たい笑みを浮かべながらそう呟く。

『デュエル！ー！』

そして三対一の特別デュエルが幕を開けた。まず最初に動いたのはアルフだ。

「僕のターン、ドロー！　「サイバー・ドラゴン・ツヴァイ」を召喚し手札の融合を見せてこのカードの名前をサイバー・ドラゴンとする。魔法カード「融合」！　フィールドのツヴァイと手札のサイバー・ドラゴン二体を融合！！　現れる「サイバー・エンド・ドラゴン」！ー！」

アルフの言葉とともに彼の場の機械竜が光に包まれ、光が弾け飛んだ中から先ほどの数倍に巨大化した三つ首の白銀機械竜が姿を現し、雄々しい咆哮を響かせた。

「カードをセット、ターンエンド」

「俺のターンだ！ ドロー！」

アルフの次にライが動き、カードをドローする。そして手札を見眺めると一気に動いた。

「手札を一枚捨てて「クイック・シンクロン」を特殊召喚し、「切り込み隊長」を召喚さらにその効果で「コマンド・ナイト」を守備表示で特殊召喚！ レベル5のクイック・シンクロンとレベル3の切り込み隊長をチューニング！ 現れる「フルール・ド・シュヴァリエ」！！」

ライの言葉とともに彼の場の二体のモンスターが光に包まれ光が花びらのように散っていくとその中から一人の戦士が姿を現す。さらにコマンド・ナイトの効果によってその攻撃力も上昇した。

フルール・ド・シュヴァリエ 攻撃力：2700 3100

「リバースカードをセット、ターン終了」

「私のターン、ドロー！」

ライチーム最後に動くのはエルフィだ。彼女は待ちきれなかったと言つようにカードをドローすると一気に手札を取る。

「魔法カード「神の居城 ヴアルハラ」を発動し、その効果で「守護天使ジャンヌ」を特殊召喚！ そして「ダーク・ヴァルキリア」を召喚し、カードをセットしてターンエンド」

エルフィの場に天使が二体召喚される。これで彼らの場には攻撃力

2500以上のモンスターが三体並んだ。しかし黒メリオルは眉一つそれを見眺めており、エルフィのターンエンド宣言を聞くとデッキに指をかける。

「私のターン、ドロー……」

そして淡々とそう言いはなつてカードをドローし、手札を見る。

「手札を一枚捨てて魔法カード「ライトニング・ボルテックス」発動」

「そうはいかない！ フルール・ド・シュヴァリエの効果で魔法の発動と効果を無効にし破壊……」

黒メリオルの発動した魔法の効果をシュヴァリエが破壊し、それを見た彼女は予想通りというように微笑んだ。

「そう来ると思った。なら魔法カード「サンダー・ボルト」」

「禁止カード!?」

黒メリオルの発動したカードは禁止カードであるサンダー・ボルト。それにライ達は目を丸くするがその間に降り注いだ雷がライ達の場のモンスターを全滅させる。

「魔法カード「死者蘇生」発動、その効果で墓地から「ブラック・マジシャン・ガール」を特殊召喚」

その言葉とともに黒い闇に包まれて女性黒魔術師が黒メリオルの場に現れる。しかしその姿はいつものものとは違い、服装は赤みをお

びたそう、原作で言うパンドラ仕様のブラック・マジシャンのものに近かった。

「強欲な壺」を発動しカードを二枚ドロ、魔法カード「賢者の宝石」の効果でデッキから「ブラック・マジシャン」を特殊召喚」

流れるように黒メリオルはカードを展開し、彼女の場に最上級黒魔術師が現れる。彼の服装もまた赤みをおびたパンドラ仕様のブラック・マジシャンと化していた。

「ブラック・マジシャンでエルフィに攻撃」

「あああああ!!!」 LP4000 1500

「ブラック・マジシャン・ガールで止め」

「あ、ぐっ……」 LP1500 0

邪悪なる闇の最上級魔術師の魔術を受けたエルフィは悲鳴を上げ、さらに追撃の女魔術師の波動が彼女に止めを刺した。ライフポイントが0になったエルフィは膝をつき、崩れ落ちる。

「エルフィ!？」

「嘘、たった一ターンで?……」

ライが声をあげ、アルフが信じられないとばかりに声を絞り出した。

「カードを二枚セットし、ターンエンド」

黒メリオルはさもなげにターン終了を宣言、しかし次のターン

レイヤーであるアルフは全く動かなかった。

「……ターンエンド」

「あ、あつ！ 僕のターン！！」

業を煮やしたのか黒メリオルが再度言う気づいたようにアルフはカードをドロー、それを見ると顔をキツと引き締めた。

「リバースカードオープン「血の代償」！ 「グリーン・ガジェット」を召喚してその効果で「レッド・ガジェット」を手札に加え血の代償の効果で500ライフを支払って召喚！ 効果でイエロー・ガジェットを手札に加える。さらに500ライフを支払って「古代の機械巨竜」を召喚！！」LP4000 3000

「リバースカード発動「奈落の落とし穴」」

「えっ！？ うわあああつ！！」

アルフの流れるような召喚コンボを黒メリオルは冷めた目で見つめながら機械巨竜を怨念纏う落とし穴に引きずり込む。

「血の代償の効果でモンスターをセットし、ターン終了……」LP
3000 2500

アルフは最後までそう行動してターンを終えた。そしてターンはライへと移る。

「俺のターン、ドロー！！」

ライは力強くカードをドロ―し、その手札を見ると一か八かと動いた。

「リバースカードオープン」「リビングデッドの呼び声」！ その効果で墓地の「クイーンズ・ナイト」を特殊召喚し、「キングス・ナイト」を召喚！ キングの効果でデッキから「ジャックス・ナイト」を特殊召喚！ 集合せよ絵札の三剣士、そしてその力結束せん！
「融合」発動！！」

ライの言葉とともに彼の場に三人の騎士が姿を現し、ライの発動した魔法によって三人は光に包まれる。

「融合召喚！ 天位の騎士」「アルカナ ナイトジョーカー」！！」

そしてライの叫び声によって彼の場に最強の騎士が降臨した。

「ジョーカーでブラック・マジシャンに攻撃！！」

「リバースカード発動」「攻撃の無力化」、攻撃は無効となりバトルフェイズ終了よ」

ライの指示を受けたジョーカーはブラック・マジシャンに向かっていくがその剣は不思議な障壁で阻まれてしまう。それにライはくつと悪態をついた。

「ターンエンド！」

「私のターン、ドロ―」

ライの言葉を聞いた黒メリオルはカードをドロ―し、手札を見る。

「さあ、混沌へと身を落とすといいわ。魔法カード「光と闇の洗礼」発動、ブラック・マジシャンは混沌の力を受けて生まれ変わる。ブラック・マジシャンをリリースし「混沌の黒魔術師」を特殊召喚！」

黒メリオルの言葉とともに彼女の場のブラック・マジシャンが光と闇に包まれ、混沌の力を秘めた黒魔術師へと生まれ変わる。そして師の魔力を受け継いでブラック・マジシャン・ガールの攻撃力も上昇する。

ブラック・マジシャン・ガール 攻撃力：2000 2300

「混沌の黒魔術師の効果発動、このカードの召喚・特殊召喚に成功した時墓地から魔法カードを手札に戻す。私はサンダー・ボルトを手札に戻し、発動」

「があっ！！！」

黒魔術師の魔術によって既に使われた魔法が力を取り戻して黒メリオルの手札に戻り、発動した雷の裁きが天位の騎士と守備モンスター
| イエロー・ガジェットをいともたやすく破壊する。

「混沌の黒魔術師でアルフを攻撃」

「うわああああっ！！！」LP2500 0

「ブラック・マジシャン・ガールでライを攻撃！」

「アルフ！ ぐああああっ！！！」LP4000 1700

先ほどのエルフィと同じようになすすべなくアルフは混沌の黒魔術師を受けて倒れる。たった二ターン、彼女にはそれしか回ってきてないのにこちらはライ一人になってしまっていた。しかもライフも大幅に削られる。

「そ、そんな……」

「ターンエンド」

ライは信じられないとばかりに呟き、黒メモリアルがターンエンドを宣言するとくつと唸って顔を横に振り、カードをドロウした。

「……カードを一枚セット、ターン終了！」

「私のターン、ドロウ……ミラーフォースと言ったところかしら？
なら魔法カード「サイクロン」を発動し、伏せカードを破壊」

ライが伏せたカードの正体を黒メモリアルはあっさりと見抜き、引いた魔法カードでその伏せカード 聖なるバリア ミラーフォースを破壊する。それにライは目を丸くした。

「小細工なんて勝利を得るための圧倒的な力の前には無力。混沌の黒魔術師で止め」

0 0 「そんな、そんな……うあああああああつ！！！」 LP200

黒メモリアルは妖しげな微笑を浮かべながらそう言って攻撃を指示、それとともに混沌の黒魔術師の魔導波がもはや何も出来ずに啞然と

しているライを一撃で吹き飛ばした。
デュエルは終了し、黒メリオルはデュエルディスクを収納する。ライ、アルフ、エルフィ、三人とも完全に気を失っている。黒メリオルはそれを冷めた目で見つめていた。

「魔神剣!!」

すると黒メリオルを狙った衝撃波に気づき、彼女は素早くそれを避けて衝撃波の飛んできた方を見る。

「……レオ」

黒メリオルが見た先にいたのはレオ、彼は刀を肩に担いで立っており、さらにその後ろにはレッドアイズブラックドラゴンがいた。

「よお、どうやらあっちに引き込まれたようだな」

「よくここが分かったわね」

「こいつらがいなくなっただって聞いてな、レッドアイズを飛ばして辺りを手当たり次第。ようやく見つけたと思っただら時既に遅しってやつだ」

レオの言葉に黒メリオルが言い返すと彼はくっくつと笑いながらさらに返す。それを聞いた黒メリオルは表情を歪めるとぱちんと指を鳴らした。それとともに彼女の後ろに黒い空間の穴が開かれる。

「ここで戦って下手を打つわけにはいかない。ここは退かせてもらおうわ」

「ま、待ておい!？」

黒メリオルの言葉にレオが慌てて叫ぶがその頃には既に彼女は穴の中に入り、空間も閉じてしまっていた。

「くそっ!！」

「レオ、とりあえずこいつらを」

「……分あつてる」

逃がしてしまったことにレオは悪態をつき、レッドアイズが言い聞かせるように言うのに呟いて返すと彼はライ達をレッドアイズの背中まで運び始めた。そして彼らが落ちないよう注意しつつレッドアイズは魔法都市へと戻っていく。

「さあて、救世主は一人除いて全員ぶっ倒したんだろ？ とつとと片付けちまおうじゃないか」

「正確には殺してはいないそうだが。まあ、ダイレクトアタックを身に受けたのだからしばらく起き上がれはしまい。まして戦うなど不可能だ」

「おつよ、とつととぶっ潰した方が手っ取り早えと思うがよお」

とある場所、気の強そうな女性　クメトの言葉に冷静そうな雰囲気
を漂わせる青年　アレウスが答え、筋肉質な男性　メテウス

もおつと返す。しかしソーマはただ一人くすくすとした笑みを見せており、言った。

「いや、救世主はあと一人……本番はそいつを完膚無きにまで叩きのめしてから。上手く行けばそいつもこっちに引き込める」

「そう上手く行くのか？ 聞いた話だと奴の実力は救世主の中でも随一という」

「心配は要らない。あいつのデッキは禁断の魔法達で強化されているし、万が一の時のためにも細工は流々だ……まず心配は要らないはずだよ」

ソーマの言葉にアレウスが聞き返すと彼はくすくすすと笑いながら言い、ちらりと彼らの背後で虚ろな目をして待機している黒メリオルを見る。そしてよっこらせと言いながら立ち上がった。

「それじゃ、ちょっと行ってくるね？」

「土産、忘れるなよ？」

「もしかしたら荷物すら忘れてくるかもよ？」

ソーマの言葉にアレウスが言うとソーマがわざとらしく言い返す。それにアレウスはふんと鼻を鳴らした。ソーマは黒メリオルを連れてすたすたと歩き去っていく。

一方魔法都市エンディミオン。もう夜もふけた頃、レオは部屋のベッドに寝転がりながら考えにふけていた。

「ライモアルフもエルフィも意識は戻ったけど身体が痛くて戦うのはまず無理、ヒーリングをすればいい二、三日はかかる計算か……！」

そう一人ごちていると彼は何か勘付いて起き上がり、ふっと一つ笑みを浮かべると机の上に置いていたデュエルディスクをデッキ、ベッドの横に立てかけていた刀を手にとって一目につかないよう城を出て行った。そして彼は一人で街から離れた広原へとやってくる。そこには一人の少女が立っていた。

「よお、メリオル」

「……気づかれるなんて想定してなかったわ」

レオの言葉に黒メリオルはそう呟いて返し、レオは既に闇に包まれた辺りを見回しながら言った。

「覚えてるか？ 小学校低学年の頃、大吾や勇達と裏山でかくれんぼしてて、お前日が暮れるまで見つからなくて最後は大騒ぎ……で、結局俺が古井戸の中に落っこちて泣いてたお前を見つけたんだよな？」

「……」

「どこにいようが見つけてやるよ。お前が闇の中に堕ちたんなら、闇の中だって探してやるぞ」

レオの言葉に黒メリオルは沈黙を以って返し、レオはふつと笑みを
見せながら言った後デュエルディスクを起動した。

「お前が消えた場所、それを見つげ出すためにも……勝負だ!!」

「……ええ」

レオの言葉を聞いた黒メリオルは静かに、だが無駄のない動作でデ
ュエルディスクを起動させる。

「デュエル!!!」

そして二人の声が静寂の中響き渡った。

第二部第十七話 望まぬ再会、VS禁断の魔術師（後書き）

どうも、いつの間にやら死者蘇生が制限カードへと緩和していて驚いたカイナです。正直まだ禁止だと思つてデュエル組んでたので……調べてマジ驚きました。でもまだ早すぎた埋葬は禁止なんだよなあ……なんでだろ？ライフコストかかるし装備魔法だから破壊されたら終わりだし自分の墓地からしか選べないのに……ま、いつか今回はライ&アルフ&エルフィVS黒メリオル、彼女のデッキは禁止魔法をふんだんに組み込んだデッキとなつております。あ、ご心配なく、あくまで禁止魔法を組み込んだだけであり禁止スタンダートではありません。デッキコンセプト自体は元々の魔法使いを主軸としているつもりなので。

そして今回はレオVS黒メリオル。まあしかしレオは平常心でデュエルが出来るのやら？んでこのデュエルが終わればこの話もクライマックスへと突入する………予定です。ま、それでは。

第二部第十八話 悲しき戦い、龍王VS禁断の魔術師

この場はもう暗く、照らし出しているのは月明かりのみ。その中に立っている一組の男女がいた。二人はそれぞれのデュエルディスクにデッキを差し込み、ディスクを起動する。そして黒メリオルがふと言った。

「今回、ライフポイント8000でやらない？」

「……いいぜ」

「デュエル！！」

黒メリオルの提案にレオが頷いて返すと二人は声を合わせて叫び、先にレオがデッキに指をかけた。

「俺の先攻、ドロー！」

レオはデッキから力強くカードをドローし、手札にドローカードを加えると黒メリオルを睨みつける。

「待つてるよメリオル、キング・オブ・ドラゴン龍王の名にかけてお前を倒す！俺は「ブリザード・ドラゴンを攻撃表示で召喚し、そいつを除外して「レックドアイズ・ダークネスメタルドラゴン」を特殊召喚し効果で手札から「ランス・リンドブルム」を特殊召喚！カードをセット、ターンエンドだ！」

「私のターン、ドロー」

レオの場に二体の龍が姿を現すが黒メリオルはそれを冷めた目で見つめており、レオのターンエンド宣言を聞くと淡々とカードをドロ―する。そのカードを見てにやりと笑った。

「魔法カード「サンダーボルト」」

「リバースカード発動「マジック・ジャマー」！ 手札を一枚捨てて魔法カードを発動と効果を無効にし、破壊する！ そしてお前の魔法カードをカウンターした事により手札から「冥王竜ヴァンダルギオン」を特殊召喚！！」

黒メリオルが落とそうとした雷が魔力を打ち消す魔法陣によって封じられ、その魔法陣の中から魔法の力を得た冥王竜が姿を現した。

「ヴァンダルギオンの効果発動！ 魔法をカウンターして特殊召喚した時相手に1500のダメージを与える！！」

「くっ、ううっ……」 LP8000 6500

ヴァンダルギオンの咆哮が黒メリオルからライフを削り取り、彼女は少しふらつくとガクンと膝をついた。

「なっ」

「……負けるの、怖い……負けたく、ない……」

それにレオが驚いたように声を漏らすと黒メリオルは弱々しく呟き、レオはそれに目を見開く。するとそこにまた別の男性の声が入ってきた。

「さあレオ君、勝てるかな？」

「ソーマ………どういう意味だ？」

男性　ソーマの言葉にレオがキツとした目で問い返すと彼はくすくすと笑いながら黒メリオルを一瞥した。

「簡単な事、彼女には洗脳の際負ける事に対する異常なほどの恐怖を植えつけておいた。もしも負けちゃったらその恐怖という闇に捕らわれて精神が崩壊するんじゃないかなあ？」

「貴様あ！！！！」

「君が言えるの？」

ソーマの楽しそうな言葉にレオが怒号を上げるとソーマは冷たい声で言い、レオが驚いたように目を見開くと彼はレオを見透かすような目をしながら続ける。

「彼女は君からの負けるなよって言葉を守ろうと意地になってた。僕はそれを利用しただけ、命令の元は君だよ？」

「うっ………」

「心配しなくても今回勝てば呪縛は解けるようにしている。メリオルちゃんを助けたいなら簡単だよ、君が負ければいい。大丈夫、君も僕達の忠実なしもべに洗脳してあげるからさ。メリオルちゃんとずっと一緒」

「……………」

ソーマのにやつきなからの言葉にレオは唸り、ソーマが誘惑するよ
うに続けるとレオは黙り込む。

「まあいいや。メリオルちゃん、戦いを続けよう。負けたくない
なら、勝つたらいいんだよ?」

「……………そう、勝てばいいの」

ソーマとレオが言い合っている間に黒メリオルは気を取り直したの
か立ちなおし、手札を見た。

「……………モンスターをセット、カードをセットしてターンエンド」

「お、俺のターン……………」

黒メリオルはモンスターと伏せカードを一枚ずつセットしてターン
を終え、レオはゆっくりカードをドロウする。しかしその脳裏には
さっきのソーマの言葉が反芻されていた。

(負けたらメリオルが壊れる?……………そんな、どうすれば……………)

レオはそう考えに浸る。さっきダメージを受けた時のメリオルの怖
がりようなんて子供の頃以来見たことがなかった、もしもあれが序
の口であれ以上の恐怖なんて事になったら……………。レオはそう考えて
いたがぶんぶんと首を横に振ると意識をデュエルに持っていく。

「だが俺も負けられないんだ! ランス・リンドブルムで守備モン
スターに攻撃!」

「リバーズカードオープン、「聖なるバリア ミラーフォース」」

レオはそう叫んでランス・リンドブルムに攻撃を指示、リンドブルムは長槍を手に突っ込んでいく。しかし黒メリオルの発動したカードによってランス・リンドブルムの目の前に聖なる障壁が出現、リンドブルムの槍を防ぐと衝撃波を放ってレオの場の攻撃態勢を取っていたモンスター、即ち全てのモンスターを破壊しつくした。

「しまった！？ カ、カードを一枚セットしてターンエンド」

「怖いもの、全部、全部、やっつければいいのよ……勝てばいいんだ。私のターン……！」

モンスターが全滅した自分の場を見たレオは目を丸くし、カードを一枚伏せるとターンを終了する。それを聞いたメリオルはくすくすと怪しい笑みを浮かべながら声を出し、デッキからカードをドロースする。

「守備モンスターをリリースし、「ブラック・マジシャン・ガール」を召喚！ さらに魔法カード「賢者の宝石」発動、その効果でデッキから「ブラック・マジシャン」を特殊召喚！！ 手札から魔法カード「死者蘇生」を発動、その効果であなたの墓地から「冥王竜ヴァンダルギオン」を特殊召喚！！」

いつもと違って赤黒い衣装に身を包んだブラック・マジシャン・ガール、その横に現れた赤黒い衣装に銀髪のブラック・マジシャン、そして冥府の王とも呼べし竜、三体の上級モンスターが一瞬で展開された。

「バトル！」

「リバーズカード発動「威嚇する咆哮」！ このターン攻撃宣言は行わせん！！」

「ちっ、ターンエンド」

黒メリオルがバトルを行おうとした瞬間レオは伏せておいたカードを発動、攻撃を封じられた黒メリオルは小さく舌打ちを叩いてターンを終えた。

「（俺の場、手札両方にカードはない……この引きでどうにか出来ないと、負ける……）…ドロー！」

レオは素早くカードをドローし、そのカードを見るとよしと頷く。

「魔法カード「神より賜りし宝札」発動！ 俺の場に他のカードは存在しないためライフコストは支払わず互いのプレイヤーは手札が六枚になるようにドローする！」

「私の手札は一枚、五枚ドローね」

レオの言葉に黒メリオルが笑みを浮かべながら言う「レオもああと頷いて手札が六枚になるようドローする。そして手札を軽く見るとその一枚を手にとった。」

「魔法カード「融合」発動！ 手札のラグナロクとロード・オブ・ドラゴンを融合し「竜魔神 キング・ドラグーン」を融合召喚、ドラグーンの効果で手札から「青眼の白龍」を特殊召喚！ そして「伝説の白石」を召喚しレベル1の白石とレベル7の闇属性キング・ドラグーンをチューニング！ 深淵の闇より出でよ、「ダークエント・ドラゴン」！！ 伝説の白石が墓地に置かれた事によりデッキから青眼の白龍を手札に加える」

あの状況から二体の上級ドラゴンを並べると黒メリオルは強張った表情で笑みを浮かべ、ソーマはひゅうと口笛を吹く。

「ダークエンド・ドラゴンの効果で攻撃力、守備力を500下げブラック・マジシャンを墓地に送る。いくぜ、ダークエンド・ドラゴンでブラック・マジシャン・ガールを、青眼の白龍でヴァンダルギオンを攻撃!!」

ダークエンド・ドラゴン 攻撃力：2600 2100

ダークエンド・ドラゴンの生み出した闇がブラック・マジシャンを呑み込み、さらにレオの指示で彼の操る龍が黒メリオルの場の少女魔術師と冥王竜を屠る。

「くあああっ!!」LP6500 6200

「ターンエンドだ」

「私のターン!」

レオのターンエンド宣言を聞いたメリオルは素早くカードをドロ―し、素早く行動に移る。

「見習い魔術師を召喚し、手札から速攻魔法「ディメンション・マジック」発動! 見習い魔術師をリリースして「ブラック・マジシャン」を特殊召喚し、青眼の白龍を破壊!」

「ちっ」

黒メリオルの場に現れた棺の中に見習い魔術師が入り、一度閉じた棺が開くと先ほどの者とは別の赤装束に銀髪のブラック・マジシャンが姿を現し、さらにその棺が白龍を吸い込んで地面へと消えていく。

「装備魔法「早すぎた埋葬」発動！ その効果で墓地から「ブラック・マジシャン・ガール」を特殊召喚」LP6200 5400

黒メリオルの場にさつき倒した少女魔術師が復活し、くすりと妖魔な微笑みをレオに見せる。その攻撃力は先ほど墓地に逝った師の魔力を受けて上昇していた。

ブラック・マジシャン・ガール 攻撃力：2000 2300

「いくわよ、ブラック・マジシャンでダークエンド・ドラゴンを攻撃！ ブラック・マジック！」

ブラック・マジシャンの闇の波動がダークエンド・ドラゴンを貫き、その残りを受けたレオは僅かに怯む。そこにブラック・マジシャン・ガールがレオの懐にまで突っ込んで攻撃呪文を詠唱した。

「ブラック・マジシャン・ガールでダイレクトアタック！ ブラック・バーニング！」

「ぐあああああつ！！！」LP8000 5300

超至近距離からの黒魔術をモロに受けたレオは悲鳴を上げ、ブラック・マジシャン・ガールはくすりと楽しそうな笑みを見せると自分のフィールドへと戻る。この攻防でライフポイントが逆転されてしまった。

「カードを一枚セットしてターンエンド」

簡易状況説明

レオ LP5300 手札二枚

フィールド モンスターなし 伏せカードなし

黒メリオル LP5400 手札三枚

フィールド ブラック・マジシャン、ブラック・マジシャン全て
攻撃表示 速すぎた埋葬発動中、伏せカード一枚

「くっ……俺のターン！」

くすりと楽しそうな笑みを浮かべながら黒メリオルがエンド宣言を
するとレオはふうっと息を吐いてデッキからカードをドロウする。

「魔法カード「古のルール」発動！ その効果で手札から「青眼の
白龍」を特殊召喚して「サイクロン」を発動！ 早すぎた埋葬を破
壊し、ブラック・マジシャン・ガールも破壊する！」

レオの言葉と共に青眼の白龍が姿を現し、それと共に吹き荒れた竜
巻が黒メリオルの場の装備魔法を破壊、それと共にブラック・マジ
シャン・ガールも苦しそうに胸を押さえながら消えていった。

「青眼の白龍でブラック・マジシャンを攻撃！ 滅びの爆裂疾風弾
――」

「うあああああっ！！」 LP5400 4900

「ターンエンド！」

白龍の破壊のブレスがブラック・マジシャンを呑み込み、黒メリオもそれを受けて声を上げる。レオはそのままターンを終えた。

「私のターン、ドロー……熟練の黒魔術師を召喚して強欲な壺を発動し、二枚ドロー。魔法カードの発動により黒魔術師に魔力カウンターが乗る」

黒メリオルは熟練の黒魔術師を召喚してから最強のドローカードとも呼べるカードで手札を増強し、ドローした二枚の手札を見るとやりと笑った。

「魔力掌握発動！ その効果で熟練の黒魔術師に魔力カウンターが一つ乗り、魔法カードの発動によりさらにもう一個魔力カウンターが乗る。魔力カウンターが三つ乗った黒魔術師をリリースしてデッキからブラック・マジシャンを特殊召喚！！」

魔力を蓄えた黒魔術師が闇に包まれ、その中からやはりというか赤装束に銀髪のブラック・マジシャンが姿を現した。

「魔法カード「千本ナイフ」発動、青眼の白龍を破壊する！」

ブラック・マジシャンの背後に無数のナイフが現れ、彼が杖を突き出すとナイフは意思を持ったように四方八方から白龍に突き刺さっていく。それを受けた白龍は悲鳴のような声を上げて破壊された。

「リバースカードオープン「リビングデッドの呼び声」！ 墓地からブラック・マジシャン・ガールを特殊召喚！」

ブラック・マジシャンの横にまたもやブラック・マジシャン・ガールが姿を現す。もちろんその攻撃力は二人分の師の魔力を受け継いで上昇していた。

ブラック・マジシャン・ガール 攻撃力：2000 2600

「くっ……」

「ブラック・マジシャン、ブラック・マジシャン・ガールでダイレクトアタック！ ダブルブラック・マジック 二重黒魔導！！」

レオが怯んだのを見た黒メリオルはにやつと笑って攻撃を指示、それと共に二人の黒魔術師は互いの杖を重ね合わせ、魔力の光線でレオを貫いた。

「があああああつ！！！」 LP5300 1100

「ターンエンド」

大幅にライフを削られてレオは悲鳴を上げ、がくと膝をつく。それを見た黒メリオルはレオを見下すように見ながらターンエンドを宣言し、それを聞いたレオは荒い息をつきながらも膝に手を当てつつ立ち上がった。

「俺のターン！」

「まだやるの？ もう立ち上がるのもやっと思えるのに」

レオの言葉に黒メリオルが呆れたような笑みを見せながら言つとレ

オは彼女を睨みつけるような目を見せながら吼えた。

「あいにく負けず嫌いな性質なもんでな！ ドロー！」

レオはそう吼えてカードをドローし、ドローカードを見る。とそれを瞬時に発動した。

「魔法カード「壺の中の魔術書」！ 互いのプレイヤーは三枚のカードをドロー、魔法カード「魔法石の採掘」、手札二枚を捨てて墓地から神より賜りし宝札を手札に加え、発動！ 俺の場には他のカードが存在しないためライフコストは支払われず互いのプレイヤーは手札が六枚になるようにドローする！」

「ドロー」

レオの手札は一気に零枚から六枚にまで増強され、黒メリオルもへえというような表情を見せながらカードをドローする。

「魔法カード「龍の鏡」発動！ 墓地の青眼の白龍三体を除外融合して「青眼の究極竜」を融合召喚し、さらに龍の鏡を発動！ 墓地のドラゴン五体を除外融合し「F・G・D」を融合召喚！」

いきなりレオのデッキ最強攻撃力二体とも言えるドラゴンが姿を現し、黒メリオルはまずいと表情を歪めた。

「手札を一枚捨ててライトニング・ボルテックスを発動！ 相手表側表示モンスターを全て破壊！」

「しまった!？」

天から降り注いだ雷が黒メリオルの場の魔術師を全滅させ、彼女は思わず声を上げる。自分の場はがら空き、二体の巨竜でダイレクトアタックをくらったら自分の負けだ。するとレオは少し黙って二体の巨竜を見つめ、ふっと微笑むと一枚の手札を取った。

「俺は、青眼の究極竜とF・G・Dをリリースする！」

「!?!」

レオの宣言と共に二体の巨竜が光に包まれ、それに黒メリオルが驚愕の表情、ソーマが面白そうな表情を浮かべているのを見るとレオは手札の一枚を握りながら目を閉じる。

「（こいつは俺とメリオルが初めてパックを買った時メリオルのあのカードと同時に手に入れた、あの頃から俺の最大の切り札……今のテキストは変わっちゃったが、俺にとってこいつは永遠にまぼろしの超レアカードだ。）レッドアイズ・ブラック・ドラゴン青眼の究極竜とF・G・Dをリリースし、現れる！」「真紅眼の黒竜」!!!」

二体の巨竜を贄として現れたのは真紅の眼を宿した黒き竜。しかしその姿を見た黒メリオルはどこか安心したような笑みを見せながら声を出す。

「攻撃力2400？ それじゃあ仮に二回ダイレクトアタックしてもギリギリ届かないじゃない」

「ああ。こいつでダイレクトアタックしてもお前の残りライフは2500……この数値、どこかで聞き覚えはないか？」

「え？……あ……」

黒メリオルの言葉にレオはふつと不敵な笑みを浮かべながら尋ね、それを聞いた彼女はえつと呟いた後気づいたように声を出す。それと共にレオはくすりと笑って残った手札を手を取った。

「魔法カード「死者蘇生」発動！ お前の墓地から「ブラック・マジシャン」を特殊召喚する！！」

レオの言葉と共に黒メリオルの墓地が光を放ち、その光の一筋がレオのデュエルディスクへと向かうと彼に場にブラック・マジシャンが現れる。しかしその姿は赤装束に銀髪ではなく紫装束に金髪の普段の状態に戻っていた。

「俺とお前の切り札でお前を闇から解き放つ！ 真紅眼の黒竜とブラック・マジシャンでダイレクトアタック、ブラック・フレア・マジック！！」

レオの攻撃指示と共に真紅眼の黒竜はブレスを吐くため頭をもたげ、ブラック・マジシャンは攻撃魔術の詠唱を唱える。そして二体は同時に攻撃を放ち、真紅眼の黒竜の炎がブラック・マジシャンの魔導波と合わさって黒メリオルへと向かっていった。

「っ、きゃああああ！！！！」LP49000

一瞬息を飲んだ直後黒メリオルの身体が闇の炎魔術に包まれて彼女のライフが0を示し、彼女はがくと膝をつく。そう思った後彼女が自分の身体を抱きしめるとその身体がガクガクと震え出し、ソーマは始まったと岩の上に座ってにやつきながら呟く。

「負けるの、怖い、怖い、負けたく、な……うあああああつ！

「!!」

突然メリオルは発狂し、それを見たレオは考えるよりも早くメリオルに向かって走り、彼女の身体を抱きしめた。

「メリオル、ごめん！」

「っ！」

レオは泣きそうな声でメリオルに謝罪の言葉を投げかけ、それに彼女が反応するとレオは彼女の身体を強くかつ優しく抱きしめながら続ける。

「お前に重圧を押し付けちまってごめん、もう大丈夫だから。お前を倒そうとする奴は全部俺がなぎ払ってやるから、お前はもう心配しなくていいから！ お前は俺が守るから！」

「レオ、レオオ……」

レオの言葉にメリオルは泣きながら彼を抱きしめ返し、ソーマは信じられないとでもいうようにひゃあど咳く。そしてレオは一旦メリオルから離れるとソーマを睨みつけた。

「ソーマア！！！」

「……ふっ、うふふ……あっはっはっは！！！」

レオの怒号を聞いたソーマは突然笑い出し、レオは何が可笑しいとばかりにさらに彼を睨みつける。

「そう、それだよ。その怒り、メリオルちゃんの恐怖、そして世界

中に広がる悲哀に恨み、それらの負の感情を吸収して我らが神は復活する！」

「ああ!？」

ソーマの言葉にレオがまだ苛ついた言葉で返すとソーマはにやりと笑って立ち上がる。するとその背後の遠い地上から巨大な城がまるで地面から生えてきたかのようにそびえ立った。

「あれこそが僕達の拠点、そこで我らが邪悪なる神、すなわち邪神が復活する。人間界で市販されている紛い物の紙ではない、それが復活した僕達はこの世界を手に入れる！ この城が姿を見せたのもこちらの総攻撃がため、これより我らは敵となる種族、特に救世主を擁護する種族達は念入りに殲滅する!……止めたければ城に来なよ、ただしこちらも全力で迎え撃つ」

ソーマはそう言うのと片腕を上げ、そう思ったらウィップテイル・ガールが飛んできて彼を持ち上げて去っていく。

「待てデメエ!!!」

「捕らわれのお姫様とその本来のデッキカードを返してあげただけありがたく思つてよね。じゃ、お城で待つてるから」

レオの怒号にソーマは笑いながら軽い調子で返して去っていく。それにレオはちつと舌打ちを叩いた。するとメリオルはさっきまでソーマがいたところを探し、あつと声を出す。

「私の本当のデッキカード、本当に返してる……律儀ね」

メリオルはそこに置かれている自分のカード　丁寧ケースにし
まわっていた　を拾い上げながら眩き、レオの方を振り向くがそ
の瞬間ふいっと顔を背ける。しかし無情にもその瞬間月が辺りを照
らし出し、彼女の顔が赤くなっているのを見せ付けるとレオもさっ
きの事を思い出してしまい顔を赤くする。そして二人の間に微妙な
空気が流れ、最初に口を開いたのはレオだった。

「と、とりあえず、城に戻ろう」

「え、ええ……」

レオの言葉にメリオルが頷くと二人は魔法都市に向けて歩き出し、
その途中でメリオルはレオに追いつくと口を開いた。

「あ、ありがとね……助けてくれて」

「……当然だ、仲間なんだからな」

メリオルの言葉にレオは彼女から目を逸らしながら頬をかいて返し、
メリオルは一つ息を吐くと笑みを浮かべながらまた言う。

「でも、守られてばかりなんてつもりはないから」

「……あん？」

「守られてばかりなんて性に合わないし、私もあなたの隣で戦う
からね」

突然の言葉にレオが呆けた声を出すとメリオルは不敵な笑みを浮か
べながら続け、それを聞いたレオはふっと笑みを浮かべた。

「当然だろうが、お前が守られるお姫様なんてガラじゃないのは元から承知してらっつての」

「……」

レオの言葉にメリオルは黙って少し足を速め、レオより少し前を歩く。そしてくるりと振り向くと柔和に微笑んだ。

「でも、たまには守られるのも悪くはないかもしれないし。そうなたた時はよろしくね？」

「……おう」

メリオルの笑顔での言葉にレオもふつと笑みを浮かべて返し、二人は魔法都市に辿り着くとまず一番にヴァルツ達に会ってソーマから得た情報を話し、その対策の話し合いに少し参加してから眠りに着いた。

第二部第十八話 悲しき戦い、龍王VS禁断の魔術師（後書き）

お、終わった……にしてもこれ禁止デツキになっただけかなあ？禁止魔法サンダー・ボルトと早すぎた埋葬、強欲な壺ぐらいしか使ってないし……これで禁止魔法デツキなんて同じ禁止使いことさだめに失笑を受けてしまうだろうな……。

さて、いよいよ相手側の目的も分かってこの話もクライマックスでもお楽しみと言えりほどの実力がないのも確かですし、とりあえずそれでは。

第二部第十九話 決戦前日、そして決戦の日

メリオルが戻ってきた翌日、魔法都市エンディミオンはレオ達救世主達の本拠地ともなっているためか大騒ぎになっていた。相手の目的は邪神の復活、そしてその日はもう近い。そしてそんな中ライ達は部屋にいた。しかしライ、アルフ、エルフィの三人の身体には包帯が巻きつけられている。

「こんな時に……いたた！」

「止めときなさいって……」

「でも、いよいよ相手も本気になってきたっていうのにこっちは僕ら三人が動けないなんて……」

ライが憎らしげに自分の身体を見ながら呟くが少し身体を動かさそうとしたらその瞬間がくんと倒れかける。それを見たエルフィが呆れながら呟き、ライがうっつと唸るとアルフが我慢できなさそうに呟く。今まで戦ってきたというのに、そしてついに決着がつくというのにこの体たらく、それはライ達三人全員が共通して思っている事だ。すると彼らの部屋のドアが開く。

「やっほー皆！」

「ネラ！ レン！ 皆！」

入ってきたのはブラックマジシャンガールことネラとサイレント・マジシャンことレンに霊使いの六人。それにアルフが驚いたような声を出した後はどうしたのと尋ねるとネラはにっつと笑みを浮かべて

杖を取り出した。

「決まってるじゃん！ もうすぐ大事な戦いなんですよ？ あたしらが治療術で三人を治すの！」

「出来るの？」

「い、一応習ってますけど……すぐに動けるくらいのヒーリングってというのは、難しいです……」

「まあ、あたしらの魔力の限りやったとして……ちょっとならともかく戦えるように動けるのは明日ってとこ、元々あたしらはホーリー・エルフ様やピケルみたいな治療術専門ってんじゃないし。でもやらないよかマシでしょ？」

「……ああ、頼む」

ネラの元氣一杯の言葉にエルフィが尋ねるとレンがおどおどしながら呟き、またネラがそう言うと言いつつライはぺこりと頭を下げて返す。それを聞いた八人はこくと頷くとまず部屋の中央に治療の魔方陣を描いて彼らの乗っているベッドをその方陣の上に移動させる。そしてネラ達がライ達を囲むように立ってそれぞれの杖を構えて呪文を詠唱する、それと共にライ達を優しい光が包み込んだ。

一方レオとメリオル、二人は身体に異常はないため決戦準備の指揮を取っているヴァルツやフリード達と共に決戦の準備のためレオは武装の確認、メリオルは怪我をしている人達の治療を薬やまだ慣れてないとはいえ治療術を使って行っていた。

「えーっと、剣はこれでよしと」

「あ、ライさん！ お久しぶりです！」

「ん？」

レオは座り込んで剣にヒビや錆がないかを確認しており、大丈夫と判断するとそれを鞘に収める。するとそんな声が聞こえ、レオはそつちを向く。そこに立っていたのは赤い鎧に身を包んだ金髪の少女剣士　クイーンズ・ナイト、その隣にはジャックス・ナイトとキングス・ナイトも立っている。その姿を確認したレオはふつと笑みを浮かべながら返した。

「悪いが人違いだ。俺はレオ、ライは俺の弟だ」

「そうなんですか！？　そ、それは申し訳ございません……」

「気にすんなよ、兄弟つつつても似過ぎだとかよく言われる。ライは王城の一室で寝てるはずだ、数日前にちょっとやりあってな」

「そうですか……後でお見舞いに行った方がよろしいですね」

レオの言葉を聞いたクイーンは慌てたように声を上げてぺこりと頭を下げ、レオは笑いながらそう返して説明する。それにクイーンはこくんと一人頷き呟いており、それを見ていたレオは並んでいる剣や矢を見ながらクイーンに声をかけた。

「なあ、お前らって武器の点検とかできるか？」

「え？……あ、はい。一応最低限習ってますが……」

レオの言葉にクイーンはこくんと頷いて答え、それを聞いたレオは

肩をすくめながら続けた。

「んじゃ悪いが手伝ってくれ、元の世界じゃ剣なんて見たこともねえからフリードに教わったように調べるので精一杯なんだよしかも遅えし。これ終わったらライ達のとこに案内するから……頼めるか？」

「構いませんわ！ ジャック、キング殿、お二人も手伝ってくださいませ」

「ええ、分かりました」

「武器の点検なんて数年ぶりじゃのう、昔を思い出すわい」

レオの言葉にクイーンは笑顔で頷き、後ろのジャックとキングにも手伝うように言うと二人はジャックは穏和な笑みを浮かべながら頷き、キングもほっほっと笑いながら頷いて点検する剣に手をかけた。そして四人で武器の点検をスタートする。

「ふう〜……ファーストエイド！」

メリオルは長く息を吐いて精神を集中すると癒しの光を発して相手の腕の怪我を治癒する。その光が消えてから彼は立ち上がって腕をぐるぐると回すとうんと頷いた。

「よし、ありがとな」

「ええ」

礼を言って去っていくのにメリオルは笑顔で返し、そこにヴァルツ

がやってきました。

「調子はどうだ？」

「あ、ヴァルツさん……なんか治療術は慣れないわ。攻撃術とはまた違うし」

「ここに来た日数からすればここまで使いこなせるだけで流石なんだがな……」

ヴァルツの問いにメリオルはふうと息を吐きながら答え、それを聞いたヴァルツはふつと苦笑にも近い笑みを浮かべて返す。それからメリオルとヴァルツはまだまだいる負傷者に治療術での治療を行い始めた。

それから時間も過ぎて夜、今のところ敵の姿の見えない中魔法都市エンディミオンには警戒と緊張が走っている。そしてそんな中王城の一室、そこにはエルフィが座ってデッキの調整を行っており、彼女の近くでは今まで共に戦ってきた仲間 勝利の導き手フレイヤが座っていた。エルフィの身体からは包帯は完全には消えていないものの治療術のおかげが減っており、確かに明日には完治するだろう状態だ。するとフレイヤが伸びをしながら口を開いた。

「さてと……ついに明日ね」

「ええ……よし、まあこんなものかな」

フレイヤの言葉にエルフィは頷いて返しながらデッキカードを入れ替え、確認する。そして組み換えを終えるとよしと頷いてデッキをデュエルディスクにセットする。

「準備オツケー？」

「ええ……明日にはあいつらと戦う事になる……今度は絶対に負けない」

「流石ね……それに比べてライは……」

フレイヤの問いにエルフィはデュエルディスクを手近にあつたタオルで拭きながらそう返し、フレイヤはふつと笑いながら返すと続けて窓の外を見ながら呆れたように呟く。ちょうどエルフィの部屋から見える中庭では二人より身体的な回復力が強かったのかもう既に完治しているライがロケット戦士や絵札の三剣士と共に剣の鍛錬を行っていた。それにフレイヤがため息をつくとエルフィが微笑を浮かべながら返す。

「まあ、あれでこそライだからね。むしろ必要以上に部屋に閉じこもって考えごとしてたら何事が起きたか心配になるわ。ちゃんとデツキ調整はすませてるみたいだし」

「あっそ」

エルフィの言葉にフレイヤはふうんと鼻を鳴らしながらそう返す。そして場所は変わって中庭、ここではライがロケット戦士とコンビを組んでクイーンズ・ナイトとジャックス・ナイトのコンビと模擬戦を行っていた。

「おりゃあっ！」

「甘いですわっ！ とりゃっ！」

「おっと！」

ライの右手の刀の振り下ろしをクイーンが右手の盾で防ぎ、左手の剣で突きを見せるがライはそれをかわしつつ左手の刀を薙ぐように振る。しかし体勢の関係上簡単に下がってかわされてしまった。

「それっ！」

「つと！」

「参りますよ！」

「させないっ！」

クイーンの飛び掛るような剣の振り下ろしをライが二刀をクロスさせて受け止めるとそこにジャックが連携を取ろうと入り、そうはさせないというようにロケット戦士がロケットモードとなってジャックに突っ込んでいくが、ジャックはその突撃を盾で受けると盾の角度を変え突撃を受け止めるではなく受け流した。

「つてええっ!?!」

それに驚いてしまったロケット戦士はコントロールを失ったか地面に激突してしまい、二対一になると分が悪すぎるかライもあつという間に切り伏せられてしまい、ライがうっつと唸ると観戦していたキングが柔和に笑いながら声を出した。

「クイーンとジャックの二人にも勝てんか。わしが入ったら連携はもつと凄いのにのう」

「そうですね、キング殿の経験とそれに伴う正確な指示は我らの連携の要です」

「そうですね、キング殿の剣術もかなりのものですし。未だに私もキング殿には敵いませんわ」

キングの言葉にジャックとクイーンは笑みを浮かべながら返し、ライはくつと唸りながら二刀を鞘に収める。そしてジャックが地面に激突したせいか目を回しているロケット戦士を揺り起こすとライ達の方を向いた。

「さて、それではもうそろそろライさんは就寝した方がよろしいでしょう。明日が決戦です、皆さんが頼りですからね。私達もそろそろ警備に戻らないとフリード將軍に怒られてしまいます」

「ああ、うん、分かった。いい運動になったよ、ありがと！」

ジャックの言葉にライはそう言うのと部屋に戻っていき、ロケット戦士もその後を追って飛んでいく。ジャック達はそれを見送った後警備に向かっていった。

それから場所は変わって今度はアルフの部屋、彼ももう動けるようになったらしく部屋の中で一人明日のためか空手の型練習に励んでいた。そして型がしまるとアルフはふつと短く息を吐く。するとドアがコンコンとノックされ、アルフがドアの方を向くとほぼ同時にドアの向こうから声が聞こえてきた。

「ア、アルフ、その……入っていい？」

「ネラ？ うん、いいよ」

声の主はネラ、その問いにアルフが返すとネラはゆっくりとドアを開けて部屋に入ってくる。彼女の服は普段の魔術師装束とは違い水色を基調とした年頃の女の子らしい可愛らしい服装だ。アルフは彼女を部屋に招き入れるとベッドの上に座る。ベッドの前にあるテーブルにはデッキらしきカードの束とその他のカードの束が置かれている。

「……………デッキ、調整してたの？」

「うん、ついに明日だからね。今度こそ絶対に負けるわけにはいかないから……………これで最後にする」

ネラの言葉にアルフは頷いて決意を感じさせる表情で返し、それを聞いたネラは少し黙り込んでから続けた。

「……………ね、この戦いが終わったら帰っちゃうの？」

「？ うん、まああっちの学校もあるし」

「あ、あのみ……………」

ネラの言葉にアルフは一回首を傾げた後頷いてそう返し、それを聞いたネラはうつむく。心なしか顔が赤くなっており、ネラはまた少し黙ってからアルフに声をかけ、顔を赤くしてうつむきながら少し深呼吸をし、続けた。

「あたし、アルフが好きだよ！」

「うん、僕もネラは大好きな友達だよ」

ネラの告白の意味をアルフはやはり理解しておらず、ネラは顔の赤みを増しながらうつつと唸り、アルフが首を傾げていると続けた。

「ち、違う……だからその……こういうこと！」

「!？」

ネラは赤い顔のまま上目遣いでアルフを見、突然アルフに飛び掛つて彼の唇を自らのそれで塞ぐ。それにはさしものアルフも驚いたように目を見開いてしまい、それから少ししてネラが離れてから彼女は少し荒くなつた呼吸のまま続ける。

「こ、こういうこと……その、アルフが恋愛相手として大好きなの！」

「……」

流石にここまでしたネラの告白の意味を理解できないほどアルフは鈍くなく、彼の顔もどんどん赤くなつていき思わずネラから顔を背けてしまう。

「……」

「っ！」

「流石に……今はそれを考えられる状況じゃないから」

そしてアルフはぼそりとそう呟き、ネラが息を飲むとさらにそう続ける。それを聞いたネラはしばらく黙っていたがやがてにっというものの元気そうな笑みを浮かべた。

「き、気にしないでよ元々あたしがいきなり言ってきただけなんだから！　そ、それじゃ遅くにごめんね、あはははは！」

ネラは素早く言葉を並べ立てて部屋を出て行き、アルフはそれを見送るとボタンとベッドに倒れこんで右腕をとんと自分の瞑った目の上に置く。彼の脳裏には今まで共に過ごしていたネラの姿が次々と浮かんでおり、アルフはその初めての経験に戸惑ったような表情を浮かべていた。

「あははは、はは……はは……」

一方、アルフの部屋を出た後自分の部屋へと戻って行っていたネラの笑顔　空元気による作り笑い　の頬を一筋の涙が流れ、やがて次々と涙が溢れていく。彼女はついに笑顔を維持する事も出来ずに泣きながら部屋へと戻っていった。

そして最後にまた王城の一室に場面が移る。この部屋にいるのはレオとメリオル、しかし窓際に座っているメリオルと対称的にレオはベッドでくたくたとすっかり寝息を立てており、メリオルはあとため息をついた。ちなみにベッド脇にあるテーブルには調整したらしいレオのデッキがデュエルディスクと共に置かれている。

「全く、寝付けないかなと思つて来てみたらすっかり熟睡してるし……レオには緊張感つてもものがないのかしら？」

メリオルはため息をつきながらそう呟く。実際自分は明日自分達の戦いによつてこの世界の命運が決まるだろうというこの状況では流石に寝付けない、そのためレオの様子を見にきたのだが彼はそんな事なんて微塵も感じさせずに寝こけている。なんかプレッシャーを感じている自分が馬鹿らしく、メリオルはまたはあとため息をつい

た。

「ま、レオが緊張しまくってるのなんて想像つかないし、レオが後ろでどっしり構えてくれるから私達も思いつきり戦えるのよね」

ここに来る前に優勝した大会でも戦意喪失になりそうになった時にレオがはっぱをかけてくれた事で逆転できたし、今までも団体で行うデュエル大会ではレオが大将としていてくれるから安心して戦ってこれた。それは今回も、そしてこれからも変わらないだろう。

「さてと……部屋に戻りますか。お休み、レオ」

メリオルは立ち上がって一つ伸びをすると部屋を出て行きながらそう挨拶し、部屋に戻っていく。レオはやはり何も気づいてないように寝息を立てていた。

それから少し時間が過ぎて夜明け前、ソーマを始めアレウスにクメト、メテウスは前の方に立っているリーダーらしき男性 影のせいで顔などはよく見えない に向けてひざまずいていた。彼らの後ろには調整をすませたらしい人形兵も待機している。

「さあ、いよいよ我らが神復活の時が来た！ 人形兵よ、我らに抗う種族を全て蹂躪せよ！」

リーダーらしき男性の言葉に人形兵達は機械的な雄叫びを上げる。

「そしてアレウス、クメト、メテウスは救世主共を抹殺するのだ！
！」

「はっ！はっ！はっ！」

男性の続けての指示に呼ばれた三人がそう答える。残ったソーマは彼の護衛のためか呼ばれず、ソーマはくすりと笑みを浮かべていた。そして場所は変わって魔法都市エンディミオン、空中で遠い範囲を見張っていたレッドアイズは地上から空中から敵が来た事に気づくとグオオオオオオンと合図の咆哮を上げる。それと共に魔法都市に住む魔法使いやここを本部としているため遠征としてきていた戦士族や機械族の面々もやってくる。しかし地上の方は門をしっかり閉じているからいいが空中の方は空中を戦えるメンバーの数が少なくしかも飛んでいる悪魔族から飛び降りる形で他の悪魔族が襲来する。予想の範疇とはいえ厄介である事に変わりはなかった。

「A班とB班は正面広場に向かい、C班は空中の悪魔族迎撃を援護しろ！……外にはアンデットに恐竜、恐竜族の力では門や壁もいつまで持つか……」

指揮官の一人であるヴァルツは城の中庭で指示を出しながらも考えを止めておらず、するとメリオルやアルフ、エルフィがやってきて少し間を置いてから少し欠伸交じりのレオとライがやってくる。

「さてと……ヴァルツ、状況は？」

「悪魔族の強襲は想定済みだ、しかし門や壁を攻撃する恐竜族の数が多すぎる。しかも別の場所ではアンデットが攻めてきている……このまま門や壁を破られたらまずいのは確かだ」

「アンデット、ってことはあいつね……ヴァルツさん、アンデットがいるのはどこ？」

メリオルが尋ねるとヴァルツはそう返し、それにエルフィがふっと笑みを浮かべながら呟いてヴァルツに尋ねる。

「ここから南西の壁だが？」

「そこは私かなんとかするわ！ フレイヤ、ヴァルキリア、ゼラートさん！」

「「ええ！」」

「承知した」

ヴァルツの言葉にエルフィはそう返し、自らの仲間である天使三人を呼ぶ。それに三人はこくと頷いて返し、エルフィはヴァルキリアの両手に捕まるとまるでグライダーのように言われた方向に飛んでいく。その次のライが口を開いた。

「よし、んじゃ恐竜の方は俺が片付けるよ！ 行くぞ、ロケット戦士！」

「オツケイ！！」

ライの言葉にロケット戦士はそう叫んでロケットモードになり、ライがその上に乗るとロケット戦士は一気に飛んでいく。

「恐竜族がいるのは北の門だ！ 頼んだぞ！！」

「はいー！」

ヴァルツの声にライは左手を挙げて叫ぶ。それにしてもロケット状態のロケット戦士に乗ってそこまで返す余裕があるとはかなりのバランス感覚だ。そして次にアルフが尋ねた。

「ヴァルツさん、アマゾネスが来てるって報告はないですか？」

「アマゾネスか……いや、今のところは」

アルフの言葉にヴァルツは首を横に振って返そうとするがその瞬間忍者マスター SASUKE がやってきた。

「報告でござる！ 北西よりアマゾネスの者達が接近！」

「北西！？ まずいな、あつちは兵をそこまで裂いてないぞ……今から行って間に合うか……」

SASUKE の言葉にヴァルツはむうと呟く、するとそこに声が響いてきた。

「おれつちに任せときな！ 数分で北西まで連れてってやるぜ！」

「え……サイクロイド？……」

その声の主にアルフは唾然とした言葉で呟く、そこにいたのは自転車型のビークロイドことサイクロイド。サイクロイドはグッとサムズアップしており、アルフは少し黙った後言った。

「分かりました……これに乗って行きます。頼みますね？」

「おうよー！」

アルフの言葉にサイクロイドはまたグッとサムズアップし、アルフはサイクロイドのまたがると一気にペダルをこいで走っていった。それを見届けるとレオとメリオルは表情を引き締めた。

「さてと……どうする？」

「今のところ他に増援の報告はないが……」

レオの言葉にヴァルツはそう返し、上を向く。レッドアイズは敵を迎撃しているがなんとか手も空いているところだ。

「よし、今の内にレッドアイズ殿と共に本陣に向かおう。私も出る！ フリード殿、後は任せました！」

「承知した！」

ヴァルツの決断と言葉にフリードはこくと頷いて答える。そしてレオ、メリオル、ヴァルツは屋上へと向かう。そしてレオがレッドアイズに呼びかけた。

「レッドアイズ！ 行けるか！？」

「ん？ ああ、任せろ！」

レオの言葉にレッドアイズはこくと頷いて屋上へと降り、レオ、メリオル、ヴァルツはレッドアイズの背中に乗る。するとその次の瞬間レオの頭に何かに乗った。

「だっ！？」

「あ、チビちゃん！」

突然のことにレオが驚いたように声を出すとメリオルが続けて言う。

レオの上に乗ったのはチビスケこと黒竜の雛、雛はぎゅつとレオにしがみついており、とても下りてくれそうな雰囲気ではない。

「しょうがない……行くぞ！」

「ちっ」

ヴァルツの言葉にレッドアイズは少し舌打ちしながら翼を羽ばたかせ、相手の本拠地へと向かって飛んでいった。

その間、こちらはライ。ロケット戦士で一気に空を飛んでいたライはあつという間に恐竜族が壊そうとしている壁へとやってきており、俊足のギラザウルスに乗って恐竜達に指示を出している男性　メテウスを見つけると声を出した。

「ちょっと待ったー！」

「何だ!？」

「壁を壊すのはやめてもらっようよ！　そして今すぐ退け！」

ライの言葉にギラザウルスに乗ったままのメテウスがライを見ながら返し、ライはロケット戦士の上に仁王立ちした状態で言い、メテウスはふんと笑うと声を出した。

「そうはいかねえ！　そっちこそどいてもらおうかつー!!」

メテウスはそう叫んで自身の武器である鎖付き鉄球　ギラザウルスの上に乗っているためか少し小さく取り回しやすくギラザウルスに当たらないようにしている　をライに向けて投げる。しかしそれをロケット戦士が見切つてかわし、それを見たメテウスもギラザ

ウルスに指示して追走、いきなり追いかけてつこが始まった。

「くらいい!!」

「そんなものに当たるかつ!!」

メテウスの投げる鎖付き鉄球をライは二刀を構えて受け流しつつロケット戦士が避ける。とはいえやっぱりライのバランス感覚はずば抜けているとしか言いようがない。ロケット戦士の上に立ちながら鉄球を弾くなんて普通ありえない光景だ。するとメテウスはちつと舌打ちして鉄球を下げるとギラザウルスに掴まってスピードを上げ、一気にロケット戦士に追いついてデュエルディスクを構えた。

「こうなりやデュエルでケリつけようじゃねえか!!」

「面白い!!」

メテウスの言葉にライもふつと笑いながらそう言ってデュエルディスクを構えた。そしてロケット戦士とギラザウルスが走っている上で二人は声を上げる。

「デュエル!!」

「つか下りるよ! 下りてデュエルやれよ!!」

「グオウツ!!」

しかしデュエルの掛け声の直後ロケット戦士がいい加減ツッコミを入れ、それに同意したのかギラザウルスも吼える。それを聞いた二人は少し黙るとスピードを落としてもらい、同時に地面へと降り立って向かい合った。

「んじゃ、改めて……」

「デュエル!!!」

そしてライが合図をし、二人の声が魔法都市外の広原に響き渡った。

第二部第十九話 決戦前日、そして決戦の日（後書き）

というわけでお久しぶりです、二ヶ月ぶりです。構成が思いつかなかつたりリアルでちよつと色々あつたりして遅れました。まあこんな駄作小説の続きなんて待ってる方はいないでしょうけどねフッフ……。

さ、さあ勝手に落ち込んでいた気を取り直して今回は決戦の準備といよいよ決戦、次回はライVSメテウスのデュエルです。残念ながら前にメテウスと戦ったメリオルは敵本陣へと突っ込みました。それにしても……半ば確信犯とはいえクイーン達絵札の三剣士にサイクロイドとアルカナ率少し高いな。このままエルフィのデュエル時にはアテナとルイン登場さずか？

レオ「止める」

冗談だよ、多分。そもそもルインはとにかくアテナは天使族のリーダーなんだから来るわけにはいかないし。ま、それでは次回の拙いであろうデュエルもよろしくお願いします。それでは。

第二部第二十話 決戦、光戦士VS恐竜

魔法都市エンディミオン北門、ここでライとメテウスが決戦のデュエルを行おうとしていた。ライの近くにはロケット戦士が、メテウスの近くには俊足のギラザウルスが待機している。

「デュエル!!!」

そして二人の声が重なり合い、すぐさまライが続けた。

「俺の先攻、ドロー!」

ライはそう宣言してカードを引き、その内の二枚を取った。

「モンスターをセット、カードをセットしてターンエンド!」

「俺のターン、ドロー!」

ライはモンスターをセットした後さらにカードをセットしてターンを終え、それを聞くとメテウスは力強く吼えてドローした。そして手札を見るとにやりと笑う。

「「俊足のギラザウルス」を特殊召喚! ギラザウルスを特殊召喚扱いで召喚した時めえは墓地からモンスターを特殊召喚できるが今墓地にモンスターはいねえ!」

メテウスの場に今彼の近くにいる小型恐竜が姿を現してキュイイと鳴き声を上げる。そしてその恐竜が光に包まれた。

「俊足のギラザウルスをリリースし、「^{ダーク}暗黒ドリケラトプス」をアドバンス召喚！ 攻撃だ！」

メテウスの場に現れたクチバシや羽の付いたトリケラトプスの突進にライの場に伏せられたモンスター　シャイン・エンジェルが姿を現す。

「げっ！？　リ、リバーズカードオープン「ガード・ブロック」！」

流石に貫通持ちモンスターが来るとは予想してなかったのかライは驚きながらもリバーズカードを発動する。それによって現れた障壁がライを守るがシャイン・エンジェルは破壊されてしまった。

「ガード・ブロックの効果で俺へと戦闘ダメージを0にしてカードを一枚ドロー！　そしてシャイン・エンジェルの効果発動、戦闘で破壊された時デッキから攻撃力1500以下の光属性モンスター、「サイレント・ソードマン　LV3」を特殊召喚！」

「チッ、カードを一枚伏せてターンエンドだ」

シャイン・エンジェルの遣してくれた光の中から沈黙の少年戦士　サイレント・ソードマン　が姿を現し、さらにライはカードを一枚ドローする。

「俺のターン、ドロー！　そしてスタンバイフェイズにサイレント・ソードマンLV3の効果発動！　このカードを墓地に送る事でデッキから「サイレント・ソードマン　LV5」を特殊召喚！」

「てめえの特殊召喚に合わせてリバーズカード発動「狩猟本能」！　相手がモンスターを特殊召喚した時手札から恐竜族を特殊召喚で

きる！ 俺は「スーパーコングダクターティラー超伝導恐獣」を特殊召喚だ！」

ライの場の沈黙の少年戦士が光に包まれ、その光が弾け飛ぶと中の戦士は青年男子へと成長して大剣を肩に担ぐ。しかし彼の登場に合わせてメテウスが伏せていたカードを発動し、メテウスの場にも巨大な伝導恐竜が姿を現した。

「……「異次元の女戦士」を召喚し、永続魔法「連合軍」を発動！俺の場の戦士の攻撃力は戦士・魔法使いの数×200上昇する！」

ライの場に異次元より来た女戦士が姿を現し、さらに発動された魔法の力で二人の戦士の攻撃力が上昇した。

サイレント・ソードマン LV5 攻撃力：2300 2700
異次元の女戦士 攻撃力：1500 1900

「サイレント・ソードマンで暗黒ドリケラトプスに攻撃！サイレント沈黙の剣レベル5！！」

「ぐおつ！」 LP4000 3700

ライの攻撃指示を聞いた沈黙の戦士は肩に担いだ大剣を構えなおして一気に暗黒ドリケラトプスに突進、振り下ろした剣がドリケラトプスを斬り倒してその衝撃波がメテウスにもダメージを与える。それからライは少し浮かぬ表情を見せながら女戦士と相手の恐竜を見比べる。

「止むを得ない……異次元の女戦士で超伝導恐獣に攻撃！」

ライの言葉を聞いた女戦士はライを見ながら意思の強い表情でこく

んと頷いて持つている剣に力を込め、不思議な光を纏わせて恐獣へと斬りかかった。そして女戦士が恐獣に斬りつけた瞬間女戦士近くの空間が歪み、女戦士は恐獣もろとも異次元へと消えていった。

「異次元の女戦士の効果で戦闘を行ったモンスターを女戦士と共にゲームから除外する……」LP4000 2600

サイレント・ソードマン LV5 攻撃力：2700 2500

ライはくつと表情を歪めてそう説明する。戦士の数が減ったためサイレント・ソードマンの攻撃力も下がってしまった。

「リバーズカードを一枚セット、ターン終了」

「俺のターン、ドロー！」

そしてライは手札から一枚カードをセットしてターンを終え、それを聞いたメテウスはカードをドローする。そしてドローカードを見るとにやりと笑みを浮かべた。

「リバーズカードを二枚セットして魔法カード「命削りの宝札」発動！手札が五枚になるようにドローし、そして伏せていた魔法カード「インスタントフュージョン簡易融合」発動、ライフを1000ポイント支払ってレベル5以下の融合モンスター、「プラグティカル」を特殊召喚！さらにプラグティカルをリリースし「大進化薬」を発動だ！このカードが場に存在する限りレベル5以上の恐竜を召喚する時のリリースは必要なくなるぜ！」LP3700 2700

メテウスは一気に手札を増強し、魔法の効果により彼の場に一体の恐竜が姿を現すがその恐竜はあっという間に消えていき代わりにメ

テウスの場に謎の薬が出てくる。そしてメテウスは一枚のカードを手に取った。

「エンシェント・ダイノ超古代恐獣を召喚！　そしてフィールド魔法「ジュラシック・ワールド」を発動し、超古代恐獣でサイレント・ソードマンLV5に攻撃！！」

超古代恐獣　攻撃力：2700　3000

「リバースカードオープン「死力のタッグ・チェンジ」！　その戦闘で発生する俺へのダメージを0にしてダメージステップ終了時レベル4以下の戦士を手札から特殊召喚する。俺は手札から「ロケット戦士」を特殊召喚！」

辺りがジュラ紀の容貌へと変化していくと恐竜達の力が上がっていき、超古代恐獣の口から発射されたプレスがサイレント・ソードマンを貫きライをも貫こうとするがライの発動した罠の効果によって現れたロケット戦士が盾でそのプレスを防ぎ、盾を構えながらフィールドに出る。

「ちっ、リバースカードを一枚セットしてターンエンドだ」

簡易状況説明

ライ：LP2600　手札二枚

フィールド：ロケット戦士守備表示　連合軍、死力のタッグ・

チェンジ発動中

メテウス：LP2700　手札二枚

フィールド：超古代恐獣攻撃表示　ジュラシックワールド、大

進化薬発動中、伏せカード一枚

相手にダメージを与える事は叶わずにメテウスは舌打ちをすると最後の手札を伏せてターンを終える。それを聞いたライはデッキに指を置いた。

「俺のターン、ドロー！」

「リバースカード発動「リビングゲットの呼び声」！ 墓地から暗黒ドリケラトプスを特殊召喚しこの瞬間超古代恐獣の効果発動！ 墓地から恐竜族の特殊召喚に成功した時カードを一枚ドローするぜ！」

暗黒ドリケラトプス 攻撃力：2400 2700

ライがカードをドローした瞬間メテウスが伏せていたカードを発動し、その効力を受けて地面が割れさつき倒した暗黒ドリケラトプスが蘇生された。そして超古代恐獣の目が光り、メテウスはカードを一枚ドローする。

「……装備魔法「ライトイレイザー」をロケット戦士に装備してロケット戦士を攻撃表示に変更、バトルフェイズ、ロケット戦士無敵モード！ 一応連合軍の効果で攻撃力上昇！」

ロケット戦士 攻撃力：1500 1700

ロケット戦士の手に剣の代わりにナックルが握り締められ、ライの指示と共にロケット戦士はミサイルモード 俗に言う無敵モードへと変化する。そしてライは超古代恐獣を指しながら叫んだ。

「行けっ！ ロケット戦士で超古代恐獣に攻撃！ ロケットブースト・イレイザーアタック！！」

ライの攻撃指示を受けたロケット戦士は一気にブーストを点火して加速、青白い光に包まれながら超古代恐獣に激突すると超古代恐獣の姿が消えていった。

「ロケット戦士は俺のバトルフェイズ時戦闘では破壊されず俺への戦闘ダメージも0になる。そしてライトイレイザーの効果により装備モンスターと戦闘を行ったモンスターをダメージステップ終了時にゲームから除外する！ ターンエンドだ」

「ちっ、俺のターンドロー！」

ライの得意気な言葉を聞いたメテウスは舌打ちをし、カードをドロースする。

「大進化薬の効果によって「ジュラック・ヘレラ」をリリース無しで召喚し、ジュラック・ヘレラでロケット戦士に攻撃！」

ジュラック・ヘレラ 攻撃力：2300 2600

「ダメージ計算時に死力のタッグ・チェンジの効果で戦闘ダメージを0にし、ダメージステップ終了時に手札から「ネクロ・ガードナー」を守備表示で特殊召喚！ そしてライト・イレイザーの効果でジュラック・ヘレラを除外！」

ジュラック・ヘレラの突進にロケット戦士はライトイレイザーを握った手の殴打攻撃で対抗するが突進の威力の方が強く吹っ飛ばされ破壊されてしまう。しかしライの召喚したネクロ・ガードナーが突

進の衝撃を受け止めてライを守り、さらにライト・イレイザーの力によって現れた異空間にジュラック・ヘレラも消えていった。

「暗黒ドリケラトプスでネクロ・ガードナーに攻撃！」

「ぐっ……」 LP 2600 1200

暗黒ドリケラトプスの突進がネクロ・ガードナーを打ち砕き、その衝撃波が今度こそライを襲う。

「ターンエンドだ！」

「俺のターン、ドロー！」

少し苦しくなってきたかライはけほつと咳をした後そう叫んでカードを引く。

「魔法カード、「光の護封剣」を発動！ 相手モンスターの攻撃を三ターン封じる！ モンスターをセットしてターンエンド！」

「往生際の悪い！ 俺のターンだ、ドロー！」

ライの言葉と共にメテウスの場に光の剣が三本刺さり、彼の場のモンスターの動きを封じ込める。それを見たメテウスはちつと舌打ちをしてそう言うカードをドローした。

「大進化薬の効果でアルティメットテイラノ「究極恐獣」をリリース無しで召喚！ ターンエンドだ！」

究極恐獣 攻撃力：3000 3300

その言葉と共に究極に進化したとも言われる恐竜が姿を現し、咆哮を上げる。そしてターンエンドの宣言と共に光の剣が一本消えた。

「俺のターン、ドロ―！……ターンエンド。これで大進化薬の効果も切れる」

ライはカードを引いた後すぐにエンド宣言をし、彼の言葉と共にメテウスの場にあつた不思議な薬が消えていき、それを見たメテウスもちつと舌打ちをした。

「俺のターン、ドロ―！……「セイバーザウルス」を召喚し、リバーカードをセット、ターンエンドだ」

セイバー・ザウルス 攻撃力：1900 2200

メテウスの場に新たな恐竜が現れ、彼のエンド宣言と共に光の剣が残り一本となる。恐竜達は自由を取り戻し始めたのかゲオオと咆哮を上げ始めた。それを見たライはまたくつと唸る。

「俺のターン、ドロ―！……「切り込み隊長」を召喚！ その効果で「クイーンズ・ナイト」を守備表示で特殊召喚、ターンエンド！」

ライの場に二人の戦士が現れるがその攻撃力では一番攻撃力の低いセイバー・ザウルスすら倒せずライはターンを終了する。

「諦めるんだな！ 俺のターンドロ―、セイバー・ザウルスをリリースし「フロストザウルス」をアドバンス召喚！ ターンエンドだ！」

フロストザウルス 攻撃力：2600 2900

メテウスの場に三体の上級恐竜が並んだ。そして彼のエンド宣言によって光の剣は消え、恐竜達は雄々しく咆哮を上げる。次のターンから容赦のない攻撃が飛んでくることはもう間違いなかった。

簡易状況説明

ライ：LP1500 手札零枚

フィールド：切り込み隊長攻撃表示、クイーンズ・ナイト守備表示、モンスター裏守備表示 連合軍、死力のタッグ・チェンジ発動中

メテウス：LP2700 手札二枚

フィールド：究極恐獣、フロストザウルス、暗黒ドリケラトプス全員攻撃表示 ジュラシックワールド、リビングデッドの呼び声発動中、伏せカード一枚

「俺のターン……」

ライはそう呟いて目を閉じ、左腕を腰の辺りに下げると姿勢を低く取りデッキに指をかける。まるで侍が鞘から刀を抜こうとするように。そしてライはカッと目を見開いた。

「ドロー……!!」

そして侍が居合いの要領で抜刀するかのごとく鋭いドローを見せ、ライはドローカードを見る。

「俺も引いたぜ! 魔法カード「命削りの宝札」発動! そして「コマンド・ナイト」を反転召喚し、クイーンズ・ナイトを攻撃表示

に変更して「キングス・ナイト」を召喚！ キングの効果発動、ク
イーンとキングが場に揃った時デッキから「ジャックス・ナイト」
を特殊召喚！」

ライの手札が一気に増強され、さらにライの場に伏せられていた戦
士がその正体を明かしクイーンが剣を構えて攻撃態勢に移るとその
横にキングが姿を現す。そして二人が剣をクロスさせるとジャック
も戦闘場に立った。

「あーったくミスったミスった！ さっきのターンでコマンド・ナ
イトを反転召喚すりゃセイバー・ザウルスは倒せたのに！ まーい
つか、今から結成されし騎士達で恐竜の撲滅だ！ 連合軍の効果で
全戦士の攻撃力は1000ポイント上昇し、コマンド・ナイトの効
果でさらに攻撃力は400上昇するぜ！ さらにフィールド魔法「
侍の戦場」発動！ フィールド魔法の上書きによってジュラシッ
クワールドは破壊され、俺の場の戦士の攻撃力は500上昇、さらに
戦闘以外では破壊されなくなる！」

切り込み隊長	攻撃力：1200	3100	
コマンド・ナイト	攻撃力：1200	3100	
クイーンズ・ナイト	攻撃力：1500	3400	
キングス・ナイト	攻撃力：1600	3500	
ジャックス・ナイト	攻撃力：1900	3800	
暗黒ドリケラトプス	攻撃力：2700	2400	
究極恐獣	攻撃力：3300	3000	
フロストザウルス	攻撃力：2900	2600	

ライは髪をかいてそう呟いた後明るく笑いながらそう続ける。ライ
の場の戦士達は背後の連合軍の鼓舞を受けてその攻撃力を上昇させ、

さらにコマンド・ナイトが剣を掲げると攻撃力をさらに上昇させる。そしてジュラ紀の容貌を見せていたフィールドが上書きされて辺りは誇り高き侍の戦い合う戦場へと変化していき、それがさらに戦士達を鼓舞させた。

「いつけー！ ジャックス・ナイトで究極恐獣を攻撃、ジャック・ブレードー！」

「ぬっ」LP2700 1900

ライの指示を受けたジャックは剣を構えると一気に究極恐獣に肉薄向かってくる牙をかわしてその脳天に剣を突き刺し究極恐獣を破壊した。

「キングス・ナイトでフロストザウルスを攻撃！ キング・スラッシュー！」

「くっ」LP1900 900

ライの指示を受けたキングの剣はフロストザウルスの纏う氷を砕いてフロストザウルス本体までも斬り倒した。

「クイーンズ・ナイトで暗黒ドリケラトプスを攻撃！ クイーンズ・ソードー！」

「ぐっ、させん！ リバースカード発動「生存本能」！ 墓地の恐竜族は五体、それら全員をゲームから除外して2000ライフを回復する！」LP900 2900 1900

ライの指示を受けたクイーンは素早い動きでドリケラトプスを翻弄、

隙を突いた鋭い剣撃がドリケラトプスを幾多に斬り裂き破壊した。咄嗟にメテウスが発動したカードの効果で倒しきるには至らなかつたが連続ダイレクトで終了だ。するとライはにっと笑みを浮かべる。

「かつこよく決めるぜ！ 速攻魔法「瞬間融合」発動、絵札の三剣士を融合し「アルカナ・ナイト・ジョーカー」を融合召喚！ このカードの効果で特殊召喚した融合モンスターはエンドフェイズ時にエクストラデッキに戻るけど、今となってはそんな事関係ない！ アルカナ・ナイト・ジョーカーでダイレクトアタック！」

ライの発動した魔法の光に三剣士が包まれると、その光の中から天位の騎士が姿を現す。そしてライは楽しそうに笑いながらそう言うどぐつと拳を握り締めてそう宣言。それを聞いたジョーカーも剣を構えなおしてメテウスに向かつていった。ちなみに連合軍とコマンド・ナイト、そして侍の戦場の効果でちゃんと攻撃力も上昇している。

アルカナ・ナイト・ジョーカー 攻撃力：3800 5300

「いつけー！！ ロイヤルストレートフラッシュ！！！」

「ぐおおおおおつ！！！」 LP1900 0

トランプ・ナイト
切り札の騎士の斬撃がメテウスを襲い、メテウスは悲鳴を上げて崩れ落ちる。それを見たライは握りこぶしを上に掲げた。

「勝ったー！！！！ん？」

ライは嬉しそうにそう言った後辺りを見回す。指揮官を失ってパニックになったのか恐竜達は散り散りに逃げて行っており、ライはそ

れを確認するとふうと息を吐いてへたり込んだ。

「あ、そだ、捕まえた方がいいよなってええっ!?!」

ライはメテウスを捕まえといた方がいいかなと思つて彼の方を向くと驚きの声を上げる。メテウスは気絶したようだがギラザウルスが銜えて逃げていってしまった。しかも流石は俊足の名を持つ恐竜、凄い速さで近くの森に逃げ込んでしまった。

「……………」

「ラ、ライ……………」

思わずライは目で追うことしか出来ず、ロケット戦士がその声をかける。するとライはぶんぶんと首を横に振つて立ち上がった。

「とりあえず戻ろう! アルフとエルフィがどこに行つたか分からないし、何か手伝える事があるかも!」

「そ、そうだな! よっし乗れ!」

ライの言葉を聞いたロケット戦士はこくこくと頷いてミサイルモードへと変形、ライはそれに乗ると王城へと戻つていった。

そして時間を戻してライとメテウスがデュエルを始めた頃こちらはエルフィ。彼女はヴァルキリア達と共に南西の壁へと向かつてきており、壁を越えてアンデット軍を見つけるとエルフィは一気にヴァルキリアに手を離してもらい飛び降りながら腰のレイピアを抜いた。狙いは相手の人間 アレウス。

「こんのおー!」

「む!?!」

エルフィの叫び声に反応したのかアレウスはエルフィを見上げてその場を離れ、彼女が落ちてきたのを視認すると槍を構えてエルフィに突き出す。しかしエルフィはそれの切っ先をレイピアで逸らしつつ斬りつけ、アレウスも柄の部分を使って受け止めつつ槍で斬りつける。

「壁の破壊をやめなさい!」

「こちらにも目的があるのでね! 断る!?!」

エルフィの叫び声にアレウスはそう返し、レイピアと槍がぶつかり合って互いに弾かれると二人は反射的にデュエルディスクを構えた。

「なら、デュエルで決着つけましょう!」

「いいだろう! 死の恐怖をまた味わうがいい!」

エルフィの言葉にアレウスはそう返し、二人はデュエルディスクを起動する。

「デュエル!?!?!」

そして二人の声が響き渡った。

第二部第二十話 決戦、光戦士VS恐竜（後書き）

ふう、終わった。前回みたいに二ヶ月空くどころか一週間足らずで書き上げられたよ。

今回はライVSメテウス、んでライのデッキはちょっと作りかえられて戦士族は戦士族でも光属性を軸に置きました。なんか彼と仲がよくなった戦士ってロケット戦士といい絵札の三剣士といい光属性が多いんで……さあ今回はどんなデュエル内容の矛盾点ツッコミが来るかなあ（おい）。とりあえず手札枚数のミスを突っ込まれたから双方に命削りの宝札使わせるなんて暴挙をしちゃったけど……。さあ次回はエルファイVSアレウス、どんなデュエルになるのやら……ま、それでは！

第二部第二十一話 決戦、天使VS不死者

魔法都市エンディミオン南西、ここでエルフィとアレウスが決戦のデュエルを行おうとしていた。ちなみに彼女はアンデットにしっかりと囲まれてはいるがアレウスが指示したのかゼラートやヴァルキリア、フレイヤが凄みを効かせているためか襲ってこようとはしていない。

「デュエル!!」

二人の声が重なり合い、続けてエルフィがデッキに指をかけた。

「私の先攻、ドロー!」

エルフィはそう宣言してカードをドローし、それを見ると別のカードを手にとった。

「永続魔法「神の居城 ヴアルハラ」を発動! その効果で手札から「光神テテユス」を特殊召喚! さらに「勝利の導き手フレイヤ」を召喚し、フレイヤの効果で天使族モンスターの攻撃力・守備力が400ポイント上昇!」

光神テテユス 攻撃力：2400 2800
勝利の導き手フレイヤ 攻撃力：1000 500

神の住まう城から一人の天使が現れたと思ったならその横にフレイヤが姿を現し、キツと相手を睨みつける。また彼女の力によりテテユスの攻撃力も上昇していった。

「カードを一枚伏せて、ターンエンド」

「僕のターン、ドロー」

最後にエルフィはカードを一枚伏せてターンを終え、それを聞いたアレウスはカードをドローする。そして別のカードを手に取った。

「魔法カード「ミイラの呼び声」発動！ その効果で「闇より出でし絶望」を守備表示で特殊召喚し、モンスターをセット、カードを二枚伏せてターンエンドだ」

「よし、私のターン！」

アレウスの場合に絶望の影ともう一体のモンスターが姿を現すが攻撃はしてこない。それを見たエルフィはよしと呟いてカードをドローし、それを見るとまたよしと呟いた。

「ドローカードは「アテナ」、光神テテュスの効果でドロー。「シヤインエンジェル」、ドロー、「天空騎士パーシアス」、ドロー。ここまでね」

エルフィは次々カードをドローしていき最後のドローカードを見てそう呟くとそれらを手札に加える。

「「シヤインエンジェル」を召喚、フレイヤの効果で攻撃力は400上昇する。バトル、シヤインエンジェルで守備モンスターを攻撃！」

シヤイン・エンジェル 攻撃力：1400 1800

「通す。守備モンスターは「ピラミッドタートル」、だが破壊と同時にリバースカード発動「道連れ」！ その効果で光神テテウスを破壊する！」

「させない、手札の「紫光の宣告者」バイオレット・デクレアラの効果発動！ 手札からこのカードと天使族モンスター一体を墓地に送る事で罫の発動を無効にし、破壊する。私は天空騎士パーシアスを宣告者と共に捨てて道連れの発動と効果を無効にし、破壊！」

「ちつ、だがピラミッド・タートルの効果でデッキから守備力200以下のアンデット、「ヴァンパイア・ロード」を特殊召喚！」

シャイン・エンジェルが光の弾で守備モンスター　ピラミッド・タートルを倒すがその瞬間アレウスが発動した罫から現れた地獄の手がテテウスへと伸びる。しかしそれに立ちはだかるように天空騎士と紫光の宣告者が現れ、パーシアスの力を得た宣告者の光がその手を浄化した。それを見たアレウスは舌打ちをするがその後になんぞ宣言、それと共に倒れたピラミッド・タートルが背負っていたピラミッドの中からヴァンパイア・ロードが呼び出された。

「メインフェイズ2にフレイヤを守備表示に変更し、ターンエンド」

「待った、お前のエンドフェイズにリバースカードを発動させてもらう。永続罫「死霊ゾーマ」、こいつは発動後僕のモンスターゾーンにモンスターとして守備表示で特殊召喚される。僕のターン、ドロ」

エルフィがターンエンドを宣言した瞬間アレウスはそれに待ったをかけてリバースカードを発動、それと共に彼の場に一体の死霊が姿を現した。それからアレウスはカードをドロし、決めていたかの

ように手札を一枚取った。

「さあ、死霊の世界へと案内してあげよう。フィールド魔法「アンデットワールド」！ その世界に踏み入れしものは死の魔力を受け種族はアンデットへと強制変更される。これによりフレイヤの効果も働かなくなる」

「くっ……」

勝利の導き手フレイヤ	守備力：500	100
光神テテユス	攻撃力：2800	2400
シャインエンジェル	攻撃力：1800	1400

「ゾンビキャリア」を召喚し、レベル2アンデットのゾンビキャリアとレベル4アンデットの死霊ゾーマをチューニング！ 冥界の魔王よ、今ここに死霊となりて蘇れ！ 「蘇りし魔王 ハ・デス」シンクロ召喚！」

「くっ……」

「闇より出でし絶望を攻撃表示に変更し、バトル！ ヴアンパイア・ロードでシャインエンジェルを攻撃！ 言っておくがハ・デスがいる限り僕の場のアンデットが破壊したモンスターの効果は無効になるぞ」

「分かってるっ！」 LP 4000 3400

「オネストはないみたいだな。ヴアンパイア・ロードの効果発動、このカードが相手に戦闘ダメージを与えた時僕はモンスター、魔法、罫のいずれかを宣言しお前はデッキからそれを一枚捨てる。僕は魔

法を宣言しよう、モンスターを宣言して高レベルの天使を墓地に置きアテナが何かで蘇生されたらたまったものじゃない」

「いちいちつつさいわね！ 魔法カード「打ち出の小槌」を墓地に送る！」

「続けて闇より出でし絶望でテテユスを攻撃！ さらにハ・デスでフレイヤを攻撃！」

「つつ……」 LP 3400 3000

「ターンエンドだ」

簡易状況説明

エルフィ LP 3000 手札三枚一（うち一枚アテナ）

フィールド：モンスターなし 神の巨城 ヴアルハラ 発動中、伏せカード一枚

アレウス LP 4000 手札零枚

フィールド：闇より出でし絶望、ヴァンパイア・ロード、蘇りし魔王ハ・デス全て攻撃表示 アンデットワールド、ミイラの呼び声発動中、伏せカードなし

アンデット達の猛攻で一瞬でエルフィの場の天使が全滅し、エルフィがくつと唸るとアレウスはターンエンドを宣言し、エルフィはカードをドロウする。するとよしと微笑んだ。

「魔法カード「高等儀式術」！ その効果でデッキからレベル4の

通常モンスター、デユナミス・ヴァルキリアとレベル2の通常モンスター、ハッピー・ラヴァーを墓地に送りレベル6の「神光の宣告者」^{クレアラ}を守備表示で儀式召喚！そしてリバースカードオープン「転生の預言」、その効果で高等儀式術と……デユナミス・ヴァルキリアをデッキに戻す！」

「それで耐えようという気が」

「まあね、幸いアンデットワールドの影響は手札にまで及ばないからパーミッションに不自由はないわ。ターンエンドよ」

エルフィの発動した儀式の贅に二体の勇敢なる戦天使がなり、その二人が光に包まれたと思うと巨大な宣告者が姿を現し、エルフィの前で防御の体勢を取った。それにアレウスが言っているとエルフィはそう言っただターンを終了する。

「僕のターン、ドロー……ターンエンドだ」

「私のターン、ドロー……カードを一枚セットし、ターンエンド」

「僕のターン、ドロー……ターンエンドだ」

「私のターン、ドロー」

三ターンの硬直戦、変わったのはエルフィにリバースカードを一枚伏せていることか。そしてアレウスがターンエンドを宣言するとエルフィが静かにカードをドローした。そしてドローカードを見るとくすりと笑う。

「墓地の光属性「光神テテュス」と「紫光の宣告者」を除外して」

ホーリーシャイン・ソウル
神聖なる魂」を特殊召喚し、リバーズカードオープン「異次元からの帰還」！ ライフ半分を支払って除外されているテテユスと宣告者を特殊召喚！」LP3000 1500

一気に天使が並んできた。それにアレウスがほうと笑みを零すとエルフィは手札を一枚取る。

「「極星天ヴァルキュリア」を召喚！ そしてレベル2の極星天チユナーヴァルキュリア、レベル6の神聖なる魂、レベル2の紫光の宣告者をチユーニング！ 全知全能の神よ、今ここに降り立ち力を示さん！ シンクロ召喚「極神聖帝オーデイン」！！」

ヴァルキュリアが剣で光輪を描き、その光輪にエルフィの言った三体のモンスターが包み込むとその光の中から全知全能の神が姿を現す。しかし死霊の世界に足を踏み入れた事によりその種族はアンデットと化す。

「バトル！ 光神テテユスでヴァンパイア・ロードを攻撃！」

「チツ」LP4000 3600

「極神聖帝オーデインで闇より出でし絶望を攻撃！ ヘヴンズジャツジメント！！」

「ぐあああああつ！」LP3600 2400

天使達の連続攻撃がアンデット軍を蹴散らし、アレウスはくつと表情を歪める。

「エンドフェイズに異次元からの帰還の効果によりテテユスは除外

される。ターンエンド」

「僕のターン、ドロー」

エルフィの言葉と共にテテユスが異次元へと消えていき、彼女のエンド宣言を聞いたアレウスはカードをドローする。

「……モンスターをセットし、蘇りし魔王ハ・デスを守備表示に変更してターンエンドだ」

簡易状況説明

エルフィ LP1500 手札^{アテナ}一枚

フィールド：極神聖帝オーディン攻撃表示、神光の宣告者守備表示 神の居城 ヴアルハラ 発動中、伏せカードなし

アレウス LP2400 手札二枚

フィールド：蘇りし魔王ハ・デス、裏側表示モンスター共に守備表示 アンデットワールド、ミイラの呼び声発動中、伏せカードなし

「私のターン、ドロー……神光の宣告者を攻撃表示に変更、宣告者でハ・デスを攻撃し、続けてオーディンで裏側守備モンスターを攻撃！」

「ちっ、だが守備モンスターは「ゴブリンゾンビ」、その効果で「馬頭鬼」を手札に加える」

「カードを一枚セットし、ターンエンド」

神光の宣告者の放った光の弾丸が死霊となったハ・デスを貫き、オーデインが死霊となったゴブリンに裁きを与える。しかしゴブリンの力によってアレウスの手札に馬の妖怪が加えられる。それを見ながらエルフィはターンを終えた。

「僕のターン、ドロー……」

アレウスはカードをドローすると少し考え、一枚手札を取った。

「魔法カード「死者への手向け」発動、手札を一枚捨て、お前のオーデインを破壊する」

「させない、神光の宣告者の効果で手札の天使、アテナを捨ててその発動と効果を無効にし、破壊！」

「ミイラの呼び声の効果で「馬頭鬼」を特殊召喚し、「命削りの宝札」を発動！ 手札が五枚になるようにドローする。僕の手札は零枚、ゆえに五枚ドローする」

「ぐっ……本当に、こっちの命が削られる気持ちだわ……」

零枚の手札が一瞬で五枚に増強される。それを見たエルフィがため息をついて呟き、パーミッションのタイミングミスったかなと呟く。その間にもアレウスは続けた。

「手札を一枚デッキトップに戻し、墓地のゾンビキャリアを特殊召喚する。そしてレベル4のアンデット、馬頭鬼とレベル2のアンデット、ゾンビキャリアをチューニング！ 死霊となりし竜よ、今ここに現れる、「デスカイザー・ドラゴン」！！ ゾンビキャリアは

自らの効果で特殊召喚された場合墓地に置かれた時ゲームから除外される」

その言葉と共に現れたのは死霊と化した竜、そいつは現れたと同時に遠吠えを始めた。

「デスカイザー・ドラゴンの特殊召喚時相手の墓地からアンデットを特殊召喚できる。今はアンデットワールドの効果により全てのモンスターがアンデットとなり特殊召喚の条件を満たしているが……これが一番面白いが。僕はデスカイザー・ドラゴンの効果で「極星天ヴァルキリア」を守備表示で特殊召喚！」

「?……あつ」

デスカイザーの遠吠えに呼び出されたのはアンデットと化した戦天使、その姿を見てエルフィはきょとんとしていたが直後気づいたように声を上げ、アレウスはふつと笑う。

「魔法カード「ライトニング・ボルテックス」！ 手札を一枚捨ててお前の場の表側表示モンスターを全て破壊する。宣告者をおうにも手札はもう無い！」

「くっ!！」

降り注ぐ雷がエルフィの場の天使を破壊し、エルフィは目を瞑って声を上げる。そしてアレウスが最後の手札を取った。

「僕はまだ通常召喚を行っていない。「闇竜の黒騎士」ブラックナイト・オブ・ダークドラゴンを召喚し、バトル！ これで終わりだ!！」

「リバースカードオープン」「和睦の使者」！ このターン全ての戦闘ダメージを0にする」

「ちっ、ターンエンドだ」

「エンドフェイズのオーデイン蘇生には極星天が必要なのに……やられた……私のターンドロー！」

アレウスの指示と共に呼び出されたアンデットがエルフィに止めを刺そうと向かってくるがエルフィの発動したカードから現れた修道服の女性陣がそれらからエルフィを守る。それを見たアレウスが舌打ちをしてターンを終えるとエルフィも表情を歪めてそう呟き、カードをドロウする。

「ヴァルハラの効果で「墮天使スペルビア」を特殊召喚し、スペルビアでデスカイザー・ドラゴンを攻撃！」

「ちっ、デスカイザーがフィールド上に存在しなくなった時こいつの効果で特殊召喚されたモンスターも破壊される」LP2400
1900

本来は墓地からの特殊召喚こそが本領だが止むを得ない。呼び出されたスペルビアの攻撃がデスカイザー・ドラゴンを破壊し、デスカイザー・ドラゴンが崩れていくと共にヴァルキリアも崩れ落ちていく。

「ターンエンド！」

「僕のターン、ドロウ」

エルフィのエンド宣言と共にアレウスはカードをドローする。

「墓地の馬頭鬼の効果発動、馬頭鬼を除外して墓地の「闇より出でし絶望」を守備表示で特殊召喚。闇竜の黒騎士を守備表示に変更しターンエンドだ」

「私のターン、ドロー……カードを一枚セットし、スペルビアで黒騎士を攻撃。ターンエンド」

「僕のターン、ドロー……終わりだな」

アレウスのエンド宣言を聞いたエルフィはカードを引くとそれをすぐにセット、スペルビアで黒騎士を破壊するとターンを終えた。それからアレウスはカードを引き見るとにやりと笑ってそう言い、それにエルフィが不思議そうな表情を見せると動いた。

「速攻魔法「異次元からの埋葬」！ その効果で馬頭鬼とゾンビキヤリアを墓地に戻し、馬頭鬼の効果発動、馬頭鬼を除外し、墓地から「竜骨鬼」を特殊召喚！」

「あの時のコストね……でも、それが？」

「ふっ、闇より出でし絶望を攻撃表示に変更し、バトル！ 闇より出でし絶望でスペルビアに攻撃！」

「！？」

アレウスの言葉と共に地面から骨でできたように白い細長いモンスターが姿を現す。このデュエルで姿がなかったモンスターだがエルフィは案外冷静に見抜いた後そう尋ね、それにアレウスはふっと笑

つて闇より出でし絶望に自爆特攻させる。それにエルフィは驚いたように目を見開き、絶望は当然スペルビアに返り討ちにあう。そして絶望が消えていくとアレウスは手札を取った。

「速攻魔法「デーモンとの駆け引き」発動！ レベル8以上のモンスターが僕のフィールドから墓地に送られた時に発動し、僕はデッキから「バーサーク・デッド・ドラゴン」を特殊召喚する！！」
P1900 1800

「!?!」

その言葉と共に現れたのは巨大な屍の竜、その姿にエルフィが息を飲み、アレウスはスペルビアを指差した。

「バーサーク・デッド・ドラゴンでスペルビアに攻撃！ デッド・ブレス！！」

「リバースカードオープン「和睦の使者」！ 戦闘ダメージを0にする！」

「しぶとい、エンドフェイズにバーサークの攻撃力は500ダウンする。ターンエンドだ」

バーサーク・デッド・ドラゴン 攻撃力：3500 3000

屍の竜が放った死のブレスが修道服の女性達に阻まれ、アレウスは舌打ちをしてターンを終える。ちなみにエンドフェイズにバーサーク・デッド・ドラゴンの身体が少し崩れ落ちていた。

「私のターン……ドロー！」

エルフィは目を瞑ってふうっと息を吐いてデュエルディスクが水平になるように胸の前に持っていく、指をデッキにかける。そしてカッと目を見開くとカードをドロ―し、ドロ―カードを見るとよしと頷く。

「魔法カード「壺の中の魔術書」発動！ 互いのプレイヤーはデッキからカードを三枚ドロ―する。そして魔法カード「高等儀式術」！ デッキからレベル4の通常モンスター「デュナミス・ヴァルキリア」二体を儀式の生贄に捧げ、「破滅の女神ルイン」を儀式召喚！」

再度引き当てた高等儀式術、その力によって破滅の名を冠する女神が姿を現す。

「いけっ！ ルインでバーサーク・デッド・ドラゴンに攻撃！！
ダメージステップ時にオネストを手札から発動、その効果でルインの攻撃力はバーサーク・デッド・ドラゴンの攻撃力分上昇する！」

「しまっ…ぐああああああっ！！！！」LP1800 0

ルインの背中に光の羽が現れ、ルインは美麗に飛び立つと手に持った杖に力を集中、屍の竜を一瞬で破滅させるとその光がアレウスを包み込む。その光が消えた時アレウスは地面に倒れこんでいた。

「終わった……」

エルフィはふうと息を吐くと倒れているアレウスの元に歩いて行く。そして彼を揺り動かした。

「起きなさい、情報あらいだらい吐いてもらおうよ……アレウス？」
しかしアレウスは一切反応せず、エルフィは不思議に思う。と同時に声が響いた。

「エルフィ、手を上に伸ばして……！」

「!？」

咄嗟の声にエルフィは弾かれたように右手を上に伸ばし、同時に彼女の身体が宙に浮く。

「ヴァルキリア!? 何を!？」

「下を見て!」

エルフィは自分を持ち上げているデュナミス・ヴァルキリアに問うがそれに隣でゼラートに掴まり空を飛んでいるフレイヤが声を上げ、エルフィは下を向くと絶句した。アレウスは数多くのアンデットに覆われるように隠されており、アンデット達は地面の中に消えていく。その後アレウスの姿はなかった。

「死霊が地に還ったか……だが奴は一体?……」

「一瞬だけど、あいつから死の臭いを感じ取ったわ。アンデットを使ってたのもそれが理由かもね」

「……でも、一体どういこと?」

「とりあえず一度戻りましょう。報告も必要だわ」

ゼラートの眩きにヴァルキリアが言うとエルフィが首を傾げる。それにフレイヤがそう言うのと三人は頷いて王城へと戻っていった。そしてまた時間は戻ってこちらはアルフ、彼は他の二人がロケット戦士に乗っての空中滑走やヴァルキリアのグライダーに比べサイクロイドの身体である自転車というなんとも安っぽい方法で言われた地点へと向かっていた。

「うっしやあ兄さん、そこを越えればすぐだぜ！」

サイクロイドの威勢のいい声にアルフは頷く。しかし自転車がどうやって壁を越えればいいのかやら、そうアルフが考えているとサイクロイドがまた声を上げる。

「いいつくぜえっ!!！」

「うええっ!?!」

なんとサイクロイドはアルフの操縦なしで大ジャンプ、塀を一気に飛び越えた。そしてズウンと音を響かせてアマゾネス達のと真ん中に着地し、アルフはすぐにサイクロイドから下りて辺りを見回す。すると屈強な女性　クメトが笑いながらやってきた。

「おやおやいつぞやの坊や、また随分な登場だね」

「今から壁を破壊しようって言うのなら止めに来ました。嫌なら力づくでも」

「ふん……面白いじゃないか」

クメトの言葉にアルフはそう言い、クメトはふつと笑うとデュエルディスクを構える。それを見たアルフもデュエルディスクを構え、二人は同時に声を上げた。

「デュエル!!!」

第二部第二十一話 決戦、天使VS不死者（後書き）

やーようやくと書けましたわ。んで次回はアルフVSクメト、ちなみにどうでも良いでしょうがこのサイクロイドが塀を越えるというところは色々と没ネタがあつてアルフが魔法カード、リミッター解除を発動しサイクロイドの速度を上げて壁を破壊し登場つてのがあつたんですがそもそも壁の破壊を防ぐために来てるのに本末転倒なので却下、次にアルフがサイクロイドをジャンプさせ、攻撃を仕掛けてきたアマゾネス達に向かってサイクロイドを武器に振り回して応戦、サイクロイドは最終的に気を失うつてのを考えたんですが流石にサイクロイドが可哀想だから却下にしました。

さーて次回はどうなるやら？これが終わってからの小説も考えてるし早く終わらせたいよな……ま、それでは。

第二部第二十二話 決戦、機械VS女性部族

魔法都市エンディミオン北西、ここではアルフとクメトが決戦のデュエルを行おうとしていた。ちなみに彼はサイクロイドと共にしっかりアマゾネス達に囲まれているがクメトの一喝により一切手を出さずとする様子は見せていない。

「デュエル!!!」

二人の声が重なり合い、続けてクメトがデッキに指をかけた。

「先攻はもらうよ、ドロー!」

クメトはそう宣言してデッキからカードをドローし、手札をちらりと見て動いた。

「モンスターをセット、カードを一枚セットしてターンエンドだよ!」

「僕のターン、ドロー!……」「サイバー・ドラゴン」を特殊召喚し、アンティーク・ギアナイト「古代の機械騎士」を召喚! バトル!」

アルフの場に白銀の機械竜と古代の機械騎士が姿を現し、アルフの宣言と共に二体は戦闘体勢を取る。

「サイバー・ドラゴンで守備モンスターを攻撃、エヴォリューション・バースト!」

「守備モンスターは巨大ネズミ、このモンスターが破壊された時デ

ツキから攻撃力1500以下の地属性モンスターを攻撃表示で特殊召喚できる。巨大ネズミを特殊召喚！」

「古代の機械騎士で攻撃、アンティーク・スピア！」

「巨大ネズミの効果で「アマゾネスの剣士」を特殊召喚！」LP4
000 3600

機械竜の光線で破壊された巨大なネズミによって同じモンスターが召喚され、そのネズミを機械騎士の槍が貫くと今度は荒々しいイメージの女剣士が姿を現した。

「リバースカードを一枚セットし、ターンエンド」

「アタシのターン、ドロー！」「アマゾネスの聖騎士」を召喚し、永続魔法「アマゾネスの闘志」発動！ このカードはアマゾネスモンスターが自分より攻撃力の高いモンスターに攻撃する時、ダメージステップ時に攻撃力を1000ポイント上げるのさ！」

「スカイスクレイパーのアマゾネスバースジョンって訳か……まずい」

「アマゾネスの聖騎士の攻撃力はアタシの場のアマゾネス一体につき1000ポイント上昇する。さあいくよ！ アマゾネスの聖騎士でサイバー・ドラゴンに攻撃」

「ちよつと待った！ 攻撃宣言の前にリバースカードオープン」「威嚇する咆哮」発動！ このターン攻撃宣言は行わせない！」

アマゾネスの聖騎士 攻撃力：1700 1900

クメトが攻撃指示をしようとした瞬間アルフが発動したカードから

発された咆哮がアマゾネス達を威嚇し、その攻撃行動を止めさせる。それを見たクメトはちつと舌打ちをした。

「メインフェイズ2にフィールド魔法「アマゾネスの里」発動！アマゾネスの攻撃力は200ポイント上昇し、一ターンに一度アマゾネスが戦闘もしくはカード効果で破壊された時そのアマゾネスのレベル以下のアマゾネスを特殊召喚できる。ターンエンドだ」

アマゾネスの聖騎士 攻撃力：1900 2100

アマゾネスの剣士 攻撃力：1500 1700

その言葉と共に辺りの情景が変わっていき、アマゾネスの攻撃力が上昇する。そしてクメトがターンを終えるとアルフはデッキからカードをドローした。

「僕のターン、ドロー。古代の機械騎士をリリースし、「ブローバツク・ドラゴン」をアドバンス召喚！ブローバツク・ドラゴンの効果発動、コイントスを三回払いその内の二回以上が表なら相手フィールド上のカードを一枚選択し、破壊する。コイントス！」

アルフの言葉と共に彼のフィールドに三枚のコインが現れ、弾かれたように回転して宙を舞う。そして着地したコインの内二枚が表を指していた。

「発動成功！アマゾネスの里を破壊するよ。ブローバツクファイア！」

その言葉と共にブローバツク・ドラゴンがどこぞに目掛けて銃弾を発射、その直後女性部族の里が消えていく。それを見たクメトはチツと舌打ちをした、これにより彼女の場のアマゾネスもパワーダウ

ンする。

アマゾネスの聖騎士 攻撃力：2100 1900

アマゾネスの剣士 攻撃力：1700 1500

「一気にいくよ！ ブローバック・ドラゴンでアマゾネスの聖騎士を攻撃、ガン・キャノン・ショット！」

「チツ」 LP3600 3200

「さらにサイバー・ドラゴンでアマゾネスの剣士を攻撃！」

「アマゾネスの剣士の効果で、戦闘ダメージ600はあなたに受けてもらうよ！」

「分かってるぐっ！」 LP4000 3400

ブローバック・ドラゴンの頭部から撃ち込まれた銃弾が聖騎士を貫きクメトにもダメージを与え、続けてサイバー・ドラゴンが放った光線が剣士を撃つが剣士は倒れ際に手に持っていた剣をアルフに投げ、それを受けたアルフは顔をしかめる。

「カードを一枚セットし、ターンエンド」

簡易状況説明

アルフ：LP3400 手札二枚

フィールド：サイバー・ドラゴン、ブローバック・ドラゴン両

方攻撃表示 伏せカード一枚

クメト：LP3200 手札二枚

フィールド：モンスター無し アマゾネスの闘志発動中、伏せカード一枚

「アタシのターン、ドロー！」

クメトはカードをドローするとにやりと笑みを浮かべ、まず一枚発動する。

「魔法カード「死者への手向け」発動！ 手札を一枚捨てブローバツク・ドラゴンを破壊！」

その言葉と共に発動された魔法カードから出てきた包帯がブローバツクに巻きついていき、カードの中に吸い込まれるとカードごと消えていく。

「魔法カード「命削りの宝札」！ 手札が五枚になるようドローし、アタシの五回目のスタンバイフェイズ時に手札を全て墓地に置く」

発動されたカードの効果によりゼロ枚だった手札が一気に五枚に増強される。それにアルフはくっくと唸り声を上げ、対称的にクメトはにやりと笑みを浮かべた。

「リバースカードオープン「アマゾネスの意地」！ 墓地からアマゾネスを特殊召喚する！ この効果で特殊召喚されたアマゾネスは表示形式の変更が出来ず、攻撃可能の時は強制攻撃する事になるけどね」

「聖騎士？ それとも剣士？」

クメトが発動したカードを見たアルフは身構えながらそう呟く、そしてクメトの場に一体のアマゾネスが姿を現した。

「アマゾネス女王」を特殊召喚！」

「女王！？ いつの間、さっきのコストか！？」

クメトの場に現れたのはアルフが予想したどちらでもなく女性部族アマゾネスの王。それにアルフは驚きを隠せなかったがその直後気づき、クメトはその通りというように笑みを浮かべる。

「さらに「アマゾネス訓練生」を召喚し、バトルだよ！ アマゾネス訓練生でサイバー・ドラゴンに攻撃、アマゾネスの闘志の効果によりダメージステップ時に攻撃力は1000アップだ！」

アマゾネス訓練生 攻撃力：1500 2500

「ぐっ！？」LP3400 3000

まだ少女の雰囲気を残すアマゾネスは闘志を身に纏いながら手に持っていた鎖を振り回すと一気にサイバー・ドラゴン目掛けて投擲、サイバー・ドラゴンをがんにがらめにするるとアルフ目掛けて投げつける。そしてサイバー・ドラゴンの姿が消えていった。

「アマゾネス訓練生が破壊したモンスターは墓地に行かずデッキの一番下に戻される。さらに訓練生はモンスターを破壊することによってその攻撃力を200ポイント上昇するよ！」

アマゾネス訓練生 攻撃力：1500 1700

「さらにアマゾネス女王でダイレクトアタック！」

「こっちは通さない、リバーズカードオープン」「ガード・ブロック」！ その戦闘ダメージを0にしてカードを一枚ドロー！」

クメトの指示を受けると女王は大剣を振りかぶってアルフに襲い掛かるがアルフが発動したカードから現れた障壁がその攻撃を阻み、女王はチツと舌打ちをして自らのフィールドに戻る。その間にアルフはカードの効果でドローをした。

「しぶといねえ、ターンエンドだ」

「僕のターン、ドロー」

クメトのエンド宣言を聞くとアルフはカードをドローする。そしてドローカードを見るとくすりと微笑んだ。

「沼地の魔神王」を召喚し、魔法カード「オーバーロード・フュージョン」発動！ 場の魔神王と墓地のブローバック・ドラゴンを除外融合し、現れる、「ガトリング・ドラゴン」！！」

沼地の魔神王とブローバック・ドラゴンが闇に包まれ、その闇の中から三本の頭を持ちそれらに一つずつガトリングをつけている機械竜が現れる。

「普段は究極巨人やキメラテック・オーバーの保険なんだけどね。ガトリング・ドラゴンの効果発動、コイントスを三回行い、表の数だけフィールド上のモンスターを破壊する！ コイントス！」

アルフはくすつと笑いながらそう言つたと真剣な表情で続け、その言葉と共に現れたコインが弾かれたように回転し宙を舞う、そして落ちてきたコインの内表を指していたのは一枚だ。

「アマゾネス女王を破壊する！ ガトリングファイア！」

アルフの指示と共にガトリング・ドラゴンは中央の頭にあるガトリング砲から弾丸を連射、それを受けた女王はなすすべなく破壊されていった。

「そしてガトリング・ドラゴンでアマゾネス訓練生を攻撃、ガトリング・ショット！」

「ぐうっ！」 LP3200 2300

続けてアルフが言つとガトリング・ドラゴンは三本の頭についているガトリング砲を訓練生に向け全弾発射、訓練生は倒れその銃弾の残りがクメトを貫いた。

「リバースカードを一枚セットし、ターンエンド！」

「アタシのターン、ドロー！」

アルフのエンド宣言を聞くとクメトは表情をきつくしながらカードをドローし、ドローカードを見る。するとふつと笑った。

「「アマゾネスの格闘戦士」を召喚！」

「闘志の効果を使つてもガトリングには勝てないよ？」

「分かってるよそれぐらい、アタシは魔法カード「アマゾネスの呪詛師」を発動！ アマゾネスの格闘戦士の攻撃力とガトリング・ドラゴンの元々の攻撃力を入れ替える！」

「えっ!？」

アマゾネスの格闘戦士	攻撃力：1500	2600
ガトリング・ドラゴン	攻撃力：2600	1500

クメトの発動した魔法から妙な呪詛が聞こえだし、それを受けた格闘戦士は力を増していくが逆にガトリング・ドラゴンは力を失っていく。

「これで攻撃力は上回ったよ。格闘戦士でガトリング・ドラゴンに攻撃だ！」

「くっ!!」 LP3000 1900

クメトの指示を受けた賢者がガトリング・ドラゴンを破壊し、アルフのライフを削る。それを見てクメトはにやりと笑みを浮かべた。

「カードを一枚セット、ターンエンドだ」

「くっ……僕のターン、ドロー！」

アルフは目こそ光は失ってないものの苦しげな表情でカードをドロし、そのカードを見るとはっとした表情を見せた後よしと頷いた。

「リバースカードを一枚セットし僕も引いたよ、「命削りの宝札」！ その効果で手札が五枚になるようドロー、さらに魔法カード」

壺の中の魔術書」！ 互いのプレイヤーはカードを三枚ドロウする」
相手の手札も増やしたとはいえアルフは一気に手札を七枚に増強、
それらをさつと見眺めた。

「プロト・サイバー・ドラゴン」を召喚し、「エヴォリユーション・バースト」発動！ プロト・サイバーはサイバー・ドラゴンとして扱われ、このターン攻撃できない代わりに相手フィールド上のカードを一枚破壊する。アマゾネスの格闘戦士を破壊！」

「ちいっ」

「リバーズカードを二枚セット、ターンエンド」

簡易状況説明

アルフ：LP1800 手札三枚

フィールド：プロト・サイバー・ドラゴン攻撃表示 伏せカード四枚

クメト：LP2300 手札四枚

フィールド：モンスター無し 伏せカード一枚

互いにモンスターを召喚しての殴り合い、それを感じながらクメトはにやりと笑みを浮かべた。

「楽しいねえ……アタシのターン、ドロウ……！」

クメトは笑いながらそう言ってカードをドロウし、見ると伏せカー

ドを発動した。

「リバーズカードオープン「アマゾネスの意地」！ その効果で」

「つつ……チエーンしてリバーズカードオープン「サンダー・ブレイク」！ 手札を一枚捨ててアマゾネスの意地を破壊！」

「おおっとお！ だったらさらにチエーンして速攻魔法「サモンチエーン」を発動！ このカードはチエーン3以降に発動する事が出来、アタシはこのターン合計三回まで通常召喚を行える！ アマゾネスの意地は破壊されちまうがまあいいとしようかねえ」

「そんな……」

クメトが発動したのはさつきも使っていた蘇生カード、それでまたもや女王を呼び出されては敵わないためアルフはすぐさま対処するがそれすらも予想していたかのようにクメトはもう一枚の魔法を発動する。落雷が蘇生カードを破壊したものの不思議な光がクメトの場を包んだ。

「さあ行くよ！ アマゾネスの聖騎士を召喚、続けて訓練生、最後にペット虎タイガーを召喚！」

アマゾネスの聖騎士	攻撃力：1700	2000
アマゾネスペット虎	攻撃力：1100	2300

魔法の力によって一気に三体のアマゾネスが場に揃う、しかも聖騎士と虎はその効果により攻撃力を上昇させていた。

「終わりだね！ アマゾネスペット虎でプロト・サイバー・ドラゴンを攻撃！」

「づうっ！」 LP1800 600

「止めえ！ アマゾネスの聖騎士でダイレクトアタック！」

「この瞬間リバーストラップ発動「攻撃の無力化」！ 攻撃を無効にしバトルフェイズを終了させる！」

「しぶといねえ！ リバーカードをセットし、ターンエンドだ！」

プロト・サイバー・ドラゴンがアマゾネスを守りし虎に噛み砕かれると守るものがいなくなったアルフを聖騎士が斬ろうとする。しかしそれはアルフがすんで発動した障壁に阻まれ、クメトは最後の手札を伏せるとターンを終えた。

「僕の、ターン……ドロォー……！」

アルフは力強くカードをドローするとそれを手札に加え、別の一枚を取る。

「この戦いに勝つためならば敢えて傷も受けよう、魔法カード「死者蘇生」！ その効果で墓地からプロト・サイバー・ドラゴンを特殊召喚しこの瞬間リバーカード、「地獄の暴走召喚」発動！ プロト・サイバーのカード名はサイバー・ドラゴンとして扱われる、よって僕はデッキからサイバー・ドラゴン三体を特殊召喚！」

「こつちもそのカードの効果でアマゾネスの聖騎士をデッキと墓地から特殊召喚させてもらうよ！ 残念ながらペット虎はフィールド上に一体しか存在できないんでね」

アマゾネスの聖騎士×3 攻撃力：1700 2200
アマゾネスペット虎 攻撃力：2300 3100

アルフの場に先ほど破壊された機械竜が姿を現したと思うと横にその機械竜より幾分か立派な白銀の機械竜が三体姿を現す。その直後クメトも聖騎士を特殊召喚し、その効果でアマゾネス達は攻撃力を上昇させる。

「魔法カード「融合」発動！ プロト・サイバー・ドラゴンとサイバー・ドラゴン二体を融合し、「サイバー・エンド・ドラゴン」を融合召喚！！」

灰黒色の機械竜と白銀の機械竜二体が融合し、三本の頭を持つ白銀の機械巨竜がアルフの場に姿を現す。そしてキツとした表情でクメトの場を見た。

「僕にも守りたい者が出来た。だからこそ負けるわけにはいかない！ サイバー・エンド・ドラゴンでアマゾネスペット虎を攻撃、エターナル・エヴォリューション・バーストオー！！！」

「あっはっはっは！ ぜんっぜん学習してないねえ！ リバースカードオープン「銀幕の鏡壁」！！^{ミラーウォール} サイバー・ドラゴンの攻撃力は半減、返り討ちでアタシの勝ちさ！！！」

アルフの攻撃指示を受けたサイバー・エンド・ドラゴンは三本の顔から光線をアマゾネスを守る虎目掛けて放つがクメトは高笑いをしてしながら伏せカードを発動、ペット虎の前に敵の攻撃を反射する鏡の壁が出来上がるうとしていたがアルフは冷静に動いていた。

「この瞬間を待っていた！！ リバースカードオープン「リビング

デッドの呼び声「！」

「！？」

アルフの叫び声にクメトは驚いたように目を見開く、そしてアルフの場に一体の機械が姿を現す。

「現れる、「人造人間 サイコ・ショッカー」！」

「んなっ！？ そんなカードいつの間に……しまった……」

アルフが呼び出したのはこのデュエル中一度もその姿を見なかった人造人間、それを見たクメトは驚きの声を上げるがその直後気づいたように顔をしかめる。あの時以外考えられない、自分がサモンチエーンを使う事となったチエーン、サンダー・ブレイクの手札コスト。

「サモンチエーンのためにアマゾネスの意地を囮にしたつもりでした？ でも、僕も使わせてもらいましたよ。以前の僕が敗北した鏡壁、これを突破するためにね！ サイコ・ショッカーが存在する限り全ての罠は封じられる、つまり鏡壁も不発になる！」

「ちいつ、だが、まだ終わりはしないよ！！」

アルフがそう宣言した瞬間サイコ・ショッカーの放った光線が鏡壁を消していき、ペット虎にサイバー・エンド・ドラゴンの光線が勢いを止める事無く向かっていく。それを見たクメトがそう言うがアルフはふっと笑みを浮かべた。

「うん、僕もまだ終わらないと思ってたよ。このカードを引かなけ

ればね……ダメージステップに速攻魔法「リミッター解除」発動！
サイバー・エンド・ドラゴンの攻撃力を倍にする！！」

「なっ！？」

サイバー・エンド・ドラゴン	攻撃力：4000	8000
サイバー・ドラゴン	攻撃力：2100	4200
人造人間 サイコ・ショッカー	攻撃力：2400	4800

「これこそが今僕に出来る最大最高の一撃、エターナル・エヴォリ
ューション・バースト・マキシマム！！！」

アルフの叫び声と共にサイバー・エンド・ドラゴンの放つ光線の威
力が高まり、ペット虎を撃ち抜く。そしてその一撃は止まる事無く
クメトを呑み込んだ。

「うわあああああ！！！！」LP2300 0

クメトは悲鳴を上げて倒れ、アルフは荒い息をしながら終わったと
呟く。すると突然辺りのアマゾネス達がばたばたと倒れていっ
た。

「わっ！？ 一体何がっ！？」

「ん？ おい兄ちゃん！ アマゾネス達から何か出てきてるぞ！？」

アルフが驚いたように叫ぶとサイクロイドがそう叫んで指を差す。
確かにアマゾネス達から何かもぞもぞと動き出てきており、アル
フはそれを見ると目を閉じて氷の魔力を集中する。そしてアマゾネ
ス達から出てきたものを全て凍りつかせ、その内の一個を掴み上げ

た。

「これは…… A細胞？…… そういえばライが戦士達の中にA細胞に洗脳された奴らがいたって言ってたっけ…… つまりアマゾネス達は洗脳されてた？」

「兄ちゃん！」

「！？」

アルフは静かにそう分析、呟いていたがサイクロイドの言葉で我に返りサイクロイドが指差す方、クメトが倒れている方を見る。とクメトは息絶え絶えながら立ち上がり未だにA細胞に洗脳されているのか目が虚ろなペット虎に乗ると走り逃げ出した。

「くそっ！ サイクロイドさん、追いますよ！」

「いやいやいやいくら俺たちでもこの戦火の中あいつを追えつてのは無理だつて……！」

「もー役立たず！…… とりあえずアマゾネスさん達を保護した方がいいし、報告しないと…… でも気を失ってる人を放つとけないし、壁を越えるのも一苦労だしなあ……！」

アルフはそう叫んでサイクロイドに乗ろうとするがサイクロイドは手をぶんぶんと振って無理だと主張、それにアルフはもーと叫んだ後気を取り直してそう言う。そして壁を見上げながら続けるとふとサイクロイドをじーっと見つめ出し、その視線を受けたサイクロイドは嫌な予感とばかりに後ずさる。しかしアルフはがっしとサイクロイドを掴んだ。

「いや、いや無理無理無理!!!」

「大丈夫！　ハンマー投げはやった事ないけど思いつきり遠心力つけて力いっぱい投げれば多分!!!」

サイクロイドは悲鳴のような抗議の声を上げるがアルフはどこか自信満々にそう返す。彼らがこれからやろうとしている事は簡単、アルフがハンマー投げの要領でサイクロイドを魔法都市に投げ入れ、報告をさせようと言うのだ。そしてその間自分はアマゾネスの保護を行うわけである。そしてアルフはサイクロイドのハンドルの片方を掴むとぶんぶんぶんと思いつき振り回す、そのフォームは正にハンマー投げの選手のそれであった。

「ぎゃあああああああ!!!」

「どっ、せえーい!!!」

そしてアルフがぶん投げるとサイクロイドは悲鳴を上げて魔法都市の中に飛んでいき、ドンガラガツシャーンという音が聞こえてきた後キコキコキコとサイクロイドが動く音がする。アルフはどこかやりきったようによしと頷くとアマゾネス達を護衛しやすいように一箇所に集め出した。

その頃こちらはレオ達、レッドアイズは飛行能力を持つ悪魔勢を力づくでなぎ払いながら敵の本拠地まで到着、レオとメリオル、ヴァルツが下りるとレッドアイズは戦闘体勢を取り直し、ヴァルツも振り返って杖を構えた。

「さあつてと、重てえ荷物も下りた事だしようやく本気で戦えるぜ

「！」

「レオ、メリオル、挟み撃ちになっては面倒だ。ここは俺達が食い止める」

「えっ!？」

「た、たった二人で!? 危険です、私達も!」

レッドアイズが好戦的な口調でそう言うとヴァルツも冷静にそう続けるがレオは驚いたように叫び、メリオルもそう言って扇子を取り出すとその瞬間レッドアイズが吼えた。

「付け焼刃程度にしか戦えねえ人間なんざ邪魔なだけだ! とつとと奥行つてこい!」

「案ずるな。俺とて黒魔術師の称号は伊達ではない」

「……………」

レッドアイズの咆哮にヴァルツも微笑んでそう言うと二人は黙り込む、するとレッドアイズが思い出したように言った。

「そつだ、レオ。てめえはくたばろつがどつなるつが知つたこつちやないが、俺の子だけは絶対に守つてもらつかな?」

「ん? お、おう…………任せとけよ」

「キユ」

レッドアイズの言葉にレオは笑つてすっかり自分の頭の上を定位置

にしている黒竜の雛を撫で、雛も鳴き声を上げる。そしてレオとメリオルは一気に奥向かって走り出し、ヴァルツはレッドアイズに話しかけた。既に上空には多くの悪魔達が揃っている。

「さあ、多勢に無勢というやつだ。少しばかり本気でいかせてもらおうかな？」

「おう。あいつらがいるんじゃないけども遠慮しちまって本気が出せなくていけねえ」

ヴァルツの言葉にレッドアイズも頷いてそう言っていると敵悪魔の一体が無謀にも突進する。それをレッドアイズは炎を吐くまでもなく尻尾で叩き落とし、直後五体程の悪魔が突進してきた。

「魔導波！」

するとヴァルツが魔導波を放ってその悪魔達を砕く。二人はにやりと笑みを浮かべ合つと悪魔達を睨みつけた。

第二部第二十二話 決戦、機械VS女性部族（後書き）

さあ、ライ、エルフィ、アルフ三人の決戦デュエルも終了し後はレオとメリオルの二人だけ。いよいよこの戦いもクライマックスです。

……えーっと、特に言うこともないので……それでは！
レオ「おい！？」

あ、えと、感想お待ちしております。それでは！

第二部第二十三話 決戦、魔術師VS暗黒

敵本拠地 仮に暗黒城と言おう、その内部をレオとメリオルの二人は走っていた。すると先頭を走っていたレオの足元に何かが当たり、レオは咄嗟に足を止めてバックステップを踏むとメリオルを守るように構える。

「やあ、やっぱり来たんだね」

「ソーマ！」

そこに立っているのはソーマ、彼は銃を二人に向けて構えておりレオも腰の刀を抜いて構えメリオルも自分の武器である扇子を構える。

「なるべくなら君達を味方につけたかったんだけどね」

「あいにくだったな。この先に行かせないというならすぐにぶつ倒すまでだ……いく!？」

ソーマの言葉にレオはそう言って刀をソーマに向け、突進しようとするがメリオルが前に立ってそれを制する。

「ここは私に任せて。今もエンディミオンは襲われてるし他の種族達もどうなってるか分からない、レオは先に進んで黒幕を倒した方がいいわ」

「だが……」

「心配いらないわ。言ったでしょ？ 私は守られるだけなんて性に

あわない、それに私はレオの相棒でしょ？」

「……任せるぞ」

「任されたわ」

メリオルの言葉にレオは反論しようとするがその前にメリオルはそう続け、それを聞いたレオが頷いてそう言うとメリオルもくすりと笑って返し、一気に二本の扇子を振るって風の刃でソーマを威嚇、その隙にレオが奥へと走った。そして攻撃が止んだ後ソーマは奥へと行ったレオには目もくれずにメリオルを見る。

「相変わらず、外見可愛いくせに中身男前だね」

「あいつと幼馴染やってたら誰だってこうなるわ。レオは追わせないわよ」

「ああ。君の勇気に免じて彼は先に行かせてあげるよ、僕達の大將はそうそう簡単にやられはしないだろうしね……じゃあ、始めようか。今度こそ無限の暗黒に飲み込んであげるよ」

ソーマが笑みを浮かべながら言うとメリオルはそう言ってデュエルディスクを構え、それを聞いたソーマもこくと頷いてデュエルディスクを構える。それからの言葉を聞いたメリオルはくすりと笑った。

「言ったわよね？ 私はただ守られるだけなんて性に合わないの……要するに、ナメんじゃないわよ！」

「デュエル！！！」

二人の声が響き渡り、メリオルは五枚の手札を引いた後さらにもう一枚のカードをドローしながら言う。

「私が先攻をもらうわ、ドロー！」

そして手札を見眺め、一枚を手に取る。

「「熟練の黒魔術師」を召喚し、魔法カード「魔力掌握」を発動！
熟練の黒魔術師に魔力カウンターを乗せ、さらに魔法カードの発動によりもう一個魔力カウンターが乗る。そしてデッキから魔力掌握を手札に加えるわ。リバースカードを二枚セットし、ターンエンド」

「僕のターン、ドロー」

メリオルの場に現れた黒魔術師の両肩についた装飾に魔力が宿り、メリオルは二枚のカードを場に伏せるとターンを終える。それを聞いたソーマは静かにカードをドローした。

「僕のターン、ドロー。手札の「ダーク・パーシアス」を捨てて「ダーク・グレファア」を特殊召喚、ダーク・グレファアの効果発動、手札の「ダーク・クルセイダー」を墓地に送りデッキから「速攻の黒い忍者」を墓地に送る」

「これで闇属性が三体……」

「うん、ダーク・アームド・ドラゴンの召喚条件は整った……けど残念ながら手札にないんだよねえ。だから墓地に三枚以上の闇属性モンスターが墓地にいる時その内の二枚、ダーク・パーシアスと速

攻の黒い忍者をゲームから除外して手札の「ダーク・ネフティス」を墓地に送る」

ソーマは一気に三枚の闇モンスターを墓地に送り、それを見たメリオルが顔をしかめる。以前の決闘で苦しめられた暗黒の武装龍ダーク・アームド・ドラゴンの召喚条件が整った。しかしソーマはけらけらと笑いながらそう言い、彼の背後に闇に落ちた聖騎士と黒き忍者の魂が現れるとそれが黒き不死鳥の魂に吸収され、不死鳥の姿も一時消えていく。そしてソーマはもう一枚の手札を取った。

「僕はまだ通常召喚を行っていないから、手札から「ジャイアント・オーク」を召喚させてもらうね。そしてジャイアント・オークで熟練の黒魔術師を攻撃！」

「速攻魔法「収縮」を発動！ ジャイアント・オークの攻撃力を半減させる！」

ジャイアント・オーク 攻撃力：2200 1100

ソーマの場に現れた巨大な悪魔が手に持った棍棒で黒魔術師に殴りかかるがその瞬間メリオルが発動した魔法によってその身体が縮んでいく。そして黒魔術師が杖から発した魔導波がジャイアント・オークを返り討ちにする。

「しまった……」LP4000 3200

「さらに魔法カードの発動によって熟練の黒魔術師に魔力カウンタ―が乗るわ！」

魔導波の残りを受けながらソーマは顔をしかめ、メリオルがふつと

笑いながらそう言つと黒魔術師の胸の装飾にも魔力が宿つた。

「あらら、これはまずい。カードを一枚セットしてターンエンドだ」

「私のターン、ドロー」

ソーマはこれで手札がゼロになった。そして彼の言葉を聞いたメリオルはカードをドローする。

「私のターン、ドロー！ 魔力を溜めし黒魔術師よ、真の姿を解き放て！ 魔力カウンター三つを乗せた熟練の黒魔術師をリリースし、デッキからブラック・マジシャンを特殊召喚！」

メリオルの言葉と共に黒魔術師は闇の魔力に包み込まれ、その闇が弾け飛ぶと全身を黒い衣装に包んだ最上級黒魔術師が姿を現す。

「「クルセイダー・オブ・エンディミオン」を召喚し、ブラック・マジシャンでダーク・グレフアーを攻撃！」

「そうはいかないよ、リバーズカードオープン「和睦の使者」！ 戦闘ダメージを0にする」

そして彼女の指示でブラック・マジシャンが闇の波動を放つがダーク・グレフアーの前に修道服を着た女性達が現れてその念で波動を防いだ。

「くつ、リバーズカードを一枚セットしてターンエンド」

「僕のターン、ドロー。そしてスタンバイフェイズ時に前のターン墓地に送ったダーク・ネフティス等特殊召喚し効果発動！ ネフテ

イスの特殊召喚に成功した時フィールド上の魔法・罫を一枚破壊する！ 君がさつき伏せたりバースカードを破壊させてもらうよ！」

「ぐうっ！」

メリオルが悔しそうに顔を歪めながらターンを終えるとソーマはカードをドロウする。そして彼のデュエリディスクの墓地から闇が湧き出ていきその闇が不死鳥を形作る。そして現れた闇の不死鳥が翼を羽ばたかせるとメリオルの場の伏せカードが一枚破壊されてしまった。

「「ダーク・リゾネーター」を召喚し、レベル3の悪魔族ダーク・リゾネーターをレベル4のダーク・グレファアーにチューニング！シンクロ召喚「デーモン・カオス・キング」！！」

悪魔と闇に堕ちた戦士が闇に包まれていき、その中から新たなる悪魔が姿を現す。

「バトルフェイズ、デーモン・カオス・キングでブラック・マジシヤンを攻撃！」

「リバースカードオープン「エネミーコントローラー」！ その効果でデーモン・カオス・キングの表示形式を変更！」

「あら。じゃあダーク・ネフティスでクルセイダー・オブ・エンデイミオンを攻撃だ！」

「ぐっ……」 LP4000 3500

炎を身につけているとでも称するような悪魔がブラック・マジシヤ

ンに攻撃を仕掛けようとするもののメリオルの発動したコントロールに操作されその悪魔は守備の体形になる。それにソーマは残念そうに笑った後ダーク・ネフティスに攻撃を指示、その闇の炎にクルセイダー・オブ・エンディミオンが焼き尽くされ、メリオルのライフも削った。

「ターンエンド」

そしてソーマはターンエンドを宣言する。

簡易状況説明

メリオル：LP3500 手札二枚（内一枚魔力掌握）

フィールド：ブラック・マジシャン攻撃表示 伏せカードなし

ソーマ：LP3200 手札零枚

フィールド：ダーク・ネフティス攻撃表示、デーモン・カオス・キング守備表示 伏せカードなし

「私のターン、ドロー！ 魔法カード「壺の中の魔術書」を発動、互いにカードを三枚ドローする」

「ありがとう」

メリオルの発動した魔法カードにソーマはわざとらしい口調でお礼を言いながらカードを引き、メリオルもどこかむすつとしながらカードをドローする。そして一枚のカードを取った。

「これが魔法使い達の住む場、私が守るべき地！ フィールド魔法

「魔法都市エンディミオン」発動！」

その言葉と共に場の一部が城下町の一片へと変化する。

「魔法カード「魔力掌握」！ 魔法都市エンディミオンに魔力カウンターを一個乗せ、デッキから魔力掌握を手札に加える。魔法カードの発動により魔法都市にもう一個カウンターが乗る。さらに、魔法カード「千本ナイフ」でデーモン・カオス・キングを破壊！ 魔法の発動により魔法都市にカウンターを乗せる！」

魔法都市エンディミオン 魔力カウンター：0 3

メリオルは一気に魔法を発動していき、ブラック・マジシヤンの放った千本のナイフがデーモン・カオス・キングを貫く。そしてブラック・マジシヤンは杖を構えた。

「ブラック・マジシヤンでダーク・ネフティスを攻撃！ ブラック・マジック！」

「くっ……」 LP3200 3100

「リバースカードを一枚セットし、ターンエンド」

ブラック・マジシヤンの魔導波がダーク・ネフティスを貫き、ソーマは顔を歪める。そしてメリオルはカードを一枚セットしてターンを終えた。

「僕のターン、ドロー」

ソーマはカードをドローすると合計四枚になった手札を吟味しながら

らふむと頷き、自分の墓地を確認する。

「墓地に闇属性が六体、除外に二体と……じゃあ、ダーク・クリエーターを守備表示で特殊召喚！ このカードは僕の場にモンスターが存在せず僕の墓地に五体以上の闇属性モンスターが存在する時特殊召喚できる。さらにダーク・クリエーターの効果発動、墓地の闇属性モンスター、ダーク・クルセイダーをゲームから除外し、墓地からデーモン・カオス・キングを攻撃表示で特殊召喚！」

ソーマの場に闇の創造神が姿を現し、その横に闇が吹き出たと思っただらさつき倒した悪魔が姿を現す。

「デーモン・カオス・キングでブラック・マジシャンを攻撃！」

「リバーズカードオープン「次元幽閉」！ 攻撃モンスターを除外する！」

「くっ！？」

ソーマの指示と共に炎を纏った悪魔がブラック・マジシャンに攻撃を仕掛けるが、ブラック・マジシャンの前に突如異次元への道が出来、デーモン・カオス・キングは勢い余ってそれに突っ込んでいくと異次元への道は消えていく。それにソーマは表情を固めた。

「ダーク・アームド・ドラゴンの効果対策に墓地に送るわけにはいかないからね。本当はレオのレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン対策だけど」

「強かだね。カードを一枚セットして、ターンエンド」

メリオルの言葉にソーマはへらへらと笑いながらターンを終えた。

「私のターン、ドロ。よし、魔法カード「地砕き」発動！ ダーク・クリエーターを破壊！ ついでに「魔力掌握」を発動し、魔法発動と合わせて二つの魔力カウンターをエンディミオンに乗せる！」

「むっ」

メリオルは引いたカードを即時発動し、そのカードの効果でダーク・クリエーターが砕け散る。それにソーマは表情を曇らせた。もちろん魔法の使用によりエンディミオンに魔力カウンターも乗る。

魔法都市エンディミオン 魔力カウンター：3 4 6

「いくわよ！ ブラック・マジシャンでダイレクトアタック！」

「おおっと、そうはいかないよ！ リバーストラップ発動「聖なるバリア ミラーフォース」！ 暗黒使いの僕が聖なるなんてのもおかしいけど、相手の攻撃表示モンスターは全て破壊するよ！」

「なっ!?!」

メリオルの言葉と共に黒き魔術師がソーマに攻撃を行おうと杖を構えるがその瞬間ソーマは伏せていたトラップを発動、ブラック・マジシャンの放った魔導波が聖なるバリアに阻まれてしまい逆にブラツク・マジシャンを貫いた。

「リ、リバースカードを一枚セットし、ターンエンド」

「ははは、正に一進一退の攻防だね。僕のターンドロ」

メリオルは慌てたようにリバースカードを伏せるとターンを終え、ソーマは笑いながらカードをドロワーしてふむと呟きながら手札を吟味し始める。

「僕は手札を一枚捨てて「D・D・R」を発動、除外されている」「ダーク・パーシアス」を攻撃表示で特殊召喚してつと、ダーク・パーシアスでダイレクトアタック！ ちなみにダーク・パーシアスの攻撃力は墓地に眠る閻属性モンスターの数×100ポイント上昇するよ」

ダーク・パーシアス 攻撃力：1900 2500

魔法都市エンディミオン 魔力カウンター：6 7

「リバースカードオープン「和睦の使者」！ 戦闘ダメージを0にするよ！」

「ちえ〜。ターン終了」

簡易状況説明

メリオル：LP3500 手札零枚

フィールド：モンスターなし 魔法都市エンディミオン発動中、伏せカードなし

ソーマ：LP3100 手札一枚

フィールド：ダーク・パーシアス攻撃表示、D・D・R発動中
(ダーク・パーシアス装備)、伏せカードなし

「私のターン、ドロー！ くっ、モンスターをセットしてターンエンド！」

メリオルは引いたモンスターを見てくっと表情を歪ませるとそれを伏せてターン終了を宣言する。

「僕のターン、ドロー。僕は「終末の騎士」を召喚しその効果でデッキから闇属性モンスター、「シャドウ・ダイバー」を墓地に送る。さあ、バトル！ ダーク・パーシアスで守備モンスターを攻撃！」

ダーク・パーシアス 攻撃力：2500 2600

ソーマの場に一体の騎士が姿を現し、闇の力を持つモンスターが一体墓地へと送られる。そして彼の攻撃指示を受けた闇の聖騎士がメリオルの守備モンスターを切り裂いた。

「守備モンスター、見習い魔術師の効果発動！」

「それにチェーンしてダーク・パーシアスの効果発動！ 墓地の闇属性モンスター、シャドウ・ダイバーを除外してカードを一枚ドロ！！」

ダーク・パーシアス 攻撃力：2600 2500

「チェーン1の見習い魔術師の効果でデッキからレベル2の魔法使い「見習い魔術師」をセットするわ」

「じゃ、終末の騎士で攻撃！」

「見習い魔術師の効果でデッキから「執念深き老魔術師」をセット！」

「ありや、しまったな……カードを一枚セットしてターンエンド」
ソーマは肩をすくめてターンエンドを宣言し、それを聞いたメリオルはデッキに指をかける。

「私のターン、ドロ―！ よし！ 魔法カード「命削りの宝札」を発動、手札が五枚になるようドロ―し私の五回目のスタンバイフェイズ時に手札を全て捨てる」

「一気に手札が五枚に増強とはね、流石だよ」

魔法都市エンディミオン 魔力カウンター：7 8

メリオルの言葉と五枚のカードドロ―にソーマは笑いながらそう返す。もちろん魔法カードの発動によりエンディミオンにも魔力カウンターが乗った。

「いくわよ、魔法都市エンディミオンに乗っている魔力カウンターを六つ取り除き、手札から「神聖魔導王エンディミオン」を特殊召喚！ 魔導王がこの方法で特殊召喚に成功した時、墓地から魔法カード一枚を手札に戻す、私は「地砕き」を手札に戻すわ。そして執念深き老魔術師を反転召喚し、その効果でダーク・パーシアスを破壊！」

魔法都市エンディミオン 魔力カウンター：8 2

「くっ！」

魔法都市に溜められた魔力が一点に集中したと思ったたらそれが光を

放ち、メリオルの場に一人の男性魔法使いが姿を現す。そして彼の魔力によってメリオルが使用した魔法カードが力を取り戻して彼女の手札に戻り、メリオルはさらに先ほどセットした老魔術師を呼び起こす。その魔術が闇の聖騎士を打ち砕いた後老魔術師は光に包まれる。

「執念深き老魔術師をリリースし、マジカル・マリオネット「魔法の操り人形」をアドバンス召喚！ そして手札から魔法カード「地砕き」を発動、終末の騎士を破壊するわ！」

魔法都市エンディミオン 魔力カウンター：2 3
魔法の操り人形 魔力カウンター：0 1 攻撃力：2000 2
200

「うわっちゃー」

あっという間にソーマの場が全滅、それにソーマはそう声を出していたがメリオルはじつと彼の伏せているリバーズカードを見ていた。

「神聖魔導王エンディミオンの効果発動！ 手札から魔法カード「二重魔法」を捨ててあなたの伏せカードを破壊する！」

そう言うと共にメリオルが捨てた魔法カードの魔力が魔導王へと集中し、魔導王の放った魔力の光線がソーマの伏せカードへと向かっていく。そして伏せカードが木っ端微塵に粉碎された。

「よし！ 魔法の操り人形でダイレクトアタック！」

「手札からクリボーの効果発動！ 手札からこのカードを捨てる事によりその戦闘で発生する戦闘ダメージを0にする！」

魔法の操り人形が手に持つ槍がソーマへと向かっていくが、その槍を巨大化したクリボーが盾となつて受け止める。

「くつ、なら魔導王エンディミオンでダイレクトアタック！」

「墓地のネクロ・ガードナーを除外し、攻撃を無効にする！」

戦闘ダメージを防がれたのにメリオルはくつと唸つた直後追撃を指示、しかしその魔導波は半透明の姿で現れたネクロ・ガードナーに防がれた。

「いつの間に、D・D・Rのコストね……」

「そゆこと」

「道理でダーク・パーシアスの攻撃力がおかしいと思つた……リバーカードを一枚セットして、ターン終了よ」

メリオルは驚いたように言つた後呟くように続け、ソーマがへらへらと笑いながら言つとメリオルはため息混じりにカードを一枚伏せてターンを終える。

「僕のターン、ドロ！ さーてと、僕の墓地には闇属性モンスターが八枚ある。今この時、闇の中から終わりの時が刻まれ始める！

魔法カード発動、「終わりの始まり」！！ 僕の墓地に存在する闇属性モンスターを五体ゲームから除外する事で三枚のドロが可能となる。僕はジャイアント・オーク、ダーク・グレフアー、ダーク・リゾネーター、終末の騎士、クリボーの五体をゲームから除外し、カードを三枚ドロする！」

魔法都市エンディミオン 魔力カウンター：3 4
魔法の操り人形 魔力カウンター：1 2 攻撃力：2200 2
400

「一気に三枚もドロって……」

ソーマの真剣な表情での言葉にメリオルはまずいともいうような表情で返す。するとソーマが口を開いた。

「メリオルちゃん、八引く五の答えって分かる？」

「馬鹿にしてるの？ 三……しまった!？」

ソーマのにこにこ笑顔での言葉にメリオルは怪訝な表情で返すとその直後気づいたように声を上げる。

「そーいうこと。僕の墓地に存在するモンスターは全て闇属性のダーク・ネフティスとダーク・クリエーター、そしてダーク・パーシアスの三体。よって手札から暗黒の武装龍、「ダーク・アームド・ドラゴン」を特殊召喚!」

ソーマがニヤリと笑みを浮かべながらそう言うと共に彼の場に闇が集まり、その闇が武装龍を形作る。

「いくよ、ダーク・アームド・ドラゴンの効果発動! 墓地の闇属性モンスターを一体ゲームから除外し、相手フィールド上のカードを一枚破壊する。僕は三体の闇モンスター全てをゲームから除外し、神聖魔導王エンディミオンと魔法の操り人形、そしてその伏せカードを破壊させてもらおう!」

「リバーズカード発動「エネミーコントローラー」！ その効果で
ダーク・アームド・ドラゴンの表示形式を変更、守備表示にさせる
！」

ダーク・アームド・ドラゴンの闇のブレスがメリオルの場の魔術師
を破壊していくが破壊される寸前に発動された魔法のコントローラ
ーによりダーク・アームド・ドラゴンは守備の体形へと変化した。

「さらに、魔法都市エンディミオンは破壊されたモンスターに乗っ
ている魔力カウンターを受け継ぐ。魔法の発動と合わせて三つの魔
力カウンターが魔法都市に乗るわ！」

魔法都市エンディミオン 魔力カウンター：4 7

「ちえつ。じゃ、「ジャイアントウィルス」を攻撃表示で召喚し、
ダイレクトアタック！」

「くつ！」 LP 3500 2500

「ターン終了」

ダーク・アームド・ドラゴンの攻撃を封じたおかげでどうかこの
ターンは生き延びる事が出来た。メリオルはそう思いながらソーマ
のターンエンド宣言を聞き、カードをドローする。

「私のターン、ドロー。私は魔法カード、「魔力儉約術」を発動し、
さらに魔法カード「ソウル・サークル」を発動！ このカードの発
動にはライフ半分のコストが必要だけど魔力儉約術の効果で支払わ
ずに済む。ソウル・サークルの効果で墓地に存在する魔法使い族モ

ンスター、見習い魔術師二体と執念深き老魔術師、黒魔力の精製者をゲームから除外しカードを四枚ドロロー！」

魔法都市エンディミオン 魔力カウンター：7 9

メリオルはドロローしたカードを見るとよしと頷いて一気に二枚の魔法を発動、その効果で一気に手札は四枚に増えた。

「魔法カード「黒魔術のカーテン」！ このターンの召喚・反転召喚・特殊召喚を封じる代わりにデッキから「ブラック・マジシャン」を特殊召喚！ このカードの発動コストであるライフ半分は魔力俵術の効果で支払われないわ！」

魔法都市エンディミオン 魔力カウンター：9 10

メリオルの場に一枚のカーテンが現れ、そのカーテンが翻るとそこから一枚の石版が姿を現す。そしてその石版が砕け散ったと思っただらブラック・マジシャンが姿を現した。

「魔法カード発動「サウザウン千本ナイフ」！ その効果でジャイアントウィルスを破壊する！」

魔法都市エンディミオン 魔力カウンター：10 11

「ジャイアントウィルスを？」

「戦闘破壊で効果ダメージ受ける上リリース要員確保してたまるもんですか」

「ちえー」

メリオルの言葉にソーマがわざとらしく驚いた声を上げるとメリオルはそう返し、それにソーマはへらへらと笑いながらそう言う。その間に千本のナイフが巨大なウィルスを滅多刺しにし消滅させる。

「さらにブラック・マジシャンでダーク・アームド・ドラゴンを攻撃！ ブラック・マジックー！」

「あっちゃー」

ブラック・マジシャンの魔導波がダーク・アームド・ドラゴンを撃ち砕き、ソーマはわざとらしく額に手をやる。それを見ながらメリオルはちよっと苛々とした様子で声を出す。

「ターン終了！」

「僕のターン」

ソーマはそう言ってカードをドロウする、するとニヤリと笑みを浮かべた。そしてそのカードをデュエルディスクに叩きつける。

「今ここに終焉をもたらせ！！」
「終焉の精霊」ジ・エンド・オブ・スピリッツ！！」

その言葉と共にソーマの場に終焉の闇のオーラを纏った精霊が姿を現し、クケケケケと気味悪い笑い声を見せる。

「終焉の精霊の攻撃力はお互いの除外された闇モンスターの数×300、僕の除外闇モンスターは12体」

「私は4体、よりもよってソウル・サークルで除外したモンスター

「全部が闇属性なんて……」

終焉の精霊 攻撃力：？ 4800

ソーマの言葉と共に終焉の精霊の纏う闇のオーラが強くなる。そしてソーマはさらに別のカードを手に取った。

「フィールド魔法「ダークゾーン」発動！ 闇属性モンスターの攻撃力が500上昇し、守備力が400下降する。フィールド魔法の上書きにより魔法都市エンディミオンは破壊される、この破壊はルール破壊のため魔法都市の効果も発動しない」

「くっ……でもブラック・マジシャンも闇属性だからその効果を受けるわ！」

メリオルの場に広がっていた魔法都市が闇に侵食され、闇の場が出来る上がる。そして双方の場の闇のモンスター達はその効力を受けて攻撃力を上昇させた。

終焉の精霊	攻撃力：4800	5300
ブラック・マジシャン	攻撃力：2500	3000

「いくよ、終焉の精霊でブラック・マジシャンを攻撃！ エンド・オブ・ザ・ダークネス！」

「くあああああっ！！」 LP2500 200

終焉の精霊の身体から噴出された闇が一瞬でブラック・マジシャンを呑み込み、メリオルに強大なダメージを与える。それを受けたメリオルは痛みにより一瞬視界がぶれ、足元もぐらつく。あと少しで

もダメージを受けたらライフポイントの残り問わずそのまま崩れ落ちそうな状態だ。

「終焉の時は刻まれ始めた。さあ、どこまで耐えられるかな？ 僕のターンは終わりだ」

ソーマは飄々とした雰囲気はどこへやら静かにそう言った後ターンエンドを宣言する。

簡易状況説明

メリオル：LP200 手札二枚

フィールド：モンスターなし 魔力儉約術発動中、伏せカードなし

ソーマ：LP3100 手札零枚

フィールド：終焉の精霊攻撃表示 ダークゾーン発動中、伏せカードなし

「私の、ターン……ドロー！……私はモンスターをセットし、ターン終了！」

「僕のターン、ドロー。ちっ」

メリオルはモンスターをセットするとすぐにターンを終え、それを聞いたソーマはカードをドローするがそのドローカードを見ると舌打ちを叩く。

「魔法カード、「魂の解放」を発動。君の墓地から熟練の黒魔術師、

魔法の操り人形、神聖魔導王エンディミオン、そしてブラック・マジシャン二体の計五枚のカードを除外する。その全てが闇属性、よってさらに終焉の精霊の攻撃力は1500上昇するよ」

終焉の精霊 攻撃力5300 6800

異次元へと消えた魔法使い達の宿す闇の力を終焉の精霊が喰らい、力をつけていく。

「終焉の精霊でセットモンスターに攻撃！ 闇に吞まれる！ エンド・オブ・ザ・ダークネス！！」

ソーマの指示を受けた終焉の精霊は膨大な闇の力でメリオルの場のモンスターを破壊する。

「見習い魔術師の効果発動……その効果で、「水晶の占い師」をセツトー！」

「しぶといね、ターン終了」

メリオルの場にどうにかモンスターが残り、首の皮一枚で繋がった様子を見せる。それを見たソーマは引きつった笑顔を見せながらターンを終え、それを聞いたメリオルはカードをドローした。

「私のターン、ドロー！ 私は魔法カード、「魔法石の採掘」を発動、手札を二枚捨てて墓地の命削りの宝札を手札に加え、発動！手札が五枚になるようにドロー！」

メリオルはドローしたカードを見るとすぐに発動、先ほど使った手札増強カードを手札に加えると一気に発動し、総計零枚となってい

た手札が一気に五枚へと膨れ上がった。

「「水晶の占い師」を反転召喚し、効果発動！ デッキから二枚のカードをめくり、その内の一枚を手札に加え、もう一枚をデッキの一番下に戻す」

メリオルの効果説明が終わると水晶の占い師は二つの水晶を自らの魔力で浮かび上げらせ、それらは二枚のカードを映し出す。一枚は「クルセイダー・オブ・エンディミオン」、そしてもう一枚……メリオルはその姿を見た瞬間、そちらの水晶に手を伸ばす。そしてメリオルが手を伸ばした水晶がひび割れていき、パラインと音を立てて砕け散ると共にその水晶に映し出されていたカードがメリオルの手に握られる。

「私は「ブラック・マジシャン」を手札に加え、クルセイダー・オブ・エンディミオンをデッキボトムに送る！」

メリオルが手に取ったのは紫色の衣装に身を包み、手に持った杖の前に突き出して今にも魔法を放とうとしているかのようなポーズを取っている黒魔導の最上級魔術師、このデッキに眠る最後のブラック・マジシャンのカード。

「魔法カード「古のルール」を発動、その効果で手札のレベル5以上の通常モンスター、「ブラック・マジシャン」を特殊召喚！ さらに手札から速攻魔法「デイメンション・マジック」発動、水晶の占い師をリリースし、手札から「ブラック・マジシャン・ガール」を特殊召喚！」

ブラック・マジシャンが姿を現したと思ったらその横に立つ水晶の占い師の背後に巨大な棺が現れ、占い師は静かに棺に入る。そして

棺が一度閉まり、また開いたと思うとそこには可愛らしい女黒魔術師が入っており、彼女はピヨンと棺から飛び降りる。

「魔術師二人の連携攻撃で、終焉の闇をなぎ払え！ ブラック・バ
ーニング・マジック！！」

メリオルの言葉を聞いた黒魔術師の師弟は顔を見合わせて小さく頷きあうと終焉の精霊に向かっていき、終焉の精霊が放つ終焉の波動をかわして二人同時に魔術を叩き込む。それを受けた終焉の精霊は闇を噴出しながら消えていった。

「終焉の精霊の効果発動、このカードが破壊され墓地に送られた時除外されている全ての闇属性モンスターを墓地へと戻す」

「その効果で除外されていた二人のブラック・マジシャンも墓地に戻る。よってブラック・マジシャン・ガールの攻撃力が600上昇するわ！」

ブラック・マジシャン・ガール 攻撃力：2000 2600

終焉の精霊が噴出した闇の力が、異次元へと消えていた闇のモンスター達はそれぞれの墓地へとその姿を現していく。そして先に倒れた黒魔術師の魔力を受けた女黒魔術師の魔力も増強していった。

「あなたの墓地にネクロ・ガードナーが戻った。つまり今の状態じやぎりぎり止めは刺すことが出来ない……なんて甘いわね！ 手札から魔法カード「高等儀式術」を発動！ デッキからレベル4の通常モンスター、チェミナイ・エルフ二体を儀式の生贄に捧げ、混沌の力を受け継ぐ黒魔術師、「マジシャン・オブ・ブラックカオス」を儀式召喚！！」

「!?!」

メリオルは冷静にそう考察した後ふつと笑ってそう言い、手札の魔法を発動する。そしてその儀式の生贄に二組の魔術師姉妹がなると混沌の魔力を持つ黒魔術師　マジシャン・オブ・ブラックカオスが姿を現す。その姿を見たソーマの表情が驚愕に満ち溢れた。

「結集、黒魔術の三銃士！　あなたは場に何もなく、手札もない。あるのは墓地のネクロ・ガードナーが一体のみのはず。これで終わりよ！」

「……」

メリオルの言葉にソーマは沈黙を守りつつ肩をすくめる。そしてメリオルは一度目を閉じてふうつと息を吐くと気合を入れてかつ目を見開いた。

「マジシャン・オブ・ブラックカオスでダイレクトアタック！　滅びの呪文　デス・アルテマ!!!」

「墓地のネクロ・ガードナーを除外し、その攻撃を無効にする！」

混沌の力を得た黒魔術師の滅びの呪文を半透明の姿となって現れた戦士の魂が受け止める。しかし滅びの呪文を受けるので精一杯というようにその魂は消えていき、ソーマは魔術師師弟の魔術詠唱をなすすべなく見つめていた。

「ブラック・マジシャン、ブラック・マジシャン・ガールのダイレクトアタック!!!　黒魔術奥義、ダブル・ブラック・マジック二・重・黒・魔・導!!!!」

「ぐっ、あああああぁっ!!!」LP31000

二人の黒魔術師が力を合わせて放った魔導波がソーマに直撃、ソーマの悲鳴が響き渡ると共にこのデュエルは終焉を迎えた。

「勝った……」

メリオルは息を荒くしながらそう呟き、目の前に倒れ伏しているソーマを見る。

「ふ、ふふふふ……」

「!?!」

するとソーマは满身創痕の状態ながら立ち上がり、それを見たメリオルは一瞬驚いた表情を取りながらすぐに戦闘の準備をする。しかしソーマは己の武器である拳銃を取り落としており、そもそもダメージが効いているのか身体中がぐくと震えている。襲われる心配は特にしなくても問題なさそうだし今のソーマなら肉弾戦でも勝てる自信は彼女にはある、メリオルはうつむいてふらふらとふらつきながらゆっくりゆっくり自分に向けて歩いてくるソーマを構えを取りながらじっと見据えている。そしてソーマがある一步に踏み込んだ瞬間二人を刺々しい鉄檻が囲んだ。

「!?!」

「ふ、ふふふ……悪夢の鉄檻だよ」

そえにメリオルが驚いて回りを見回していると一緒に鉄檻に入った
ソーマは笑いながら顔を上げる、そして彼が手に持った物を見たメ
リオルは目を見開いた。

「爆弾!？」

「この先に、通すわけにはいかないね……グッバイ」

メリオルの声と共にソーマは静かにそう言うと爆弾を地面に叩きつ
ける。それと同時にメリオルの目の前を一瞬の閃光が包み、火薬の
臭いとその場に充満した。

「!？」

「キュツ!？」

ソーマの相手をメリオルに任せて先に進んでいたレオは突然足を止
めて振り返り、その頭の上を定位置にしている黒竜の雛は振り落と
されないようにしがみつく。しかしレオは振り向いて少し考えるよ
うに足を止めた後前を向きなおした。

「キュー？」

「……俺はメリオルを信頼して後を任せた。なら、最後まで信頼す
るべきだ……行くぞ」

雛の鳴き声にレオは静かにそう言うとまた走り出す。そして最後の
長い一本道の先には一つ巨大な扉があり、そこには二人の門番らし
きデュエルロボが立っていた。

「……敵、発見」
「デュエル……」

二体のデュエルロボは静かにそう言っただけで左腕そのものがなっているという状態のデュエルディスクを構える。それを見たレオはスピードを緩める事無くデュエルディスクを起動した。

「邪魔だ！ 出でよ、輝ける光の龍と深淵の闇の龍！
レッドアイズ・ダークネスドラゴン
！！ 真紅眼の闇竜！！」

ブルーアイズ・シャイニングドラゴン
青眼の光龍

「ぐおおおおおつ！！！！」

レオが呼び出した輝ける光と深淵の闇の龍が二体のデュエルロボを破壊、レオはスピードを緩めないままその勢いで扉を蹴り開けた。そこには一人の男性が立っており、レオが入ってきたのに気づくと振り返る。彼は外見から年齢を予測するともう中年近いが体つきは筋肉質で、真っ黒い髪をオールバックにしている。

「ほう、来たか。まあソーマを倒せるほどならばあの二体の門番なぞ雑魚同然だろうがな」

「あいにくあいつは相棒に任せた。俺の役目は仲間の皆に代わってお前を叩き潰す事だ」

「ふっ……」

男性の言葉にレオはそう言っただけで刀を抜き、相手に突きつける。それを見た男性はふつと含み笑いを見せると一瞬でレオの眼前へと肉薄拳を繰り出す。レオはそれをかわすと逆に刀で斬りつける。しかし男性もまた右腕のナックルでそれを受け止めた。

「やるな。名は？」

「レオ。武術で勝負しても良いがデュエルディスクをつけていては本気が出せない。それに、ここでの決着方法はやっぱこいつだろ？」

男性の言葉にレオは自らの名を名乗り、デュエルディスクを突きつけながら不敵な笑みを浮かべると男性もくっくつと笑う。

「確かにな……我が名はガオウ。復活せし邪神の主の名、刻みながら死ぬが良い」

「龍王に倒せぬ敵はない」

レオと男性　ガオウはそう言いあうと距離を取り、互いにデュエルディスクを構えた。

「邪神最初の贄となれる事を光栄に思え！」

「復活してそうそう悪いが、邪神にはもう一回眠ってもらおう！」

「デュエル！！！！」

そして二人の声が響き渡った。

第二部第二十三話 決戦、魔術師VS暗黒（後書き）

大体三ヶ月ぐらいぶりです、新しく短大に進学して色々と時間がなくなったり書くモチベーションが上がらなかつたりと色々あって更新が遅れました……と言っても、これ読んでくださってる方いるのかなぁフッフッフ……。

ま、もうすぐ終わりだし読者がいないとしてもここで途中打ち切りは気分悪いからちゃんと終わらせるとするか。それでは！

最終話 最終決戦、龍VS邪神

敵本拠地 暗黒城、その最深部、ここへとやってきたレオは邪神の復活を果たした敵の黒幕 ガオウと対峙してデュエルディスクを構えていた。

「デュエル!!!」

そして二人の声が響き渡り、直後ガオウがデッキに指をかける。

「我が先攻をもらおう。ドロー！」

ガオウはそう言ってカードをドローし、手札を眺め回すとその内の一枚を手取る。

「モンスターをセットし、カードを二枚セット。ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー」

ガオウは案外地味な手でターンを終了し、それを見たレオはふむと呟きながらカードをドローする。

「俺は「レッドアイズ・ワイパーン真紅眼の飛竜」を召喚し、飛竜を除外する事で「レッドアイズ・レッドアイズダークネスメタルドラゴン」を特殊召喚！ レッドアイズ・レッドアイズダークネスメタルの効果発動、手札から「マテリアルドラゴン」を特殊召喚！」

レオの場にいきなり二体の上級ドラゴンが姿を現す。そしてレオはガオウの場を指差した。

「一気に決めさせてもらう！ マテリアルドラゴンでモンスターを攻撃、マテリアル・バースト！！」

「むっ……」

マテリアルドラゴンの吐いたプレスがガオウの場の守備モンスターを破壊する。それにガオウはむっと呟いた後声を出した。

「ダンディライオンの効果発動！ このカードが墓地に送られた時私の場に綿毛トークン二体を特殊召喚！」

「なら一体だけでも！ レッドアイズ・ダークネスメタルで綿毛トークン二体を攻撃！」

「リバーズカード発動「和睦の使者」！ 戦闘ダメージを0にし、私の場のモンスターは戦闘では破壊されない！」

ガオウの場に二体の可愛らしい綿毛が現れ、レオはその一体だけでも破壊しようと追撃を指示するものの、紅き目の機械竜が吐いた炎のプレスは修道服姿の女性達の張った結界に防がれてしまう。それを見たレオはくそつと表情を歪めた。

「チツ、俺はリバーズカードを二枚セットし、ターンエン」

「この瞬間もう一枚の伏せカード発動「心鎮壺」！ 貴様の伏せた二枚のカードを封じさせてもらう！！」

「なっ……」

レオはリバーズカードを二枚伏せてターンを終えようとしたがその

瞬間ガオウがもう一枚の伏せカードを発動、その壺の力によってレオの二枚の伏せカードが封じられてしまった。

「私のターン、ドロー！」

レオが啞然としている間にガオウは自分のターンに入る。そしてカードをドローした後それを手札に入れて別の手札を一枚取った。

「魔法カード「デビルズ・サンクチュアリ」を発動！ 私の場にメタルデビルトークンを一体特殊召喚し、綿毛トークン二体とメタルデビルトークンをリリース！」

ガオウの場に不思議な悪魔が姿を現し、直後その悪魔と二つの綿毛が闇に飲まれていく。そしてガオウは黒い闇のオーラが纏っているカードをデュエルディスクに叩きつけた。

「消去せよ！ 「邪神イレイザー」！！」

「邪神……」

その言葉と共にガオウの場に巨大な邪神竜が姿を現し、その姿を見たレオの表情に緊張が走る。

「イレイザーの攻撃力、守備力は相手の場のカードの数×1000、貴様の場に存在するカードは四枚、よって攻撃力は4000！」

邪神イレイザー 攻撃力：？ 4000

ガオウはクククと笑いながらそう宣言し、その言葉と共にイレイザーの覇気が上がっていく。それを見たレオも思わず身構えてしまっ

た。

「消去せよ、邪神イレイザー！ レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンに攻撃！ ダイジエステイブ・ブレエース！！！」

「ぐあああああつ！！！」 LP4000 2800

ガオウの攻撃指示を聞いたイレイザーは口から相手を消去する闇のブレスを撃ち出し、ダークネスメタルを消去しレオにもダメージを与える。そのブレスを受けたレオも思わず悲鳴を上げてしまった。

邪神イレイザー 攻撃力：4000 3000

「リバーズカードを一枚セットし、ターンエンドだ」

「お、俺のターン、ドロー！」

ガオウはリバーズカードを一枚伏せるとターンを終え、それを聞いたレオはカードをドローする。それを見るとよしと頷いた。

「魔法カード「大嵐」を発動！ フィールド上全ての魔法・罠を破壊する。これでイレイザーの攻撃力は大幅にダウンするぜ！」

「リバーズカード発動、カウンタートラップ「マジック・ジャマー」！ 手札を一枚捨てて魔法の発動と効果を無効にし、破壊する！」

「ぐうっ！？」

レオが魔法を発動すると共に大きな竜巻が魔法・罠を破壊しようとするが、ガオウが発動したカードから出てきた不思議な光がその竜

巻を治めていく。それを見たレオは表情を歪めた。しかしすぐに気を取り直すともう一枚の手札を取る。

「速攻魔法「突進」発動！ 俺のフィールド上のモンスター、マテリアルドラゴンの攻撃力を700アップする。そしてバトル、マテリアルドラゴンで邪神イレイザーを攻撃！ マテリアルバーストオ
！！」

マテリアルドラゴン 攻撃力：2400 3100

レオの指示を聞いたマテリアルドラゴンの放ったブレスがイレイザーを貫き、その身体に風穴を開く。するとイレイザーに開いた風穴からどす黒い血のような液体がフィールドに広がった。

「イレイザーの効果発動、このカードが破壊された時フィールド上全てのカードを破壊する。イレイザーはただでは死なん、その場にいたもの全てが共に消去される！」LP4000 3900

「マテリアルドラゴンは手札一枚を身代わりに破壊を無効にする……が、手札がない……」

ガオウの言葉にレオはそう呟くが今彼には手札がなく、マテリアルドラゴンは自分の身体にまわりついてくる血を必死に振り払ってもがくがやがて血に呑み込まれて沈んでいき、心鎮壺に封じ込まれた二枚の伏せカードもその壺と共に血の池へと沈んでいく。フィールドがから空きになってしまった。

「ターンエンド……」

手札がなければ何も出来ない。レオは苦虫を噛み潰したような表情

でそう眩き、それを聞いたガオウはにやりと笑う。まあ彼も手札は零枚なんだが。

簡易状況説明

レオ LP：2800 手札零枚

フィールド：モンスターなし 魔法・罠なし

ガオウ LP：3900 手札零枚

フィールド：モンスターなし 魔法・罠なし

「私のターン、ドロ―……私は「ダブルコストン」を召喚し、ダブルコストンでダイレクトアタック!!」

「ぐおおおおっ!!」 LP2800 1100

「ターンエンドだ」

「ちいいっ！ 俺のターン、ドロ―!!」

ガオウは引いたカードをそのまま召喚し、がら空きのレオの場にダイレクトアタックを仕掛ける。その一撃にレオが声を上げるとガオウはターンエンドを宣言、それを聞いたレオがカードをドロ―する。そしてそのドロ―カードを見るとよしと頷いた。

「仕切りなおしだ！ 魔法発動「神より賜りし宝札」！ 自分の手札がこれ一枚、もしくは零枚の時のみ発動可能、互いのプレイヤーは手札が六枚になるようにドロ―する。なおこのカードの発動には1000ポイントのライフコストが必要だが、俺のフィールドに他

のカードが存在しない時そのライフコストは支払わなくてもよい！
カードドロー！！」

「ふむ、ドロー！」

レオ 手札：零枚 六枚

ガオウ 手札：零枚 六枚

レオの発動したカードの効果により、一気に互いの手札が六枚に増強される。ガオウの方にはモンスターが一体存在しているとはいえ実質デュエル仕切り直しの状態だ。

「「バイス・ドラゴン」を守備表示で特殊召喚！ このカードは相手フィールド上にモンスターが存在し、俺の場にモンスターが存在しない時手札から特殊召喚できる！……まあ、その召喚時に攻撃力と守備力は半減するが」

バイス・ドラゴン 守備力：2400 1200

「さらに「デルタフライ」を召喚し、レベル5のバイス・ドラゴンにレベル3のデルタフライをチューニング！ 紅蓮の竜よ、闇と共に顕現し全てを破壊する力となれ！ シンクロ召喚！！ 来い、「レッド・デーモンズ・ドラゴン」！！！」

二体の竜が闇に包まれ、その闇の中から炎が噴出し紅蓮の魔竜が姿を現し一つ咆哮を起こす。

「レッド・デーモンズ・ドラゴンでダブルコストンを攻撃！ アブソリュート・パワー・フォース！！」

「ぐあああああつ！！」LP3900 2600

「んで、リバーズカードを二枚セットしてターン終了だ。とつと、一応レッド・デーモンの効果が発動、このターン攻撃宣言しなかった俺のモンスターを破壊する効果だがどうせ他にモンスターもいないし、対処がなけりやそつちのターンでいいぜ」

「私のターン、ドロー！」

レッド・デーモンズ・ドラゴンの一撃が二体一組のモンスターを撃破、レオは律儀な効果説明の後苦笑ながらにそう呟き、その言葉を聞いたガオウはカードをドローする、そして一つにやりと微笑んだ。

「私は「ジェスター・コンフィ」を特殊召喚し、魔法カード「死者蘇生」を発動！ 先ほど破壊された「ダブルコストーン」を特殊召喚！」

「やべ……」

ガオウの場に一体のモンスターと闇属性モンスター専用ダブルコストモンスターが出揃い、さらにガオウはまだ通常召喚権を行使していない。その意味が分からないレオではなかった。

「ジェスターコンフィとダブルコストモンスターダブルコストーンをリリースし、フィールドを恐怖で支配せよ！」「邪神ドレッド・ルト」！……」

「二体目っ……」

ガオウの場に現れたのは恐怖の根源の名を持つ邪神 ドレッド・

ルルト、その覇気を感じ取ったレオは身震いをし、彼の場のレッド・デーモンズ・ドラゴンも気のせいか萎縮しているような動きを見せる。

レッド・デーモンズ・ドラゴン 攻撃力：3000 1500

「ドレッド・ルルトが存在している限りドレッド・ルルト以外のモンスターの攻撃力は半減する！ ゆけ、邪神ドレッド・ルルト！
ファイアーズノックダウン！！」

「トラップ発動、「ガード・ブロック」！！ その戦闘による俺への戦闘ダメージを0にし、カードを一枚ドローする！」

恐怖の根源の一撃が恐怖に支配されたレッド・デーモンズ・ドラゴンを打ち砕き、その衝撃がレオをも襲おうとするが、レオが発動したカードの効果により現れた障壁がそれを防ぎ、さらにレオはカードをドローする。

「危ねえ……」

「チツ、カードを二枚伏せてターン終了だ」

レオはふうと息を吐き、ガオウは舌打ちを叩くとターンを終了する。

「俺のターン、ドロー」

レオはドローしたカードを見て少し考え始め、うんと頷いた。

「永続魔法「未来融合 フューチャー・フュージョン」を発動！
エクストラデッキから「F・G・D」を選択し、その融合素材とし

て五体のドラゴンを墓地に送る！ さらに魔法発動「龍の鏡」！

下ドラ「アイス・ミラー」

さつき墓地に送った「青眼の白龍」三体を除外融合！ 現れる、史上最強たる究極の白龍！ 「青眼の究極竜」！！！」

フルーアイズ・アルティメットドラゴン

青眼の究極竜 攻撃力：4500 2250

レオの場に白き龍の融合した究極竜が姿を現す。しかし究極竜といえど恐怖の邪神には勝てないのかその攻撃力を半減させていた。

「まだまだ！ 青き目の究極竜よ、最終進化！ 究極竜をリリース
フルーアイズ・シャインングドラゴン
し「青眼の光龍」を特殊召喚！！ 光龍は墓地のドラゴン一体につきその攻撃力を300アップする。俺の墓地にドラゴンは合計八体よってその攻撃力は5400！！」

「だが、いかに攻撃力を高めようが邪神の恐怖の前には無力！！」

青眼の光龍 攻撃力：3000 5400 2700

「魔法発動「壺の中の魔術書」！ 互いのプレイヤーはデッキからカードを三枚ドロォー！」

「ドロォー」

「っし、魔法発動「死者蘇生」！ 俺は墓地から「マテリアルドラゴン」を特殊召喚し、マグナ・ドラゴ「炎龍」を召喚！ レベル6、光属性のマテリアルドラゴンにレベル2の炎龍をチューニング！ シンクロ召喚！！ 輝け、「ライトエンド・ドラゴン」！！」

「むっつっ？」

レオの場に光り輝く竜が姿を現し、それを見たガオウが目を細める。そしてレオはにやりと笑った。

青眼の光龍 攻撃力：2700 2850

ライトエンド・ドラゴン 攻撃力：2600 1300

「そういうこと、ちと力づくだがな。ライトエンドでドレッド・ルートを攻撃、この瞬間ライトエンドの効果発動、自身の攻撃力を500下げる事で戦闘を行う相手モンスターの攻撃力を1500ダウンさせる！」

ライトエンド・ドラゴン 攻撃力：1300 1050

邪神ドレッド・ルート 攻撃力：4000 2500

「計算も出来んのか！？ この自爆特攻で貴様の負けだ！」

「リバーズカード、オープン「レインボー・ライフ」！ 手札を一枚捨ててこのターン受けるダメージを全て回復に変換する！ よって自爆特攻による超過ダメージ1450は回復に変換させてもらおうぜ！」 LP1100 2550

ライトエンドの光がドレッド・ルートを蝕むがガオウは驚いたように叫び、それに対しレオはくっくつと笑いながら返してリバーズカードを発動。その力によってレオのライフが回復した。

「ひゅう、危ねえ。どんな相手か分からないからフルバーンやワンキル対策にレインボー・ライフを組み込んで助かったぜ。さあ、光の龍よ！ 恐怖の邪神を撃ち砕け、シャイニング・バースト！」

青眼の光龍 攻撃力2850 3000

「ぐ、ぬう！ リバースカードオープン」「ヘイト・バスター」！！
悪魔族モンスター、邪神ドレッド・ルートが攻撃対象に選択された時、相手攻撃モンスター青眼の光龍と攻撃対象モンスタードレッド・ルートを破壊し、攻撃モンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える！」

「この場合、俺が受けるダメージは光龍本来の攻撃力3000、だがレインボー・ライフによってそのダメージも回復に変換だ。ありがとさん」LP2550 5550

「ちっ！」

レオの攻撃指示を受けた光龍は光の波動を撃ち放つが邪神はそれを受けると最後の力を振り絞って己の身体が消滅すると同時に跳ね返し、光龍を破壊するとその波動がレオに降り注ぐ。しかし虹のもたらず力がそれを回復の力へと変換、レオがほっとしたように言うのがオウは舌打ちを叩いた。

「ターン終了。そっちのターンだ」

レオはそう言ってターンをあげ渡す。しかしまたあっさり彼の手札は零枚になってしまっていた。ガオウの手札は合計五枚になっているというのに……。

「私のターン、ドロー！……ちっ、「死者転生」を発動！ 手札を一枚捨てて墓地に存在する「ダンディライオン」を手札に加える。モンスターをセットし、速攻魔法「サイクロン」を発動し、未来融合のカードを破壊！ カードを二枚セット。ターンエンドだ」

「危ね……俺のターン、ドロー！」

少し引きが悪かったのがガオウは舌打ちをするとモンスターのセットとカードのセット、さらに未来融合の破壊によるF・G・Dの召喚阻止でターンを終える。それを見たレオはほっと息をついてカードをドローした。

「……モンスターをセット、ターンエンドだ」

「私のターン、ドロー」

レオも引いたモンスターカードをそのまま伏せるとターンを終え、ガオウもカードをドローする。

「プレゼントだ！ 「メタモルポット」を反転召喚し、効果発動！ 互いのプレイヤーは手札を全て捨て新たに五枚のカードをドローする！ さらにこの瞬間墓地に送ったダンディライオンの効果により綿毛トークン二体を特殊召喚！」

「あんがとさん！ だがこれで三体のリリース要員が揃った……が、確か綿毛トークンは特殊召喚ターンはアドバンス召喚のリリースには出来ないはずだぜ！」

「大した知識だ。ターンエンド！」

ガオウは余裕を見せたように笑ってモンスターを反転召喚、その効果により互いの手札が五枚に増強され、レオは少し笑ってそう言った後確認のように言い、それにガオウはくっくつと笑ってそう言った後ターンを終えた。それを聞いたレオもにやりと笑う。

「俺のターン、ドロー！俺のデッキの命は瞬発力、手札さえ揃えば一気に攻め込めるのが持ち味だ！結果がいいか悪いかは後で考える！」

その悪い結果がさつきから何回か起きている場から空き+手札零状態なのだが。

「マスクド・ドラゴン「仮面竜」を反転召喚し、「ロード・オブ・ドラゴン ドラゴンの支配者」を召喚、魔法カード「龍の鏡」を発動！フィールドのロード・オブ・ドラゴンと墓地の神竜ラグナロクを除外融合！現れる、「竜魔神 キング・ドラゴン」！！キング・ドラゴンの効果発動、一ターンに一度手札からドラゴンを特殊召喚できる。俺は「デルタフライ」を特殊召喚し、デルタフライの効果発動！仮面竜のレベルを一つ上げる。レベル4となったドラゴン族、仮面竜にレベル3のデルタフライをチューニング！シンクロ召喚！羽ばたけ、「エクスプロード・ウィング・ドラゴン」！！」

二体の上級ドラゴンの速攻召喚、レオの得意プレイングに持ち込んだ。

「行くぜ、キングドラゴンでメタモルポットを攻撃！」

「させん！トラップ発動「和睦の使者」！このターン我の場のモンスターは戦闘では破壊されず、戦闘ダメージは0となる！」

「またかよっ！ターンエンドだ」

簡易状況説明

レオ LP:5550 手札三枚

フィールド：竜魔神キングドラグーン、エクスプロード・ウイング・ドラゴン両方攻撃表示 魔法・罨なし

ガオウ LP：2600 手札五枚

フィールド：メタモルポット攻撃表示、綿毛トークン二体守備表示 伏せカード一枚

「我がターン、ドロ……クククツ、三邪神の内二体までを破壊したのは見事、しかもその両方を攻撃力を上回らせての勝利は素晴らしい。だが、もうそうはいかん！ メタモルポットと綿毛トークン二体をリリースする！」

ガオウの言葉と共に彼の場の三体のモンスターが闇に包まれ、呑みこまれていく。そしてガオウが掲げたカードが黒い闇のオーラを放ち始めた。

「来るか！？ 三邪神最後の一体が！」

「さあ、今ここに降臨し全てを上回る力となれ！ 「邪神アバター」をアドバンス召喚！！！」

レオが声を上げるとガオウもその声を上げ、何かを待つように両手を広げる。そして暗黒城の天井からゆっくりと、もはや闇としか言いようがないほどのオーラを放つ漆黒の球体が降りてくる。そしてその球体は下降の動きを止めたかと思うとゆっくりとその姿を変化させていった。その姿はレオの場に存在するエクスプロード・ウインド・ドラゴンが真っ黒になったとしか言いようのない姿だ。

「邪神アバターの攻撃力はフィールド上に存在する邪神アバター以

外のモンスターの攻撃力が一番高いモンスターの攻撃力+100となる。ゆえに邪神の現在の攻撃力は2500！さらに、アバターの召喚に成功した時、相手は相手ターンで数えて二ターンの間魔法・罠を発動できない！」

邪神アバター（エクスプロード・ウィング・ドラゴンベース） 攻撃力？ 2500

「邪神アバターでエクスプロード・ウィング・ドラゴンを攻撃！
ダーク・キング・ストーム！！」

「ぐうっ！！」LP5550 5450

アバターの黒い竜巻がエクスプロード・ウィング・ドラゴンを破壊し、レオのライフを僅かに削る。そしてアバターの身体が今度はキング・ドラゴンの姿に変化していった。

「リバーズカードを二枚セットし、ターンエンドだ。くっつ、アバターは全てを超越する神、それに敵うものなど存在しえん！」

「やべえな……俺のターン、ドロー」

ガオウが高笑いをしながらそう言うのとレオもそう呟いてカードをドローする。そもそもレオのデッキは高レベルドラゴンによる戦闘破壊に特化しており、それを問答無用で超えていくアバターの存在ははっきり言ってやばい以外の何者でもなかった。

「とにかく今は耐えるだけだ。キングドラゴンの効果発動！手札からドラゴン族モンスターを一体特殊召喚」

「させん！カウンタートラップ発動「天罰」！！手札を一

枚捨てる事によりモンスターの効果の発動を無効にし、破壊する！
「なっ!?!」

レオの宣言の直後ガオウは伏せていたカードの内一枚を発動し、そのカードから発された雷がキングドラグーンを破壊する。

「魔法・罫を封じられた時、アバターを破壊する事が可能となりうるのはモンスター効果のみ。それさえ封じればアバターの存在を揺るがすものは存在しない！」

「くそっ、モンスターをセットしてターンエンド！」

「私のターン、ドロー！ 我は「ザ・カリキュレーター」を攻撃表示で召喚！ カリキュレーターの攻撃力は自分フィールド上のモンスターの合計×300となる。アバターのレベルは10、カリキュレーターのレベルは2、よってカリキュレーターの攻撃力は12×300で3600となりアバターの攻撃力はそれをも超越する3700となる！ さらにアバターに装備魔法「メテオ・ストライク」を装備！ 装備モンスターが守備モンスターを攻撃した時、その攻撃力が守備力を超えていればその数値だけ相手プレイヤーに戦闘ダメージを与える！」

レオはモンスターをセットするとターンを終え、ガオウはカードを引き抜くと手札からモンスターを召喚、そのモンスター カリキュレーターは味方フィールド上のモンスターレベルを計算すると攻撃力を上昇、カリキュレーターの召喚によってアバターもフィールド最強の攻撃力を持つそのモンスターに姿を変えている。さらにアバターに全てを貫通する隕石の力が付加された。

ザ・カリキュレーター 攻撃力：？ 3600

邪神アバター（ザ・カリキュレーターベース） 攻撃力：？ 37
00

「ゆけ！ アバターで守備モンスターを攻撃！」

「があああああつ！ せ、戦闘破壊されたマスクド・ドラゴン仮面竜の効果発動！ デ
ツキから仮面竜を守備表示で特殊召喚！」 LP 5450 2850

「しづとい！ カリキュレーターで仮面竜を攻撃！！」

「ちっ、仮面竜の効果発動！」

アバターの放った闇の波動がレオの場の竜のみならずレオの身体をも飲み込んでその身体を蝕み、レオは悲鳴を上げながらもモンスター効果によって破壊された竜と同じ竜を呼び出す。それを見たガオウはちつと舌打ちを叩いた後追撃を指示し、その一撃に仮面竜が破壊されるとレオはそう宣言し、デッキをデュエルディスクから外して中を確認する。

（仮面竜の効果によって呼び出せるのは攻撃力1500以下のドラゴン……あまり使わないからボマー・ドラゴン外したのはミスったな……だがレインボー・ライフがなかったら負けてたし、まあなんとかなるか……）

レオはデッキを確認しながらそう心中で呟く、その中にはデッキ改造の中に対する若干の後悔も混じっていた。そしてレオは一体のドラゴンカードを手にとるとデッキをシャッフルし、デュエルディスクに差し込んでから選んだカードを場に呼び出した。

「俺は「黒竜の雛」を守備表示で特殊召喚！ 頼むぜ、チビスケ！」

「キューツ！」

レオの場に呼び出されたカードは黒竜の雛、それを呼び出したレオの言葉に彼の頭の上に乗っかっている黒竜の雛はそう声を上げていた。まあ今のデュエルではこの子が戦闘参加する事はないのだが。

「ふん、ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！」

ガオウの言葉を聞くとレオはカードをドローし、手札を吟味する。アバターの効果によってこのターンの終了時まで魔法・罫は封じられている。

「リバーズカードを二枚セット、ターンエンドだ！」

「我のターン、ドロー。ふん、アバターの効果による魔法・罫封じが消え多少なりとも抵抗しようというわけか。だが無駄だ！ 魔法発動「大嵐」！ まとめて吹き飛ばがいい！」

レオは二枚のリバーズカードを伏せるとターンを終え、それを見たガオウはカードをドローするとくつくつと笑って魔法を発動、それによって現れた大嵐が全ての魔法・罫を破壊しようとして押し寄せる。

「悪いが諦めが悪い性分だね！ リバーズカードオープン！ 窮鼠猫を噛む、悪あがきだ！ 「威嚇する咆哮」！！」

「させん！ リバーズカウンター発動「魔宮の賄賂」！ 貴様に一枚のドローを許す代わりに魔法・罫の発動と効果を無効にし破壊す

る！」

「それは読んでるっつの！ カウンタートラップオープン」盗賊の七つ道具」！ 俺のライフ10000をコストに罠の発動と効果を無効にし破壊！ よって魔宮の賄賂の発動を無効にし、威嚇する咆哮の効果が発動！ このターンのあんたの攻撃宣言を封じるぜ！」

P 2 8 5 0 1 8 5 0

「そしてチエーン1の大嵐が全ての魔法・罠を破壊する。ぬかったわ……」

チエーン対決は実質的にレオの勝利、黒竜の雛が正に竜というような雄々しい咆哮を起こし、相手の攻撃宣言を封じさせる。

「むう……ならば装備魔法「レアゴールド・アーマー」をアバターに装備！ 相手は装備モンスター以外のモンスター以外に攻撃できん！ そしてターン終了。ここまで耐え抜いたのは見事、しかし貴様の場にいるのはそんな雑魚竜一匹、それで何が出来る！？」

「キューツ！！！」

「俺の相棒を馬鹿にすんな！ 俺のターン、ドロー！！！」

ガオウの言葉に雛が心外だというように鳴き声を上げるとレオもそう言っただカードをドローする。するとにやりと笑った。

「魔法発動「魔法石の採掘」！ 俺の手札二枚を捨て、墓地に存在する魔法カードを一枚手札に加える。俺は今ある手札二枚両方を捨てて墓地から魔法カード「神より賜りし宝札」を手札に加える。そして「神より賜りし宝札」を発動！ 今回こそこのカードの発動に必要なライフコスト10000ポイントを支払い、互いのプレイヤー

は手札が六枚になるようにドローする！！　いくぜ……ドロォー！！
！！」LP1850　850

レオ　手札：零枚　六枚
ガオウ　手札：零枚　六枚

一気に互いの手札が零枚から六枚へと増強される。そして六枚の手札を見たレオはにやりと笑みを浮かべた。

「さあ、いくぜ！　黒竜の雛の効果発動！　黒竜の雛を墓地に送り、
レッドアイズ・ブラックドラゴン
「真紅眼の黒竜」を手札から特殊召喚！！　頼むぜ、マイフェイバリット！　そして！」

レオの言葉と共に雛は急成長を遂げ、真紅の眼を持つ黒き竜へと変化する。すると黒竜の姿が闇に包まれた。

「こいつが、俺の切り札だ！　真紅眼の黒竜をリリースし、深遠の闇よりその姿を現せ！！　闇を操れ、「真紅眼の闇竜」レッドアイズ・ダークネスドラゴン！！！！」

レオの場に存在していた黒き竜は闇の力を得て闇の竜へと変化する。

「闇竜は墓地に存在するドラゴン族モンスターの数×300、攻撃力を上昇させる。俺の墓地に存在するドラゴンは十九体！　よつてその攻撃力は5700上昇し、8100となる！　ああ、ちなみに魔法石の採掘でドラゴンを一体墓地に送ってるから、あしからず」

闇竜は墓地に眠る同族の魂の力を得てその攻撃力を爆発的に上昇させる。しかしその直後ガオウの場のアバターもその姿を闇竜がさらにどす黒くなったような存在へと変えていった。

真紅眼の闇竜 攻撃力：2400 8100

邪神アバター（真紅眼の闇竜ベース） 攻撃力：3700 8200

「無駄だ！ いかにも攻撃力を高めようと我が邪神はその上に行く！
貴様の切り札も邪神の闇に吞まれるのみだ！」

「まだまだ、魔法発動「思い出のブランコ」！ 墓地から通常モンスター真紅眼の黒竜を特殊召喚！ このカードの効果で特殊召喚されたモンスターはこのターンのエンドフェイズに破壊される。戻って来い、マイフェイバリットドラゴン！！」

真紅眼の闇竜 攻撃力：8100 7800

邪神アバター（真紅眼の闇竜ベース） 攻撃力：8200 7900

「それがどうした！？ その攻撃力では我がアバターはおろかカリキュレーターにも敵わんわ！」

「パワーだけで何とかなるほどのこのゲームは甘くないんだよ！ 俺は「伝説の白石」ホワイト・オブ・レジェンドを召喚し、レベル7、闇属性の真紅眼の黒竜にレベル1の伝説の白石をチューニング！ 黒き竜の魂を受け継ぎ、闇を纏いて現れる！ シンクロ召喚！！ 穢せ、「ダークエンド・ドラゴン」！！！」

真紅眼の闇竜 攻撃力：7800 8400

邪神アバター（真紅眼の闇竜ベース） 攻撃力：7900 8500

黒き竜と伝説の白き竜の力を宿した石が闇に包まれ、その中から闇の竜が姿を現す。

「しまった！？」

「今のあんたに天罰とかの伏せカードはない！ ダークエンド・ドラゴンの効果発動！ 攻撃力・守備力を500ポイントダウンさせることで相手モンスター一体を墓地に送る！ アバターよ、闇に埋もれて眠るがいい！ ダーク・イヴァポレイション！！」

ダークエンド・ドラゴン 攻撃力：2600 2100
ザ・カリキュレーター 攻撃力：3600 600

ガオウが驚愕の声を上げるとレオは力強くそう宣言、直後ダークエンド・ドラゴンの放った闇がアバターを呑み込み消滅させた。

「馬鹿な！？ 三邪神が全滅だと！？」

「言っただろ！ 龍王に倒せぬ敵はいないとな！ ダークエンド・ドラゴンでザ・カリキュレーターを攻撃！ ダーク・フォッグ！！」

「ぐおおおおおっ！！」 LP2600 1100

ガオウの信じられんとばかりの言葉にレオは力強くそう返し、ダークエンド・ドラゴンの放った闇の霧がカリキュレーターを呑み込みその霧がガオウの身体までも蝕む。そしてその闇が消え目の前が見えるようになったガオウが見たのは、から空きの自分目掛けて炎をぶつけようと口を開けている闇竜の姿だった。

「これで終わりだ！ 真紅眼の闇竜でダイレクトアタック！！ ダークネス・ギガ・フレア！！！！」

「ぐおおあああああっ！！！！」 LP1100 0

レオの宣言と同時に闇竜の吐いた炎がガオウの身体を呑み込み、彼のライフを削り取り止めを刺す。そしてソリッドビジョンがゆっくりと消えていき、レオはふうと息を吐いた。

「終わった……後はあいつから邪神を奪い取って封印……まあヴァルツに渡せばいいだろ」

「キューツ」

「おう、全部終わった。とつとと邪神持って帰ろうぜ」

レオの頭をかきながらの言葉にその頭の上に乗っている雛が嬉しそうな声を上げ、それを聞いたレオも思わず笑ってそう返す。

「……サンゾ」

「……え？」

「許サン、許サンゾオオオツ!!!」

すると突然ガオウの方からそんな声が聞こえ、レオは嫌な予感とばかりにそつちを見る。とその直後ガオウは闇のオーラを放ちながら立ち上がり、なんと直後その姿が突然変異、レオの数十倍は軽くあるだろう巨竜へと姿を変えていた。

「うっそおっ!?!」

「邪神の力が消えていく、だが、貴様だけはアアアアツ!!!」

レオが驚愕の声を上げると巨竜と化したガオウは漆黒の牙をレオに

剥けてレオ目掛けて突進、彼を噛み砕こうとするがレオはサイドステップでそれをかわし、一気にダッシュしてガオウの口元から離れる。

「ふざけんな！ あんなの反則じゃねえか!？」

「キューツ！ キューツ!!」

ガオウの方を見ながらレオはそう叫ぶが雛の声を聞いて思い出したように前を向く。するとガオウの尻尾がまるで鞭のようにしなつてレオにぶつかった。

「が、はっ!？」

避ける暇もなくぶち当たり、レオは軽くぶつ飛んで地面に叩きつけられると気を失う。それを確認したガオウはレオを一飲みにしようと口を大きく開け、雛はキューキューと声を上げる。

「魔導波!」

「おらあああっ!!」

すると突然彼の側面から魔力の弾丸が次々と当たりさらにレッドアイズが捨て身の如き突進をかましてガオウを吹っ飛ばす。

「レオ！ 起きてっ!!」

「つとおっ!？ メ、メリオル!？ それにヴァルツにレッドアイズ!？」

さらにメリオルもその場に入り、躊躇う事無くレオ目掛けて鉄扇を

振り下ろすと長年の反射神経かレオはそれを受け止め、起き上がると驚いたようにメリオルとブラック・マジシャンことヴァルツ、そして今レオの近くでキューキュー鳴いている黒竜の雛の父親であるレッドアイズの姿を次々に見た。

「俺達を襲ってきた悪魔は全滅させた。援護する！」

「レオテメエ！ 俺の子は絶対守れつつあったろうが！！！」

「ソーマを倒した後、私は彼が取り出した爆弾の爆発に巻き込まれたと思ったんだけど、何故か無事でソーマの姿もなかったの。とりあえず援護するわ！」

「悪い。とりあえずあいつから邪神のカードを奪い取る！ いくぜ！！！」

ヴァルツの凜とした言葉、レッドアイズの怒号交じりの口調、そしてメリオルの言葉にレオは軽く頭を下げると起き上がったガオウの方を見て刀を抜いてそう叫び、それに三人はおうと頷いた。直後ガオウが突進、レオとメリオルはそれを左右に動いてかわし、ヴァルツは素早く詠唱を行った。

「くられ、幻想の呪縛！」

「!?!」

「ダーク・メガ・フレア！！！」

ヴァルツが杖を突き出しながらそういうとガオウの首辺りを不思議な光が魔法陣を組み、ガオウの身体を自由を奪う。そこにレッドアイズが火球を連続して吐いて追撃し、さらに両脇からレオとメリオルが飛び掛った。

「くられ、雷刃斬！！」

「風刃連波！！」

レオは雷を纏った刀を振り下ろし、メリオルはその逆方向で扇子を振るい風の刃を連射する。しかしそれらを受けきった直後ガオウの動きを封じていた呪縛が破壊され、ガオウは思いつきり身体を振るって二人を弾き飛ばし、その直後まだ空中にいるレオ目掛けて突進する。

「冥界の時空！！」

「ゴオオオオツ！！??？」

しかしヴァルツは素早く魔術を発動、レオとガオウの間に不思議な渦を作って攻撃を受け止めるとまた別の場所からその衝撃を衝撃波としてガオウにぶつける。それにガオウが悲鳴を上げている隙にメリオルは詠唱を行っていた。

「大いなる嵐よ、今ここに来たりて我が敵を切り刻め！ ストームダンス！！」

「こいつは特別技だ！ くられ、黒炎波！！」

メリオルの魔術が発動すると同時に無数の竜巻がガオウを包み込み、それらは巨大な一つの竜巻になってガオウを呑み込みその真空波が切り刻む。そしてレッドアイズの吐いた炎が波の如く押し寄せてガオウを焼き尽くした。

「グオオオオツ!!!」

「いい加減、往生しろっ!!!」

ガオウはどうにか竜巻と炎の波を脱出しようとして身をくねらせるがそこにレオがそう叫んでガオウに飛び掛り、刀を振り上げた。

「風雷流奥義！ 疾風迅雷!!!」

「ガアアアアアアツ!!!」

そしてガオウと交差する一瞬で素早く、また力強く激しい連続斬りを見舞い、それを受けたガオウは悲鳴を上げる。するとレオは刀傷の間から邪神のカードを発見、咄嗟に刀を投げ捨てるとまだ頭にくつついてた雛を右手に掴み振りかぶった。

「頼むぞ、チビスケート!!!」

「キューツ!!!」

レオはそう叫びながら雛を邪神のカード目掛けて投げ、雛は必死に背中の羽をピコピコと動かして空を飛びながら頑張って三枚の邪神のカードを口に銜え、別の刀傷から脱出する。そしてレオが雛をキヤッチすると邪神のカードを預かり、すぐデッキケースに入れておく。その間に雛はまたレオの頭の上に乗った。

「マダ、ダアツ!!!」

「いい加減に諦めるんだな！ くらえ、ブラック・マシク黒・魔・導!!!」

「くらいな、黒炎弾!!!」

「ガ、アアツ……」

その攻撃を受けてなおガオウは立ち上がるうとするがそこにヴァルツとレッドアイズが黒魔導と黒き炎で止めを刺し、それを受けたガオウはついに力尽きる。それを確認するとレオはほおつと息を吐いた。

「終わった、んだよな？ 今度こそ？」

「……ああ。すぐに脱出しよう、皆が心配だ」

「はい！」

「おう！」

レオの言葉にヴァルツは相手が生きていない事を確認してからそう言い、その言葉にメリオルとレッドアイズがそう言っていると四人はすぐに暗黒城を脱出、魔法都市へと戻っていった。

最終話 最終決戦、龍VS邪神（後書き）

ふにゆく、やっと最終デュエル書き終えた……まあ、相変わらずの低クオリティですが。

さて、ここまでお付き合いくださりありがとうございます。お目汚しやもしれませんが、次回の最終話までお付き合いしていただければ幸いです。

エピローグ 決着、そして旅の終わり

邪神を手にしデュエルモンスターズ界を手中に収めようとしていたガオウ一派との戦いを終え、レオ達は休息を取った後、自分達の世界へと帰る事になる。一行は魔法都市の中央広場へと集まっていた。

「もう帰るのか。どうせ時間移動を行うのだしもっとゆっくりしていけばどうだ？」

「折角の申し出申し訳ありませんが、これ以上こっちにいたらあつちの世界の勘を忘れそうで怖いので。流石にまだ剣や魔法が当たり前になったり、ドラゴンと何の違和感もなく喋るのが普通になりたくはないし……」

神聖魔導王エンディミオンの言葉にメリオルはふふつと笑いながら返し、エンディミオンはそうかとだけ呟くと口をつぐむ。

「ライ様、短い間でしたが共に戦えたこと、私は誇りに思いますわ」「うむ。このような老兵に新たな誇りを授けてくれたこと、礼を言うぞ」

「もし何か困ったことがあったらいつでもお呼びください。微力ながらお助けいたします」

「ライ！ 元気でな！！」

「うん、ありがとう。あ、それと紫炎さんに、真剣ありがとうございました。ありがとうございました。俺らの世界は剣の所持は不法だから、何かとややつこしい事になりそうだし返しとくよ」

クイーンズ・ナイト、キングス・ナイト、ジャックス・ナイト、ロケット戦士。この世界で仲良くなったメンバーの挨拶にライも元気な笑顔で返した後腰に挿していた二刀を外して前に出しながら続け、それを見たクイーンが両手を出して二刀を受け取った。

「はい、確かにお預かりいたします。そして私が責任持つて紫炎様にライ様からの伝言をお伝えの上、丁重にお返しいたしますわ」

「お願い」

クイーンの柔和な笑顔での言葉にライも笑顔でそう返した。それにクイーンの頬が僅かに赤く染まっているのにライは気づいていなかった。

そこから少し離れたところではネラがもじもじとした様子でアルフを見ており、ふうつと息を吐くと意を決したように話しかけた。

「あ、あの、アルフ！ あ、あつちに戻っても元気だね！」

「うん。ネラも元気だね」

ネラの言葉にアルフも笑顔で返し、それを聞いたネラはうつと顔を赤くしてうつむく。とアルフは思い出したようにネラに近づいた。

「ネラ、ちよつと顔上げて？」

「ん？……ふむっ！？」

アルフの言葉にネラが無防備に顔を上げた次の瞬間、アルフと唇がネラのそれと重なり合い、ネラは驚いたように硬直、周りのメンバーもまた硬直した。そしてアルフはネラから一歩離れ、満足したように微笑んだ。

「元気でね、ネラ。もう会えるか分からないけど、大好きだよ」

「あ、うあ、あう……………」

「…………メリオル、前々から思っていたが今確信を得た。アルフはタラシの才能があるぞ……………」

「うん、私もそう思う…………少し教育しなおした方がいいかも…………」

アルフの告白にネラは顔を真っ赤に染め上げて呂律が回らなくなっており、それを遠くから見たヴァルツがうつむきながら言う「メリオルも頭を抱えてそう返した。ちなみに失恋が確定となったサイレント・マジシャンことレンはがくつと膝をつき、他の霊使い達主にヒータに慰めてもらっている。」

「お世話になったわね、フレイヤ、デュナミス・ヴァルキリア。ゼラートさんも、アテナさんによろしく伝えてください」

「…………こつちも、結構楽しかったわ」

「ああ。それに、エルフィ達には正義を貫く事において大事な事を教わった」

エルフィの言葉にフレイヤは一瞬ツンとした表情を見せるがその後ににこりと笑みを浮かべてエルフィに返し、ヴァルキリアもああと頷いて返す。その後ろに立っているゼラートもエルフィから伝言を受けると黙ったままこくりと頷いた。

「キューツキューツ！」

「だーかーらー、いい加減諦めろっつーの痛い痛い痛い！！！」

一方レオはすっかり懐いてしまい離れたくないのか自分の頭の上にひつついているチビスケこと黒竜の雛を引き剥がすのに四苦八苦ししており、その雛は爪を立てて彼の頭にひつついている上引き剥がそうとすればさらに爪を立てるため痛みがくるといふ厄介な状態だ。

「レオ、貴様いつまで我が子で遊んでいる？」

「親バカも大概にしるよ teme ！ 遊んでるように見えるか！？ お前もチビスケ離すの手伝ってくれー！！！」

「くっくっ、いつそ我らの溪谷で暮らすようにすればどうだ？ 我々は大歓迎だぞ？」

「俺達は俺達の世界に帰るんだっての！」

そこに出てきたレッドアイズの言葉にレオはそう叫び、キングドラグーンがくっくっとして笑いながらそう尋ねるとレオはまたそう叫び返した。

それからメンバーのお別れ準備も終了し、レオも頭に引っ付いていた難を引き剥がしてから彼らは帰る準備を行う。今回はネラと一緒にヴァルツも転移魔法を行いレオ達を元の世界　レオ達がこの世界デュエルモンスターズワールドに来るのと大体入れ替わりになるタイミング　に送るらしい。

「……よし。ネラ、準備はいいな？」

「オツケー！　いつでもいいよ！」

魔法陣を描き、レオ達はその中央部分に乗っている事を確認するとヴァルツがネラに尋ね、それに彼女もうんと力強く頷く。それから黒魔導師の師弟は杖を構え、呪文の詠唱を始める。その詠唱が進んで行くと共に魔法陣から不思議な光が放たれ始めた。

「それじゃ、お世話になりました！」

「ああ。来られるならまたいつでも来るといい、我々は国を挙げて歓迎する」

レオが軽く右手を挙げながら挨拶するとエンディミオンは頷いてそう返し、それに五人はこくんと頷く。その直後時空転移が開始された。

とある平和な街　ほんの数分前には謎の集団から襲撃を受けていたが　にある一軒家に不思議な光が走り、その光の中からレオ達五人に黒魔導師の師弟が現れる。

「帰ってきたか」

「開け、時空の扉！！ デュエルモンスターズワールドにワープ！！！」

「あ、私の声だ」

レオがふうと息を吐くと突然そんな声が聞こえ、ネラが呟くと一行は声の方をこっそりと覗き込む。そこにはさつきまで自分達を包み込んでいたものと同じ不思議な光を発している魔法陣があり、やがてそれが消えていく光景があった。

「これから、大変な戦いを行っていく事になるのよね」

「ああ。頑張れよ、俺達」

メリオルの言葉にレオもふつと笑ってそう言い、それを聞いたか聞かないでかヴァルツとネラは街中をさつと見回した。

「さて、それじゃ俺達も最後の仕事を行うとするか」

「そだねー」

「あん？ まだ何かあるのか？」

二人の言葉にレオが不思議そうに首を傾げる。するとヴァルツがあと頷いた。

「当然だ。お前も悪魔族と戦っただろう？ 下手に騒ぎを大きくす

る前に街中の記憶操作と被害の修正を行う必要がある。そのために俺も来たんだからな」

「あ、安心してね？ アルフ達の記憶はそのままだから。でも、絶対に他の人に話しちゃ駄目だよ？ 信じてるからね？」

「分かってるよ。第一デュエルモンスターの世界に行ったなんて話しても信じられるわけないって」

ヴァルツの説明にネラが補足を要れ、お願いするような表情で言う「アルフが返し、ライモ「そりゃそうだ」と笑って続ける。それにネラが複雑な表情を見せ、ヴァルツはふうとため息をついた。

「まあ、その様子なら問題ないだろう。それじゃ俺達は記憶操作と被害修正の作業に入る。終わったら勝手に帰るから、気にしないでくれ。お前達も学校があるんだろ？ お前達が学校に行くまでに終わる作業量ではないからな」

「ええ、了解よ。ヴァルツ達も元気でね」

ヴァルツの言葉にメリオルはそう返し、それに黒魔導師二人は静かに頷くと歩き去っていく。それを見送ってからレオが口を開いた。

「さてと、んじゃまあとつと朝飯食って学校の準備でもするか」

「そうね」

レオの言葉にメリオルはそう返し、五人はレオの家に入っていく。今日からまた、新しい一日が始まる。

エピローグ 決着、そして旅の終わり（後書き）

カイナ「遊戯王X、これにて終幕です。今まで読んでくださり真に感謝いたします。それで、一つ分かったことがある」

レオ「なんだ？」

カイナ「俺こついう頭使うカードゲーム題材小説とか向かねえわ。一話出したら最低一回ここが効果処理おかしいここがルール上おかしいとか言われまくってるからね。一応けじめとしてこれだけは連載終了させるけど、カードゲームを題材にした小説とかが俺に向かないことがよく分かった！」

レオ「おいおい……」

カイナ「さて、これからはけいおん！やながされて藍蘭島とかのほのぼのやテイルズとかのファンタジーものに集中していくとしますか。それでは、今まで読んでくださった方全てに心からの感謝を述べまして、今回はこの辺で。それでは！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5572k/>

遊戯王X

2011年10月11日23時00分発行